大野原の先史遺跡

大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書
大分県文化財調査報告

第65輯

1984

大分県教育委員会

大野原の先史遺跡

序　　文

大野川は、九州山地の中核をなす阿蘇山・九重連山・祖母・傾山に源を発し、別府湾に注ぐ大分県下最大の河川であります。この河川の豊かな水量と周辺の火山性台地が織り成す流域の地形は、古代から人々が生活を営むのに格好な条件をもたらしました。そのため流域は県下でも有数の文化財の宝庫として知られています。今、この地域では、食糧生産の合理化を図るため大規模な耕地の再編成事業が実施されております。

このたび刊行いたしました「大野原の先史遺跡」は、この事業に関連して調査されたものであり、大野郡大野町を中心にした遺跡の報告書であります。調査を実施して以来すでに10年近い歳月が過ぎた遺跡もありますが、本報告書が学術研究の資料として、また郷土の文化財や歴史を知る参考資料として多くの方々に活用されれば幸いであります。

終りに長期にわたり、現地の発掘調査、又は整理作業に協力いただいた関係者の皆様方に対し、衷心より謝意を表す次第であります。

昭和 59 年 1 月

大分県教育委員会教育長

手　島　誠　一

例　　言

1.　本報告書は昭和49年度から昭和52年度にかけて、大分県大野郡大野町で実施した畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

1.　調査は賀川光夫（別府大学教授・大分県文化財保護審議委員）の指導を受け、駒方B・C遺跡については大分県教育委員会、夏足原遺跡・近中遺跡・犬山遺跡・赤鳥居遺跡・大塚遺跡については、大野町教育委員会が国庫補助を受け実施した。

1.　遺物の出土状況や写真撮影、遺物の実測に関しては調査担当者である清水宗昭・牧尾義則・坂本嘉弘（以上県文化課）及び吉留秀敏（岡山大学埋蔵文化財調査室）・栗焼憲児（中津市教育委員会）が分担した。

1.　遺物や図面の整図については、清水・牧尾・吉留・栗焼・坂本がそれぞれ担当した。

1.　本書の執筆分担は、第1章・第2章の第4節2―(2)(3)・第5章第3節を牧尾、第2章第4節1―(3)(4)を吉留、第4章第1節を清水宗昭、第4章第2節の石器の説明を栗焼憲児がそれぞれ担当し、他は坂本が執筆した。

1.　表題は文化課長秋吉辰郎による。

1.　編集は坂本があたった。

目　　次

序　　章　大野原台地の先史遺跡の調査
第１節　大野原台地の地理的環境と遺跡の分布……1
1　地理的環境……1
2　先史遺跡の分布……2
3　基本層序……3
第２節　大野原地区県営土地改良事業と遺跡……4
第３節　大野原台地での発掘調査……5
第１章　駒方Ｂ遺跡の調査
第１節　遺跡の立地と環境……7
第２節　調査経過と調査区の設定……7
第３節　遺構と遺物……8
1　遺構（甕棺）の出土状況……8
2　出土遺物……9
(1)　土器……9
(2)　石器……12
第４節　まとめ……12
第２章　駒方Ｃ遺跡の調査
第１節　遺跡の立地と環境……14
第２節　調査の経過と調査区の設定……14
第３節　各調査区の成果……16
第４節　第Ｉ区と第Ⅳ区の調査……19
1　第Ⅳ区の調査と先土器時代の遺物……19
(1)　層位と遺構……19
1）層位……19
2）遺構……20
(2)　遺物の出土状況……20
1）上部石器群……20
2）下部石器群（第Ⅵ区）……20
(3)　出土遺物……20
1）上部石器群……20
2）下部石器群……23
(4)　まとめ……32
1）石器技術と編年的位置付け……32
2）石器群の性格について……33
2　第Ｉ区の調査と縄文時代の遺物……37
(1)　第Ｉ区の遺物出土状況……37

1）層　　位……37
2）遺物のひろがり……37
(2) 出　土　遺　物……38
1）土　　器……38
2）土　　偶……41
3）石　　器……62
(3) ま　と　め……70
第5節　小　　結……71
第3章　夏足原遺跡の調査
第1節　遺跡の立地と環境……73
第2節　調査経過と調査区の設定……73
1　調査の経過と調査区の設定……73
2　調査団の構成……73
第3節　各調査区の成果……75
第4節　夏足原遺跡F地区の調査……76
1　調査区の設定……76
(1) 周辺の地形……76
(2) 調査区の設定と経過……76
2　層位と遺物……76
3　出土遺物……78
(1) 土　　器……78
(2) 石　　器……102
第5節　夏足原遺跡M地区出土の縄文土器……107
第6節　小　　結……107
第4章　大野原台地の先史遺跡
第1節　近中遺跡出土の先土器時代の遺物……111
1　遺跡の概況……111
2　出土層位……111
3　遺　　物……111
4　ま　と　め……116
第2節　大塚遺跡……117
第3節　赤鳥居遺跡……119
第4節　犬山遺跡……121
第5章　考　　察
第1節　縄文時代の大野原……123
第2節　大野川中流域における縄文後・晩期土器の編年……133
第3節　扁平打製石斧について……142
第4節　縄文晩期刻目突帯文土器系の甕（深鉢）形土器について……145

挿　図　目　次

序　　章

第１図　大野原台地の地形断面図……1

第２図　大野原台地先史遺跡分布図（折り込み）……2～3

第３図　大野原台地標準土層図……3

第１章　駒方Ｂ遺跡の調査

第４図　駒方Ｂ遺跡地形図……7

第５図　駒方Ｂ遺跡甕棺分布図……8

第６図　駒方Ｂ遺跡甕棺出土状況実測図（折り込み）……8～9

第７図　駒方Ｂ遺跡出土土器実測図(1)……10

第８図　駒方Ｂ遺跡出土土器実測図(2)……11

第９図　駒方Ｂ遺跡出土石鏃実測図……12

第２章　駒方Ｃ遺跡の調査

第10図　駒方Ｃ遺跡の地形と調査区の配置……15

第11図　駒方Ｃ遺跡第Ⅱ区検出遺構実測図……16

第12図　駒方Ｃ遺跡第Ⅲ区検出遺構実測図……17

第13図　駒方Ｃ遺跡第Ⅴ区検出遺構実測図……18

第14図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区検出の先土器時代遺構実測図……19

第15図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器の水平・垂直分布図……21

第16図　駒方Ｃ遺跡各調査区出土先土器時代遺物実測図（上部石器群）……22

第17図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(1)（流紋岩母岩№1Ａ）……26

第18図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(2)（流紋岩母岩№1Ｂ）……27

第19図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(3)（流紋岩母岩№2・3）……28

第20図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(4)（流紋岩母岩№4・5・6）…29

第21図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(5)（流紋岩母岩№7・8・9・10 黒曜石母岩№11・12・13・14）…30

第22図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器接合状況実測図(1)……31

第23図　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土石器接合状況実測図(2)……32

第24図　駒方Ｃ遺跡第Ⅰ区遺物出土状況実測図（折り込み）……38～39

第25図　駒方Ｃ遺跡出土土偶実測図……41

第26図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(1)……47

第27図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(2)……48

第28図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(3)……49

第29図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(4)……50
第30図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(5)……51
第31図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(6)……52
第32図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(7)……53
第33図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(8)……54
第34図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(9)……55
第35図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(10)……56
第36図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(11)……57
第37図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(12)……58
第38図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(13)……59
第39図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(14)……60
第40図　駒方Ｃ遺跡出土土器実測図(15)……61
第41図　駒方Ｃ遺跡出土石器実測図(1)……65
第42図　駒方Ｃ遺跡出土石器実測図(2)……66
第43図　駒方Ｃ遺跡出土石器実測図(3)……67
第44図　駒方Ｃ遺跡出土石器実測図(4)……68
第45図　駒方Ｃ遺跡出土石器実測図(5)……69
第46図　駒方Ｃ遺跡縄文後期遺物集中部……70

第３章　夏足原遺跡の調査

第47図　夏足原遺跡地形図及び調査区位置図……74
第48図　夏足原遺跡Ｆ地区土層図（Ｅ－２区）……76
第49図　夏足原遺跡Ｆ地区調査区配置図……77
第50図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(1)……89
第51図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(2)……90
第52図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(3)……91
第53図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(4)……92
第54図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(5)……93
第55図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(6)……94
第56図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(7)……95
第57図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(8)……96
第58図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(9)……97
第59図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(10)……98
第60図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(11)……99
第61図　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器実測図(12)……100

第62図　夏足原遺跡F地区出土注口土器実測図…… 102
第63図　夏足原遺跡F地区出土石器実測図(1)…… 104
第64図　夏足原遺跡F地区出土石器実測図(2)…… 105
第65図　夏足原遺跡F地区出土石器実測図(3)…… 106
第66図　夏足原遺跡M地区出土縄文土器実測図及び復原想定図…… 107

第4章　大野原台地の主要先史遺跡
第67図　近中遺跡地形図及び調査区配置図…… 112
第68図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(1)…… 113
第69図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(2)…… 114
第70図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(3)…… 115
第71図　大塚遺跡地形図及び調査区配置図…… 117
第72図　大塚遺跡出土石器実測図…… 118
第73図　赤鳥居遺跡出土土器実測図…… 119
第74図　赤鳥居遺跡地形図及び調査区配置図…… 120
第75図　犬山遺跡出土土器実測図…… 121
第76図　犬山遺跡地形及び調査区配置図…… 122

第5章　考　　察
第77図　寺遺跡出土土器実測図…… 123
第78図　宝福寺遺跡出土土器実測図…… 124
第79図　郡山遺跡出土土器実測図…… 125
第80図　大野原各遺跡出土縄文早期土器実測図…… 126
第81図　大野原各遺跡出土縄文前期土器実測図…… 127
第82図　大野川流域における扁平打製石斧の主要石材分布位置図…… 130
第83図　大野川流域の主要遺跡位置図…… 134
第84図　縄文後期中葉磨消縄文変遷概念図…… 135
付　図　大野川中流域縄文後・晩期土器編年図

表　目　次

序　章

第１表　大野原地区遺跡発掘調査年表……5

第１章　駒方Ｂ遺跡の調査

第２表　駒方Ｂ遺跡出土土器観察表……9

第２章　駒方Ｃ遺跡の調査

第３表　剝片剝離工程表……24

第４表　駒方Ｃ遺跡出土上部石器群一覧表……35

第５表　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土下部石器群母岩別分類表……35

第６表　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土下部石器群一覧表……36

第７表　駒方Ｃ遺跡第Ⅰ区出土土器組成表……40

第８表　駒方Ｃ遺跡出土土器観察表(1)……42

第９表　駒方Ｃ遺跡出土土器観察表(2)……43

第10表　駒方Ｃ遺跡出土土器観察表(3)……44

第11表　駒方Ｃ遺跡出土土器観察表(4)……45

第12表　駒方Ｃ遺跡出土土器観察表(5)……46

第13表　駒方Ｃ遺跡出土石器観察表(1)……63

第14表　駒方Ｃ遺跡出土石器観察表(2)……64

第３章　夏足原遺跡の調査

第15表　夏足原遺跡各調査区の成果一覧表……75

第16表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(1)……81

第17表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(2)……82

第18表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(3)……83

第19表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(4)……84

第20表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(5)……85

第21表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(6)……86

第22表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(7)……87

第23表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器観察表(8)……88

第24表　夏足原遺跡Ｆ地区出土石器観察表……103

第25表　夏足原遺跡Ｆ地区出土石器組成表……106

第26表　夏足原遺跡Ｆ地区出土扁平打製石斧の石材表……106

第27表　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器分類別構成表……108

第28表　夏足原遺跡Ｆ地区出土縄文後期末土器組成表…… 108
第29表　夏足原遺跡Ｆ地区出土石器石材別一覧表…… 109
第30表　夏足原遺跡Ｆ地区出土扁平打製石斧石材別の組成表…… 109
第31表　近中遺跡出土石器一覧表…… 116
第32表　赤鳥居遺跡出土土器観察表…… 119
第33表　犬山遺跡出土土器観察表…… 121
第34表　大野川流域各遺跡出土扁平打製石斧縦長・横長対比表…… 143

写 真 図 版 目 次

写真図版 1　大野原の台地群遠望と土層…… 149
写真図版 2　駒方Ｂ遺跡甕棺出土状況(1)…… 150
写真図版 3　駒方Ｂ遺跡甕棺出土状況(2)…… 151
写真図版 4　駒方Ｂ遺跡出土土器…… 152
写真図版 5　駒方Ｂ遺跡出土土器及び石鏃…… 153
写真図版 6　駒方Ｃ遺跡試掘調査の状況…… 154
写真図版 7　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区遺物出土状況…… 155
写真図版 8　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区検出先土器時代遺構…… 156
写真図版 9　駒方Ｃ遺跡上部及び下部（第Ⅳ区）出土の先土器時代遺物…… 157
写真図版10　駒方Ｃ遺跡下部(第Ⅳ区)出土の先土器時代遺物及び接合状況… 158
写真図版11　駒方Ｃ遺物第Ｉ区遺物出土状況及び土層…… 159
写真図版12　駒方Ｃ遺跡第Ｉ区遺物出土状況(1)…… 160
写真図版13　駒方Ｃ遺跡第Ｉ区遺物出土状況(2)…… 161
写真図版14　駒方Ｃ遺跡出土土器…… 162
写真図版15　駒方Ｃ遺跡出土土器及び組成…… 163
写真図版16　駒方Ｃ遺跡出土土器及び石器…… 164
写真図版17　駒方Ｃ遺跡出土石器…… 165
写真図版18　夏足原遺跡全景及びＡ－３区遺物出土状況…… 166
写真図版19　夏足原遺跡Ａ－３区遺物出土状況…… 167
写真図版20　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器(1)…… 168
写真図版21　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器(2)…… 169
写真図版22　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器及び組成…… 170
写真図版23　夏足原遺跡Ｆ地区出土土器及び石器…… 171
写真図版24　夏足原遺跡Ｆ地区出土扁平打製石斧…… 172

序　章　大野原台地の先史遺跡の調査

第1節　大野原台地の地理的環境と遺跡の分布

1. 地 理 的 環 境

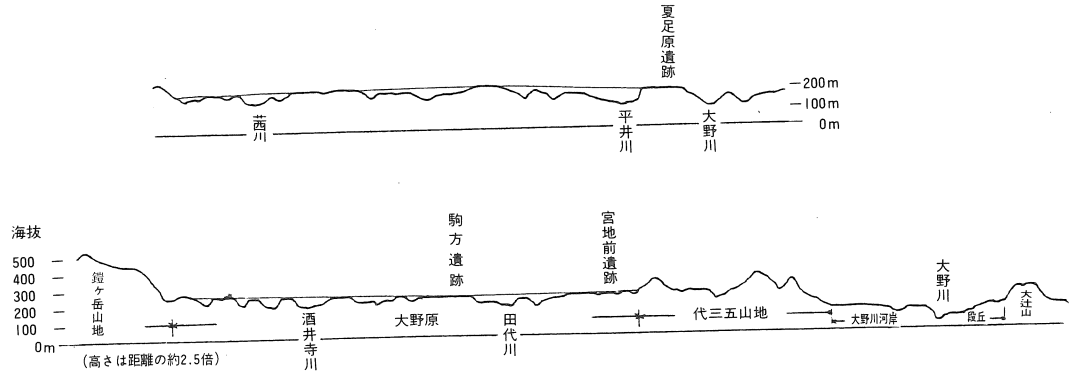
大分県最大の河川である大野川は、九州の脊梁山脈の一部である祖母・傾山系、阿蘇山、九重連山に源を発し、別府湾に注ぐ。その流域は、南部を中央構造線上にある祖母山・傾山・佩楯山系、西部を巨大カルデラである阿蘇外輪山、北部を九重火山群と鎧ケ岳山地群に囲まれた盆地状の地域となっている。この地溝部には、阿蘇山が噴出した熔結凝灰岩が埋積し、これを基盤とした火山性の台地が展開している。しかし、県下最大の流域面積をもつ大野川は、上・中・下流域でそれぞれ地形の様相が異なる。

上流域は、阿蘇東外輪山を大野川の源流が刻むため、V字谷が発達している。その一方で、標高700mから500mの西から東にかけて、緩く傾斜する細長い台地が広がる。行政区分からみれば、直入郡荻町、竹田市菅生地区がこれにあたる。

大野原を含む中流域は、標高300mから100mの独立性の台地が展開する地域である。河川からの比高差も小さくなり、台地の周辺には谷底平野が広がる。行政区からみれば、大野郡の各町村がこの地域にあたる。

下流域は、広い沖積地の広がる地帯で、周辺には丹生台地や明治台地などの標高100m以下の河岸段丘や洪積世の低丘陵が両岸に沿って展開する。行政区分では、大分市にあたる。

こうした大野川の景観の中で、中流域に位置する大野原とは、北を鎧ケ岳山地、南を大野川本流、東を代三五山地に囲まれた地帯に広がる標高250m前後の台地群を指す。台地には茜川流域の宮原、田代川流域の片島原・中原、平井川流域の屋原・大原・向原、大野川本流に沿った夏足原と、それぞれ名称が付けられている。これらの台地の表面はクロボクと呼ばれる阿蘇山噴出の黒色火山灰で覆われており、県下有数の畑作地帯となっている。一方台地下を流れる平井・田代・茜の3河川の流域には谷水田が広がり、特に町の中心地である田中地区、町西部の向原川流域、東部の浅草地区は、比較的広い水田地帯となっている。町の耕地面積1,925haのうち、水田915ha、畑は1,010haの割合となっている。



第1図　大野原台地の地形断面図（上は南北、下は東西）

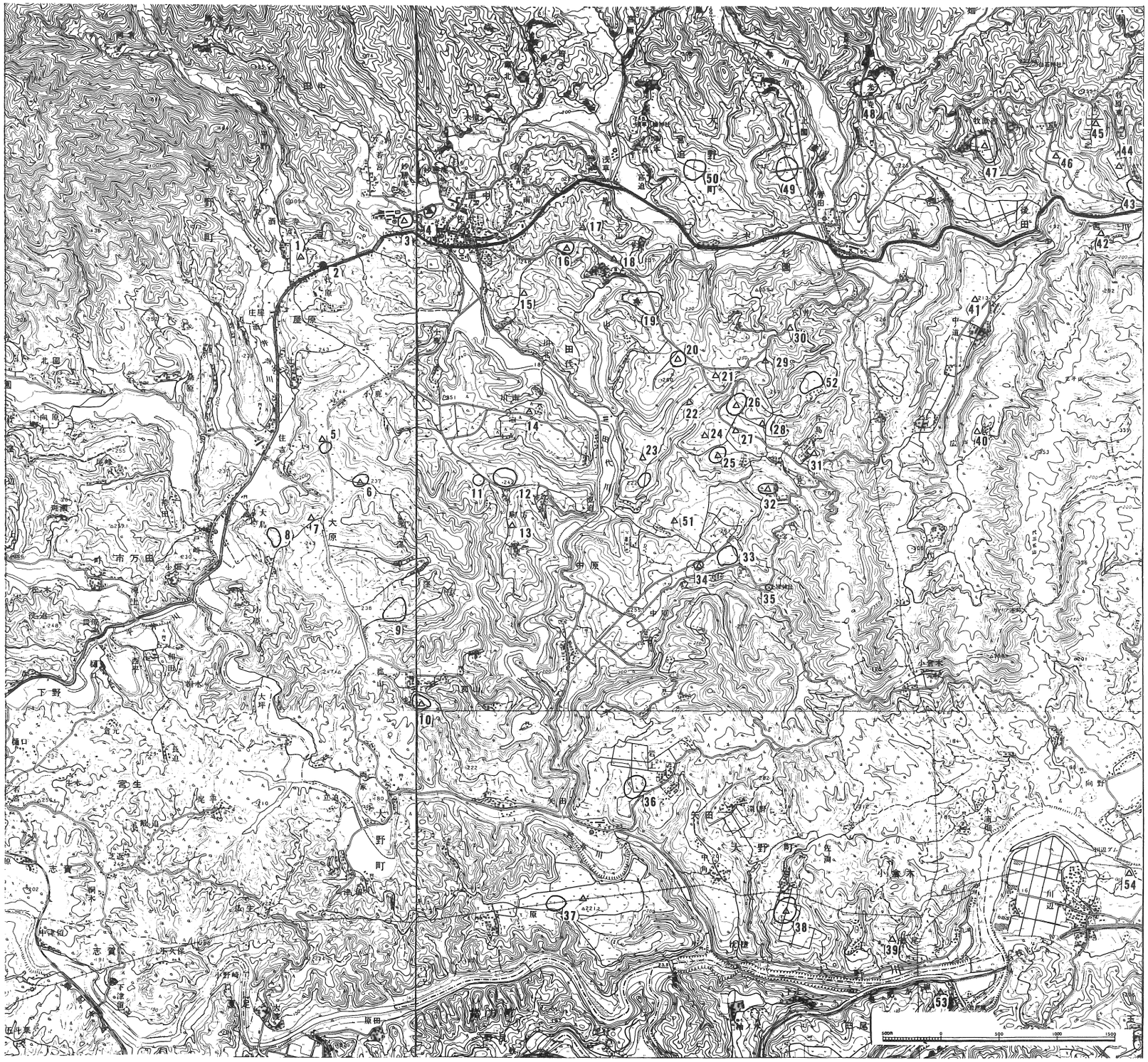
2. 先史遺跡の分布

大野川流域は、東九州でも有数の遺跡集中地帯として知られている。しかも先土器時代から古墳時代前期までの遺跡が増減しながら存在している。こうした中で中流域に位置する大野原の台地上でも、先土器時代以来、遺跡数が著しく減少する時期もあるが、古墳時代までの遺物や遺構が確認されている。

先土器時代の大野原は、地形的な好条件とともに、先土器時代の石器の石材であるホルンフェルスや無斑晶流紋岩などの原石が、大野川本流と奥岳川の合流点付近に転礫として産することなどが大きな要因となったと思われ数多くの遺跡がみられる。まず石器を形態的・層位的にみると古い時期では九州型ナイフ形石器を出土した大塚遺跡・駒方C遺跡があり、次の時期では小型の尖頭器形のナイフ形石器を出した製糸工場前遺跡や今峠遺跡が知られている。そして最新の時期では細石核を出土した小牧遺跡、宮地前遺跡などがある。厚い火山灰で順序よく覆われた大野原は、先土器研究の良好なフィールドである。また最近では代ノ原地区でナウマン象の化石も発見されている。

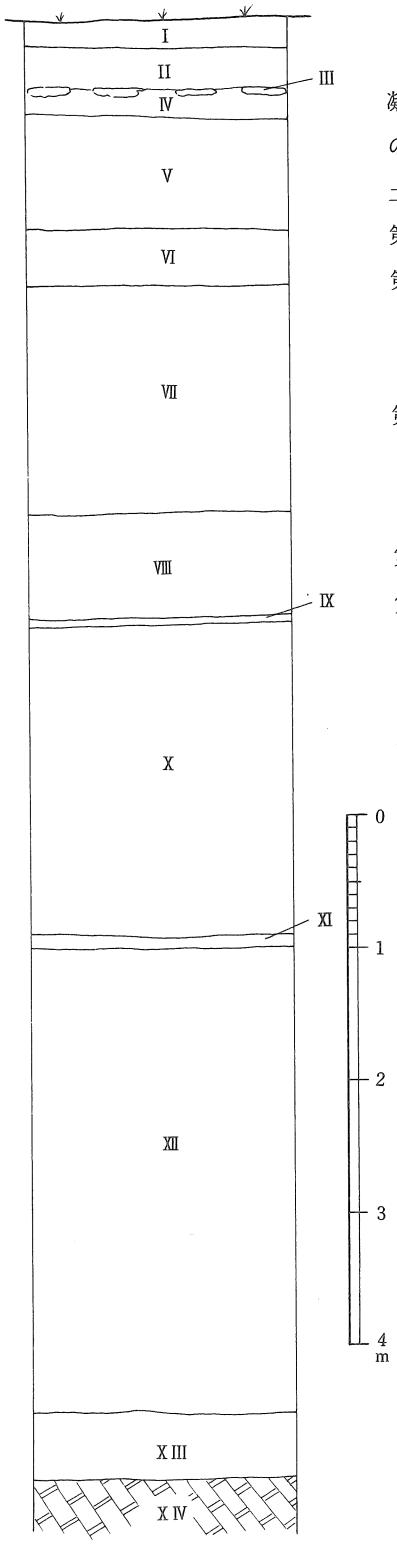
縄文時代の遺跡は、前期・中期・後期前半の時期が希薄であるが、早期と後期後半から晩期前半にかけての時期の遺物は、台地上の各所にみられる。早期の遺跡としては、早水台式土器を出土する夏足原遺跡・宝福寺遺跡、田村式土器を出土する郡山遺跡、手向山式や平栫式土器を出土する寺遺跡・井野遺跡・向原遺跡などがある。これらの遺跡以外にも押型文土器は各所で検出されている。前期の遺跡は、轟B式土器や曽畑式土器を出土した宮地前遺跡、中期は駒方C遺跡の並木式土器があるが、いずれにしろ、前・中期は遺跡数が少ない。後期は前半と後半では遺跡数に大きな変化が認められる。前半の遺跡としては、二本木遺跡や片島で出土した土器片があるが、前・中期と同様遺跡の数は少ない。ところが中葉から後半になると、遺跡数が増加し、台地の各所で確認されている。まず、中葉の北久根山式土器の時期と思われる遺跡は小牧遺跡・夏足原遺跡があり、これらの遺跡からは、西四国を中心に出土する片粕式土器が出土している。次の西平式土器は、駒方C遺跡・夏足原遺跡・宮地前遺跡から出土している、これらの遺跡は次に編年される三万田式土器も出土している。この3遺跡以外にも三万田式土器は二本木遺跡・西迫遺跡・松木遺跡からも出土している。さらに後期末に編年されている御領式土器を出土する遺跡は夏足原遺跡・小牧遺跡などがある。このように後期後半は後期前半の遺跡のあり方と趣を異にしている。

晩期も前半と後半では様相が異なる。すなわち、前半の時期は後期後半以来の遺跡数が維持され、宮地前遺跡・片島遺跡・夏足原遺跡・小牧遺跡など数多くみられるが、後半になると再び遺跡は少なくなる。晩期後半の特徴である刻目突帯文土器の出土する遺跡は、あまり知られてない。この傾向は弥生時代前期にも引き継がれ、北九州系の板付式土器系の壺形土器は今日まで全く確認されていない。その一方で、宮迫遺跡や駒方B遺跡・夏足原遺跡で、晩期の刻目突帯文土器と類似する深鉢形土器が出土している。しかしこの土器は晩期のそれとは異なり、この地域での縄文時代から弥生時代への移行の状況を暗示するかのようである。



1 門前遺跡
2 ナウマン象化石出土
3 大野高校遺跡
4 製紙工場前遺跡
5 二本木遺跡
6 近中遺跡
7 踊場遺跡
8 横井遺跡
9 窪原遺跡
10 郡山遺跡
11 駒方B遺跡
12 駒方C遺跡
13 駒方南遺跡
14 川南遺跡
15 川北遺跡
16 赤鳥居遺跡
17 花立遺跡
18 赤鳥居東遺跡
19 犬山遺跡
20 大塚遺跡
21 今峠遺跡
22 片島H地点
23 松木遺跡
24 片島A地点
25 西迫遺跡
26 片島C地点
27 片島G地点
28 片島D地点
29 片島F地点
30 穴井遺跡
31 片島E地点
32 宝福寺遺跡
33 宮地前遺跡
34 七辻遺跡
35 上津神社遺跡
36 岩上遺跡
37 夏足原遺跡（F地区）
38 佐渕遺跡
39 徳尾遺跡
40 鏡遺跡
41 中ノ道遺跡
42 岡遺跡
43 小牧遺跡
44 牧原A地点
45 牧原B地点
46 安西遺跡
47 寺遺跡
48 光昌寺遺跡
49 上園遺跡
50 宮迫遺跡
51 片島I地点
52 井野遺跡
53 岩戸遺跡
54 上下田遺跡

第2図　大野原台地の先史遺跡分布図



第３図　大野原台地標準土層図
（夏足原台地東端で観察）

3. 基 本 層 序

活発な火山活動を続ける阿蘇山は、大野原台地の基盤となる熔結凝灰岩をはじめ、次々に火山灰を降り積もらせ、現在の大野原台地の景観をつくっている。第３図は、夏足原台地東端の崖で観察した土層である。

第Ⅰ層　暗茶褐色土層　耕作土

第Ⅱ層　茶黒色土　縄文後晩期包含層。
窪地などでは表土とこの層の間に黒色の土層が認められる場合もある。

第Ⅲ層　黄色土　広域テフラと考えられている「アカホヤ」（約6300年前）で、大野原では大野川上流域に比較すると遺存状態は良くない。

第Ⅳ層　黒色土　Ⅱ層の黒色土に比較すると硬い。縄文早期包含層。

第Ⅴ層　黄褐色土　先土器時代の遺物包含層、上部は軟質であるが、下部は硬質である。また下部にはＡ・Ｔ（約21,000年前）が確認されている。

第Ⅵ層　黒褐色土　通称黒色バンドと呼ばれ県南部のほぼ全域にみられる。

第Ⅶ層　赤褐色土　Ⅶ層以前の層に比較すると粘質が強く、粒子が細かい。

第Ⅷ層　黄色砂礫土　通称「マメンコ」と呼ばれる直径約５㎜くらいの粒子の粗い層である。

第Ⅸ層　灰褐色土　やや粘質の４～８㎝の薄い土層である

第Ⅹ層　赤褐色土　粘質のやや強い、厚く堆積した土層

第Ⅺ層　黄色土　５～10㎝の薄い層である。

第Ⅻ層　赤褐色土　Ⅹ層と類似する土層である。

第XIII層　桃色土　粘質は他の土層に比較すると一番強い。

第XIV層　阿蘇熔結凝炭岩　上部は灰土状で次第に岩石化する。

第２節　大野原地区県営土地改良事業と遺跡

大野町の耕地は、町南部に広がる標高200～250ｍの火山性台地上の畑地と、それをとり巻く大野川の支流である平井川・田代川・茜川・十時川周辺に開けた谷底平野の水田地帯に分けられる。大分県では、この畑地と水田に対し、安定した生産力と生産性を高めることを目的とし、土地改良事業を昭和44年から実施している。

台地の周辺の谷水田に対しては圃場整備事業を行ない小面積の入り組んだ水田を一定面積の規格性を持った水田に再編成している。そして周辺を通る県道や国道に直結するよう道路の整備も実施している。

一方台地上の畑地は、黒色の火山灰土に覆われており、年間降雨量も2,073㎜と比較的多雨型の気候にも恵まれている。しかし、一年間の雨量分布が不均一であるため、しばしば干害を受け、計画生産に対して阻害要因となっている。このため土地生産性は極めて低く農業生産は不安定なものであった。このような状況に対して大分県では畑地帯総合土地改良事業を実施している。それは水田と同様、小さな畑地を区画整理し再編成したものである。つまり台地を削平し起伏の少ない広大な一枚の畑地を造成するものであった。併せて、これらの畑地への必要な水源を確保し、レインガンなどによる給水施設を完備させ、畑地潅漑を目ざしている。また、畑地への道路も整備し、大型農業機械の導入を容易にしている。さらにこの道路は国道や県道に連結させ、大型車による輸送に備えている。これは大分市への野菜供給基地としこの地域の役割を高めようとしている。

以上の計画を実施するにあたって大きな影響を受けるのが埋蔵文化財をはじめとする土地に刻まれた歴史的な遺産である。県教委では昭和49年この地域を遺跡分布調査し、50ケ所以上の遺跡を確認した。しかもその大部分は台地上に存在するもので、各台地には必ず土器や石器などの遺物が散布しているという状況であった。そこで、大分県教育委員会と大野町教育委員会では、昭和49年に駒方Ｂ・Ｃ遺跡を調査し、昭和50年から昭和54年まで大野町教育委員会が国庫補助を受け、夏足原遺跡をはじめとする工事予定地内の遺跡の調査に務めた。しかし、全ての工事計画に対して文化財の調査は人的にも経済的にも対応できるものではなく、調査は主として削平部分のみ実施し、可能な限り盛土工法などにより、埋蔵文化財の保護に務めた。このような方法をとっても、台地のほぼ全面に広がる遺跡にとって畑地帯総合土地改良事業は大きな打撃を与えていることは間違いのないものであろう。

また、台地周辺をめぐる谷底平野の水田地帯では、今日まで埋蔵文化財は確認されていない。しかし、圃場整備事業以前の小さな水田は、あるいは中世の大野荘以来の区画や字名、または灌漑施設を残すものである可能性もあり、今後、これらの問題も検討されなければならない。

現在、大野原地区の土地改良事業はピークを過ぎ、昭和60年の完成予定に近づいている。大野原地区で我々が経験した土地改良事業と文化財の問題は、今後の他の地区で実施される同様な事業で生かされされなければならない。

第3節　大野原台地での発掘調査

大野原の台地は、県下有数の遺跡集中地帯であることは、すでに述べたが、これらの遺跡に対する発掘調査も古くから数多く実施されている。

大野原台地の遺跡に最初に発掘のメスを入れたのは当時県立大野高校の教諭だった鳥養孝好氏である。氏は大野高校在職中の昭和30年代末から昭和40年代の始めにかけて、大野原台地の各所で表採活動と小規模な試掘を実施した。その結果駒方遺跡からは土偶や多量の土器、大塚遺跡・製紙工場前遺跡・大野高校遺跡などでナイフ形石器の良好な資料を得ている。

ところが、昭和40年頃から大野原台地で畑地帯総合土地改良事業が実施され始める。しかし、それに対応する文化財保護行政の体制はまだ整っておらず、昭和49年に実施した大野町地区の遺跡分布調査で、その実態を知ることができた。昭和49年の駒方C遺跡から昭和54年の松木遺跡の調査は、この工事に対処するのものであった。また、昭和56年の代ノ原遺跡、昭和57年の羽部遺跡の調査も、この一連の工事に対して大分県教育委員会が対応したものである。

以上のような土木工事に伴う調査とは別に大学などによる学術調査も実施されている。昭和48年に平安博物館が実施した宮地前遺跡、昭和51年から昭和54年にかけて別府大学の実施した先土器時代遺跡の調査、昭和57年に岡山大学が発掘したナウマン像の化石調査などがそれで、現在まで何らかの調査がなされた遺跡は25遺跡にのぼる。

第1表　大野原地区遺跡発掘調査年表

年月日	遺跡名	調査者及び団体	調査内容	報告書
昭和30年代末	駒方遺跡	鳥養孝好	縄文後期後半の土偶出土	鳥飼孝好「駒方遺跡と土偶頭部」（竹田高校研究資料八　昭和43年）
↓	大塚遺跡	鳥養孝好	ナイフ形石器出土	鳥飼孝好「大野郡大野町におけるナイフ形石器の新例に対する予察」（竹田高校研究資料　六　昭和41年）
	製紙工場前遺跡	鳥養孝好	ナイフ形石器出土	
昭和40年代初頭	大野高校遺跡	鳥養孝好	ナイフ形石器出土	
昭和48年	宮地前遺跡	平安博物館	縄文晩期の遺物が多量出土	渡辺誠「大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報」平安博物館　昭和48年
昭和49年	大野原地区分布調査	大分県教育委員会	約50ケ所の遺跡を確認	本書収録
	駒方C遺跡	大分県教育委員会	縄文後期後半の遺物が出土	本書収録
昭和50年	駒方B遺跡	大分県教育委員会	縄文末から弥生初期の埋葬遺跡	清水宗昭・橋爪啓史・牧尾義則・坂本嘉弘「大野原台地の遺跡Ⅰ」大野町教育委員会　昭和51年
	二本木遺跡	大野町教育委員会	弥生後期の大規模な集落跡（試掘調査）	
	近中遺跡	大野町教育委員会	弥生中期の集落（試掘調査）	
	松木遺跡	大野町教育委員会	弥生後期の環溝集落（試掘調査）	
	原遺跡	大野町教育委員会	尾根上の弥生後期の集落（試掘調査）	
	宮迫遺跡	大野町教育委員会	弥生時代前・中期の遺物出土（試掘調査）	
	赤鳥居遺跡	大野町教育委員会	縄文後・晩期の遺跡（試掘調査）	
	犬山遺跡	大野町教育委員会	縄文後期の遺跡（試掘調査）	
	梅園原遺跡	大野町教育委員会	（試掘調査）	
	夏足原遺跡	大野町教育委員会	A～C地区の調査（試掘調査）	
昭和51年	二本木遺跡	大野町教育委員会	60数軒の住居跡の調査	清水宗昭ほか「大野原の遺跡」大野町教育委員会　昭和55年

年月日	遺跡名	調査者及び団体	調査内容	報告書
	大塚遺跡	大野町教育委員会	試掘調査	坂本嘉弘・橋爪啓史「大野原台地の遺跡Ⅱ」大野町教育委員会　昭和52年
	川北遺跡	大野町教育委員会	試掘調査	
	迫ノ原遺跡	大野町教育委員会	弥生中期の集落跡　試掘調査	
	夏足原遺跡	大野町教育委員会	D～H地区の調査　試掘調査	
	坊ノ原古墳	大野町教育委員会	前方後円墳の測量調査	
	製紙工場前遺跡	別府大学	ナイフ形石器出土	橘昌信「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(2)―製紙工場前遺跡」（別府大学博物館研究報告No. 3　昭和54年）
昭和52年	二本木遺跡	大野町教育委員会	補充調査	牧尾義則・羽田野光洋「大野原台地の遺跡Ⅲ」大野町教育委員会　昭和53年 「大野原の遺跡」　昭和55年
	夏足原遺跡	大野町教育委員会	Ⅰ～L地区の調査	
	松木遺跡	大野町教育委員会	弥生後期の住居跡34軒調査	
	今峠遺跡	別府大学	小型ナイフ形石器出土	橘昌信「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1)―今峠遺跡」（博物館研究報告No.2 別府大学博物館学課程）　昭和53年
昭和53年	二本木遺跡	大野町教育委員会	補充調査	「大野原の遺跡」　昭和55年
	夏足原遺跡	大野町教育委員会	M地区の調査　弥生後期の集落跡	
	小牧遺跡	別府大学	先土器遺跡	
	片島道下遺跡	別府大学	槍先形尖頭器出土	橘昌信「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(3)―片島道下遺跡―」（別府大学博物館研究報告No. 4　昭和55年）
昭和54年	小牧遺跡	別府大学	細石核出土	
	牧上遺跡	別府大学		
	松木遺跡	大野町教育委員会	補充調査	
昭和56年	代ノ原遺跡	大分県教育委員会		試掘調査　渋谷忠章ほか「大分県内遺跡詳細分布調査概報１」大分県教育委員会　昭和57年
昭和57年	代ノ原地区	岡山大学	ナウマン象の化石出土	
	羽部遺跡	大分県教育委員会		試掘調査　渋谷忠章ほか「大分県内遺跡詳細分布調査概報２」大分県教育委員会　昭和58年

第1章　駒方B遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境

駒方B遺跡は大野町大字田代字上古屋に所在する。駒方C遺跡から東側約 150m程度しか離れていない。

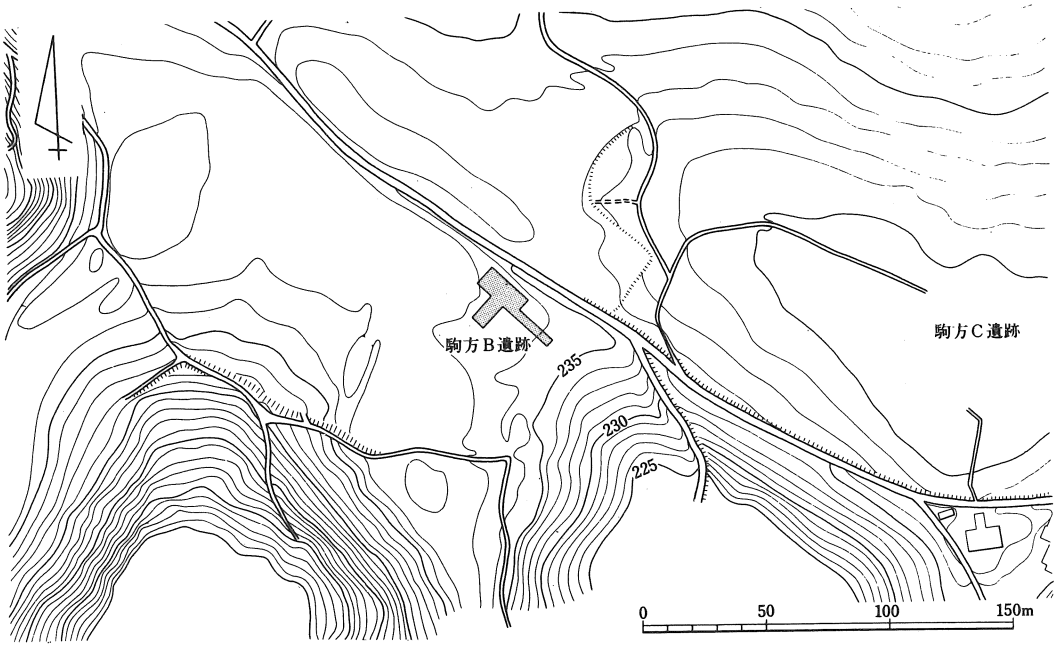
遺跡は標高 235m程度の緩かな東南傾斜の台地上のほぼ先端部にあり、東南側、南側、西南側は比較的険しい崖面になっている。

第2節　調査経過と調査区の設定

発掘調査は、昭和49年度大野川中・上流域総合土地改良事業に伴う緊急発掘調査として、大分県教育委員会が昭和50年1月16日から25日迄の10日間実施したものである。同遺跡は小字名より津室迫・天神窪遺跡として周知されており、先土器時代から縄文、弥生時代にわたる遺物の散布が確認されている。

現場では既にローム層直上面までの削平工事が大部分終了しており、露出した甕棺群の大部分はブルドーザによる破壊が著しく、土層の確認、土坑の検出等の綿密な調査は不可能な状態であった。

調査区は露出した甕棺群を中心に、わずかにローム層直上の黒色土の残る 約300㎡を拡張して設定した。



第4図　駒　方　B　遺　跡　地　形　図

なお、わずかな残存部で確認した当地区の層はⅠ層耕作土、Ⅱ層茶黒色土、Ⅲ層黒色土、Ⅳ層ローム層であり、Ⅰ・Ⅱ層が厚い。

調 査 団 の 構 成

調査主体　大分県教育委員会

調 査 員　後藤宗俊・清水宗昭・坂本嘉弘・牧尾義則（以上大分県文化課）、和田利徳・徳林信道（以上当時別府大学学生）

第3節　遺 構 と 遺 物

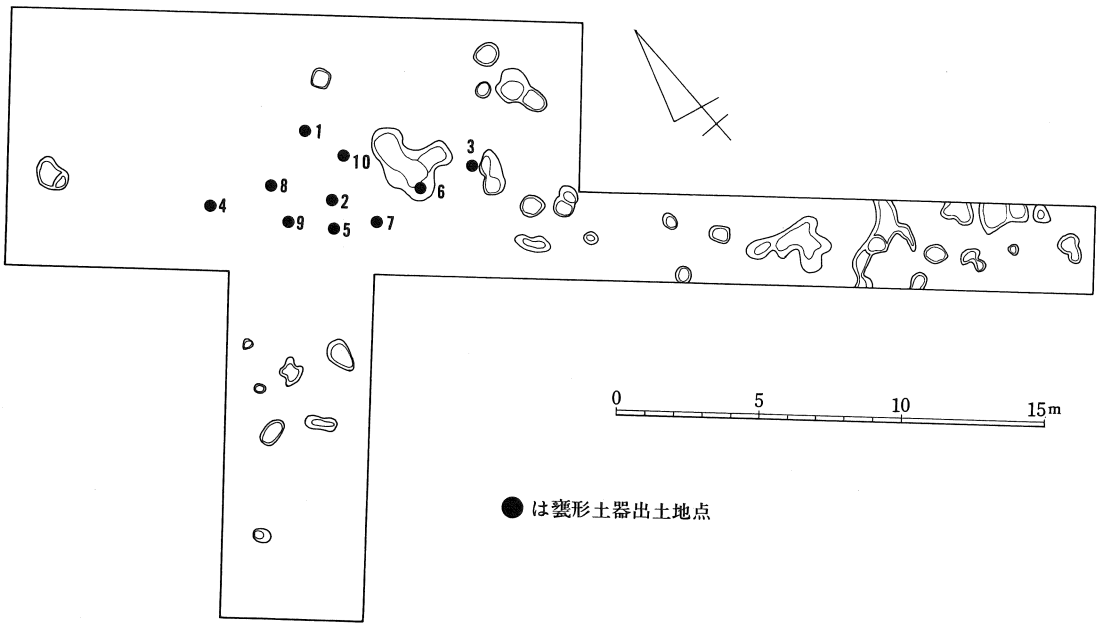
1.　遺構（甕棺）の出土状況

甕棺群の発見に至る原因及び状況についての概要は第2節で述べた通りである。

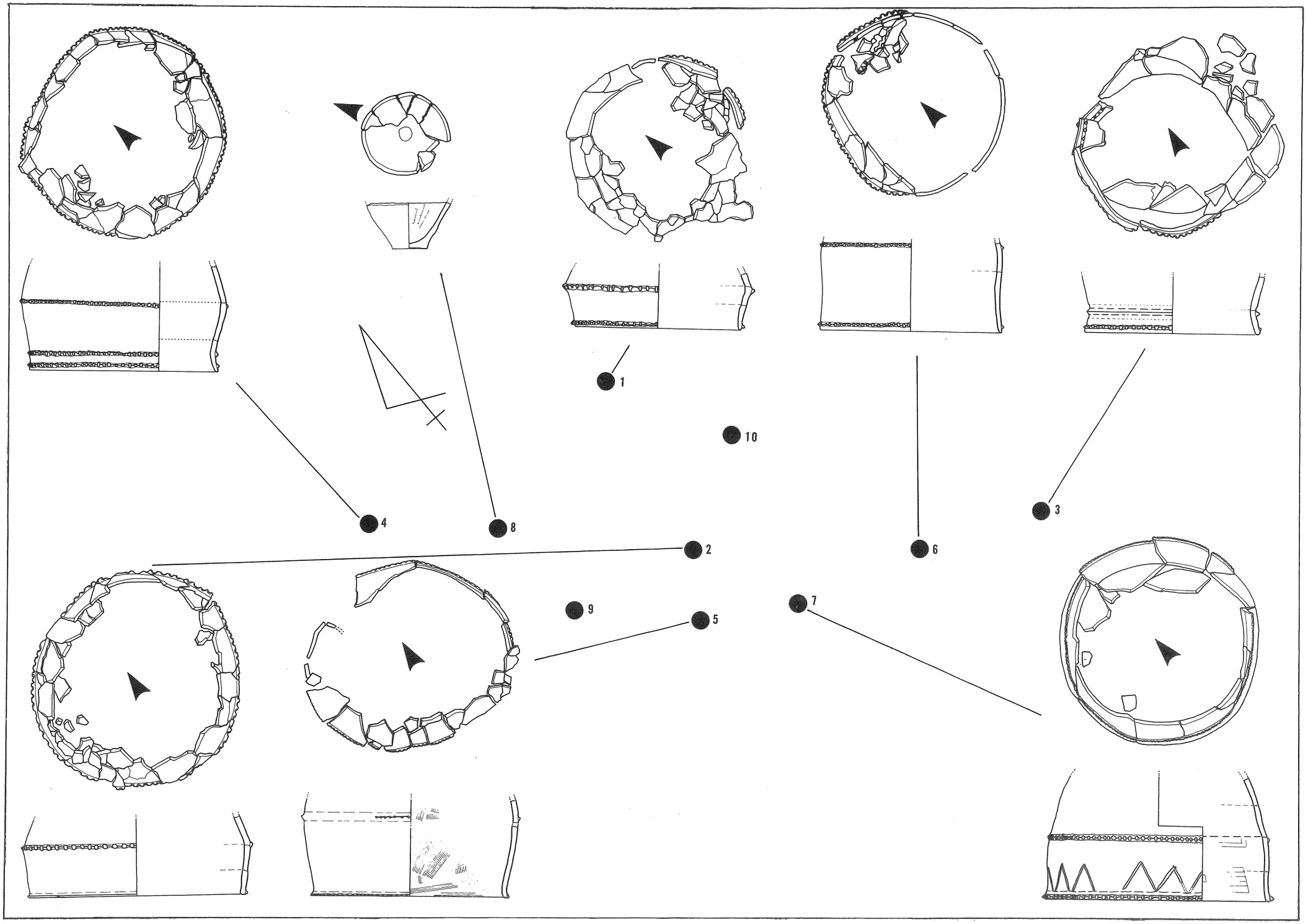
出土した10基の甕棺は大部分削平時に破壊されており、破壊前の状況復原は非常に困難であった。

甕棺は10m×5mの範囲内にほぼ1m～2m間隔で比較的整然と安置されているが、意図的な配置とは考えられない。甕は10基のうち8基（1～7号・10号）が口縁部を下に向ける伏せた状態、残り2基（8・9号）が立てた状態であったが、伏せ甕は全て底部付近を消失？していた。また、破壊を免れた部分もブルドーザの圧力により、形は保っているが細片化したものが多く、9号の底部と10号の口縁部はさらに剝落が厳しく、図化することが不可能であった。

甕埋土時の土坑についてはⅢ層黒色土からの掘り込みが考えられるが、同色により遺構線は検出できず、また10基の甕は6号甕を除いて、Ⅳ層ローム層直上面に安置されており、ローム層面まで



第5図　駒 方 B 遺 跡 甕 棺 分 布 図



第６図　駒方Ｂ遺跡甕棺群出土概略図

の掘り込みが実施されなかったものと考えられる。6号甕だけがわずかにローム層中で検出でき、甕はローム層に掘り込まれた長さ 2.5m、幅1m程度の楕円形状土坑の南端に安置していたが、これが甕埋納に関連したものであるかどうかは不明である。

他の遺構については甕棺群周辺に柱穴状の掘り込みが確認されたが、いずれも浅く、ローム層中にⅢ層黒色土層のしみ込みも多く、その性格は明確ではない。

2. 出 土 遺 物

(1) 土　　器

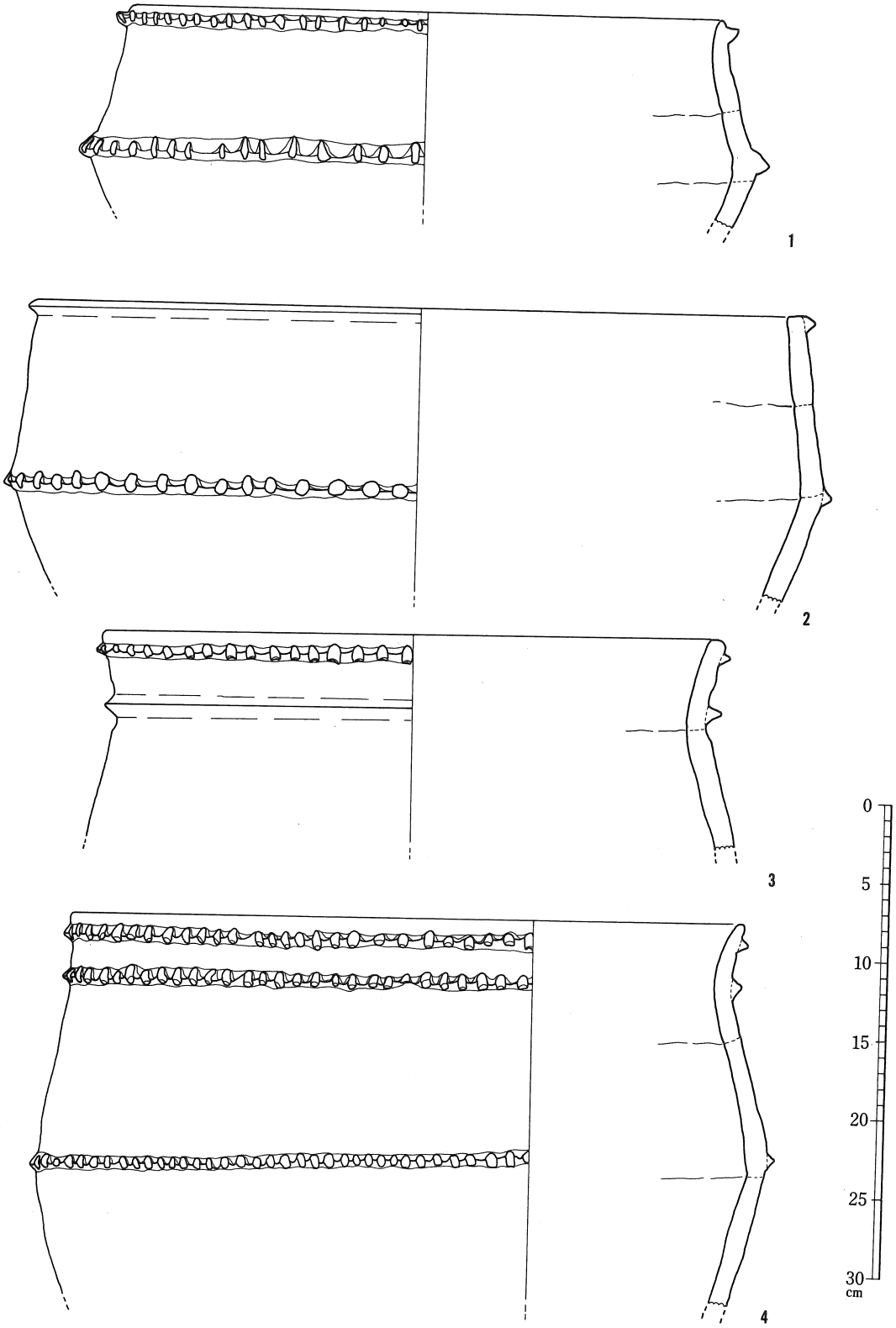
出土した土器は粘土円盤貼り付けによる底部8・9以外は全て底部が欠失した肩部から口縁部残存の粗製大形甕であるが、これらは大きく2分類できる。

1は口縁部が「く」の字に屈折内傾し、その最大径が肩部にあるもので、口唇部あるいは肩部に刻目突帯を有する。これはさらに口唇部と肩部の両方に刻目突帯を有するもの（1）、いずれか一方に有するもの（2）、口縁部に2条の突帯を有するもの(3・4)に細分できる。他は「く」の字の口縁部が次第に直線化し外湾化する傾向を有するようになるもの（5・6・7）であり、特に7は口唇部と肩部の2条の刻目突帯間にヘラによる鋸歯状沈線文を施したもので、この突帯間に沈線あるいは突帯等で装飾した甕は、大野町宮迫遺跡・同町夏足原遺跡・竹田市小高野遺跡等でも出土している。

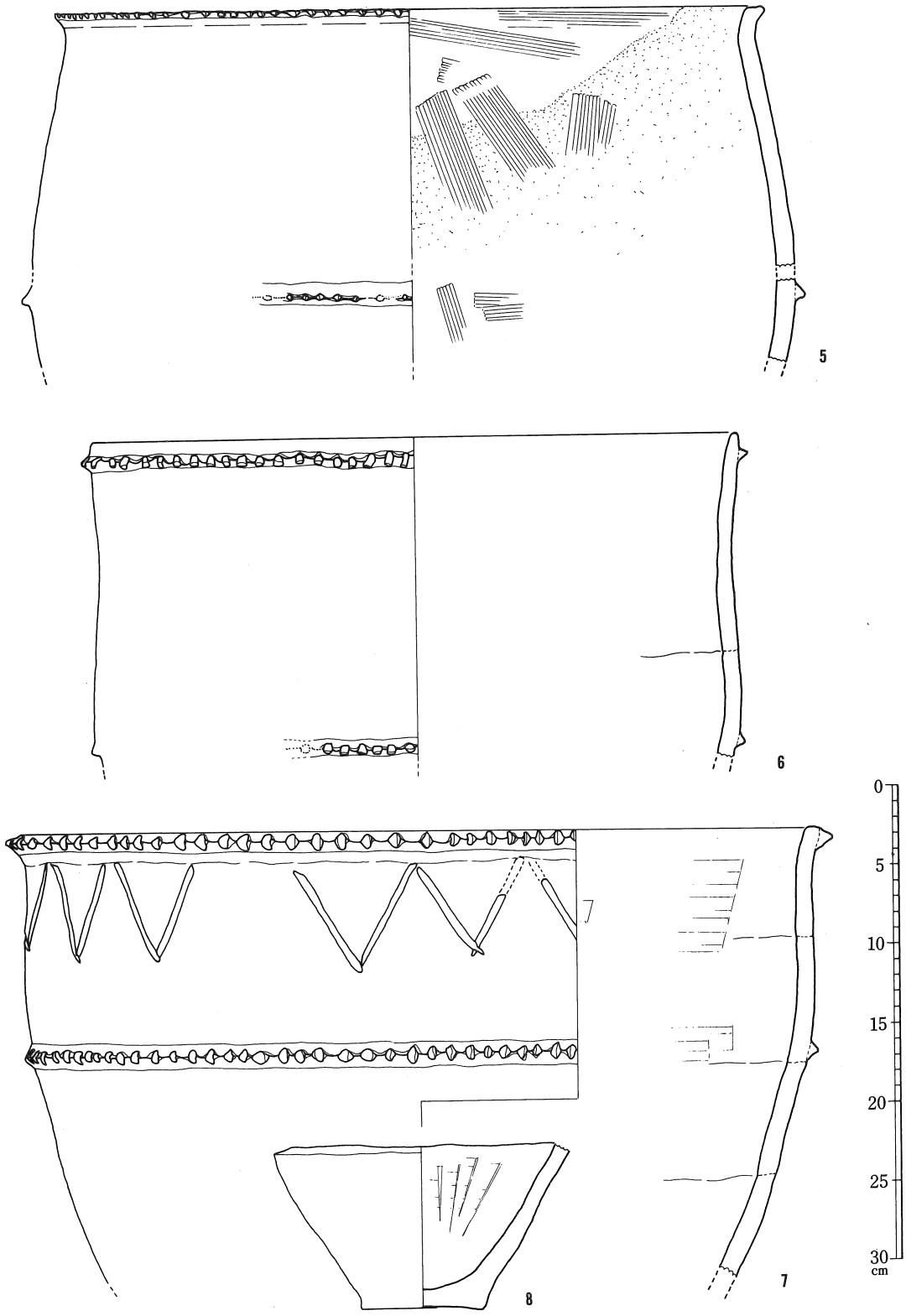
甕形土器の器面はヘラ削りのちにナデ消したものが大部分であるが、5の内面には貝殻条痕が見られる。

第2表　駒方B遺跡出土土器観察表

番号	出土状況	残存部位	口径 cm	胎土	色調	突帯の有無	調整 表面	調整 裏面	備考
1	伏せ甕	口縁部・肩部	37.6	石英砂粒混	茶褐色	口唇部・肩部の2条に刻目	指圧のちナデ	口縁部付近に指頭圧痕・ナデ	輪積み痕残る
2	伏せ甕	口縁部・肩部	49.8	石英砂粒混	茶褐色	口唇部・肩部の2条あるが肩部のみに刻目	ナデ	口縁部付近に指頭圧痕ナデ	輪積み痕残る・突帯の刻目は下方からの突き上げによる
3	伏せ甕	口縁部	39.6	石英砂粒混	茶褐色	口縁部に2条あるが、口唇部のみに刻目	ヘラ状工具によるケズリのちナデ	ナデ	輪積み痕残る。突帯の刻目は上方から棒状具により突き下げ
4	伏せ甕	口縁部・肩部	42.6	石英砂粒混	赤褐色	口縁部に2条・肩部に1条の計3条全て刻目	ヘラ状工具によるケズリのちナデ	ヘラ状工具によるケズリのちナデ	輪積み痕残る
5	伏せ甕	口縁部・肩部	45.0	石英砂粒混	表 赤褐色 裏 黒褐色	口唇部・肩部に各1条細かい刻目	ナデ	貝殻条痕のちナデ	裏面に媒付着
6	伏せ甕	口縁部・肩部	41.0		灰褐色	口縁部・肩部に各1条全て刻目	ヘラ状工具によるケズリのちナデ	ナデ	輪積み痕残る
7	伏せ甕	口縁部・肩部	52.6		黒褐色	口唇部・肩部各1条全て刻目	ヘラ状工具によるケズリのちナデ媒付着	ヘラ状工具によるケズリのちナデ	輪積み痕残る。口縁部・肩部突帯間にヘラ使用による鋸歯文状沈線
8	立て甕	底部のみ		石英・雲母片混	赤褐色		ナデ	ヘラケズリのちナデ	輪積み部から欠損
9	立て甕	底部のみ	?						剝落　欠損ひどい
10	伏せ甕		?						剝落　欠損ひどい



第7図　駒方B遺跡出土土器実測図 (1)

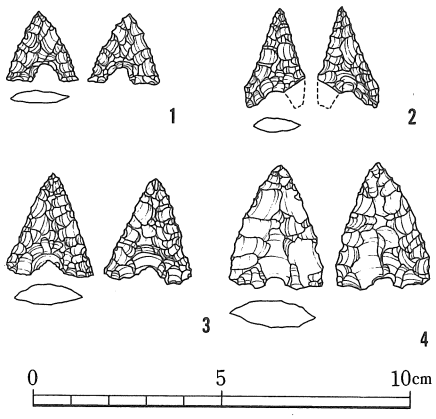


第8図　駒方B遺跡出土土器実測図 (2)

刻目突帯の刻目も画一化された様子はなく角棒状工具により真横から刺突されたもの（1・5・7）、丸棒状工具により下方から突き上げたもの（2）、上方から突き下げたもの（3・4・6）とバラエティに富む。

(2) 石　　器

発掘区からは4点の打製石鏃が出土した。4点はいずれもⅢ層黒色土に包含されたもので、姫島黒曜石、チャートが素材となる。1は甕棺付近で出土した比較的精緻な加工のものであるが、甕棺群周辺からの他遺物の出土は皆無である事から、同石鏃の副装品的性格も考えられる。時期については、当地区からは先土器、縄文晩期、弥生時代遺物が表採されているが、一応縄文晩期に比定できよう。



第9図　駒方B遺跡出土石鏃実測図
（1・3・4チャート製
2姫島産黒曜石製）

第4節　ま　と　め

県下における縄文時代以前の葬制については、先土器時代の本匠村聖岳洞穴[註1]、清川村岩戸遺跡[註2]の集石墓に始まり、縄文時代に入り、速見郡山香町川原田洞穴[註3]の集骨葬、別府市十文字原第1遺跡[註4]の上部に集石を有する土坑墓、玖珠郡九重町二日市洞穴[註5]、下毛郡本耶馬渓町枌洞穴[註6]に見られる伸展葬、抱石葬足骨除去葬等バラエティに富んだ葬法が実施されるが、終期になるとこれらの葬法は土坑墓・甕棺墓に集中する傾向がある。しかも土坑墓については、ローム層下に掘り込まない限り、土質の関係でその判別が非常に困難である事から検出例が少なく、甕棺墓だけが注目される現状にある。

甕棺墓には大きく単独で存在する単棺墓、複数で存在する群集墓的性格のものに分けられ、個々の埋納状況からも単甕で使用するものと合口甕等に細分できる。

単棺墓的要素をもつ遺跡としては、大野町夏足原遺跡[註7]・竹田市枡刈遺跡[註8]、群墓としては竹田市小高野遺跡[註9]、当遺跡のほか、合せ甕の群墓として朝地町田村遺跡[註10]等が代表的遺跡である。

これらに利用される甕形土器は口径40㎝以上の大型のものが多く、その大部分は埋納時に底部を除去する傾向をもつ。当遺跡の場合、出土した甕は全て底部を欠失しており、底部除去の確認は不可能であった。しかし、底部のみの8号甕は明らかに輪積み部からの除去によるものであり、これから推察すると当遺跡でも意図的な底部除去が実施されていた可能性が強い。

また甕棺墓の立地については、単棺墓と群墓では多少異なると考えられ、夏足原遺跡・枡刈遺跡等は台地中央部に設営されており特別な選地の傾向はうかがえないが、小高野遺跡・当遺跡等は台地先端あるいは隅に設営する事が多く、住居地との分離が明確化された結果と考えられる。

註 1．賀川光夫　『日本の洞穴遺跡』　昭和42年

…洞穴内から発見された人骨は頭蓋骨の一部と人骨器ではあるが、洞穴は間口が狭い石灰岩洞穴であり、居住地としては不適当である。当洞穴が石器と人骨器を副装品とした埋葬遺構と考えられている。

2．坂田邦洋　『岩戸』広雅堂　昭和55年

3．岩尾松美・酒勾義明　「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」（大分県地方史　34）　昭和39年

4．牧尾義則・江田　豊　「十文字原遺跡群」大分県教育委員会　昭和58年

5．橘　昌信　『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』別府大学付属博物館　昭和55年

6．賀川光夫編『大分の歴史』大分合同新聞社　昭和51年

7．牧尾義則・玉永光洋　「大野原台地の遺跡　Ⅲ」大野町教育委員会　昭和53年

8．牧尾義則　「大分県竹田市枡刈出土縄文晩期カメ棺」（考古学論叢　2）別府大学考古学研究室　昭和49年

9．賀川光夫編「小高野遺跡調査報告」（別府大学考古学研究報告　4）別府大学　昭和49年

10．賀川光夫　「縄文時代のカメ棺」（考古学ジャーナル　34・35・37号）　昭和44年

第2章　駒方C遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境

駒方C遺跡は、大野町大字中原字古屋に所在する。水系からみれば、大野町のほぼ中央を流れる田代川水系になる。遺跡のある台地は屋原から続くものであるが、地狭部があるため独立状にみえる。その形状は、最高部を中心に北向きのT字状になり、緩く東南面方向に傾斜する。これをとり巻くように田代川とその支流が流れる。駒方C遺跡は、このうちのこの最高部に位置し、標高242mを測り、北側は急斜面となっている。

この台地上には、駒方C遺跡をはじめ前章の駒方B遺跡、あるいは南に延びる台地上に、弥生時代の遺物が散布している。また東に延びる台地上でもわずかであるが遺物の散布が認められる。このように台地ではいたる所に遺物が散布している。

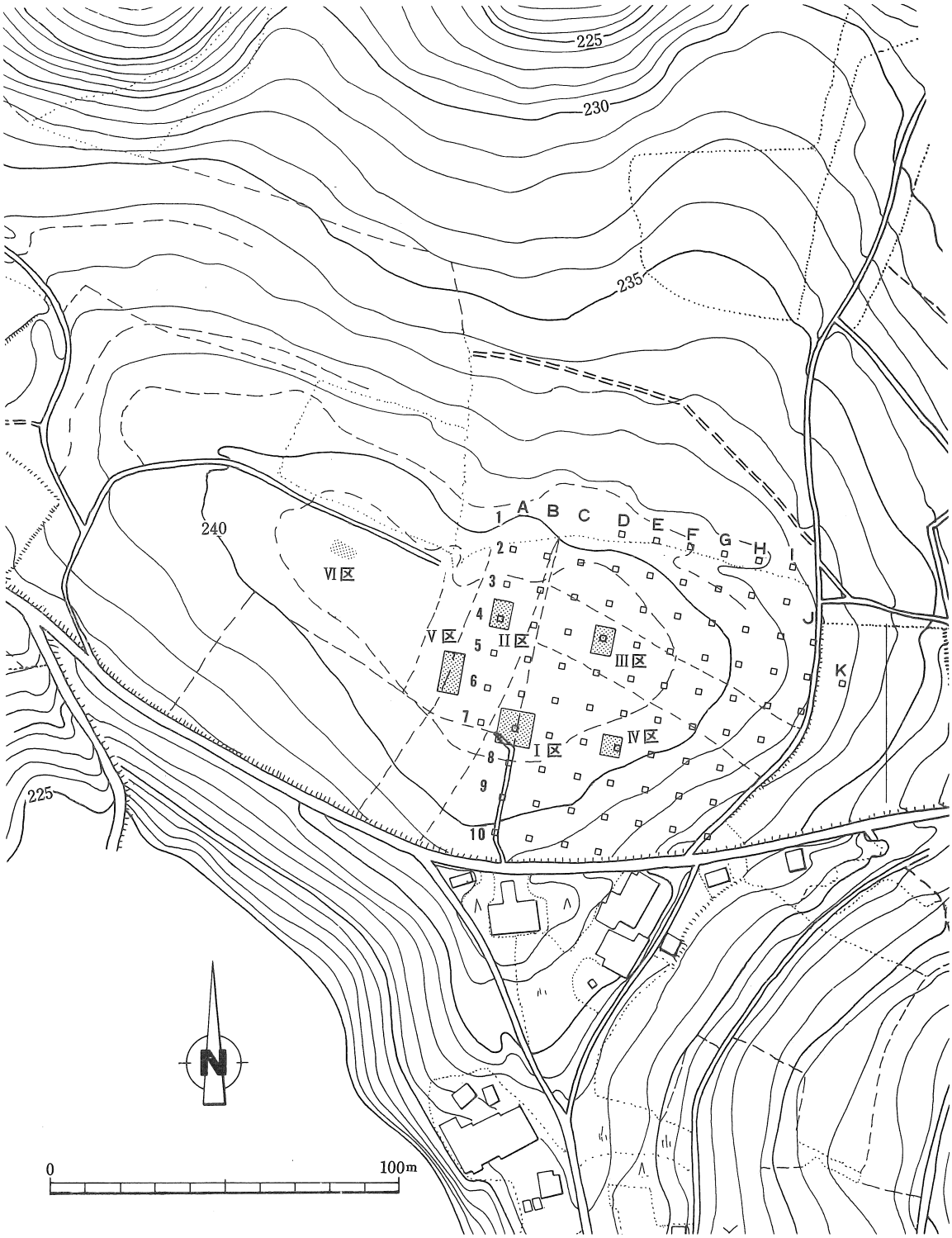
一方この台地と田代川を狭んで東に対峙する中原・片島原の台地にも、松木遺跡・宮地前遺跡をはじめ数多くの遺跡が点在している。

第2節　調査の経過と調査区の設定

昭和49年10月、大野町を分布調査した際、T字状になった台地のいたる所で遺物が採集されるため西部からA・B・Cとし、それぞれ、駒方A遺跡・駒方B遺跡・駒方C遺跡とした。ところが、この調査の際大野原地区で畑地帯総合土地改良事業が実施されていることがわかり、しかも、駒方A・B・C遺跡のある台地は、その年度の工事予定地となっていた。このため調査は緊急を要した。発掘調査は、昭和49年11月25日から開始された。まず駒方C遺跡については、最高部を中心に東西90m南北90mの調査区を設け試掘をした。その方法は10m×10mのグリッドの一角に2m×2mの試掘区を設け、その数は80個所にのぼった。試掘の結果は、頂上部の方が堆積が厚く、斜面部は表土層下に洪積層である第V層の黄褐色土があらわれるという状況であった。また遺物の出土状況は、B－7区・A－4区・D－4区・G－2区で縄文時代後期の遺物が、E－7区で先土器時代の遺物が顕著であった。このため、これらの地区を拡張し、さらに精査することにした。

昭和49年12月に開始された本調査では、B－7区を第Ⅰ区として10m×10mに拡張した。またA－4区とD－2区をそれぞれ、6m×8m拡張し第Ⅱ・Ⅲ区とした。そして、洪積層中から黒曜石の出土したE－7区については6m×6mに拡張し、第Ⅳ区とし先土器時代の遺物について調査することにした。また、今回の調査以前に、当時、地元の県立大野高校に在職されていた鳥養孝好氏が調査され土偶を発掘したという付近に、12m×6mの調査区を設定し、これをV区とした。またこれ以外にも調査終了後、工事開始直前に試掘調査した地区よりさらに西側の地区にも縄文後期の遺物集中ケ所があることが判明し、これを調査した。この地区は緊急であったため、別に調査区は設定しなかったが、遺物は第Ⅵ区としてとりあげた。

調査はタバコの作付期日が決まっており、それ以前に工事を終了させなければならないという緊急状況の中で実施され昭和49年の12月25日にに完了した。



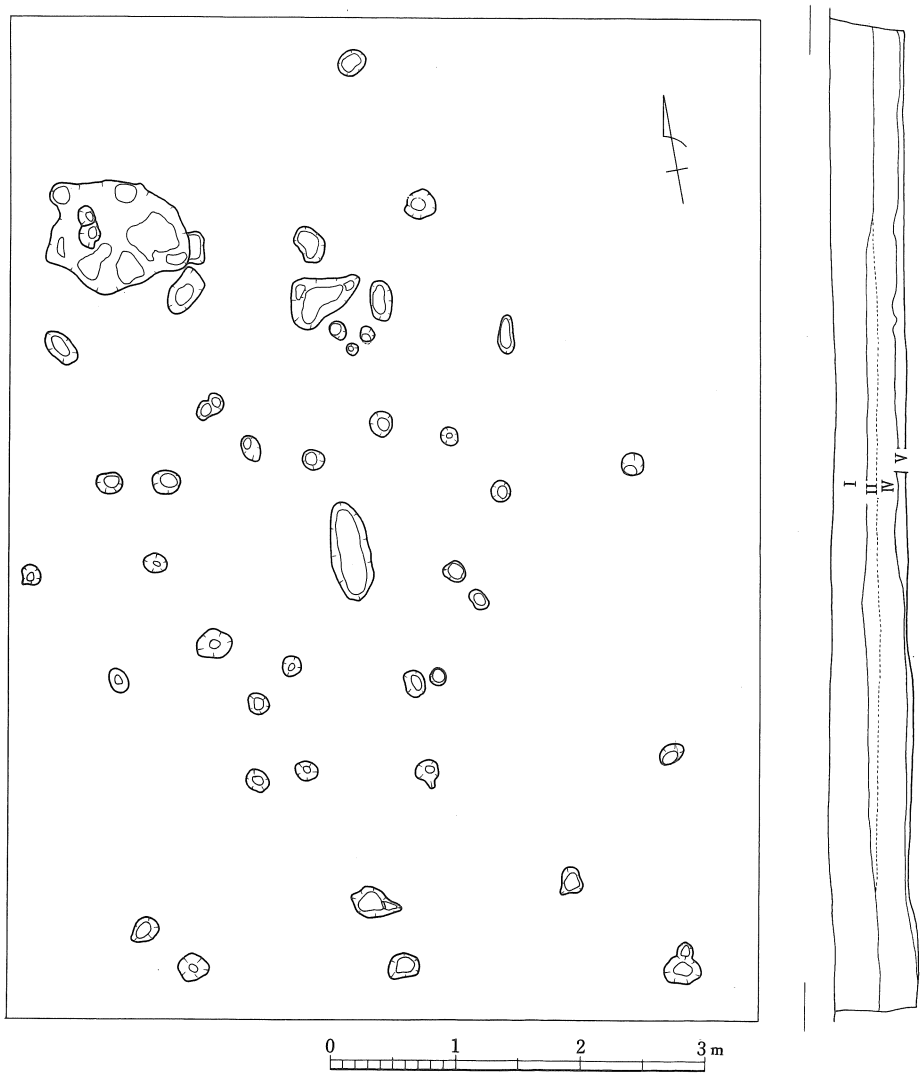
第10図　駒方C遺跡の地形と調査区の配置

第3節　各調査区の成果

第Ⅰ区から第Ⅵ区まで設定し、調査したがそれぞれの調査区で異なる成果をあげることができた。

第Ⅰ区は、10m×10mの調査区の西北隅から南辺にかけて楕円形状に縄文後期の三万田式土器が集中して出土した。遺物は他の時期の土器が全く含まれない単純な様相であった。

第Ⅱ区はA－4区を拡張したものであるが、試掘調査の段階で比較的まとまりのある縄文後期の土器片が出土したものの、拡張しても遺物は期待したほど出土しなかった。そこで、遺構の有無を確認するため第Ⅴ層の黄褐色土表面まで掘り下げ、これを遺構検出面とした。その結果、20数ケ所のピットが確認され、いずれも黒色土がつまっていた。しかし、これらのピットの中からは遺物が



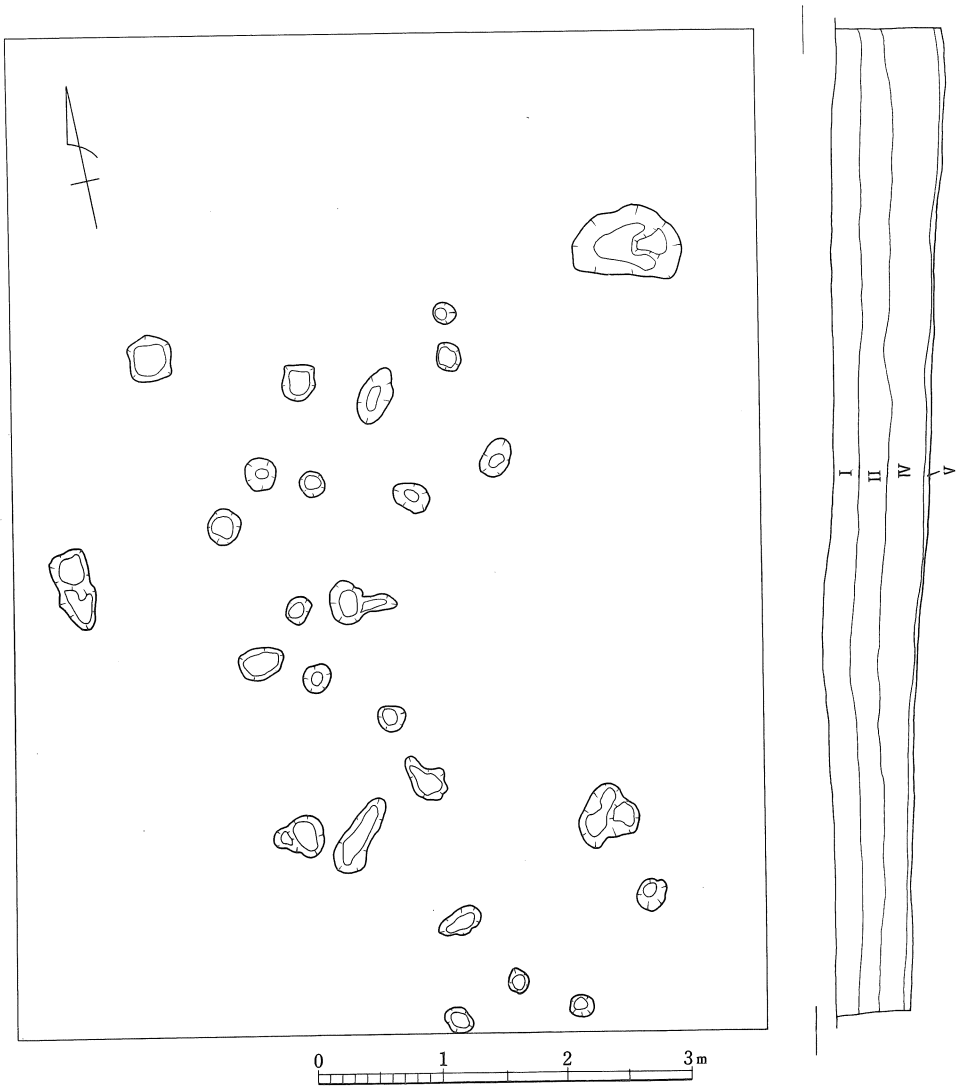
第11図　駒方C遺跡第Ⅱ区検出遺構実測図

出土せず、時期などについては不明である。

第Ⅲ区はD－4区を拡張したものであるが第Ⅱ区と同様、試掘の時に出土したほど遺物が出土せず、縄文後期後半の土器がわずかにみられたのみである。第Ⅱ区と同様、第Ⅵ層表面で検出した遺構もピットばかりであり、しかも遺物は出土しなかった。第Ⅱ・Ⅲ区ともに表土層下に縄文後期遺物包含層の第Ⅱ層があらわれ、「アカホヤ」は確認されなかった。また、縄文後期以外の遺物では、先土器時代の遺物が数点出土した。

第Ⅳ区は、E－7区の拡張区であり、第Ⅰ区が縄文後期の調査で成果があったのに対し、この地区は、先土器時代の遺物が良好な状態で出土した。

第Ⅴ区は12m×6mの、調査区であるが、この調査区は、以前調査された鳥飼孝好氏の意見を参



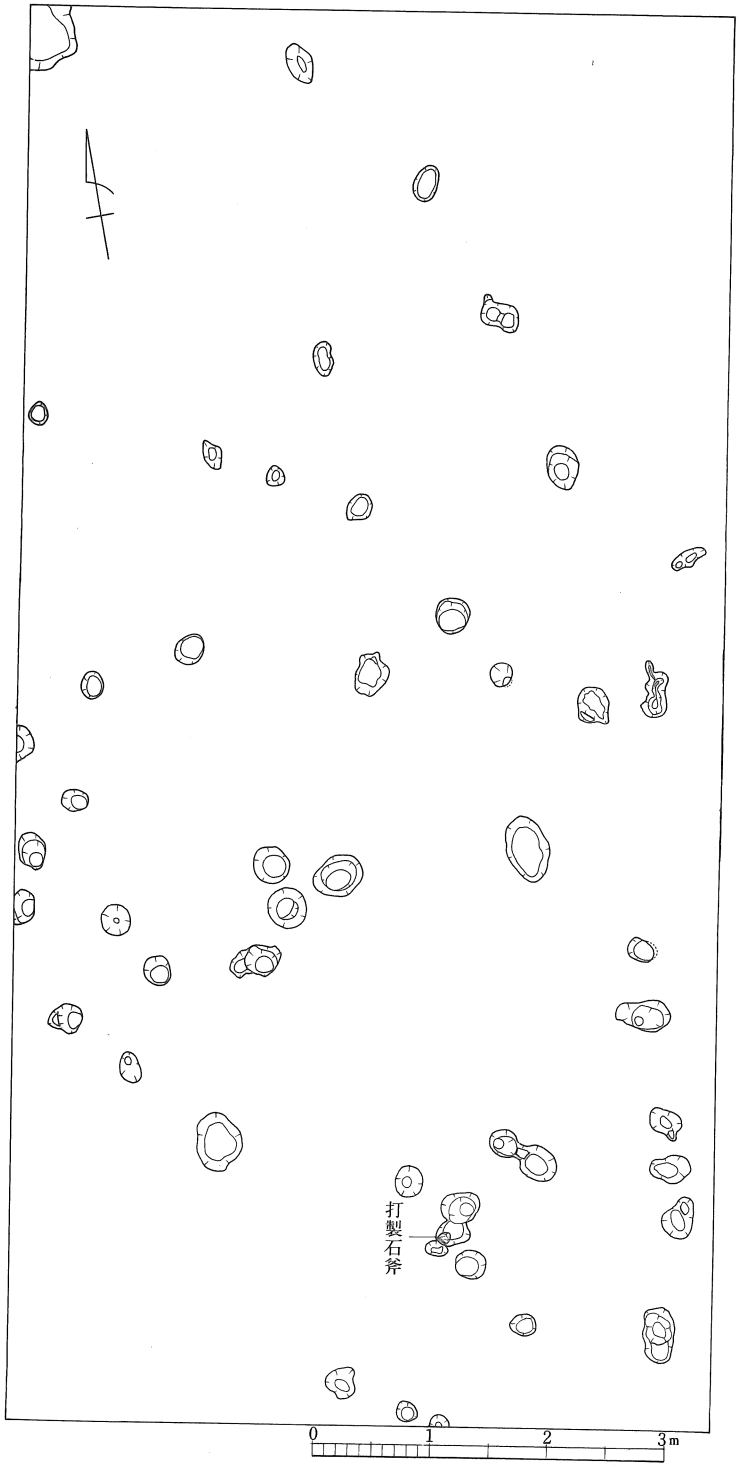
第12図　駒方C遺跡 第Ⅲ区検出遺構実測図

考にし試掘調査とは別に設定した調査区である。このため、ある程度の成果があがるものと期待されたが、耕作による削平のためか、ほとんど遺物は出土せず、第Ⅱ・Ⅲ区と同様な調査結果に終わった。ただ、遺構検出面である第Ⅴ層黄褐色土表面まで掘り下げた時点で検出されたピットを発掘中に扁平打製石斧が1点出土したのが注目される。

第Ⅵ区は、遺物を採集するだけにとどまったが、遺物の集中する状況は第Ⅰ区と同様で、縄文後期の遺物が単純な状態で出土した。その規模は、第Ⅰ区よりやや狭い範囲と思われる。

以上の調査区以外であるが、試掘の段階で遺物が出土したG－2区は、調査最終日に、任意に試掘区を拡張し、遺物を採集した。この地区も、第Ⅰ区・第Ⅵ区と同様、同時期の遺物が、単純な状況で包蔵されていた。

以上が各調査区の調査状況であるが、特に良好な状況で遺物が出土した、第Ⅰ区と第Ⅳ区および各調査区の遺物については次節で説明する。



第13図　駒方C遺跡 第Ⅴ区検出遺構実測図

第4節　第Ⅰ区と第Ⅳ区の調査

1，第Ⅳ区の調査と先土器時代の遺物

先土器時代については表面採集でホルンフェルスの剝片が採集されたことから、この遺跡に先土器時代の包含層があることが推測された。このことは試掘区を増加するにつれ資料が増し、さらに可能性の強いものとなった。そこで、縄文時代の包含層のない、しかも比較的平坦部であるE－7区を掘り下げその確認にあたった。その結果、第Ⅴ層下部からⅥ層の上部にかけて、3点の遺物が出土した。そこで、この地区を拡張し第Ⅳ区として先土器時代の調査を実施した。

調査の結果、Ⅰ層・Ⅴ層上部とⅤ層下部～Ⅵ層上部の二つの異なる層位に石器群を検出した。特に後者には、石器群集中分布の一部を遺構（焼土とピット）と共に検出し、先土器時代では数少ない例を提出することとなった。

(1)　層位と遺構

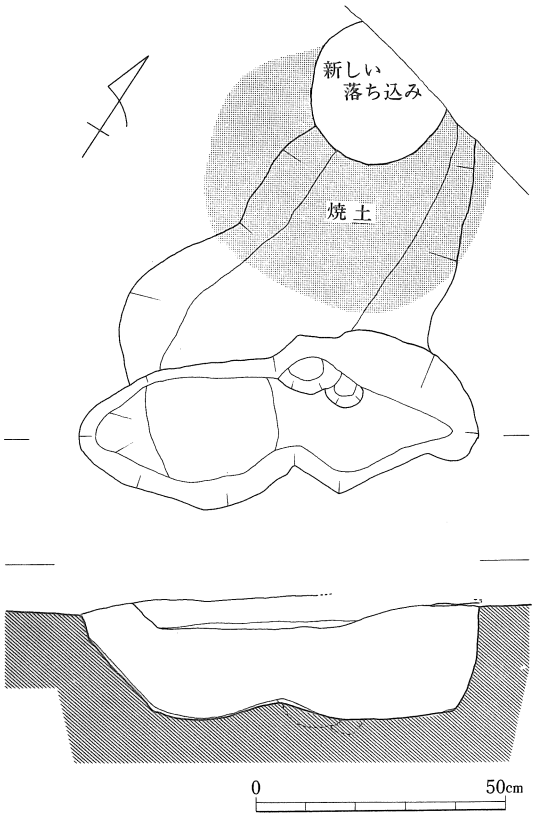
1）　層　　位

層位は、表土層直下に第Ⅵ層があらわれる。このため土層と遺物及び遺構は以下のような状況となる。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅴ層　黄褐色土層　上位は軟質であり、約60㎝堆積しているこの層の中位までは、全く遺物が出土しない。下部の硬質部には、漸移的に変化し、それと同時に遺物が出土し始める。硬質になる以外には土質には大きな変化は認められない。

なお、近年注目されている超広域火山灰である姶良一丹沢火山灰（AT）の層位は、調査当時まだ認識不足であり、肉眼的観察や科学的な同定のための作業を行っていない。したがって、調査区内での正確な位置や保存状況を知ることができない。しかし、その後の周辺の発掘調査や断面観察からⅤ層下部に存在したと推定している。調査区内でのその保存状態は悪いが、検出された遺構内の黄褐色の埋土は砂質に富み、風化、流出を免れた保存の良好な部分であった可能性がある。



第14図　駒方C遺跡第Ⅳ区検出の先土器時代遺構実測図

第Ⅵ層　黒褐色土　遺物はこの層の上部まで含まれる。また調査区内の東北隅で検出された遺構は、この層が検出面となっており、上層の黄褐色土が落ち込んでいた。焼土と思われる部分は、この層の直上の第Ⅴ層が変色していた。大野川流域で一般的に認められる暗（黒）色帯である。

第Ⅶ層　赤褐色土　この層からは石器は出土しておらず、大野川流域でもこの層から遺物が出土する遺跡は少ない。

2）遺　　構

次に遺構であるが、第Ⅴ層下部の調査が終了し、第Ⅵ層へ変化する面に達した段階で黒褐色土の面を調査区全面に露出した。その際、焼土と思われる部分と、黒褐色土の中に黄褐色の部分が残る落ち込みを検出した。

焼土の部分は、この地域の弥生時代の住居跡内に残されている炉跡ほど鮮明には焼土化していなかったが、それでも淡い赤褐色をしており、他の部分と識別できた。その範囲は直径60㎝の円形状である。しかし厚みは数㎝にとどまった。

一方遺構の部分は、黒褐色の中の黄褐色で識別は容易であったが、最深部は第Ⅶ層に達していたため、この部分の判断は困難であった。遺構の形状は第14図に示したとおりであるが、平面形は長軸75㎝　短軸30㎝の長楕円形となり断面は、深さ25㎝の緩い「W」字状となる。また、底の部分には小さな窪みがある。この深い土坑には巾50㎝、深さ10㎝の溝状の遺構が接続している。しかし、この溝状の遺構と土坑、焼土の関係はそれぞれ深くかかわるものか、あるいは前後関係をもつものかは確認できなかった。

(2)　遺物の出土状況

1）上部石器群

上部石器群については、点数が少なく、しかも、原位置からの出土ではない。このため資料的価値は下部石器群に比較すると劣る。しかし、出土の傾向をみると、A－3・4・5区、またはD－8区とE－9区などのように台地上で偏在化する傾向もみられ、第Ⅳ区で確認されたような、遺物集中分布が、台地上に数ケ所存在する可能性を暗示している。

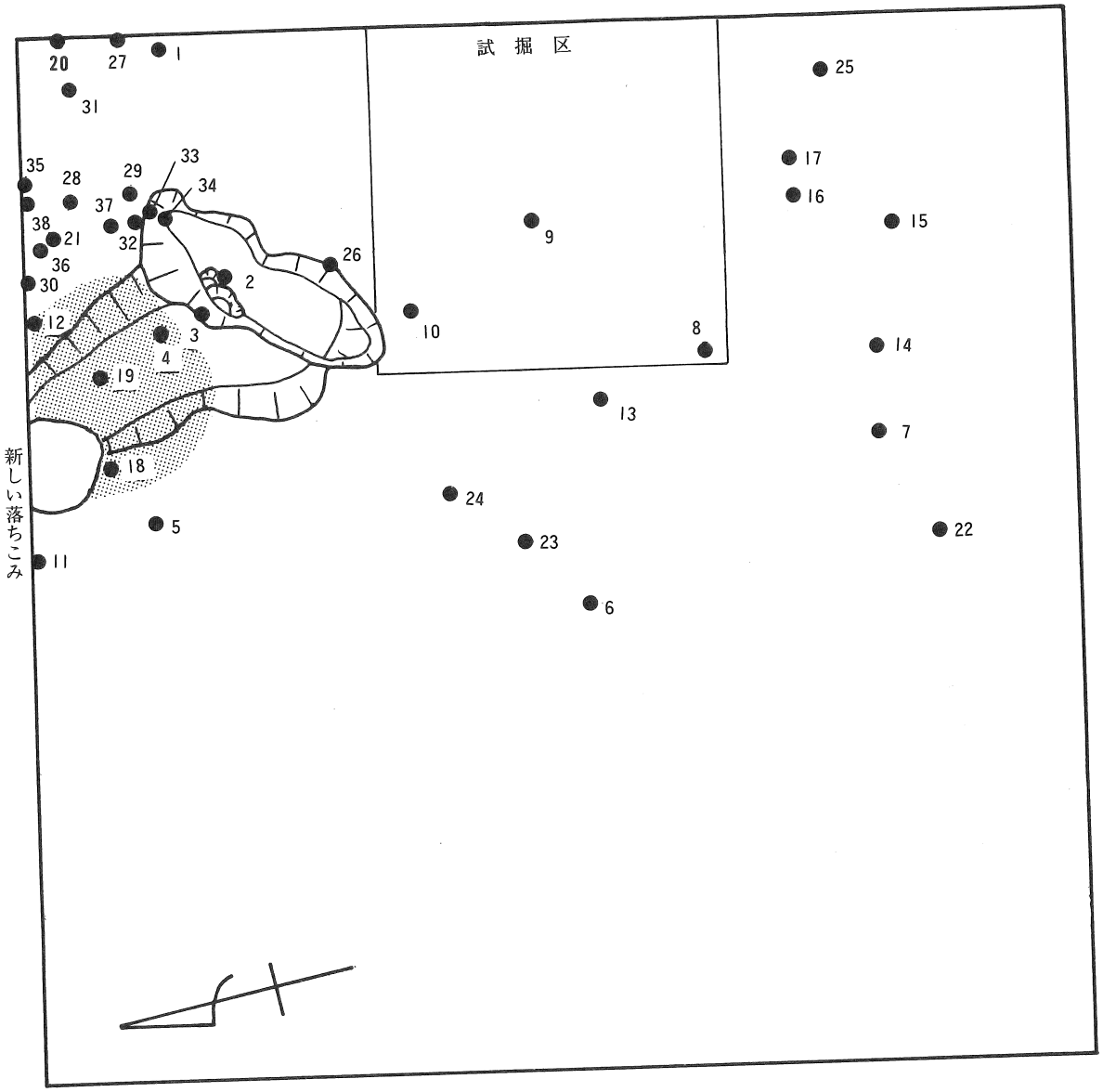
2）下部石器群（第Ⅳ区）

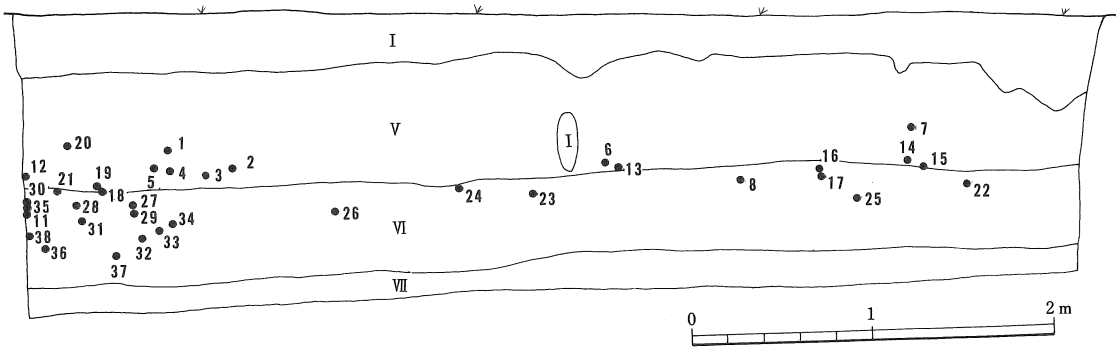
下部石器群の遺物の出土状況は前項で述べたとおり、第Ⅴ層下部に主体があり、一部第Ⅵ層上面まで含まれる。これを平面的に観察すると、遺構のある部分を中心に扇状に遺物が出土する。そこで、第Ⅳ区で検出した状況から遺物の広がりを推測すれば、半径約5ｍの円形状の遺物集中分布域が考えられる。第Ⅳ区で調査した範囲はこの約4分の1から5分の1にあたる。遺物の集中度は中心ほど密であり、特に土坑状遺構の周辺では集中的に出土し、この部分が比較的中心に近いことを示している。これに対して調査区の東南隅や西北隅、南西隅に近づくにつれ遺物の出土状況は疎となる。特に南西隅周辺では遺物は全く出土しなかった。[註1]

(3)　出　土　遺　物

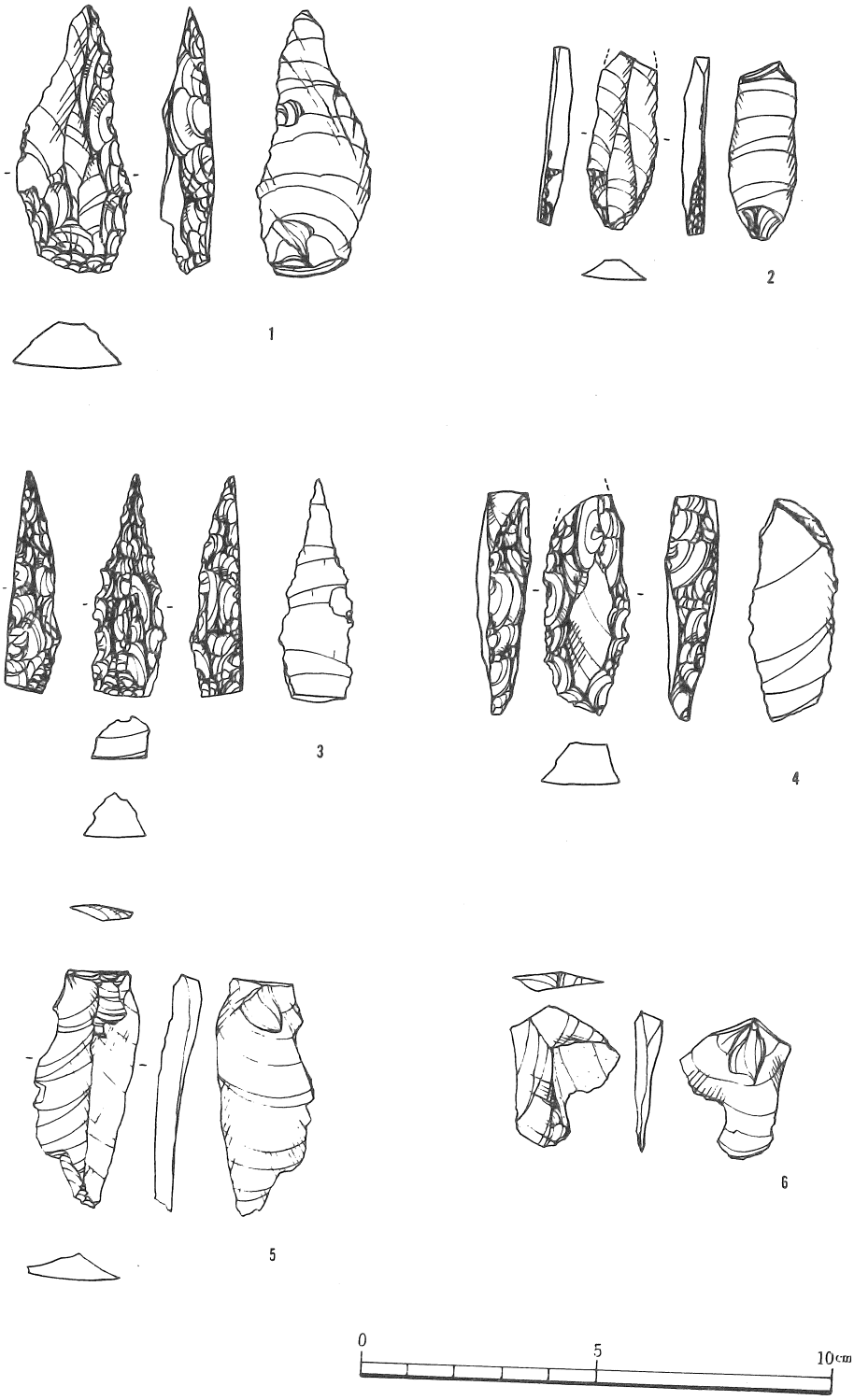
1）上部石器群（第16図）

表土（耕作土）から黄褐色土層にかけて出土した石器や剥片を一括して上部石器群と呼ぶ。これ





第15図　駒方C遺跡第Ⅳ区出土石器の水平・垂直分布図
（番号は下部石器群の遺物番号である）



第16図　駒方Ｃ遺跡各調査区出土先土器時代遺物実測図（上部石器群）

らの出土地点は広範囲におよび、これらが本来は異なる石器群に所属する可能性も残されている。出土遺物は、ナイフ形石器2点、尖頭器2点、剥片2点の計6点である。石材は全て流紋岩である。

ナイフ形石器

1は完形品である。縦長の剥片を素材とし打面を下端として整作されている。打面は残している。二次調整は右側辺全体と左側辺下半に50～60°の打角で荒いブランティングを施している。

2は、先端部を欠損しているものである。長さは約4.5cmと復原できる。端正な縦長剥片を素材としている。二次調整は、打面を下端とし両側辺基部のみに微細なブランティングを施している。わずかであるが打面を残している。

尖頭器

3は縦長剥片を素材とした三稜尖頭器である。基部は完成後欠損し、その後に欠損面から二次調整が施されている。当初の二次調整は、両側辺ともに主要剥離面と稜線から交互に施されており、特に側辺では鋸歯状に加工されている。打角は60～70°であり、断面形は正三角に近い。主要剥離面には二次調整は認められない。

4は横長剥片を素材とした角錐状石器である。先端部を欠損しているが、復原長は約5.5cmと推定できる。素材背面には先行する剥片剥離面が見られ、同様の剥片が連続して剥離されたことがうかがえる。二次調整は、両側辺ともにまず主要剥離面から施され、次に稜線から施されている。なお、この稜線からの剥離は先端部のみに施されている。

剥片

5は、平坦打面を持つ縦長剥片である。背面で観察される先行する剥片剥離も同様の形状のものが推定される。剥片下端に下方からの剥離が認められ、これが剥離面調整でない限り、打面両設の可能性もある。

6は、調整剥片である。背面に一部自然面を残すことや、剥片剥離が先行するものに対して90°移動していることから石核調整ないし打面調整に伴うものと考えられる。

以上の石器や剥片は同じ流紋岩でも石質・色調が異なるものが多い。石質のみで最も似ているものは2と4であるが、剥片剥離工程は全く別のものである。この点から本石器群は単独の個体別資料の集合であると考えられる。

2) 下部石器群（第17図～第21図）

Ⅴ層下部～Ⅵ層上部から計37点の石器や剥片などが検出できた。これは層位・平面分布・接合資料の要素から、単一の石器群と把握した。その内容はナイフ形石器2点、二次加工（使用痕）の認められる剥片5点、剥片15点、調整剥片10点、砕片5点である。これらは接合関係と石質で14の母岩別資料として把握した。流紋岩を素材とするものがNo.1からNo.10までで30点あり、主体を占める。また、黒曜石を素材とするものがNo.11からNo.14まで7点ある。以下では、まず母岩別にその内容を説明し、その後に個別の石器についてふれる。なお、主な要素は第6表で示した。

母岩 No.1

12点の資料からなり、縦長剥片を目的剥片とする剥片剥離工程を持つ一群である。第17・18図でA・Bとした二組の接合資料を含んでいる。その器種内容は、ナイフ形石器1点、二次加工の認められる剥片1点、剥片5点、調整剥片4点、砕片1点である。

接合資料から復原される母岩は、ハンドボール程の大きさのやや平たい円礫と推定できる。この円礫を半截し、その剥離面を側面とし、上下に打面を設定し剥片剥離を開始している。打面調整は、剥片剥離の過程で幾度も行われている。なお、検出された接合資料のAとBは、直接の接合関係は認められないが、Aの全体の剥片長が8㎝以上にも及ぶことから、Bに先行した段階と判断できる。また、接合関係のない21・26・34は、何れも剥片長が短かく、剥片のゆがみも大きいことから石核がより小さくなった段階、すなわち接合資料B以降の段階のものと推定できる。

さてこの**母岩No.1**の剥片剥離工程を復原し、各資料をあてはめると次のようになる。

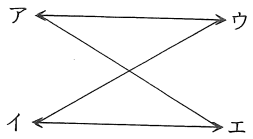
第3表　剥片剥離工程表

打順	打面	剥離内容	剥離の形態	資料番号
		⋮		
1.	ア	剥片剥離		
2.	〃	〃		
3.	〃	〃	階段状剥離	
4.	イ	〃		
5.	ア	〃		35 } 接合資料A
6.	〃	打面調整※1		
7.	〃	剥片剥離		27
		⋮		
		(この間不明)		
		⋮		
8.	エ	剥片剥離		
9.	〃	〃		
10.	〃	〃	階段状剥離	
11.	〃	〃	〃	
12.	ウ	剥片剥離	開放剥離※2	
13.	〃	打面調整		
14.	〃	〃		
15.	〃	〃		37
16.	〃	〃		5
17.	〃	〃		12
18.	〃	剥片剥離		36
19.	〃	〃		接合資料B
20.	〃	打面調整		
21.	〃	剥片剥離		1
22.	エ	〃		25＋31
		⋮		

※1. ここでは微細な打面、剥離面調整は接合資料がない限りはぶいた。

※2. ここでいう「開放剥離」は打撃の失敗で短い剥離に終ったものに限り用いた。

打面で仮称したア～エは次の様な関係がある。



復原できた剥片剥離工程から見れば、計15点の目的剥片の剥離がなされている。集中分布の全体を検出していないことや、21・26・34などの剥片からさらに後出する剥片剥離の存在が確実視されることから、実際に剥出された目的剥片数はさらに多いものと判断できる。そのうち階段状剥離や開放剥離によって失敗したものは4点であり、調査区内で検出できたものは5点である。また、1や25＋31は背面に自然面を残し剥片剥離段階で節理に沿って分解している。これらは自然面を除去する目的の調整としての性格も考えられる。7番目の27は二次調整を至て、ナイフ形石器に利用されている。また、26も二次調整が認められる。

母　岩　No.2

接合関係はないが、同一母岩と考えられる3点からなる資料である。いずれもその形状から初段階の剥離面調整に伴う剥片と推定できる。打面の残っている2・7で見る限り、この段階では平坦打

面を用いている。7は横長の剝片であり、下縁部に刃こぼれが認められることから使用した可能性がある。

母　岩　No. 3

本例は、同一母岩と推定される3点からなる資料である。接合関係は認められない。何れも縦長の剝片であるが個々に諸特徴が異なる。28はやや大形で巾広の縦長剝片である。平坦面で、背面には自然面が大きく残されている。38は、前者と同じ形態の剝片であるが、各特徴は大きく異っている。打面は2枚の剝離面で構成されている。背面には一部に自然面が残り、上下からの複数の剝片剝離面が認められる。3は、端正な縦長剝片である。平坦打面であるが、微細な剝離面調整を伴っている。剝片の背面下端には自然面を残している。これらの諸特徴から、28→3→38という剝片剝離の流れが予測される。当初は平坦、単設打面であり、後に調整、両設打面へ成形されたものと推定できる。また、剝片28・38は自然面を残すことから多分に剝離面調整剝片としての性格がうかがえる。

母　岩　No. 4

砕片及び調整剝片と剝片の先端部の3点からなる。剝片剝離工程は不明である。

母　岩　No. 5

石器2点と剝片1点の3点からなる資料である。素材剝片には自然面は認められない。現状では、打面単設の縦長剝片剝離工程である。打面は33に調整が認められ、32には認められない。33は二次加工のある剝片、29はナイフ形石器に調整されている。

母　岩　No. 6

接合関係を持つ2点の調整剝片よりなる資料である。背面に大きく自然面を残し、先行する剝離はことごとく階段状剝離に終っている。2点は剝片剝離段階で分割したものと考えられる。

母　岩　No. 7～10

流紋岩を素材とするもののうち、単独でしかも異なる母岩より剝出されたと考えられるものが4点あった。

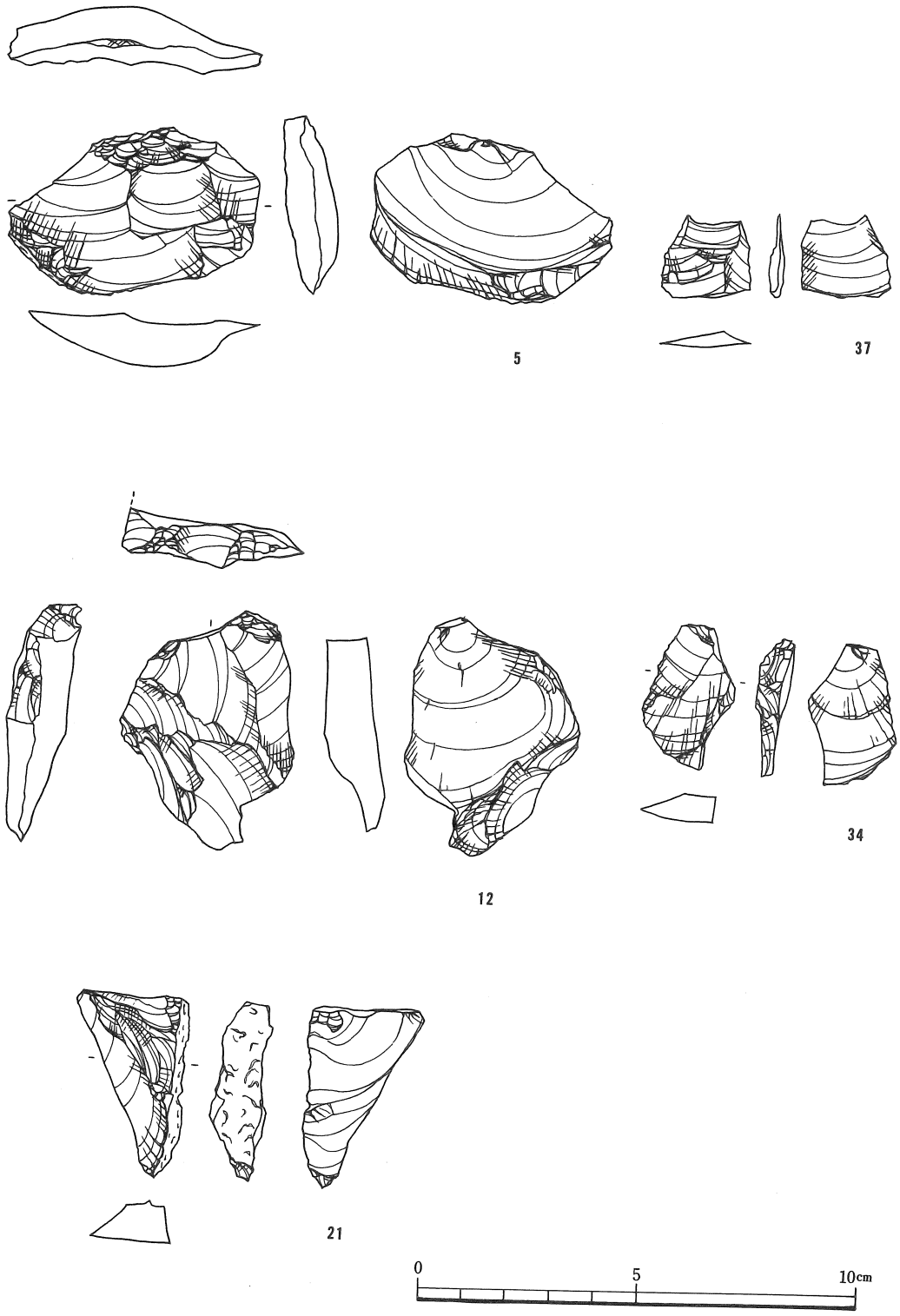
No. 7（11）は、縦長剝片である。打面調整は顕著であり、背面の剝離面の状況から打面両設の可能性もある。No. 8（30）は、縦長剝片の先端のみの破片である。No. 9（20）No.10（19）は砕片である。

母　岩　No.11

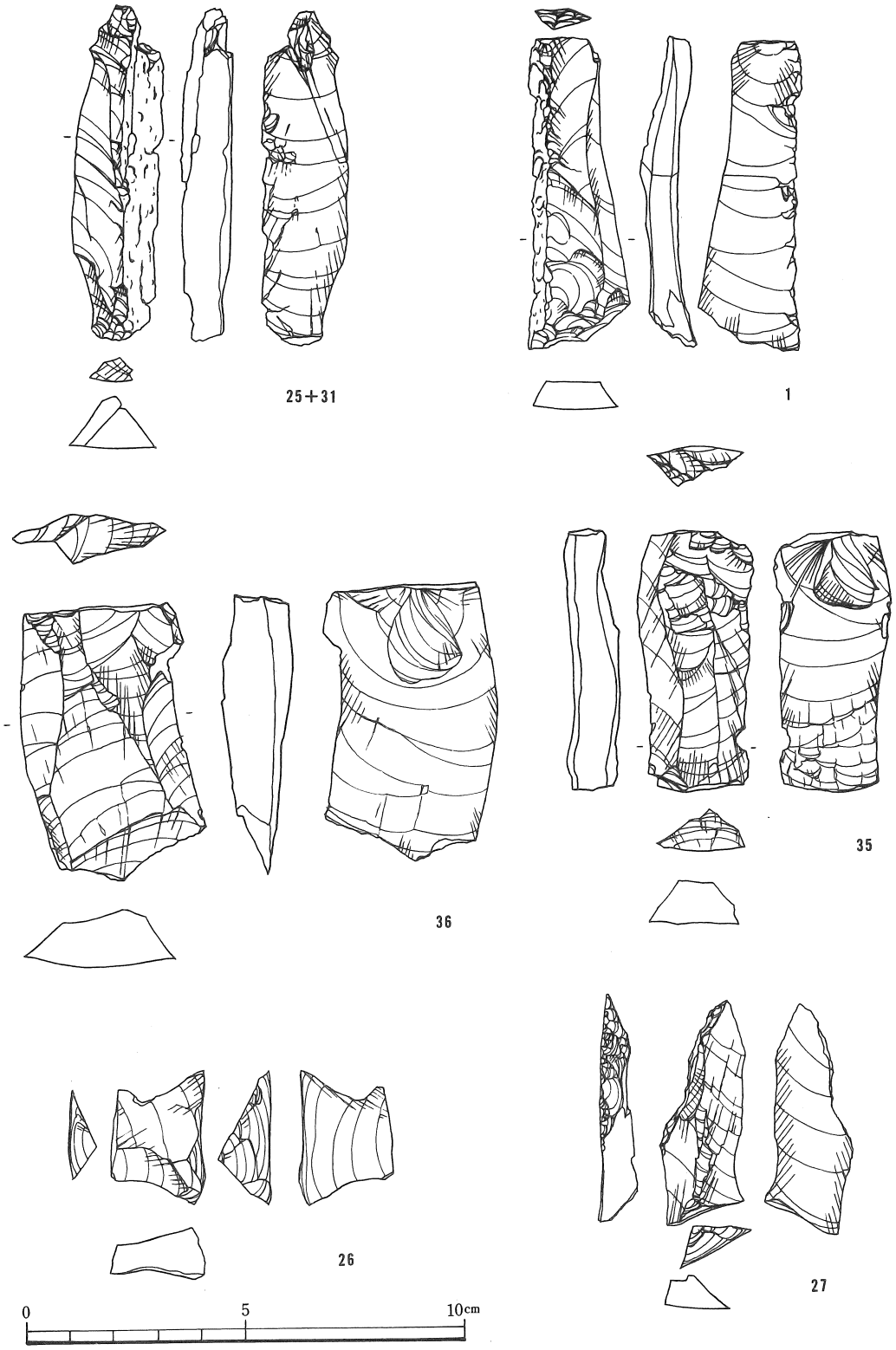
良質で半透明の黒曜石を素材としており、接合資料を含む4点からなる一群である。全てが打面部を欠失しているために打面調整の状況は不明である。接合関係のある14と16は、一方向からの剝片剝離であるが、9と15には剝片両端からの剝片剝離が認められる。これは何れも階段状剝離に終わっている。これから本資料は打面両設と考えられる。

母　岩　No.12～14

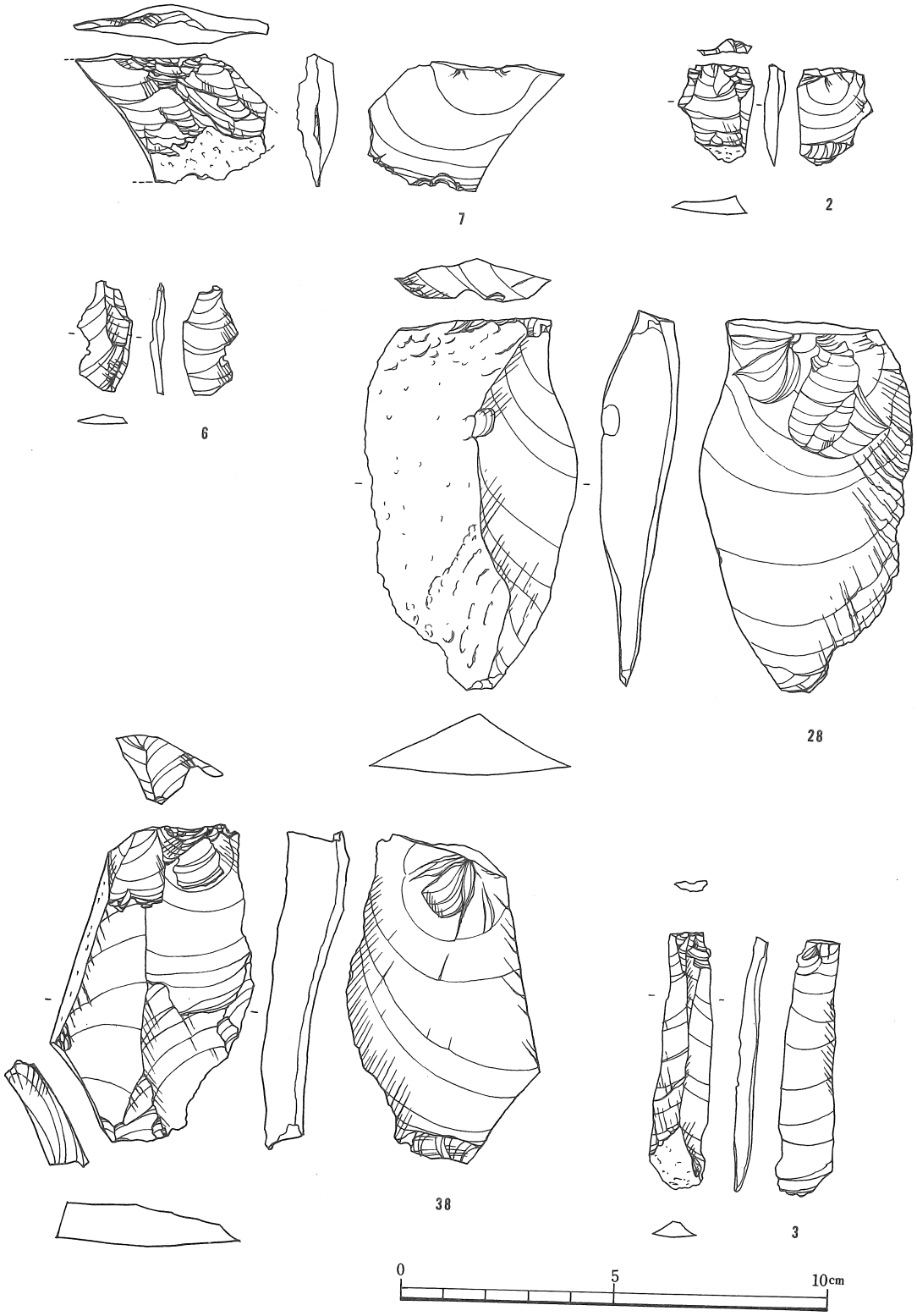
黒曜石を素材とするもののうち、単独でしかも異なる母岩から剝出されたものが3点あった。No.12（8）は、良質で漆黒色の黒曜石を素材とする剝片である。打面両設の縦長剝片石核の調整剝



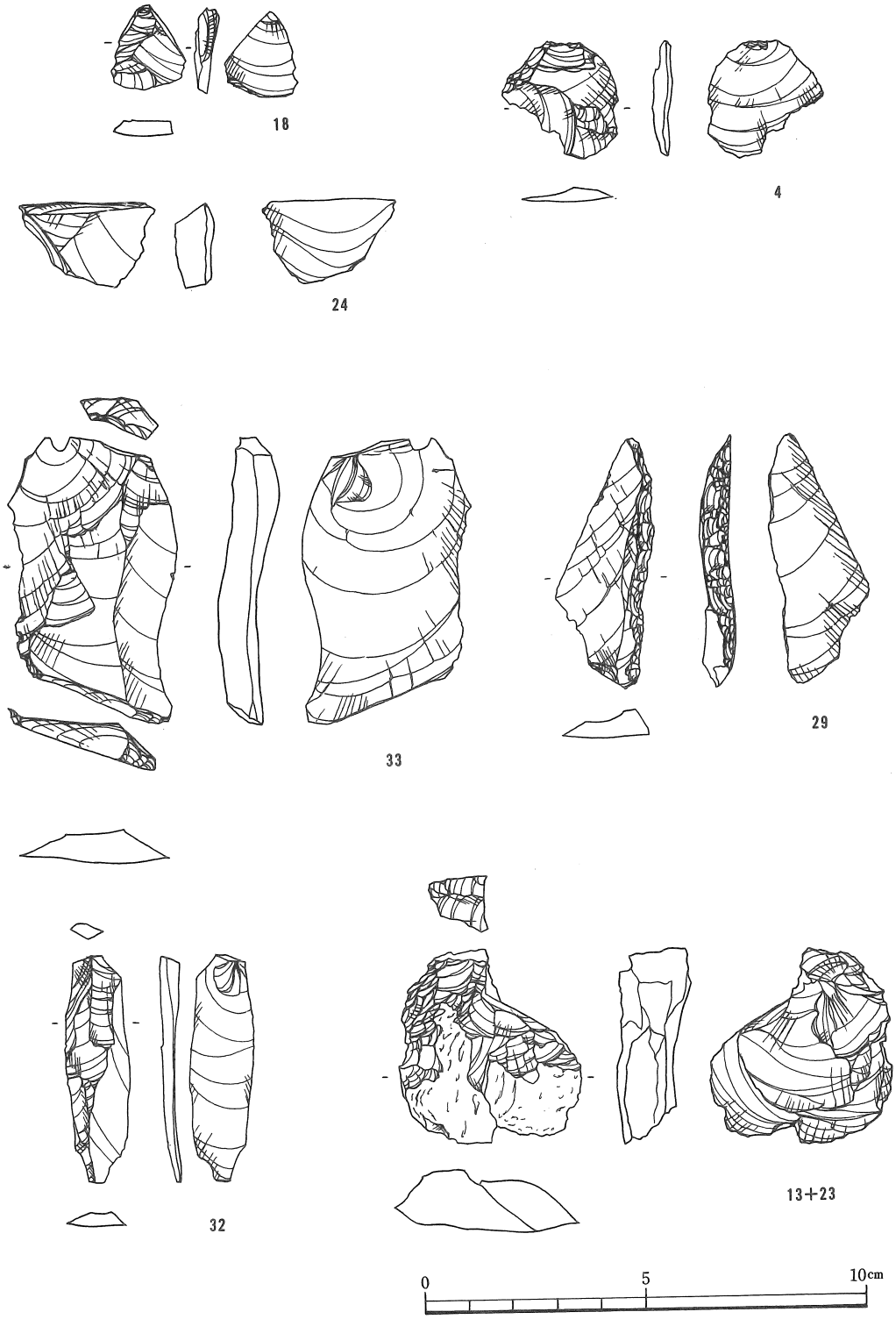
第17図　駒方Ｃ遺跡 第Ⅳ区出土石器実測図 (1)（流紋岩母岩№1 (A)）



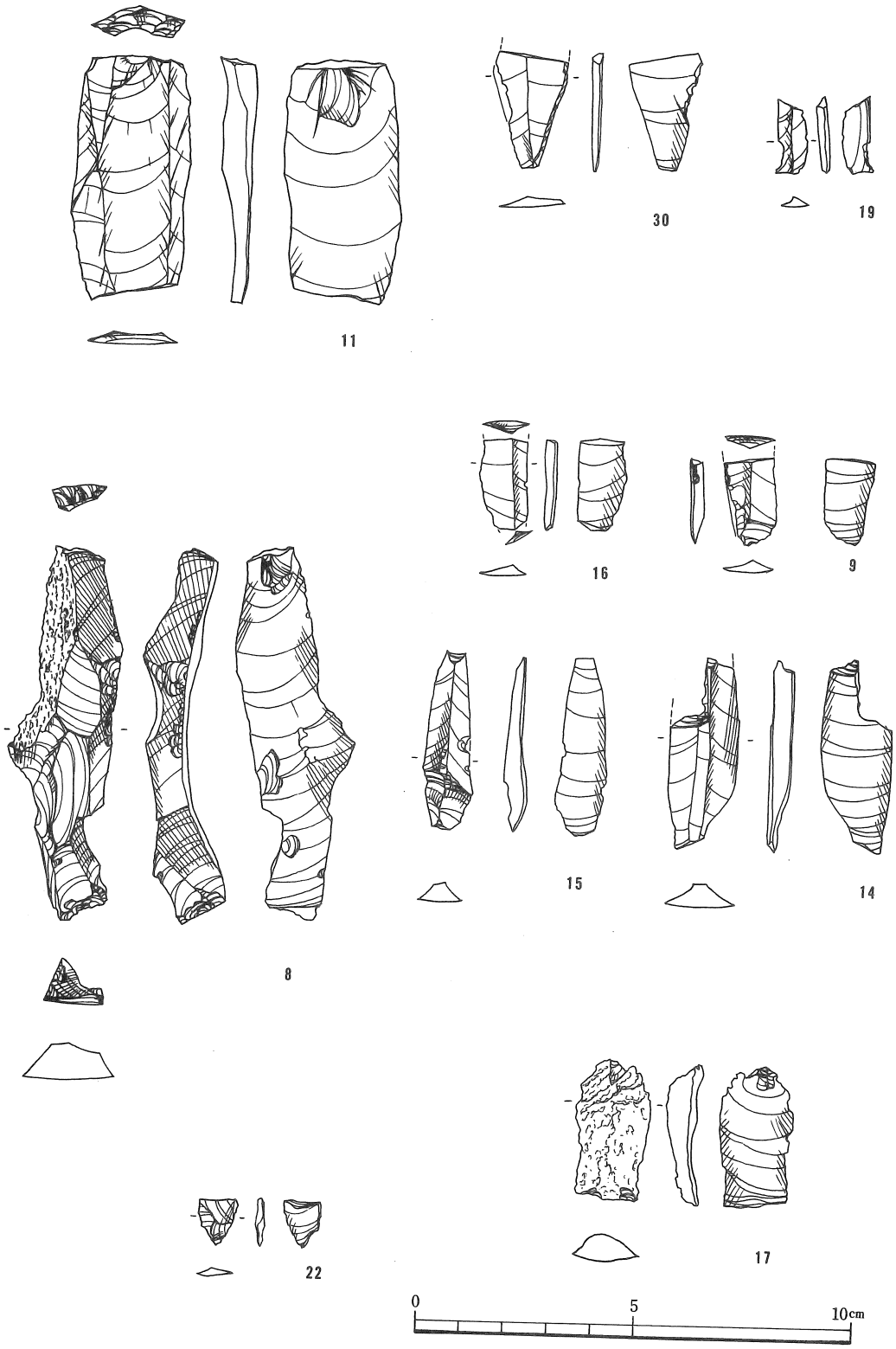
第18図　駒方C遺跡 第Ⅳ区出土石器実測図 (2)（流紋岩母岩 No. 1 (B)）



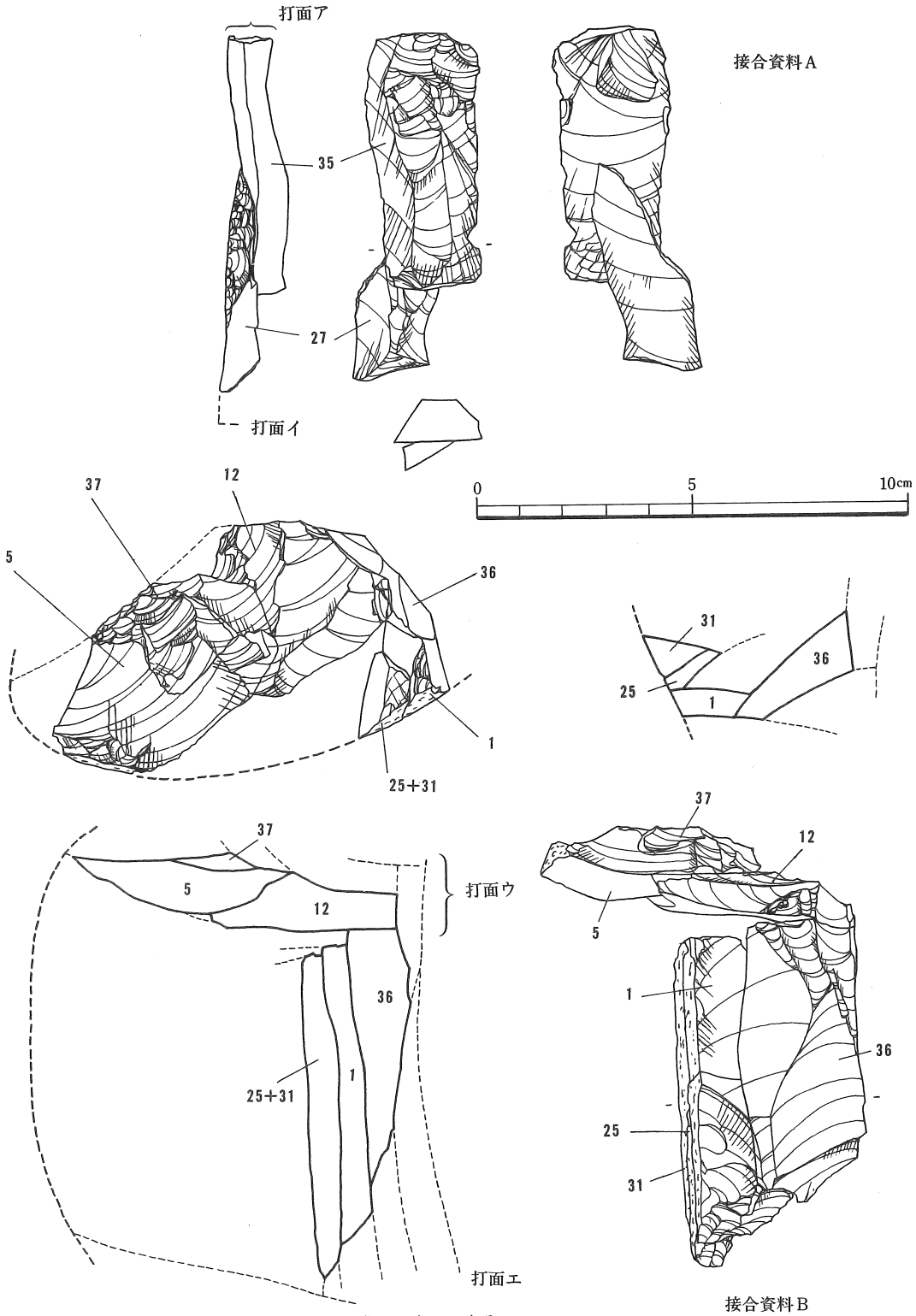
第19図　駒方C遺跡 第Ⅳ区出土石器実測図 (3)（流紋岩母岩№2・№3）



第20図　駒方Ｃ遺跡 第Ⅳ区出土石器実測図 (4)（流紋岩母岩№4・№5・№6）



第21図　駒方C遺跡第Ⅳ区出土石器実測図(5)（流紋岩母岩№7・№8・№10
黒曜石母岩№11・№12・№13・№14）



※横断面図は、剝片形状を複合させ模式化したものである。

第22図　駒方C遺跡 第Ⅳ区出土石器接合状況実測図 (1)（母岩No.1接合復原図）

片である。一部に自然面を残し、両側辺に二次加工が認められる。**No.13**（17）は、良質で半透明の黒曜石を素材とする剥片である。打面はつぶれのため不明である。背面は全て自然面である。石核形成に関わる調整剥片と考えられる。**No.14**（22）は、風化の強い漆黒色透明の黒曜石を素材とする砕片である。

石　器

本石器群では、7点の石器と認められる資料が検出できた。その内容は2点のナイフ形石器と5点の二次調整（使用痕を含む）の認められる剥片である。

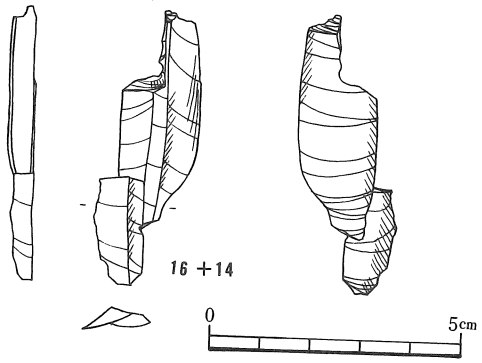
ナイフ形石器は、**母岩No.1**の27と、**母岩No.5**の29である。27は基部を欠損するものであり、29は完形品である。何れもほぼ同様の調整が施されている。それは縦長剥片の打点側を先端にし、先端に対し斜行するように切断し、主要剥離面側からブランティングを施したものである。

明確な二次調整が認められるのは、**母岩No.1**の26と、**母岩No.5**の33である。26は縦長剥片の両端を荒く折断し、台形状に整えている。33は、縦長剥片の先端部を折断し、側辺と切断面の接する両端に微細な調整を施している。

これらの他に**母岩No.2**の7や、**母岩No.11**の9、**母岩No.12**の8には、側辺に微細な刃こぼれが認められる。明確な二次調整ではないこれらの剥離をここでは何らかの使用痕と考えておきたい。

以上の中で定形石器と見られるのはナイフ形石器の2点だけである。

また、二次調整としては疑問であるが、残る縦長剥片15点の中で先端や基部を欠損するものが9点ある。



第23図　駒方C遺跡第Ⅳ区出土石器接合状況実測図(2)

(4) ま　と　め

1) 石器技術と編年的位置付け

上部石器群は、わずか6点という少ない資料であり、そのうち4点が二次調整を施した定形石器のために剥片剥離技術については不明な点が多い。これを限られた資料から推察するなら、端正な縦長剥片剥離技術と連続的な横長剥片剥離技術が考えられる。後者は剥片の形状から、いわゆる「瀬戸内技法」に近い剥片剥離技術と推定される。定形石器は何れも剥片素材の形状を大きく損うことなく二次調整を施すことが特徴である。

上部石器群の編年的位置付けは、諸条件の制約から困難ではあるが、ATより上部のローム層中に包含している点やナイフ形石器と尖頭器という石器組成、先に述べた剥片より二次調整の諸特徴から、清川村岩戸遺跡第Ⅰ文化層[註2]（以下「岩戸Ⅰ」と呼ぶ）に最も類似する内容と考えられる。筆者は先に「岩戸Ⅰ」をさらに4群2時期に分けている[註3]。本石器群をあえて位置付ければこの上部石器群は「岩戸Ⅰ」A・B群に対応するものと考えたい。

次に下部石器群を見よう。この資料も総数が37点とけっして多くなく、当期の石器技術総体をどの程度反映しているのかは明らかでない。先に母岩別に分離した14例を見ると、そのうち、7例からおおよその剥片剥離技術を捉えることができる。それらは形状の差はあるものの全て縦長剥片剥離技術と把握できる。その内容がある程度判明した例は母岩№1のみである。本例は両設の打面を有し、調整打面による縦長剥片剥離技術と理解した。特に、頻繁な打面転移とその度ごとの打面調整を特徴とするものである。他の母岩にも、打面両設と調整打面を持つ例が多く、こうした技術が本石器群の一般的特徴であると考えたい。定形石器は、ナイフ形石器の2点しかない。しかし、2点共にその二次調整の初段階に、素材剥片に対し切断技術が用いられたと推定される。これは、出土した剥片の過半数が本文で欠損としてあつかった剥片の折れが認められることと合わせて注意される。これらを積極的に「折断」剥片として評価するのは躊躇するが、二次調整の認められる26と33は、明らかに「折断」と捉えられる技術により製作されている。

下部石器群の編年的位置付けは、明確な出土層位と遺物集中分布が把握された資料でもあり、慎重を期したい。本石器群はＡＴから下位に位置し、暗色帯直上に包含されていた。現在大野川流域でＡＴより確実に下位から検出された石器群は、例が少なく内容も明らかにし難い。わずかに示された報告例を見よう。岩戸遺跡第Ⅲ文化層は、やや不定形な縦長剥片の剥離技術を持つものである[註4]が、出土層位は暗色帯より下位で、むしろ大野川中位段丘の段丘礫層上に近く、本例より古期のものである。吉岡遺跡では、断面採集によって暗色帯より下位の層序に石核が1点出土した[註5]。やや巾広の縦長剥片を剥離するものであり、岩戸遺跡第Ⅲ文化層に近い時期と考えられる。岩戸遺跡第Ⅱ文化層では、暗色帯中に数点の剥片と台形石器が出土している[註6]。百技遺跡では、数次の調査により暗色帯とその下部にかけて複数の包含層が検出された[註7]。出土した石器群総数も多く貴重である。詳細については未報告であり、不明である。

以上のようにＡＴ以前の石器群についての知見はなお少ない。しかし、概観する限り、これまで報告されたＡＴ以降の石器群とは剥片剥離技術が異っていることが指摘できよう。それは石器技術の中で縦長剥片剥離技術が主体になることである。この点で見る限り本遺跡の下部石器群は、ＡＴ以前の石器群の特徴を強く示していると言えよう。本例を細部に及んで比較検討できる資料は現時点では見当らないが、当面は層位的に見てＡＴ以前の石器群の中で、より後出する石器群として認識するに留めたい。

2) 石器群の性格について

本遺跡を含む大野川流域は、日本列島の他の地域と同様に強い酸性土壌の影響で、先土器時代の資料は石器以外の人工遺物を見出すことが困難である。当時の生活や集団諸関係を追求するために必要な研究対象は、この石器群という限られたものである。

しかし、ナイフ形石器や尖頭器など石器群の主な用途が狩猟具であり、狩猟・採集経済において狩猟の占める社会的位置が、けっして低いものではないという点で、遺跡におけるその性格を各方面から追求することが、当該期研究の中で大きな比重を与えて然るべきものと考えている。

こうした視点で先に筆者は、九州の先土器時代石器群の構造を概観した。[註8] その結果、九州内の各遺跡群ごとに石材利用のあり方が異なり、遺跡に残された石器群の内容も異なると考えた。特に地域内に良質な石材の原産地を有す遺跡群と、そうでない遺跡群との差は大きく、概して前者におけるあり方が複雑である。

大野川流域は、河床に流紋岩・ホルンフェルスといった良質の石材を産し、流域の先土器時代石器群の主な資材を確保している。したがって、石材利用から見た遺跡ごとの石器群のあり方は単純でない。しかし、大ざっぱに見るなら、石器生産を主体的に行ない、河床に近接する遺跡（Ⅰ種）と、そこから運ばれたと考えられる製品もしくは、素材と若干の石核を保有する遺跡（Ⅱ種）に分けて捉えてよい。ただし、こうした状況は、主にＡＴ以降のナイフ形石器段階についてのみ言えることで、流域内のその前後の時代の状況は不明のままであった。この点からも本遺跡の下部石器群は、ＡＴ以前の様子を知ることのできる初例として重視されるのである。

以下では、こうした視点から本遺跡の上・下石器群について検討することにしたい。

まず上部石器群である。出土状態から単一の石器群として把握することに問題があるものの、その過半数に二次調整を有し、全て単独の個体別資料であるという点で共通している。この状況から、この場所で石器製作の工程を行ったとは考えられず、全て遺跡外から持ち込まれたものと判断できる。先に示した編年的位置付けを考慮し、本遺跡をⅡ種の遺跡として把握することに問題はなかろう。

次に下部石器群である。出土状態は、単一の石器群であることを強く示しているが、調査区が狭く、集中分布域の一部分しか検出していない。したがって、検討した資料が、石器群の内容の全てを示しているのではないことは明らかである。こうした制約があるものの、観察の結果、出土した37点の資料はさらに14の母岩別資料として把握できた。特に母岩№1は、ナイフ形石器を含む12点の資料数と2群の接合資料を含んでおり、遺跡内で剥片剥離から二次調整に至る作業を行ったことを示している。その他の母岩別資料でも、接合資料があることや、調整剥片や砕片といった実際には石器として使用困難な資料を含んでいることから、数種類の母岩による石器製作が行われていたと判断したい。

調査した範囲内からは残核が検出されていないが、母岩数から見るならその幾つかは遺跡外に運ばれた可能性も考えられる。そうであるなら、本遺跡は剥片剥離工程を断片として持つ個体別資料を主体とするものと考えられる。

ＡＴ以前の石器群で内容が明らかな例は、現在この一例であり、慎重さを欠くが、下部石器群の石材利用のあり方は、ＡＴ以降の段階のそれとは明らかに異なると考えられよう。現実的には、流域の河床から離れた台地上でも、集団は移動のたびに剥片剥離や二次調整加工を実施していたと推察されるのである。少なくとも、大野川流域においてＡＴ以前と以後では石器群の石材利用のあり方は大きく異なる可能性があることを指摘しておきたい。

註 1. 下部石器群の出土層位はⅤ層下部に主体をもつが、石器群と遺構との有機的関係が捉えられ、本来はⅥ層上部に包含されていた単一の石器群がＡＴの堆積以後Ⅴ層下部まで垂直方向に移動・拡散したものと考えられる。したがって本来の層位的位置はⅥ層上部であり、あえて推察するなら、ＡＴ降灰直前のⅥ層上部と考えられる。

2. 芹沢長介編　「岩戸遺跡」東北大学考古学研究室　昭和53年

3. 吉留秀敏　「九州における先土器時代の石器群集中分布の構造」（古文化談叢　11）　昭和58年

4. 註２と同じ

5. 旧石器文化研究会　「野津町分布調査概略Ⅰ」（ぢかたび　19）　昭和52年

6. 註２および　清水宗昭・高橋信武・柳田俊雄「岩戸遺跡発掘調査概報」大分県教育委員会　昭和55年

7. 清水宗昭　「九州東北部における後期旧石器時代の様相」（大分県地方史　74）ほか　昭和50年

8. 註３と同じ

第４表　　駒方Ｃ遺跡出土上部石器群一覧表

※重量は１ｇ単位である。

遺物番号	出土地点	石材	器種	剥片形態	現存長 長さ×巾×厚さ(cm)	重量※ (g)	欠損状況
1	Ａ－５	流紋岩	ナイフ形石器	縦長	5.6×2.4×1.1	14	完形
2	Ⅰ区	〃	〃	〃	3.8×1.4×0.5	3	先端部欠損
3	Ⅱ区	〃	尖頭器	〃	4.7×1.5×1.1	8	基部欠損 (欠損後二次加工)
4	Ａ－３	〃	〃	横長	4.7×1.8×1.1	10	先端部欠損
5	Ｄ－８	〃	剥片	縦長	5.1×2.0×0.6	6	完形
6	Ｅ－９	〃	調整剥片	不定形	3.0×2.4×0.5	2	〃

第５表　　駒方Ｃ遺跡第Ⅳ区出土下部石器群母岩別分類表

母岩No.	石材	剥離形態 打面	剥離形態 剥片	調整剥片 打面	調整剥片 剥離面	剥片	石器	砕片	計
1	流紋岩	調整両設	縦長	3	1	5	2	1	12
2	〃	—	—		2		1		3
3	〃	調整単設	縦長			3			3
4	〃	—	—	1		1		1	3
5	〃	平担→調整 単設→両設	縦長			1	2		3
6	〃	—	—		2				2
7	〃	調整両設？	縦長			1			1
8	〃	—	—					1	1
9	〃	単設？	縦長			1			1
10	〃	—	—					1	1
11	黒曜石	— 両設	縦長			3	1		4
12	〃	調整両設	〃				1		1
13	〃	—	〃		1				1
14	〃	—	—					1	1
			計	4	6	15	7	5	37

第6表　駒方C遺跡第Ⅳ区出土下部石器群一覧表

※重量は1g単位である

母岩No.	遺物番号	石材	器種	剥片形態	打面	現存長 長さ×巾×厚さ (cm)	※重量 (g)	欠損状況
1	27	流紋岩	ナイフ形石器	縦長	—	5.2×1.8×0.8	7	基部欠損
	26	〃	二次加工のある剥片	不定形	—	3.1×2.2×1.2	6	完形
	1	〃	剥片	縦長	調整	7.1×2.3×0.8	17	剥片剥離により二分している。
	25+31	〃	〃	〃	平坦	7.6×2.0×1.2	18	剥片剥離によりくだけている。
	35	〃	〃	〃	調整	5.9×2.6×1.1	23	先端欠損
	36	〃	〃	〃	平坦	6.3×3.7×1.6	40	完形
	5	〃	調整剥片	不定形	—	3.7×5.8×1.1	48	〃
	12	〃	〃	〃	—	5.4×4.0×1.2		〃
	34	〃	〃	〃	—	3.3×2.1×0.8	3	〃
	21	〃	〃	〃	—	4.1×2.6×1.3	10	〃
	37	〃	砕片	〃	—	1.9×2.1×0.3	1	〃
2	7	流紋岩	二次加工のある剥片	不定形	平坦	3.0×4.5×0.9	10	両端欠損
	2	〃	調整剥片	〃	〃	2.3×1.8×0.3	2	完形
	6	〃	〃	〃	—	2.6×1.3×0.3	1	〃
3	3	流紋岩	剥片	縦長	平坦	6.0×1.3×0.4	3	完形
	28	〃	〃	〃	〃	8.7×5.0×1.8	67	〃
	38	〃	〃	〃	調整	7.3×4.9×1.4	48	先端欠損
4	24	流紋岩	剥片	—	—	1.9×3.0×0.9	4	先端破片
	4	〃	調整剥片	不定形	—	2.6×2.6×0.4	3	完形
	18	〃	砕片	〃	—	1.9×1.7×0.5	1	〃
5	29	流紋岩	ナイフ形石器	縦長	—	5.7×2.1×0.7	7	完形
	33	〃	二次加工のある剥片	〃	調整	6.1×3.9×1.1	23	〃
	32	〃	剥片	〃	平坦	5.1×1.4×0.5	3	〃
6	13	流紋岩	調整剥片	不定形	調整	4.4×3.5×1.6	26	剥片剥離によりくだけている。
	23	〃	〃	〃	—	2.4×2.2×0.9		〃
7	11	流紋岩	剥片	縦長	調整	5.6×2.7×0.7	12	先端部欠損
8	30	流紋岩	砕片	縦長	—	2.7×1.7×0.3	1	基部欠損
9	20	流紋岩	剥片	不定形	—	1.0×0.9×0.2	—	基部欠損
10	19	流紋岩	砕片	不定形	—	0.7×1.7×0.2	—	両端欠損
11	9	黒曜石	二次加工のある剥片	縦長	—	2.0×1.2×0.3	1	基部欠損
	14	〃	剥片	〃	—	4.4×1.6×0.5	3	〃 先端部欠損
	15	〃	〃	〃	—	4.0×1.1×0.5	2	基部欠損
	16	〃	〃	〃	—	2.2×1.1×0.3	1	〃
12	8	黒曜石	二次加工のある剥片	縦長	調整	8.6×2.4×1.5	18	完形
13	17	黒曜石	調整剥片	縦長	—	3.2×1.7×0.7	3	完形
14	22	黒曜石	砕片	不定形	—	1.0×0.8×0.2	—	完形

2. 第Ⅰ区の調査と縄文時代の遺物

(1) 第Ⅰ区の遺物出土状況

試掘調査の際、最も多くの遺物が出土し注目されたのがB－7区である。そこで、この区は試掘終了後、再び東壁と南壁をさらに1m拡張し、遺物の広がりを求めた。しかし、遺物出土はこの範囲にとどまらず、さらに拡大することがわかった。第Ⅰ区は以上のような経過で、10m×10mの調査区を設けたものである。

1) 層　位

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　暗茶褐色土　表土直下に表われる。遺物も表土層直下からまとまって出土し、Ⅱ層の上部が主体で、下部になるに従い急激に減少する。

第Ⅳ層　黒色土　本来なら、Ⅱ層とⅣ層との間に「アカホヤ」があるが、第Ⅰ区では確認できず、漸移的に変化する。遺物は全く含まれない。

第Ⅴ層　黄褐色土　遺構検出面。

2) 遺物のひろがり

試掘時の遺物は、掘ると同時に取り上げたため、正確な出土状態を知ることはできなかった。しかし、それ以後の調査では遺物のひろがりを確認するため、遺物を残し、その状況をみた。その結果が第24図であるが、調査区の西北隅にかけて8m×5mの楕円形に遺物がまとまって出土した。そこで、この状況を細かくみると、2つの遺物集中部分が考えられる。

第1のグループは調査区の南寄りの位置で検出された、約4m×5mの範囲に集中的に分布する部分である。分布の形状は東西に長い楕円形状であり、西端には2個所、径30cmの赤褐色をした焼土魂が認められる。遺物は、深鉢形土器・浅鉢形土器・注口土器が出土しているが、いずれも完形品はなく、全て破損状態であった。また石器では、扁平打製石斧が20点近く出土しているが、他の剝片石器の出土は少ない。

第2のグループは、調査区の北寄りの位置で検出された、東西5m、南北3mの範囲に広がる遺物群である。しかし、第1のグループに比較すると、遺物集中状況は疎である。焼土は、遺物集中部の東端に、径30cmの範囲で1個所のみ認められる。遺物の内容は、量的には少ないが、第1のグループと同じである。石器の中で扁平打製石斧以外に目立つものでは、花崗岩質の円礫がある。これは半截されたものや、挙大のものなど、形状や大きさに差がある。出土量は扁平打製石斧とほぼ同量である。

以上のように、遺物の出土状況を、細かく観察すれば、2つのグループに分かれるが、遺物の内容をみれば、両者に時期的な差はなく、土器型式上は一型式にとどまる。また両者間を区別する明瞭な線引きは不可能である。そこで、遺物を分析する場合には両者は一緒にして、作業を行なった。

(2) 出　土　遺　物

遺物は、土器と石器だけであるが、ここでは良好な状態で出土した第Ⅰ区の遺物を中心に分類し、最後に、第Ⅵ区とG－2区の遺物を補足し説明する。

1) 土　　器

器　種　分　類

土器は、注口土器・浅鉢形土器・深鉢形土器に区別できる。いずれも、それぞれの器種で、さらに細かく分類される。

（注口土器）

第Ⅰ区出土の注口土器は2点のみである。部位は注口部と口縁部であり、同一個体の可能性もある。この他、G－2区からも1個体、羽状文で飾られた注口土器が出土している。これらの注口土器は総点数3点であるが羽状文の有無で分類される。

（浅鉢形土器）

浅鉢は第Ⅰ区から17点出土したが、器形や文様にバラエティがあり、4類に分類される。

浅鉢Ⅰ類　口縁部は、内傾または内湾し、外面屈曲部から口縁部にかけての範囲に、文様帯がある。文様は平行線文（13～15・17・18）や沈線と沈線の間を細線羽状文で埋めるもの（7～12）などある。また、12や17のように口縁部に直角に粘土溜を貼り付けるのもみられる。さらに、123と124は、屈曲内湾部が大きく、その外面には粗い羽状文と沈線文が施文されている。

浅鉢Ⅱ類　器形はⅠ類と類似するが、文様がない。20は完形で丸底であるが、21は平底になる。

浅鉢Ⅲ類　19の1点のみである。底部から口縁部にかけて、直線的に延び皿状を呈する。文様は全くみられない。

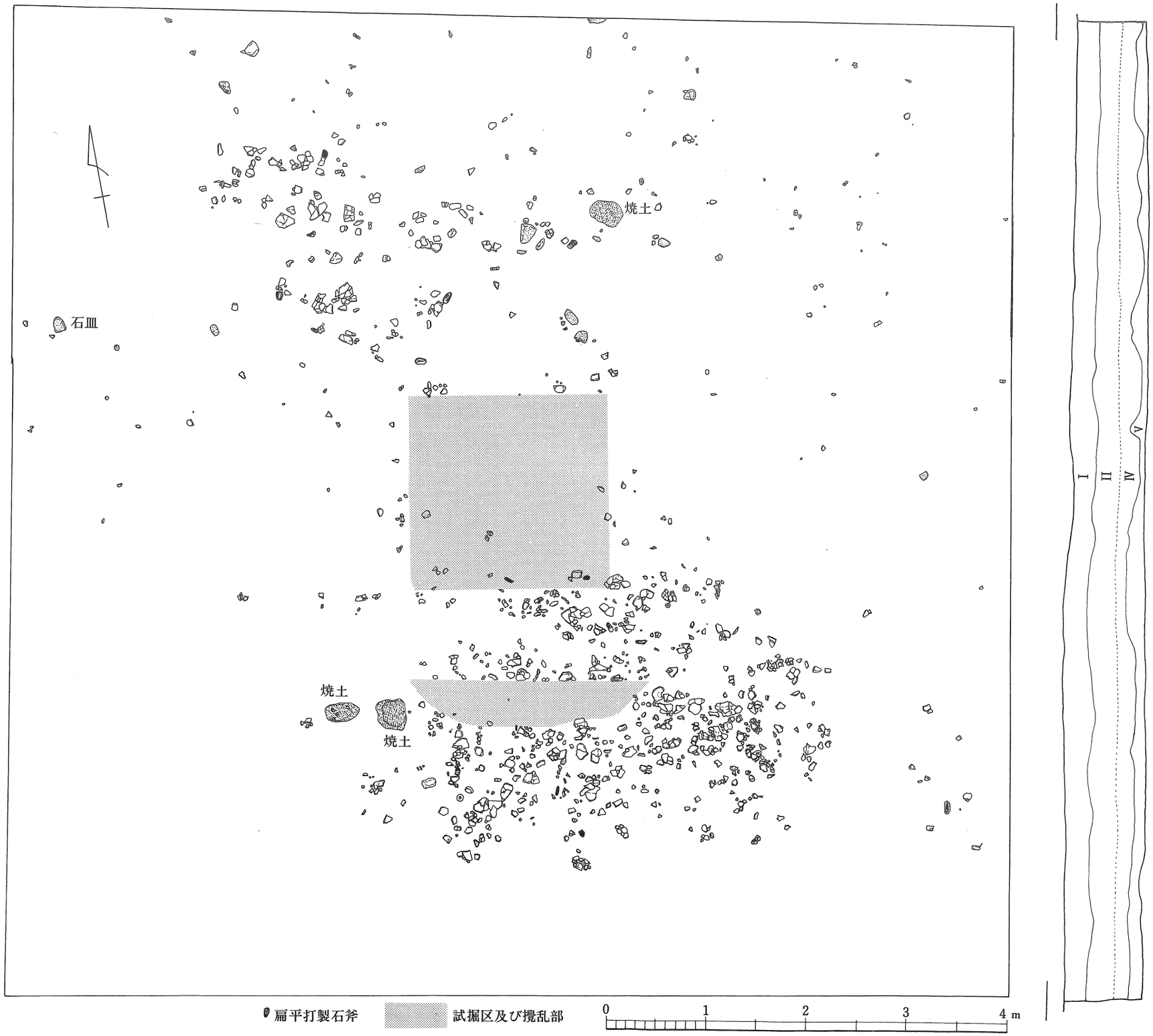
浅鉢Ⅳ類　Ⅲ類同様、16の1点のみである。胴部で稜を生じて屈曲し、口縁部は外反する胴部の屈曲部から、頸部にかけて文様帯があり、三本の平行沈線と羽状文で飾られる。

（深鉢形土器）

深鉢は口縁部の形態により、大きく2分類される。それは波状口縁と水平口縁である。また、この他にも胴部の文様や、口縁部の形態など、前述の二者とは異なる深鉢も出土している。

深鉢Ⅰ類　口縁部の形態が平坦な深鉢形土器である(29～59)。胴部が張り、口縁部は外反する。器壁は薄く均一で、厚さは5㎜前後である。外面に文様は全くみられず、唯一口縁内面に一条沈線がめぐるのみである。この文様も36のように細い鋭い沈線や、44のように浅い沈線がめぐるもの、また49のようにに口縁端部を内側に折り曲げ、沈線化したものなど、バラエティに富む。さらに口縁端部の形態も丸く仕上げる(36・43・49）ものや尖るもの(38・48・57)、平坦になるもの（35・40・45・58）などがある。口径も25㎝から50㎝まであり、口径により、いくつかのグループが考えられる。

深鉢Ⅱ類　口縁部の形態が3個所か4個所に頂部をもつ、波状口縁である（60～76）。Ⅰ類と口縁部が異なる以外は形態や口縁部内面に一条沈線がめぐるなど、全く同じである。口縁端部の形態は波状の頂部が尖るが、それ以外は平坦に仕上げられている。口径は約15㎝から約33㎝まで格差



第24図　駒方Ｃ遺跡第Ｉ区遺物出土状況実測図

があるが、Ⅰ類に比較すると小型であり、器高も低いようである。

深鉢Ⅲ類　文様の施された深鉢形土器である（22・23・27・125・126）。22・23はそれぞれ2点の破片であるが、胎土・器面調整・色調・文様などから同一個体と思われる。22・126の頸部には刺突文、胴部には平行沈線文と間隔のあいた刻むような羽状文が施文されている。また、23は胴部の破片であるが、22と同様な羽状文と沈線文がみられる。27は屈曲して内傾気味に立つ口縁部の破片で、おそらく胴部の張る形態であろう。文様は、口縁部の立ち上り部外面と頸部に平行沈線文がめぐり、口縁端部は尖る。125の口縁部は断面三角形になり、外面には平行沈線と羽状文がみられる。

深鉢Ⅳ類　28の1点のみである。口縁部は、稜を生じて屈曲し、大きく内湾する。そして胴部の張る特殊な形態である。文様は全くみられない。口縁端部は丸く仕上げられている。

深鉢Ⅴ類　24～26の3点で縄文の施文された小破片である。時期的には第Ⅰ区出土の土器より古い様相を残しており、混入土器と考える。

胎　土

土器の胎土については、野田雅之氏（現大分市立南大分中学校）の教示を受けた。それによると、土器の胎土には角閃石・斜長石・石英・黒雲母が目立ち、他には砂粒を多く含む。また、縄文後期の土器が大半を占めるが、それ以外の4点は胎土が異なる。つまり、1・2の中期の土器には、滑石が多量に含まれ、3・4には、後期土器に多く含まれる角閃石が観察されない。

角閃石とは、土器の器面にみられる黒色のガラス質で、形状は、長さ2㎜前後、巾が1㎜以下の細かい棒状のもので、キラキラ反射して見える。この粒は土器片により、多少はあるが全ての土器片の器面に観察される。

長石あるいは斜長石も、角閃石同様2㎜くらいの粒である。キラキラ反射してみえるが、透明観があり、薄く剝離するようなものである。この粒も8割近い土器片に含まれる。あるいは、角閃石と同様、全ての土器片に混入しているかも知れない。

石英は、白い粒として観察されるが粒状になった場合、チャートとの識別が、肉眼では困難という。これが含まれるのはわずかである。

黒雲母は肉眼には金色に輝く薄く剝離するもので、一般的には金雲母と呼ばれている。土器片で観察される量は多くないが、図示した資料の約1割に認められる。

砂粒の種類は不明であるが、白灰色の径1㎜以下の粒が多量に含まれる。粘土を構成する砂粒が、他で混入したものかは不明である。

以上が、胎土に含まれる主要な混和材であるが、土器作りの際、単一場所から採取した粘土のみで作らず他の場所で採取した粘土や、砂を混入すると考えられている。そこで、土器作りの粘土又は混和材の産地を求める場合、土器の胎土の大半に含まれる特徴的な角閃石や斜長石・長石がその手掛りとなろう。

器面調整

土器の器面は、全て篦状の工具で調整されている。図では、その調整の方向を矢印で示した。それによると、基本的な土器の調整方向は浅鉢では、内外面底部近くまで横方向である。

しかし、17のように口縁部以外縦方向に研磨された例もある。浅鉢の有文と無文を比較すれば、有文の浅鉢の方が、より丁寧に研磨されており、光沢を持つものもある。無文の浅鉢では、19・20は両面とも同程度の研磨であるが、21は内面の方がより丁寧に研磨されている。

深鉢では、類別にかかわらず、内外面とも口縁部から胴部中位まで横方向、以下縦方向の篦研磨であり、底部同辺は横方向である。しかし、これも例外的に56のような、口縁部外面に縦方向の篦研磨もみられる。大半の深鉢は、外面より内面の方がより丁寧に研磨されており、さらに浅鉢に比較すると、外面は研磨と表現するより、撫でに近い調整方法で仕上げている。しかし、72・81・121などは光沢が出るほど、丁寧に研磨されており、精製土器の感が強く、他の深鉢とは区別できる。

以上が駒方C遺跡出土の土器であるが、弥生土器は1点も含まれず、全て縄文土器であった。しかも、縄文中期の並木式土器や、後期中葉から後葉の西平式およびその系統の磨消縄文土器をわずかに含むものの、ほとんど単純な様相を示すものであった。これを編年上からみれば羽状文がみられることや、西平式土器の直接的な影響を受けたと思われる深鉢形土器の器形や浅鉢形土器の文様などから考えると、いわゆる三万田式土器の範囲に入るものである。しかも最近の細分化傾向にある、この型式の中でも重要な位置を占めるもので、東九州の地域性を表わしている。

そこで、この時期の土器組成をみるため、一応、完全に掘り上げた第Ⅰ区の土器について検討をしてみる。土器の分類については、先に浅鉢についてはⅠ～Ⅳ類、深鉢についてはⅠ～Ⅴ類まで分類したが、これらの分類の主眼は、口縁部の形態においたものである。このため、土器の形態別の点数を出すには以下のような方法をとった。

① 点数は全て口縁部のみを対象とした。

② 接合した資料は1点としたが、接合しないものは同一個体の可能性が強くても1点とした。

③ 個体数を推測するため、底部の数も対象とした。

以上のような原則で第1区の土器の数を調べると下表のようになる。なお深鉢の不明土器が16点数えられた。

第7表　駒方C遺跡第Ⅰ区出土土器組成表

器種	浅鉢				深鉢					注口土器	底部
分類	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ		
点数	12	3	1	1	130	44	1	1	1	2	63
百分率	7%	1.5%	0.5%	0.5%	66%	22%	0.5%	0.5%	0.5%	1%	
総計	17				177					2	
総百分率	9.5%				89.5%					1%	

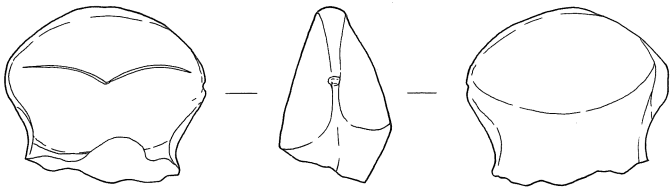
この表から、主要な土器である浅鉢・深鉢Ⅰ・Ⅱ類でみれば、これらで90%を越し、それぞれの比率は、1：9となる。三万田式土器以前の東九州では、浅鉢形土器がほとんどないが、この時期からは、土器組成の一角を占めるようになるのは注目される。また、底部からみた個体数は、63点が数えられるが、観察の結果同一個体の存在も考え、約50個体が想定できる。

2) 土　　偶

第27図の土偶は、昭和40年項に鳥養孝好氏の実施した調査の際に出土したもので、現在竹田高校の資料室に展示されている。出土位置は氏によると第Ⅴ区あたりで、一緒に土器片や扁平打製石斧などが出土したという。

土偶は頭部のみで、全体を知ることはできない。遺存状況は幅5.3㎝、長さ4.7㎝、最大の厚さ2.8㎝である。顔面と思われる面は幅広で平坦に仕上げられ、箆描きで細く眉状の文様が描かれている。また後面は上位を平坦に仕上げ中位やや下で稜が生じている。これは頭部と頸部の境界を意識したものと思われる。側面から観察すると、頭頂部がやや尖り気味になり、顔面の顎部と後頭部で広がる三角状になる。

これらの特徴は大きくみれば、町内の宮地前遺跡で採集されている半球形をなす頭部の土偶と顔面の描き方など類似している。縄文時代後期後半の特徴をもったものと認識され、時期は三万田式土器に伴うと考えて間違いないものであろう。



第25図　駒方Ｃ遺跡出土土偶実測図 ⅓

第8表　　駒方C遺跡出土土器観察表 (1)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考	整理番号
1	表採	深鉢		口縁部	暗茶色					滑石	凹線文のあと刺突文	
2	表採	深鉢		胴部	暗茶色					滑石		
3	E－3	深鉢		口縁部	明茶色						) 同一個体の可能性が強い	
4	E－3	深鉢		胴部	暗茶色							
5	I区	注口土器		口縁部	明茶色	○	○					B－7
6	I区	注口土器		注口部	黒茶色	○	○		○		タテ方向のヘラみがき	B－7
7	I区	浅鉢	I	口縁部	明茶色	○					細い羽状文	I－3
8	I区	浅鉢	I	口縁部	明茶色	○					細い羽状文	28
9	I区	浅鉢	I	口縁部	明茶色	○	○		○		細い羽状文	39
10	I区	浅鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				) 同一個体　太い羽状文	86
11	I区	浅鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○					I－17
12	I区	浅鉢	I	口縁部	茶色	○						I－12
13	I区	浅鉢	I	口縁部	暗茶色	○						
14	I区	浅鉢	I	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のヘラみがき	37
15	I区	浅鉢	I	口縁部	淡黒色	○					ヨコ方向のヘラみがき　内面はタテ方向	35
16	I区	浅鉢	IV	胴部	茶色	○	○				短い羽状文	
17	I区	浅鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				入念に研磨されている　内面は黒色	82
18	I区	浅鉢	I	口縁部	茶色	○					口縁部周辺にスス付着　内面は黒色	72
19	I区	浅鉢	III	口縁部	茶色	○					内面は黒色	101
20	I区	浅鉢	II	口縁部	茶色	○						68
21	I区	浅鉢	II	口縁部	明茶色	○	○				口縁部周辺にスス付着　内面黒色	78
22	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				刻むような羽状文　内面茶色) 同一個体	81
23	I区	深鉢		胴部	暗茶色	○	○				内面茶色	B－7
24	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○					I－15
25	I区	深鉢		胴部	茶色	○	○				縄文	27
26	I区	深鉢		胴部	暗茶色	○	○					I－18
27	I区	深鉢	III	口縁部	茶色	○	○					B－7
28	I区	深鉢	IV	口縁部	茶色	○	○		○		口縁部周辺にスス付着	B－7
29	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨	65
30	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨	25
31	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨	37
32	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨	4
33	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨	78
34	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨	5
35	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色		○				ヨコ方向のヘラ研磨	79 32

第9表　　駒方C遺跡出土土器観察表(2)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考	整理番号
36	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○		○		口縁部内面に細い沈線	72
37	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○					
33	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				頸部にスス付着	21
39	I区	深鉢	I	口縁部	明茶色	○	○				内面は黒色	66
40	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○				口縁部周辺にスス付着	26
41	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○						102
42	I区	深鉢	I	口縁部	黒色	○	○				内面は淡茶色	68
43	I区	深鉢	I	口縁部	明茶色	○						B－7
44	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○	○			頸部にスス付着	45
45	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○				頸部にスス付着	45
46	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○					37
47	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○					
48	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○					70
49	I区	深鉢	I	口縁部	明茶色	○						
50	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○					
51	I区	深鉢	I	口縁部	明茶色	○	○		○		外面スス付着　入念にヘラ研磨されている	71 109
52	I区	深鉢	I	口縁部	淡黒色	○	○				内面は明茶色	45
53	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○	○				内面の方がより入念にヘラ研磨	38
54	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○				外面にスス付着	B－7
55	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○				外面はスス付着	B－7
56	I区	深鉢	I	口縁部	淡茶色	○	○				外面は明茶色	42
57	I区	深鉢	I	口縁部	暗茶色	○	○	○			内面は明茶色	
58	I区	深鉢	I	口縁部	茶色	○		○			外面スス付着	37
59	I区	深鉢	I	口縁部	黒色	○	○		○		ナデたようなヘラ研磨	71
60	I区	深鉢	II	口縁部	灰茶色	○	○				ヘラ研磨	B－7
61	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨	B－7
62	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○				外面スス付着	82
63	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○		○		ヨコ方向の入念なヘラ研磨　外面にスス付着	75
64	I区	深鉢	II	口縁部	茶色	○	○				外面にスス付着　器面は剝落気味	B－7
65	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着　内面には煮コゲ痕	B－7
66	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○				頸部にスス付着	
67	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	65
68	I区	深鉢	II	口縁部	茶色	○	○					
69	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○				頂部が欠ける	80
70	I区	深鉢	II	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	

第10表　　駒方C遺跡出土土器観察表(3)

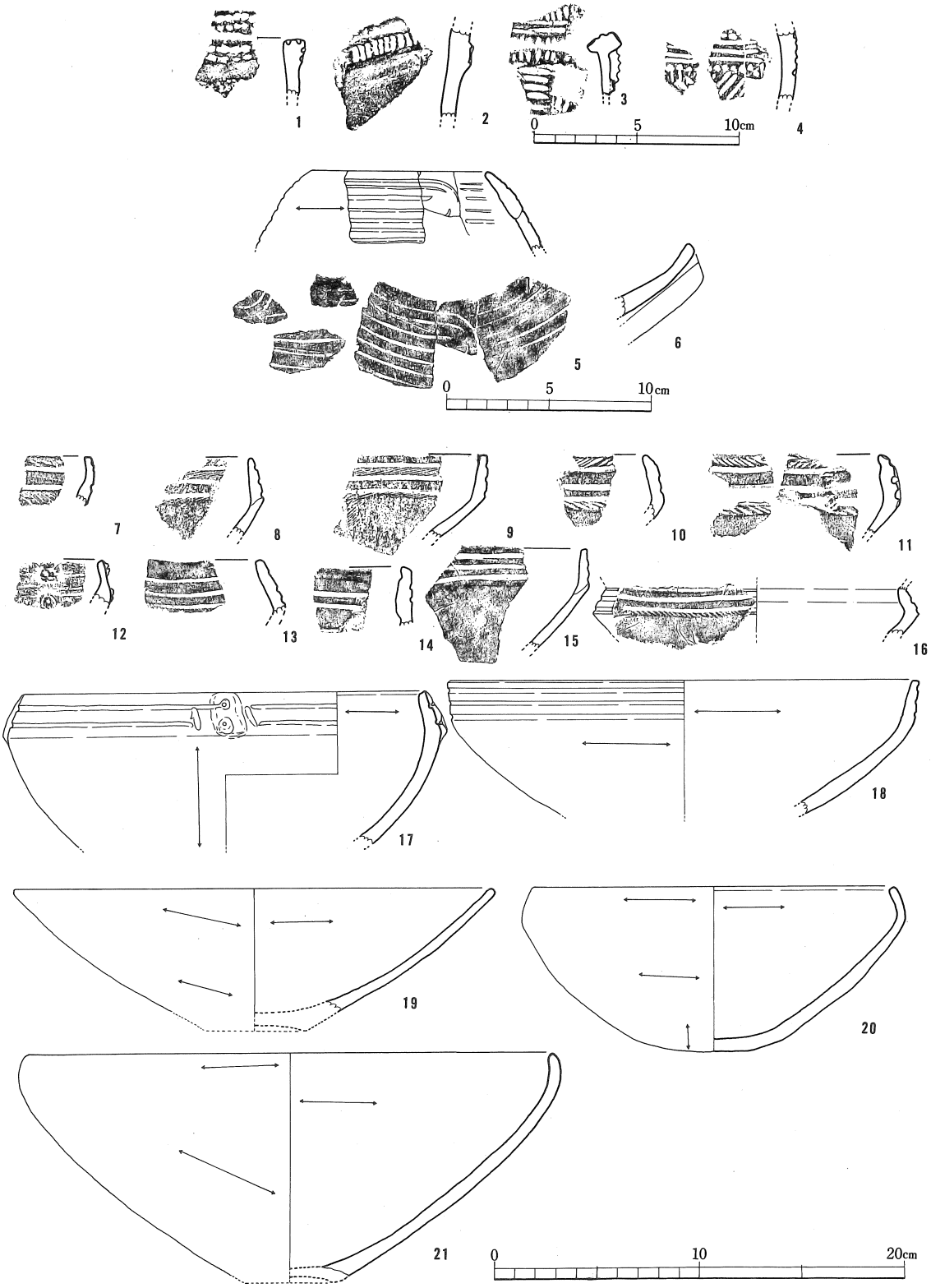
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考	整理番号
71	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○					102
72	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○				他とは際立た入念なヘラ研磨	B—7
73	I区	深鉢	II	口縁部	茶色	○	○				頸部にスス付着	
74	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○				外面にスス付着	20
75	I区	深鉢	II	口縁部	明茶色	○	○		○			
76	I区	深鉢	II	口縁部	茶色	○	○				外面にスス付着　内面に沈線なし	78
77	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	I—2
78	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	66
79	I区	深鉢		頸部	黒色	○	○				頸部にスス付着	
80	I区	深鉢		頸部	黒色	○	○					81
81	I区	深鉢		胴部	茶色	○	○				72の胴部か？　入念なヘラ研磨	
82	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	102
83	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○					外面にススが多量に付着	
84	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○		○		胴部にスス付着	24
85	I区	深鉢		頸部	茶色	○					内面剝落著しい　胴部中位にスス付着	63
86	I区	深鉢		頸部	茶色	○						31
87	I区	深鉢		頸部	淡茶色	○	○				内面は雑な仕上げ	B—7
88	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○		○		外面にスス付着	22
89	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○				内面はヨコ方向のヘラなで状の研磨	104
90	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				胴部と頸部の上位にスス付着	B—7
91	I区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○				外面にスス付着	30
92	I区	深鉢		頸部	明茶色	○	○				細かい砂粒を多く含む	
93	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○					40
94	I区	深鉢		胴部	淡茶色	○	○				胴部の最大径部にスス付着	B—7
95	I区	深鉢		胴部	黒色	○	○				内面は明茶色	B—7
96	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○				内面は明茶色	69
97	I区	深鉢		頸部	茶色	○	○	○			内面は明茶色	21
98	I区	椀？	I	底部	茶色	○	○				内面は粗い仕上げ	27
99	I区	浅鉢？	II	底部	茶色	○	○					103
100	I区	浅鉢	II	底部	茶色	○	○				底部はヘラみがき	28
101	I区	深鉢？		底部	暗茶色	○	○					92
102	I区	深鉢		底部	茶色	○	○				内面に炭化物が付着	B—7
103	I区	深鉢		底部	明茶色	○	○					B—7
104	I区	深鉢		底部	茶色	○	○		○			
105	I区	深鉢		底部	茶色	○	○				細かい砂粒を含む　内面に炭化物	B—7

第11表　　駒方C遺跡出土土器観察表(4)

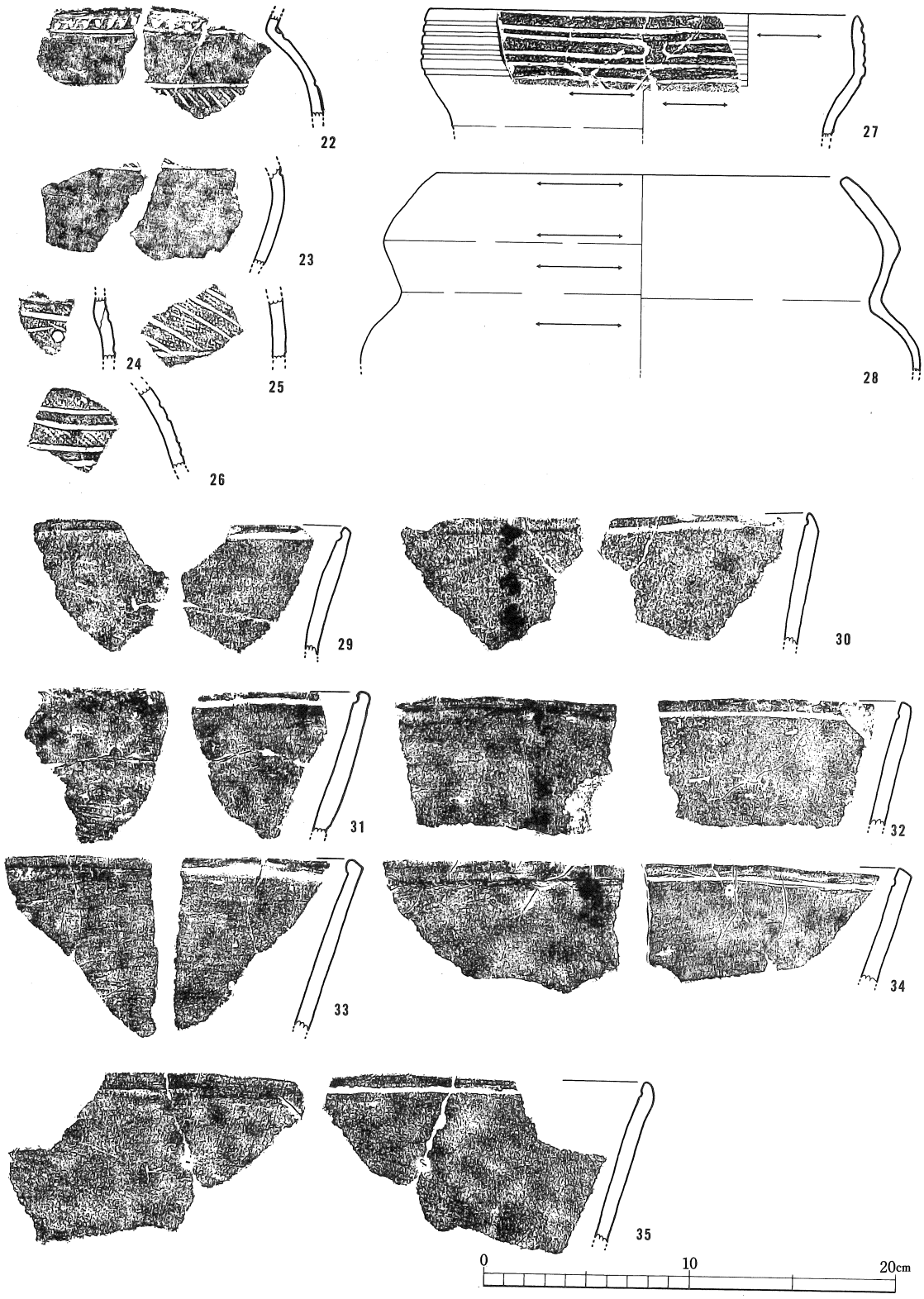
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考	整理番号
106	Ⅰ区	深鉢		底部	茶色	○	○				内面は黒色	110
107	Ⅰ区	深鉢		底部	暗茶色	○	○		○			
108	Ⅰ区	深鉢		底部	茶色	○	○				粗い仕上げ	105
109	Ⅰ区	深鉢		底部	暗茶色	○	○				内面には炭化物　接地部は磨滅している	84
110	Ⅰ区	深鉢		底部	明茶色	○	○	○			底部は磨滅している	45
111	Ⅰ区	深鉢		底部	明茶色	○	○	○			器面は剝落気味　内面に炭化物付着	74
112	Ⅰ区	深鉢		底部	明茶色	○	○				粗い仕上げ　内面に炭化物付着	31
113	Ⅰ区	浅鉢？		底部	茶色	○	○				入念なヘラ研磨　光沢がある	B－7
114	Ⅰ区	深鉢		底部	明茶色	○	○		○		内面に炭化物	26
115	Ⅰ区	浅鉢		底部	茶色	○	○					20
116	Ⅰ区	深鉢		底部	茶色	○	○	○			内面に炭化物付着	B－7
117	Ⅰ区	深鉢		底部	茶色	○	○				内面は粗い仕上げ	74
118	Ⅰ区	深鉢？		底部	明茶色	○	○					75
119	Ⅰ区	深鉢		胴部	茶色	○	○				外面の上位にスス付着　器面剝落気味	
120	Ⅰ区	深鉢		底部	淡茶色	○	○				硬い焼き	B－7
121	Ⅰ区	深鉢		底部	茶色	○	○				入念なヘラ研磨　72・81と同一個体か？	B－7
122	Ⅰ区	深鉢		胴部	淡茶色	○	○				胴部にスス付着	82
123	G－2	浅鉢？	Ⅰ	口縁部	茶色	○	○				外面は入念なヘラ研磨	
124	G－2	浅鉢	Ⅰ	口縁部	茶色	○	○				連点状の羽状文	
125	G－2	深鉢	Ⅲ	口縁部	淡茶色	○	○		○		入念なヘラ研磨　光沢がある	
126	G－2	深鉢	Ⅲ	頸部	黒色	○	○				連点状の羽状文　内面は茶色	
127	G－2	深鉢	Ⅰ	口縁部	暗茶色	○	○				入念なヘラ研磨	
128	G－2	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○				外面にスス大量に付着	
129	G－2	深鉢	Ⅱ	口縁部	淡茶色	○	○		○		外面にスス付着	
130	G－2	深鉢	Ⅰ	口縁部	淡黒色	○	○				内面は明茶色	
131	G－2	深鉢	Ⅰ	口縁部	淡茶色	○	○				外面にススが付着	
132	G－2	深鉢	Ⅰ	口縁部	茶色	○	○					
133	G－2	注口土器		口縁部	明茶色	○	○				細い羽状文　巻貝による圧痕　光沢が出るほどの研磨	
134	G－2	深鉢		底部	明茶色	○	○				内面は黒色	
135	G－2	深鉢		底部	明茶色	○	○				粗い仕上げ	
136	G－2	深鉢		底部	暗茶色	○	○					
137	G－2	深鉢		底部	明茶色	○	○				内面は黒色	
138	G－2	深鉢		底部	明茶色	○	○				接地部は磨滅している	
139	Ⅵ区	浅鉢		口縁部	明茶色	○	○				口縁部にスス付着	
140	Ⅵ区			胴部	明茶色	○	○					

第12表　　駒方C遺跡出土土器観察表(5)

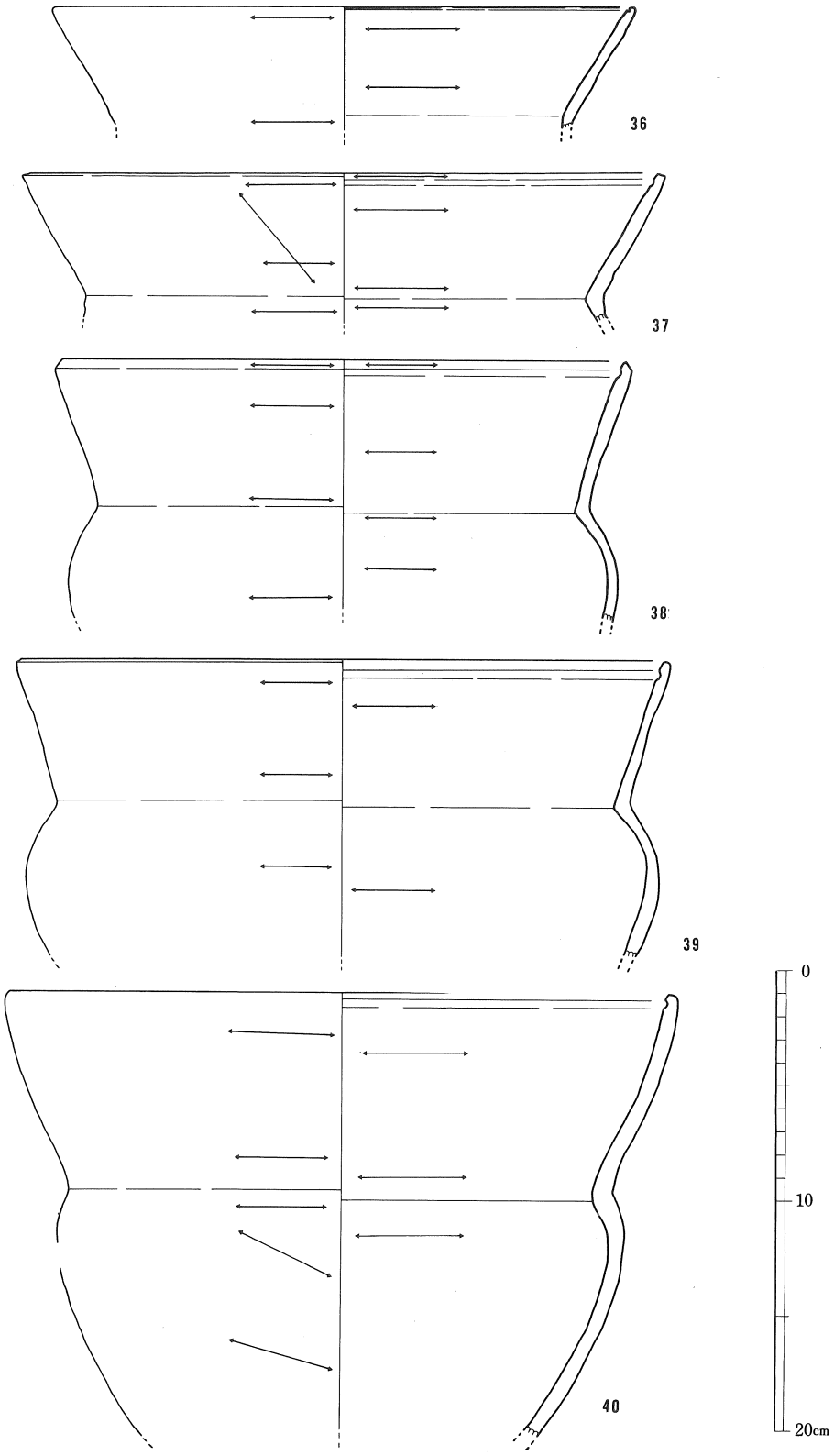
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 黒雲母	胎土 その他	備考	整理番号
141	Ⅵ区			底部	明茶色	○	○				内面黒色　入念なヘラ研磨	
142	Ⅵ区			底部	明茶色	○	○				内面に炭化物付着	
143	Ⅵ区			底部	明茶色	○	○					
144	Ⅵ区	深鉢		頸部	暗茶色	○	○					
145	Ⅵ区	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○	○	○		内面に炭化物が付着	
146	Ⅵ区	深鉢	Ⅱ	口縁部	淡茶色	○	○					
147	Ⅵ区	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○				入念なヘラ研磨	
148	Ⅱ区	深鉢		口縁部	暗茶色	○	○					
149	Ⅱ区	深鉢		胴部	茶色	○	○					
150	Ⅱ区	浅鉢		肩部	茶色	○	○				凹線文	
151	Ⅱ区	浅鉢		口縁部	暗茶色	○	○					
152	D－4	浅鉢？		口縁部	茶色	○					入念なヘラ研磨	
153	D－4	深鉢		口縁部	明茶色	○	○				ヘラ研磨	
154	Ⅲ区	深鉢		胴部	暗茶色	○	○				連点状の羽状文	
155	Ⅲ区	深鉢		胴部	明茶色	○						
156	Ⅲ区	浅鉢	Ⅰ	口縁部	暗茶色	○	○				ヘラ研磨	
157	B－3	浅鉢	Ⅰ	口縁部	茶色	○					細かい羽状文　ヘラ研磨	
158	A－6	浅鉢	Ⅰ	口縁部	暗茶色	○						
159	C－7	浅鉢	Ⅰ	口縁部	暗茶色	○					細かい羽状文　ヘラ研磨	
160	D－6	深鉢		口縁部	暗茶色	○	○				ヘラ研磨	
161	D－5			底部	明茶色	○					ヘラ研磨	
162	表採			底部	暗茶色	○						
163	表採	深鉢		口縁部	茶色	○					ヘラ研磨	
164	表採	深鉢		口縁部	茶色	○					ヘラ研磨	
165	表採	深鉢		胴部	淡茶色	○						
166	D－6	深鉢		口縁部	暗茶色	○	○					



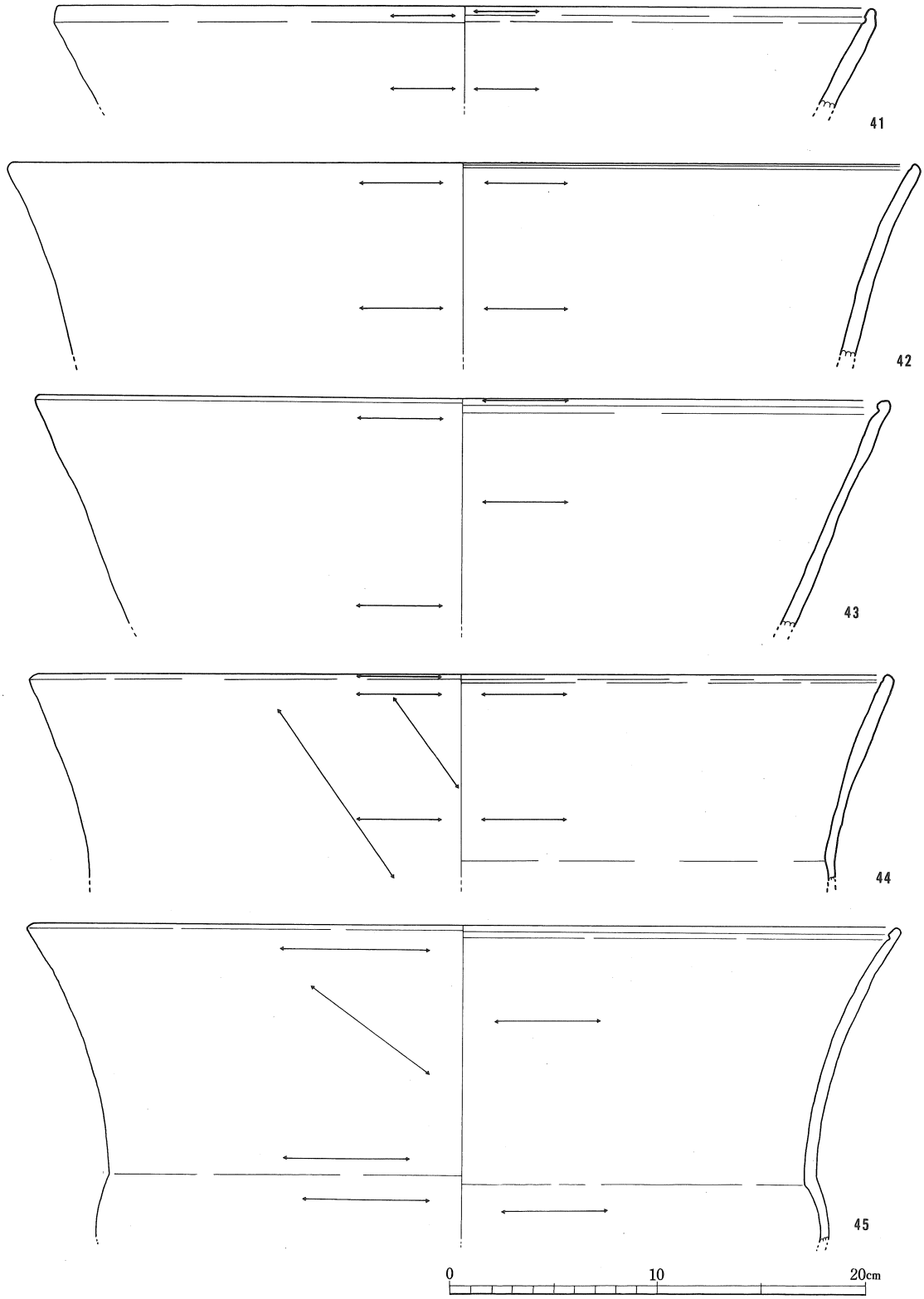
第26図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (1)



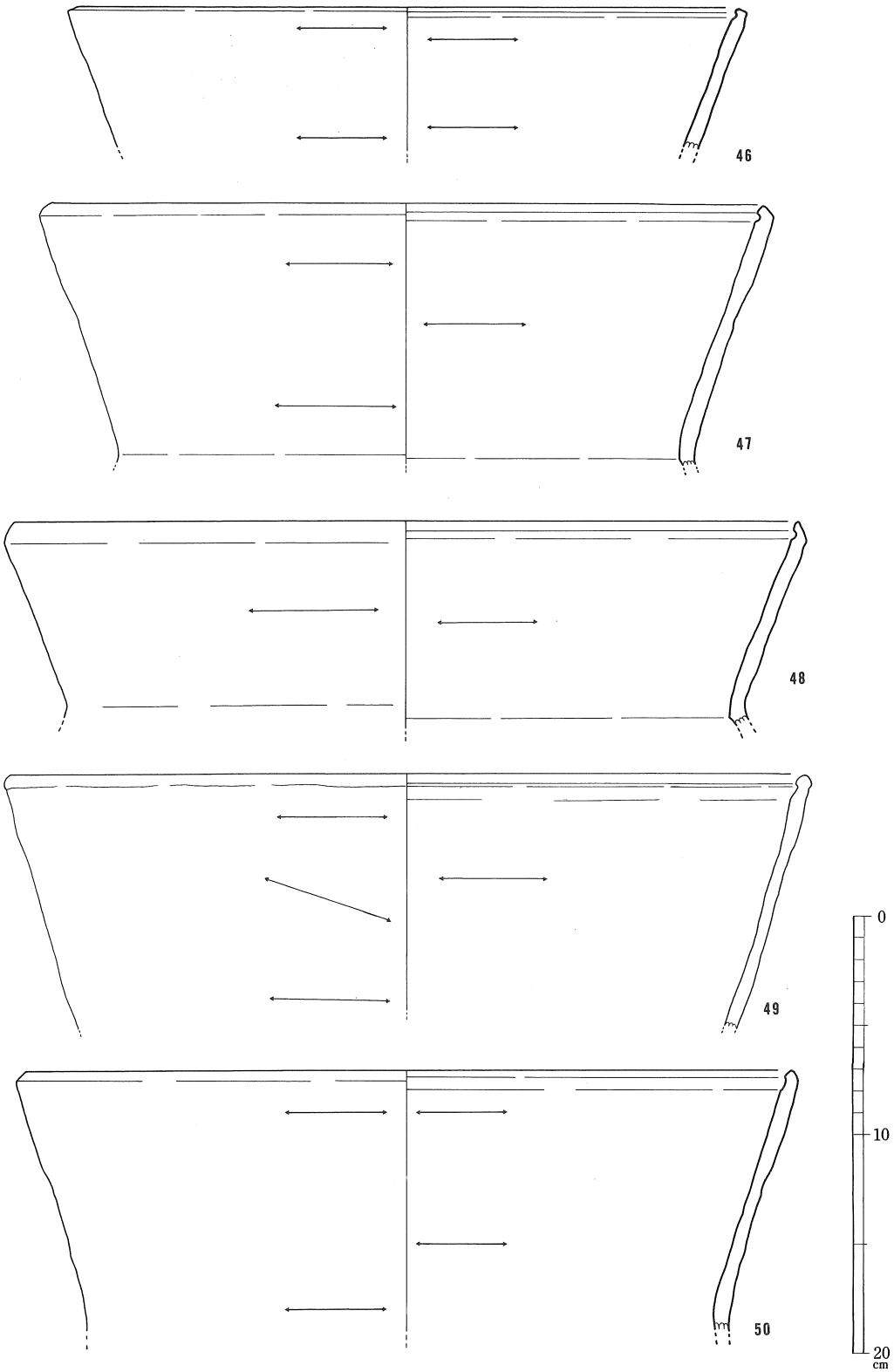
第27図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (2)



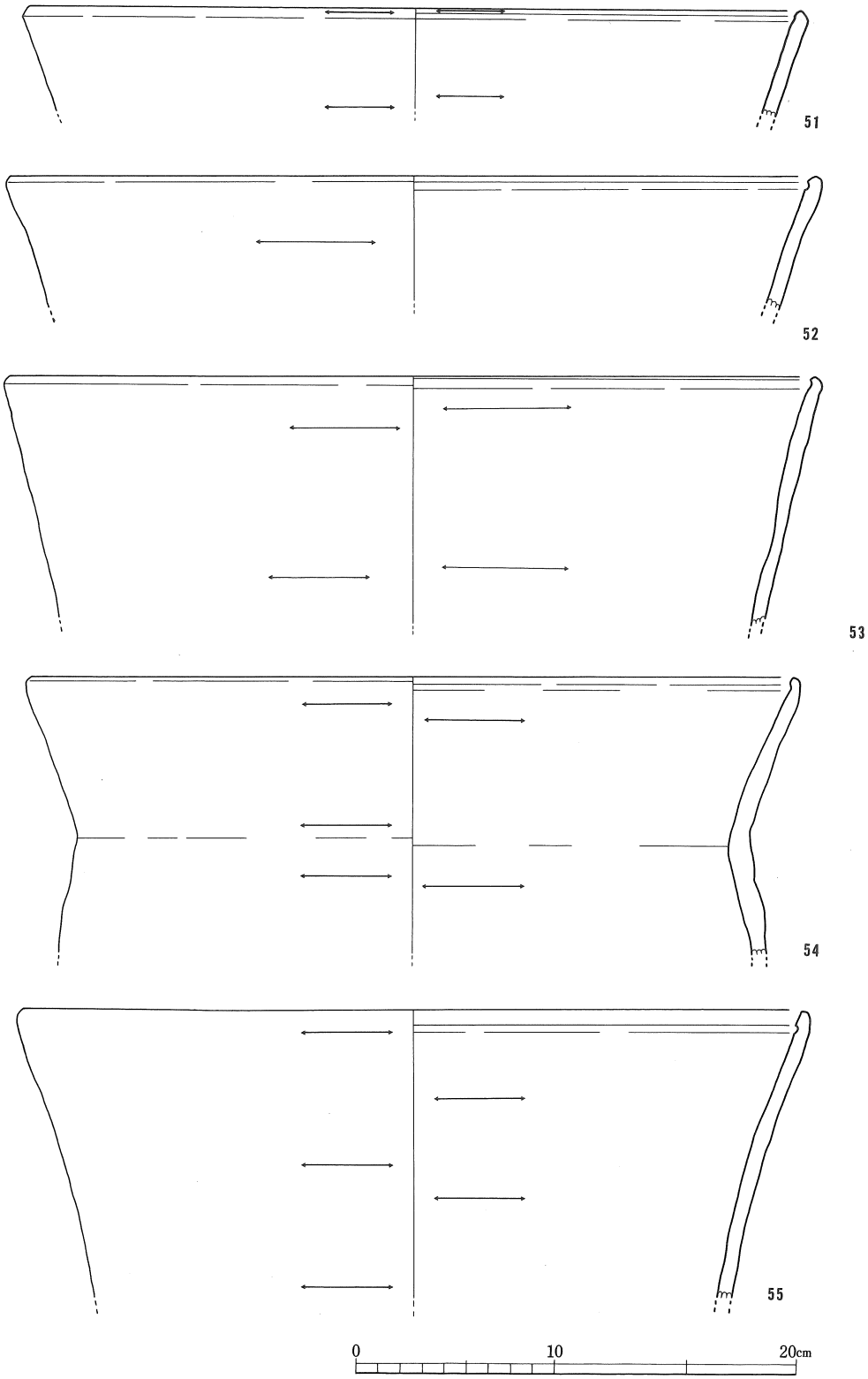
第28図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (3)



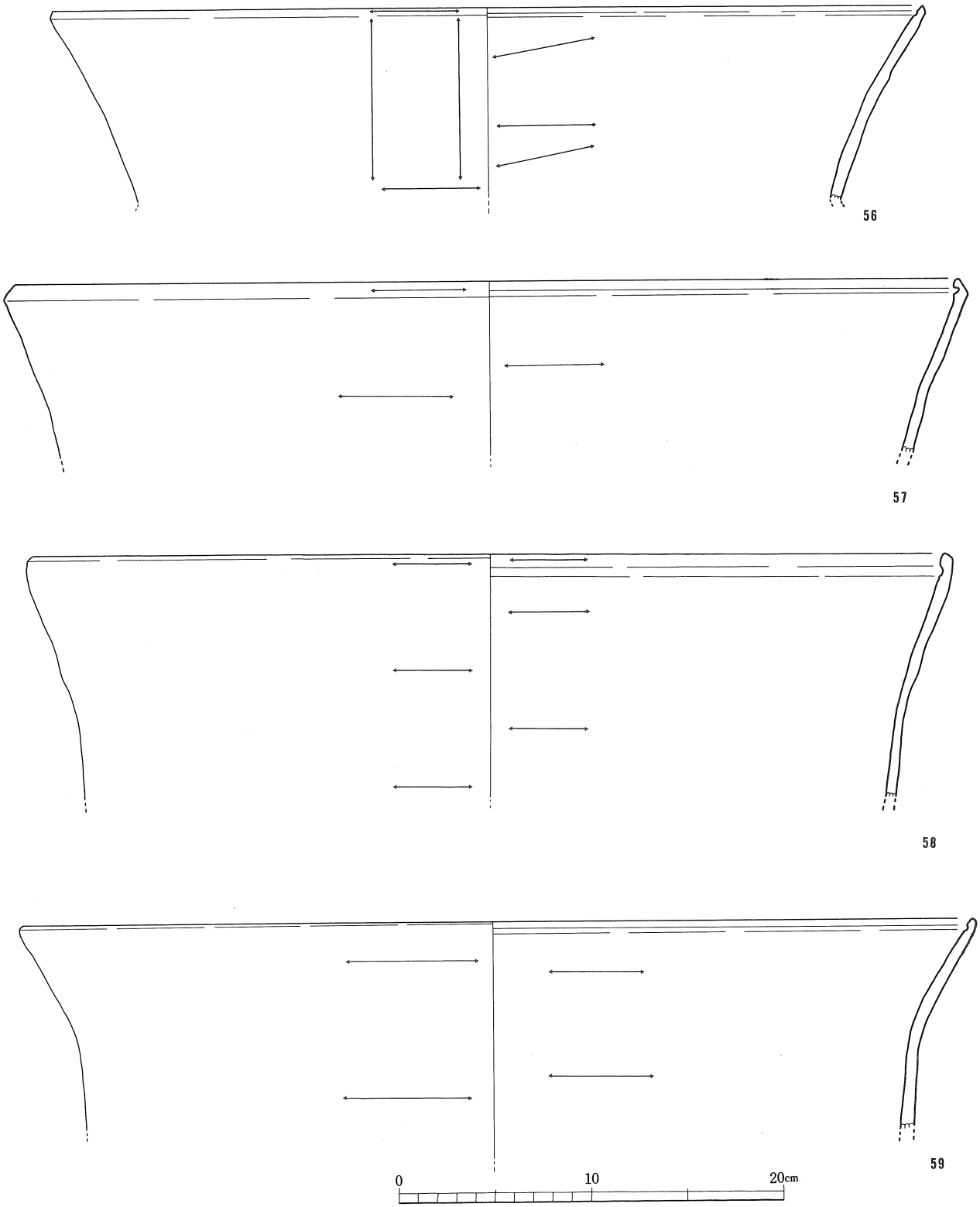
第29図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (4)



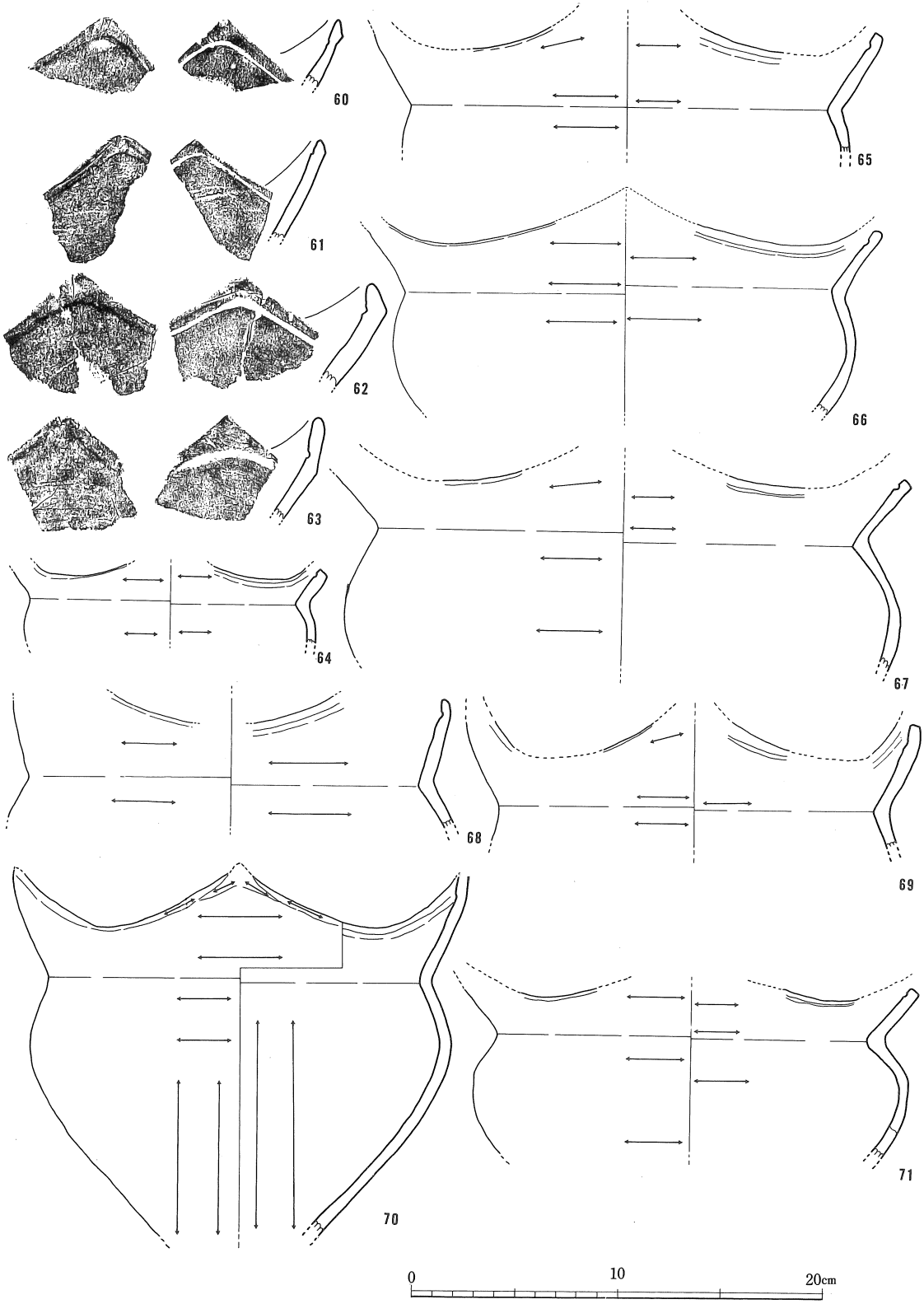
第30図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (5)



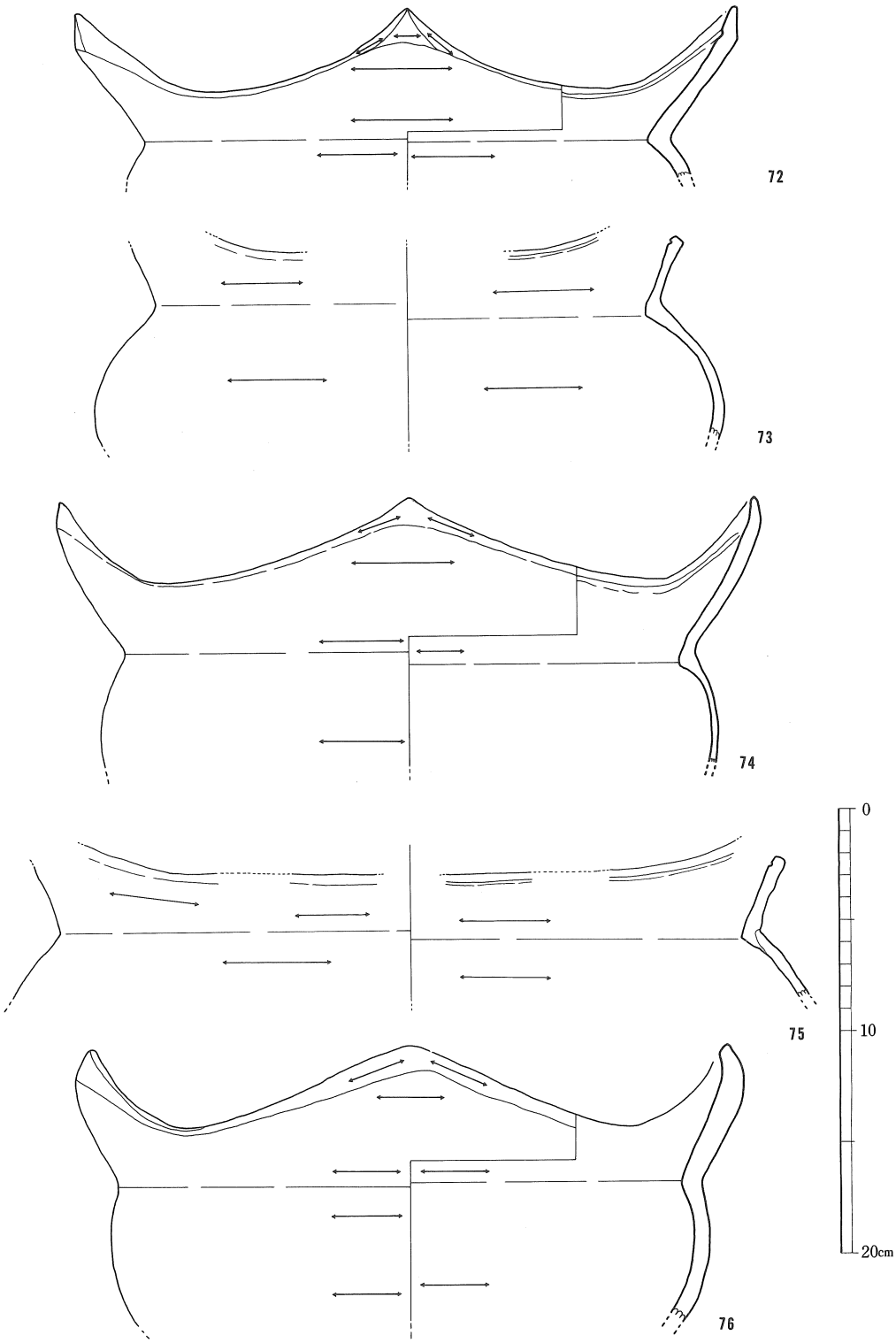
第31図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (6)



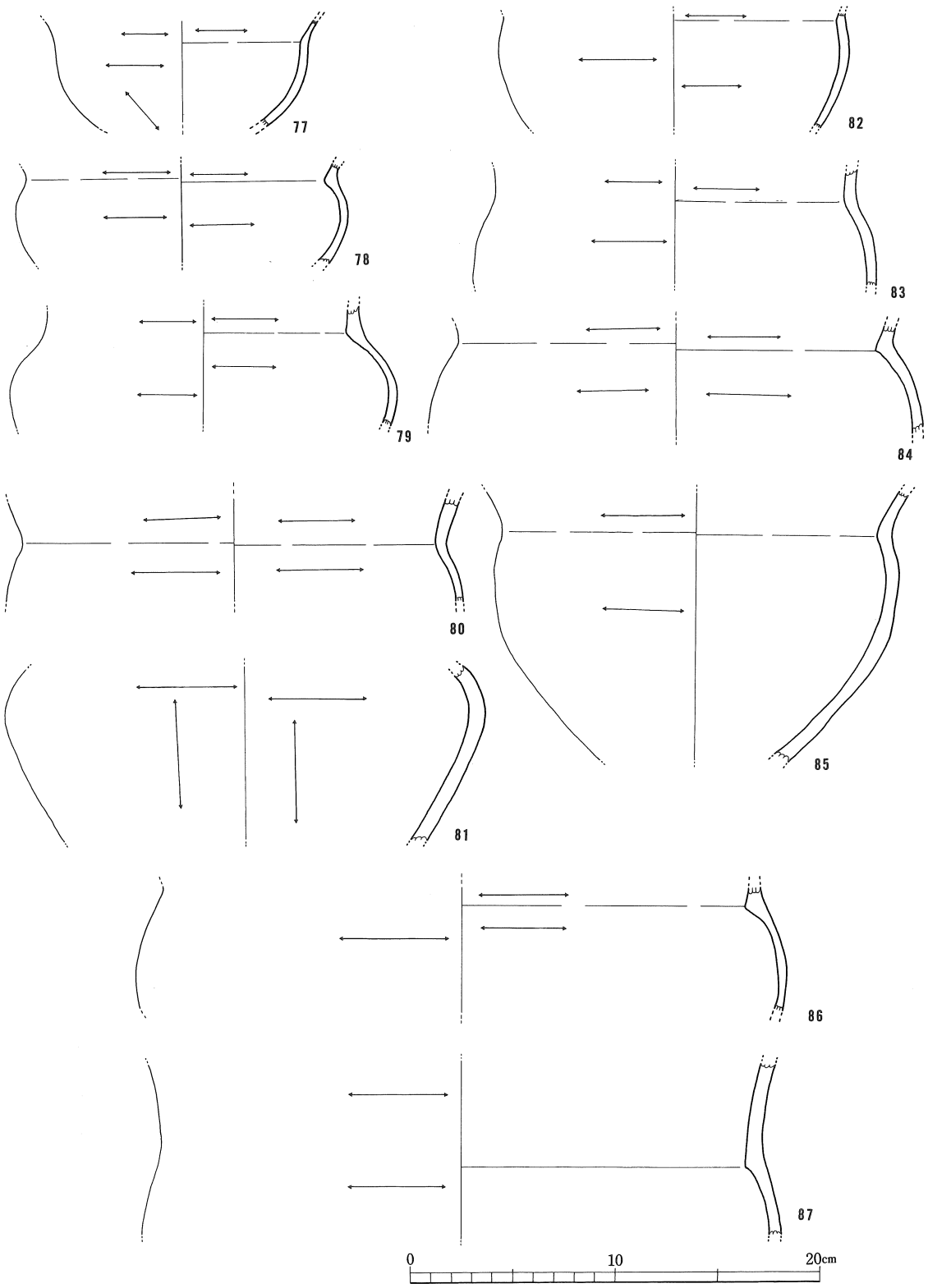
第32図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (7)



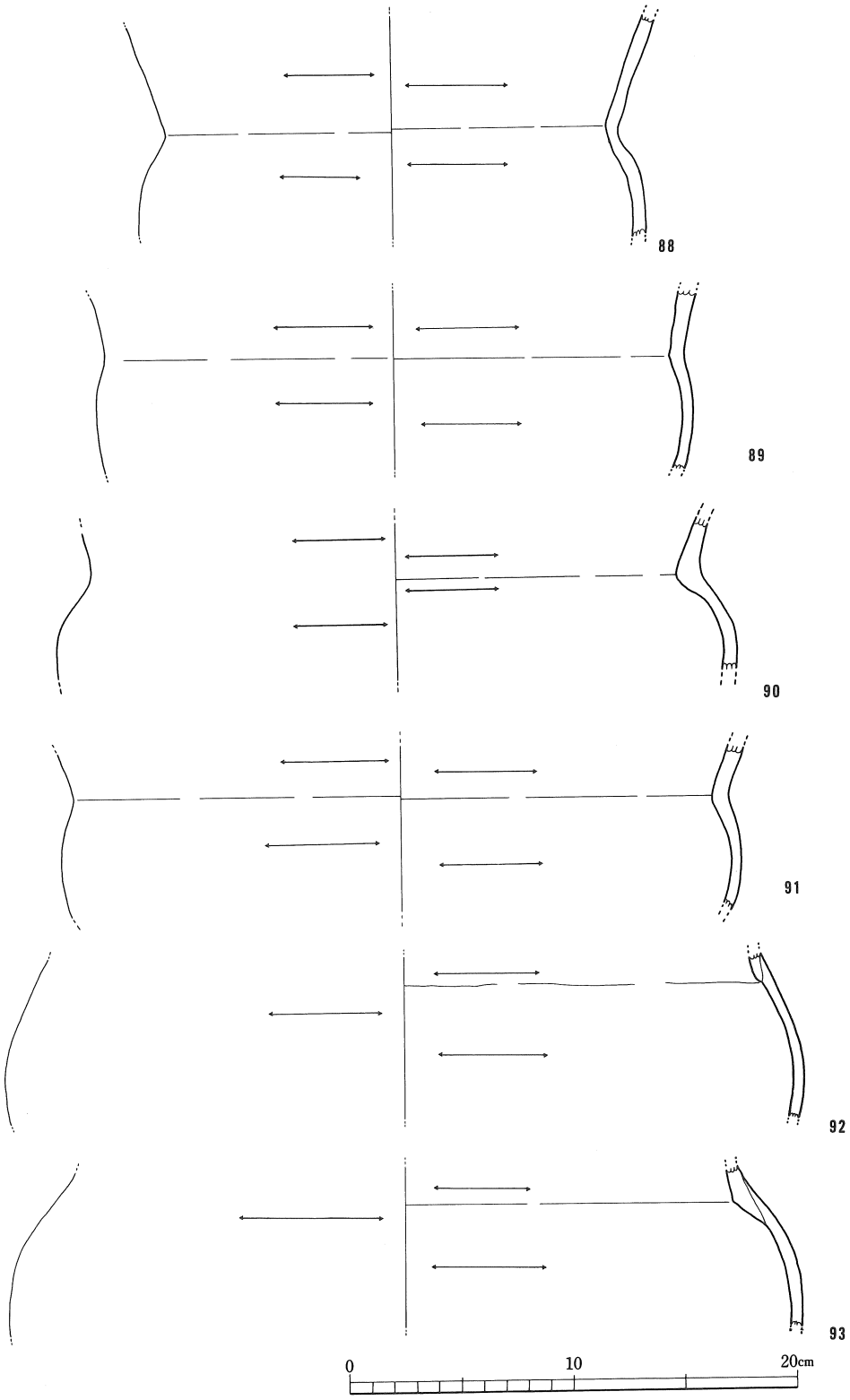
第33図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (8)



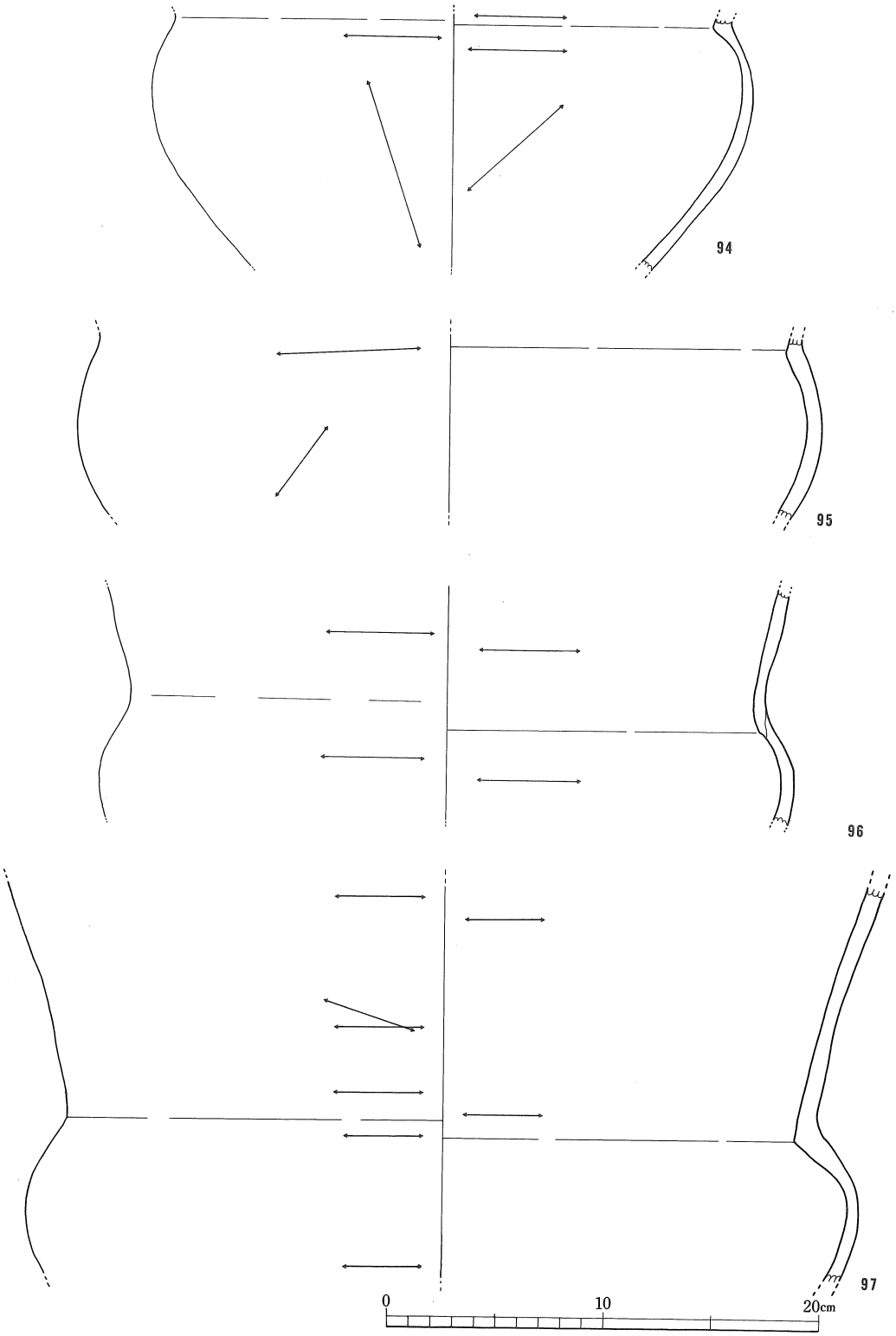
第34図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (9)



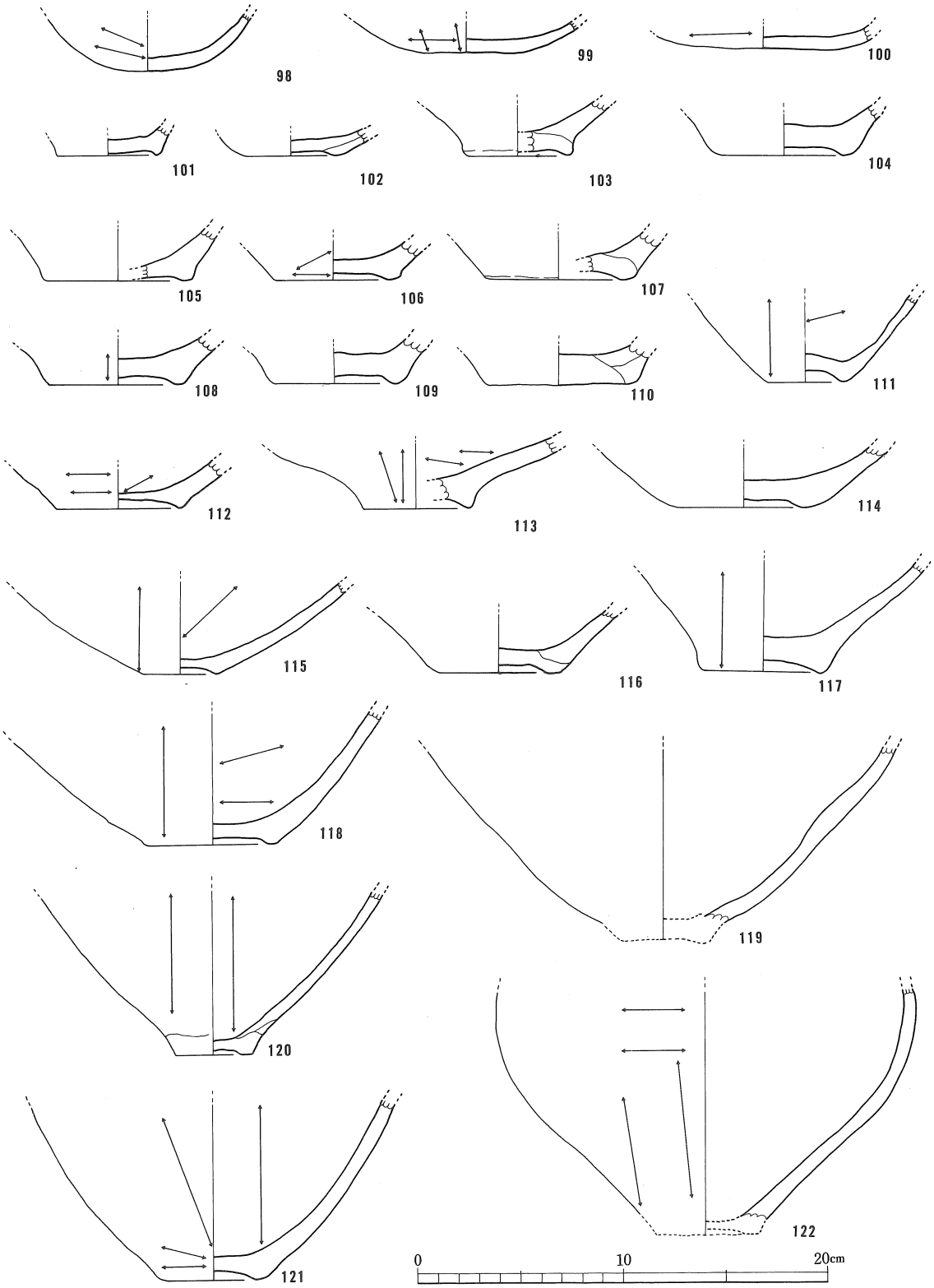
第35図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (10)



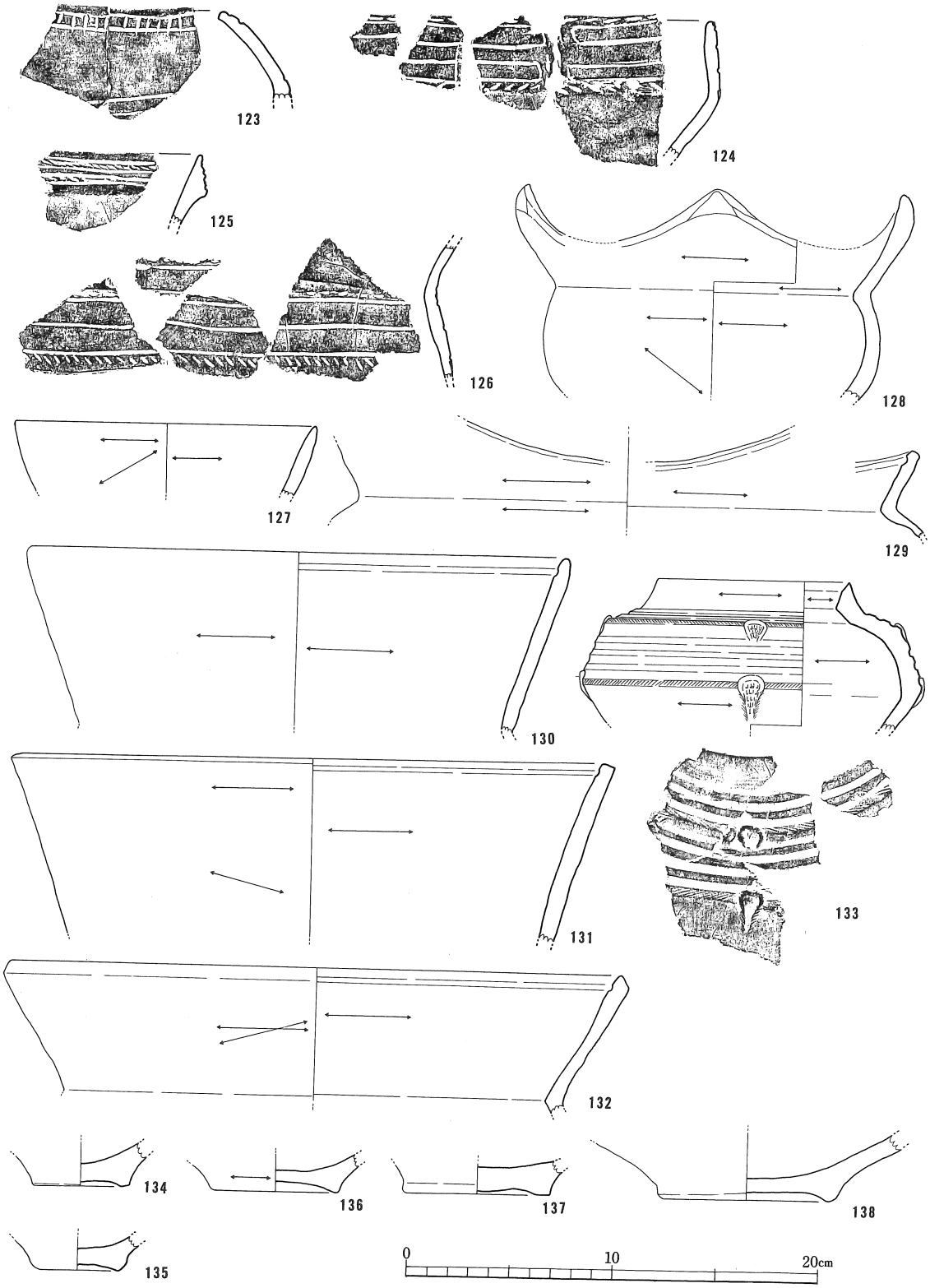
第36図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (11)



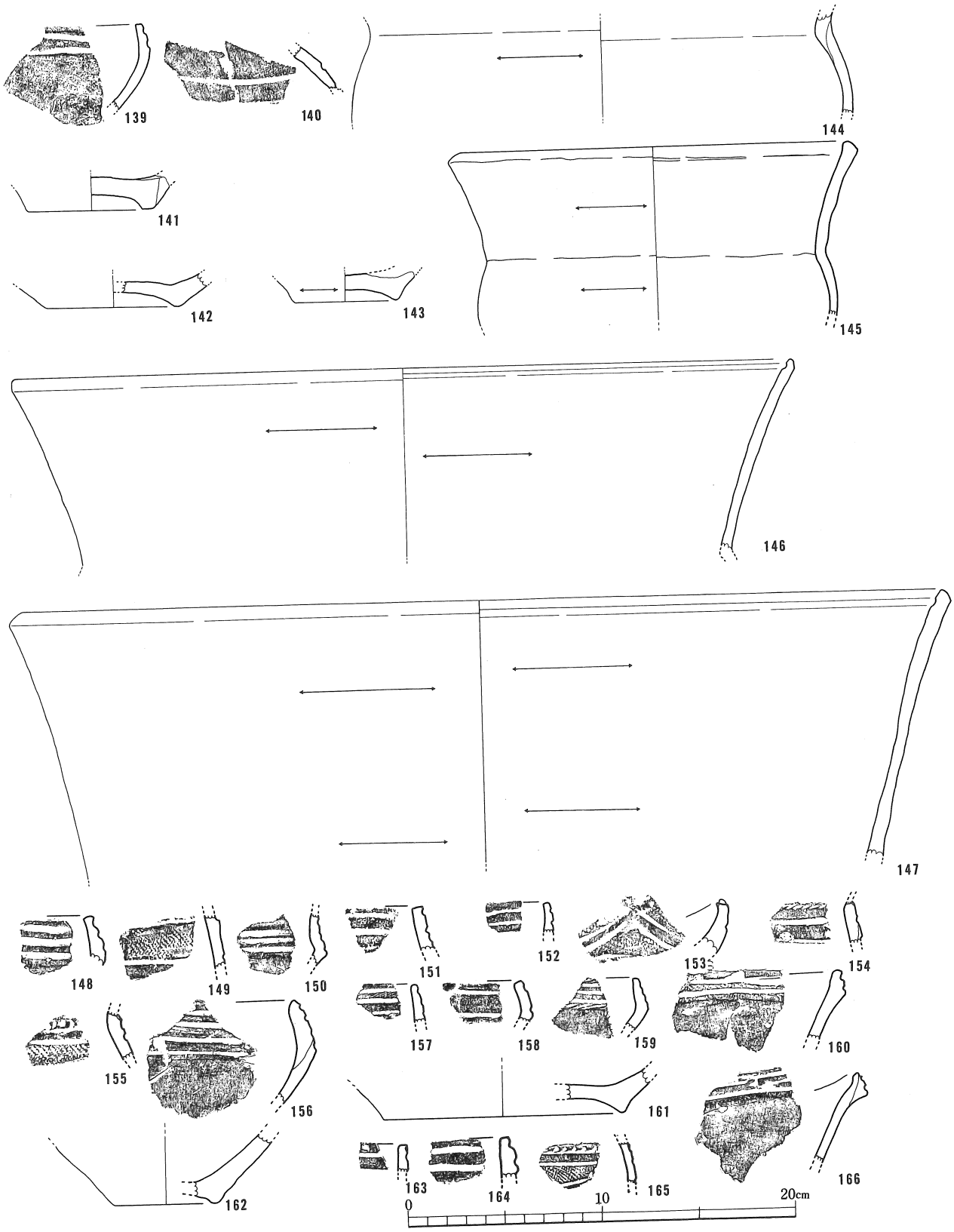
第37図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (12)



第38図　駒方C遺跡 出 土 土 器 実 測 図 (13)



第39図　駒方C遺跡 出土土器実測図(14)（G－2 拡張区）



第40図　駒方Ｃ遺跡 出土土器実測図(15)（第Ⅵ区）

3) 石　　器

発掘区より出土した石器は若干の剝片石器の他は扁平打製石器類が主体を占める。これらはいずれも包含層中からの出土であるが、縄文時代後期三万田式土器に伴うものと考えられる。

1. 打製石鏃（1～3）

出土した3点は全て姫島産黒曜石製で、えぐりが深く比較的精緻な加工が施されている。

2. 横刃形石器（4～8）

この種の石器に特徴的な事は、石材の選択が意図的になされていることで、板状に剝離する片岩系の横長剝片を利用する場合が多く、加工は整形加工と刃部に集中し、断面三角形に仕上がる。仕上がりの形態は石庖丁形石器と類似する。

3. 掻器（9～13）

片岩系の板状石の剝片をそのまま利用、あるいは2次加工を施して使用したもので、定形化した形状はない。

4. 扁平打製石斧（15～59）

出土石器の7割を占める縄文時代後期から晩期初頭に顕著に出土する石器で、当遺跡では大きく形態的に、基部と刃部の比率の大きい三角形状のものと、ほぼ同率の長方形状の2種に分類できるが、中間形体が多く、明確には判別しにくい。しかしながら概して前者には片面に自然面を残すものが多く、量産を目的とした結果の形状とも言える。

使用された石材は結晶片岩（緑色片岩）と同町で産出する「鉄平石」「片島石」と呼ばれる安山岩が主体となる。これらの産出地は遺跡からは近距離にあり、原石入手の容易さが出土量にも比例するものと考えられる。また、使用によって生じたと考えられる摩滅痕は刃部と基部でそのほとんどが確認できるが、当石器が垂直に着柄する「フクシ」的な使用が実施されたものと考える。
なお、15～19については、形態的には扁平打製石斧に類似するが、全て板状に剝離する石材を利用しており、他の扁平石斧と比較すると断面が非常に薄く、簡単な加工を施されたものだけであり石斧的な使用にはとても耐えられるものではなく、むしろ掻器的な用途を考えた方がよい。

5. 磨製石斧（60～62）

3点が出土しているが、厚手の断面形の全面研磨を施したものは1点のみである。

6. 十字形石器（63）

県内では縄文時代後期から晩期初頭の遺跡で扁平打製石器類に共伴して出土する石器であるが、量的には少ない。その利用法は未だ不明であるが、当遺跡出土のものは十字形の四頭部に刃部が形成されており、それぞれに摩滅痕が残っている。駒方C遺跡周辺では、同町片島に所在する宮地前遺跡・宝福寺遺跡等で出土している。

7. 円形石器（64）

発掘区付近で表採されたものであるが、この種の石器も扁平打製石器と共伴して出土するが、その出土量は極めて稀である。緒方町大石遺跡等に同石器が出土している。

8. ハンマーストーン（65）

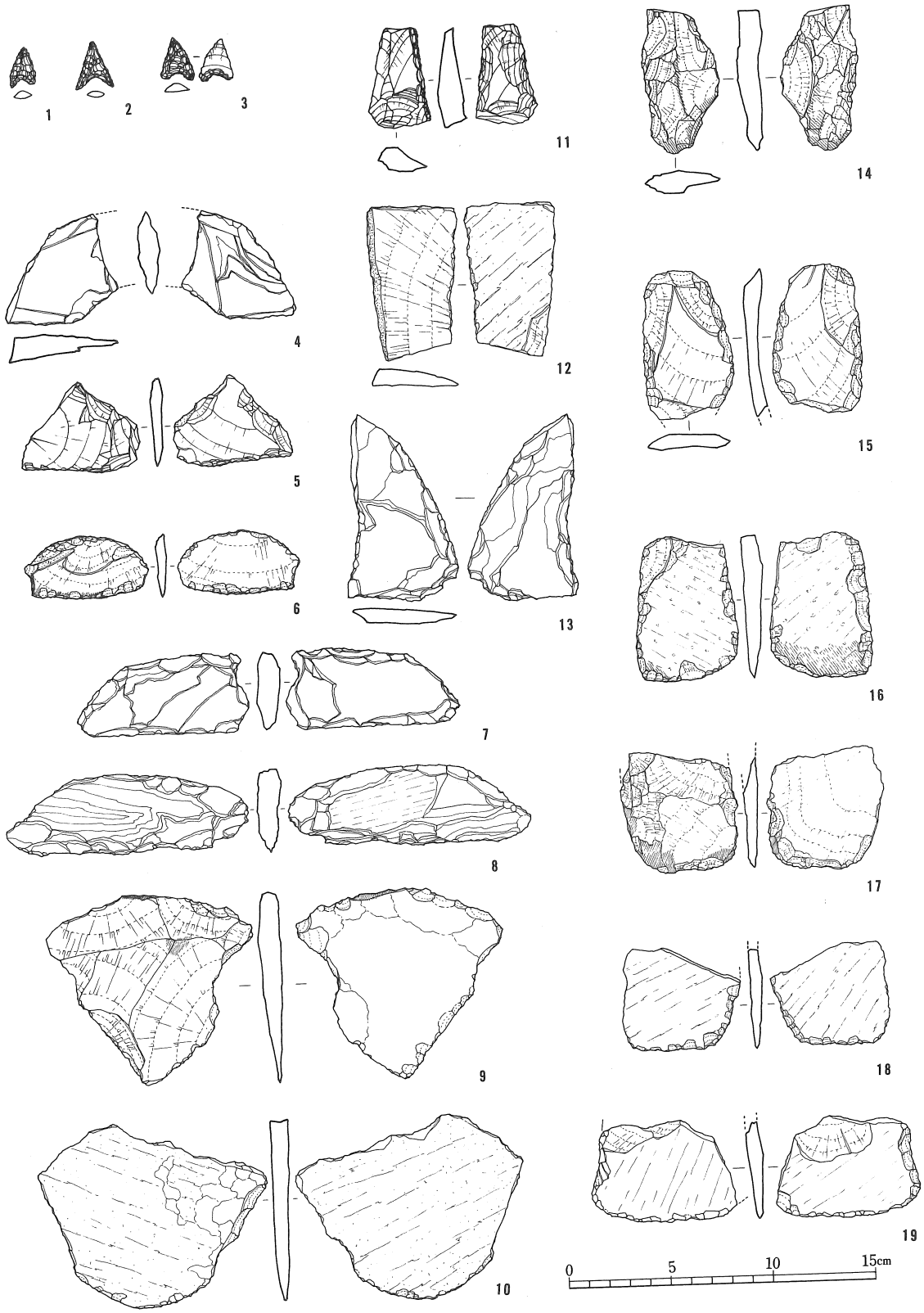
楕円形状の円礫を利用しており、先端部には敲打痕及び敲打時の小剝離痕が残る。発掘区内からは扁平打製石器製作によると考えられる小剝片の出土があり、同石器の利用が考えられる。

第13表　　駒方C遺跡出土石器観察表 (1)

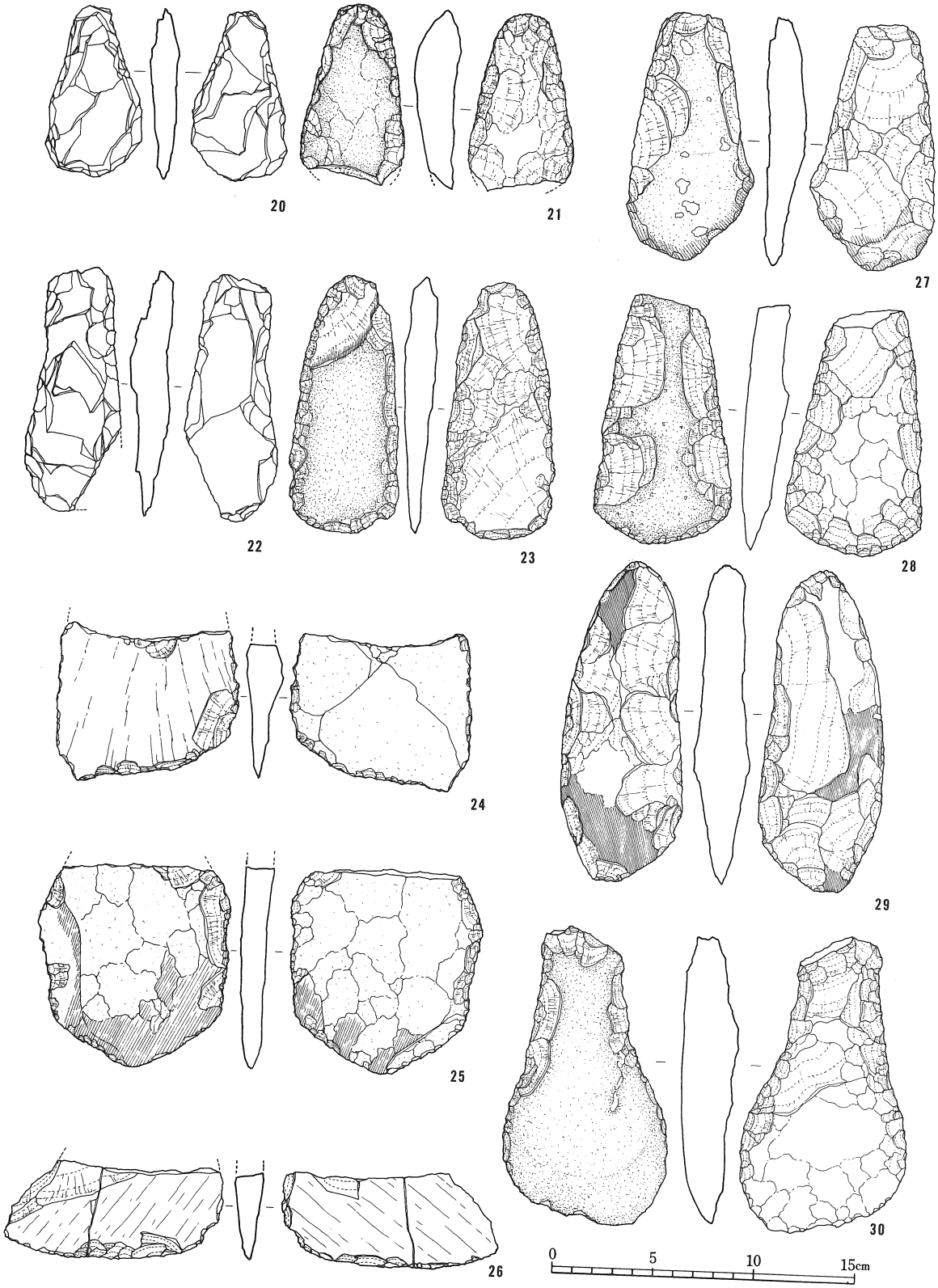
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
1	打製石鏃	2.0	1.3	0.4	0.5	姫島産黒曜石	片脚がわずかに欠損
2	打製石鏃	2.3	1.9	0.3	1.0	姫島産黒曜石	完形品
3	打製石鏃	2.2	1.7	0.4	1.0	姫島産黒曜石	片面に主要剥離面残る
4	横刃形石器？	5.6+α	4.3+α	1.1	37.0	結晶片岩	扁平打製石斧？
5	掻器	4.5	5.9	0.6	17.0	サヌカイト	わずかに自然面残る　横刃形石器
6	横刃形石器	3.1	6.1	0.5	11.0	サヌカイト	刃部摩滅
7	横刃形石器	4.0	8.4	1.1	48.0	結晶片岩	背部は敲打による刃潰し
8	横刃形石器	3.9	11.9	1.2	83.0	結晶片岩	基部陵部がわずかに摩滅
9	尖頭状石器(掻器)	9.3	10.1	1.1	95.0	安山岩	
10	掻器	9.0	11.2	0.9	102.0	安山岩	
11	掻器	4.9	3.0	1.3	17.0	姫島産黒曜石	
12	掻器	7.5	4.2	0.9	39.0	安山岩	
13	掻器	9.1	5.4	0.7	55.0	結晶片岩	
14	不明石器	7.1	3.8	1.2	31.0	サヌカイト	先端部が著しく摩滅
15	扁平打製石斧？	7.2	6.4	0.9	37.0	サヌカイト	先端部がわずかに欠損
16	扁平打製石斧？	7.0	5.0	1.0	45.0	安山岩	先端部摩滅
17	扁平打製石斧？	5.9	5.7	0.7	38.5	緑色片岩	先端部摩滅　刃部のみ
18	扁平打製石斧？	5.1	5.8	0.6	23.0	安山岩	刃部のみ
19	扁平打製石斧？	5.0	8.1	0.8	35.0	安山岩	刃部のみ
20	扁平打製石斧	8.4	4.8	1.4	60.0	結晶片岩	撥形・完形品
21	扁平打製石斧	8.9	5.2	2.2	106.0	玢岩	撥形・刃部欠損
22	扁平打製石斧	12.1	4.7	1.9	124.0	結晶片岩	撥形・刃部欠損
23	扁平打製石斧	12.8	5.5	1.6	120.0	安山岩	撥形・片面に節理面残る
24	扁平打製石斧	7.8	9.0	1.8	105.0	安山岩	基部欠損
25	扁平打製石斧	10.0	9.5	1.4	194.0	凝灰岩	基部欠損　刃部著しく摩滅
26	扁平打製石斧	4.8	10.7	1.4	71.0	安山岩	基部欠損
27	扁平打製石斧	12.2	6.3	1.9	152.0	玢岩	撥形・片面自然面残る　完形品
28	扁平打製石斧	12.3	6.3	2.0	218.0	玢岩	撥形・片面自然面残る　完形品
29	扁平打製石斧	15.9	6.0	2.3	344.0	硬質質砂	部分的に研磨、完形品
30	扁平打製石斧	14.7	8.2	2.2	319.0	玢岩	撥形・片面自然面残る　完形品
31	扁平打製石斧	8.7	3.2	0.8	34.0	結晶片岩	刃部摩滅　完形品
32	扁平打製石斧	10.4	3.6	1.4	84.0	結晶片岩	短冊形・刃部摩滅・刃部一部欠損
33	扁平打製石斧	11.2	4.6	1.7	103.0	サヌカイト	短冊形・完形品
34	扁平打製石斧	13.0	4.5	1.5	124.0	結晶片岩	短冊形・刃部摩滅・完形品

第14表　　駒方C遺跡出土石器観察表(2)

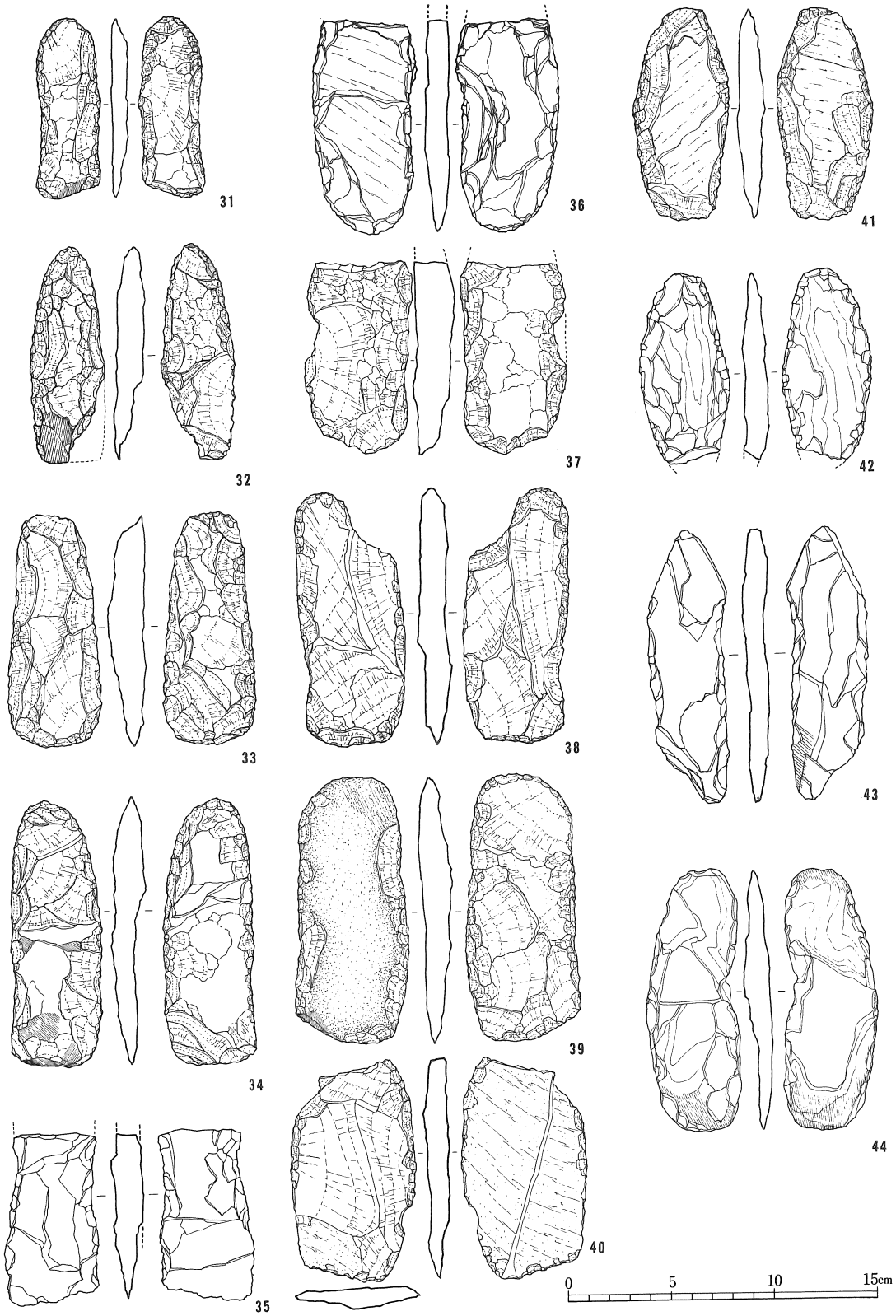
番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
35	扁平打製石斧	8.3	4.6	1.5	70.0	結晶片岩	基部欠損
36	扁平打製石斧	10.4	5.1	1.2	82.0	結晶片岩	基部欠損
37	扁平打製石斧	9.3	5.3	1.9	108.0	玢岩	基部欠損
38	扁平打製石斧	12.4	5.2	1.5	122.0	緑色片岩	
39	扁平打製石斧	13.0	5.6	1.6	157.0	玢岩	片面自然面残る。完形品
40	扁平打製石斧	10.8	6.1	1.2	79.0	安山岩	完形品
41	扁平打製石斧	10.3	4.7	1.3	78.0	結晶片岩	完形品
42	扁平打製石斧	9.2	4.4	1.2	67.0	結晶片岩	刃部欠損
43	扁平打製石斧？	13.2	3.6	1.1	78.0	結晶片岩	横刃形石器の可能性大
44	扁平打製石斧	12.7	4.5	1.2	91.0	結晶片岩	先端刃部著しく摩滅
45	扁平打製石斧	4.3	4.8	1.4	37.0	玢岩	基部のみ
46	扁平打製石斧	6.9	4.3	1.2	61.0	結晶片岩	基部のみ
47	扁平打製石斧	7.8	5.4	2.2	100.0	玢岩	基部のみ
48	扁平打製石斧	7.1	6.6	1.2	73.0	安山岩	基部のみ
49	扁平打製石斧	8.2	5.5	1.0	62.0	安山岩	基部のみ
50	扁平打製石斧	5.3	4.5	1.2	40.0	玢岩	基部・刃部欠損
51	扁平打製石斧	6.2	5.9	1.2	59.0	安山岩	基部・刃部欠損
52	扁平打製石斧	7.6	7.2	1.7	114.0	安山岩	基部・刃部欠損
53	扁平打製石斧	10.7	5.0	0.9	92.0	凝灰岩	刃部のみ・新しいキズが多い
54	扁平打製石斧	9.4	6.4	1.6	152.0	安山岩	基部欠損・刃部摩滅
55	扁平打製石斧	10.7	7.7	1.5	131.0	安山岩	基部欠損・刃部摩滅
56	扁平打製石斧	7.0	5.0	0.7	36.5	結晶片岩	基部・刃部一部欠損・刃部摩滅
57	扁平打製石斧	7.3	5.2	1.2	59.0	安山岩	基部欠損・刃部摩滅
58	扁平打製石斧	5.1	6.7	1.2	46.0	結晶片岩	刃部のみ
59	扁平打製石斧	6.2	7.1	0.9	55.0	安山岩	刃部のみ
60	磨製石斧	5.8	5.8	1.9	57.0	石質不明	基部のみ・研磨部剝落
61	磨製石斧	10.5	4.0	1.8	104.0	結晶片岩	
62	磨製石斧	12.0	5.2	3.1	220.0	緑泥片岩	基部のみ
63	十字形石器	11.6	12.8	1.2	134.0	安山岩	第Ⅳ区出土
64	円盤状石器	9.9	9.5	1.4	250.0	玢岩	駒方C遺跡付近で表採
65	敲打石	11.9	5.9	3.3	366.0	石質不明	
66	磨石	14.3	9.6	7.7	1 kg以上	硬質砂岩	
67	石皿	18.2	12.0	5.0	1 kg以上	石質不明	表裏とも利用



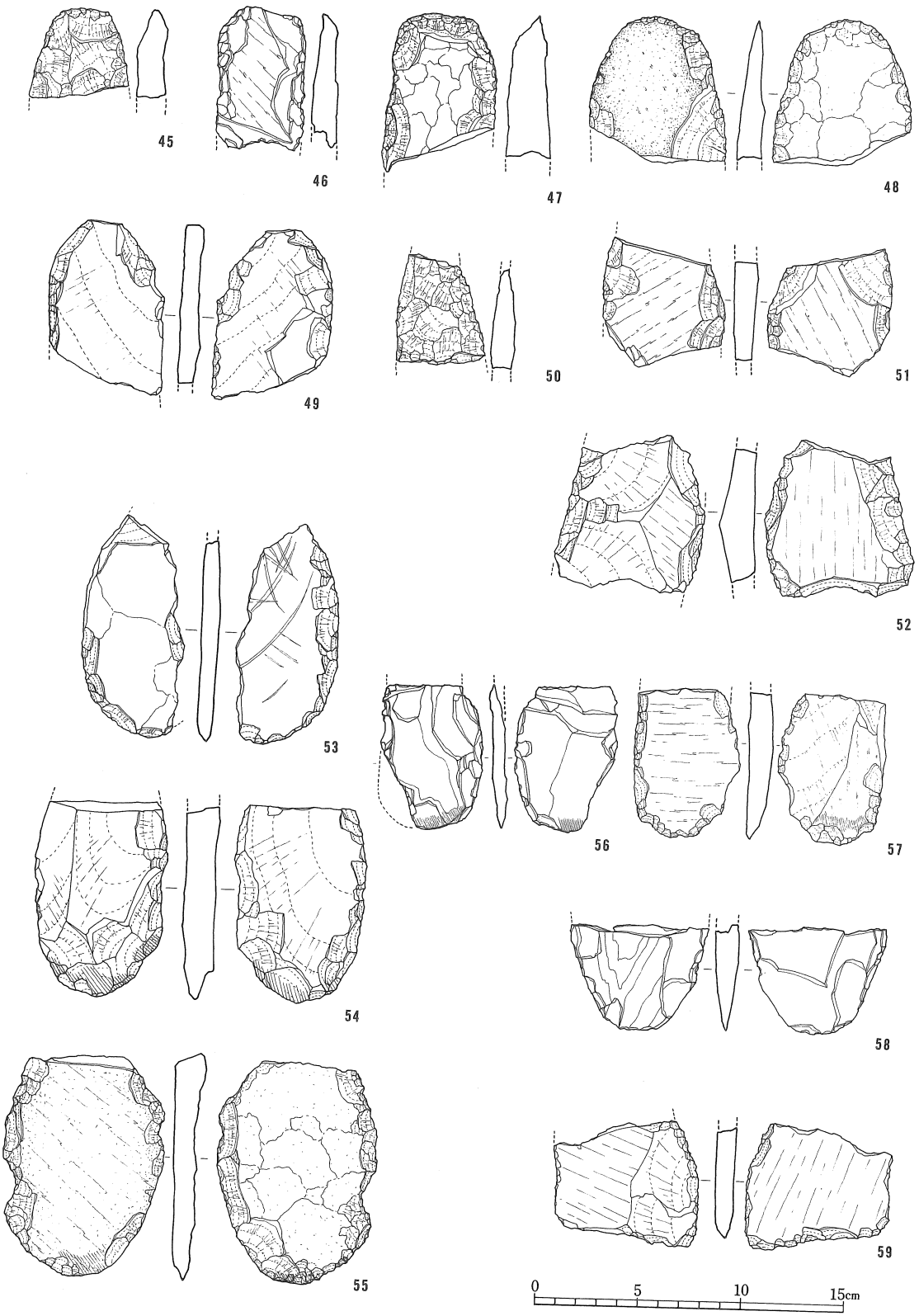
第41図　駒方C遺跡 出 土 石 器 実 測 図 (1)



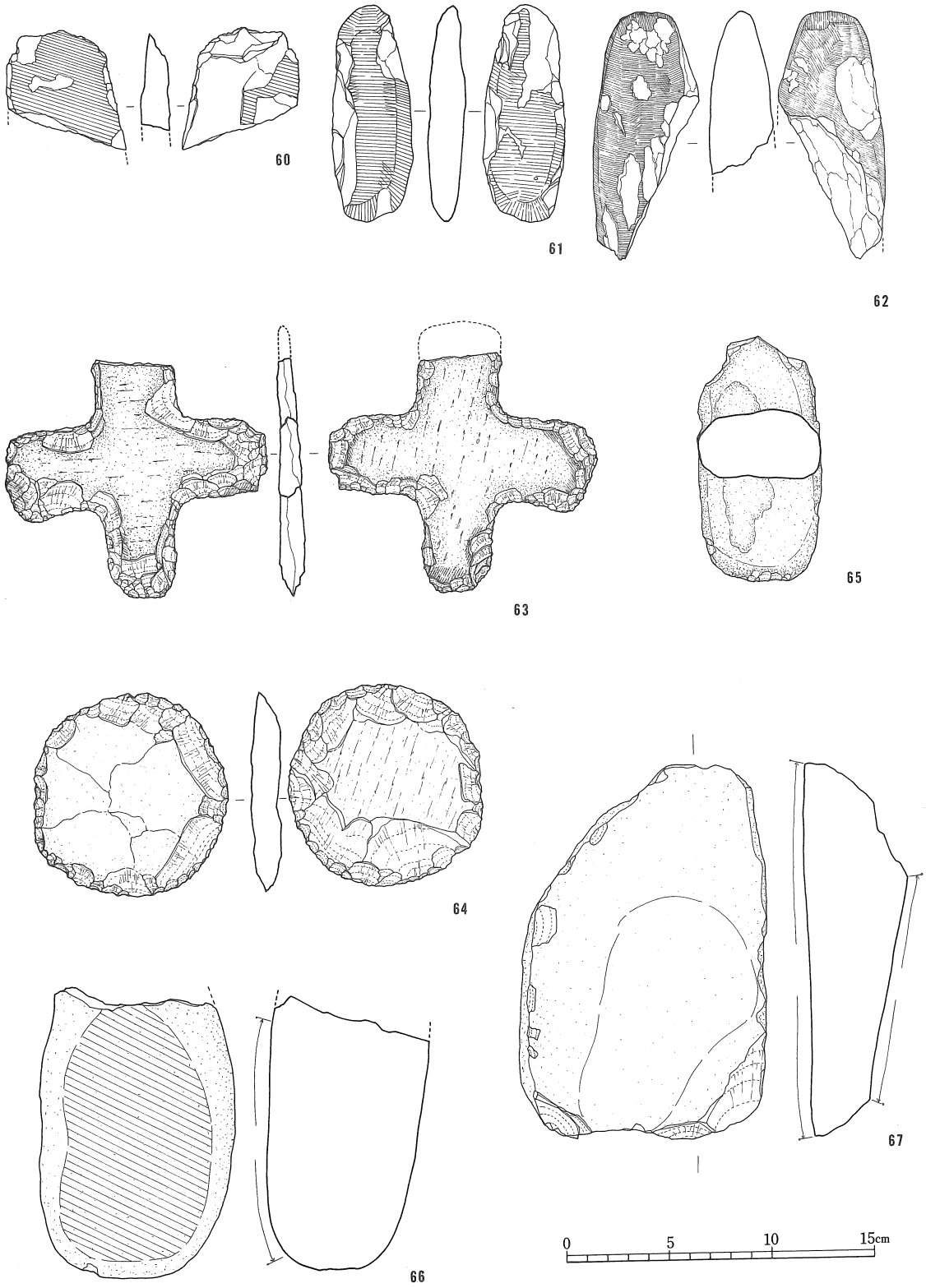
第42図　駒方C遺跡 出 土 石 器 実 測 図 (2)



第43図　駒方C遺跡 出 土 石 器 実 測 図 (3)



第44図　駒方C遺跡 出 土 石 器 実 測 図 (4)



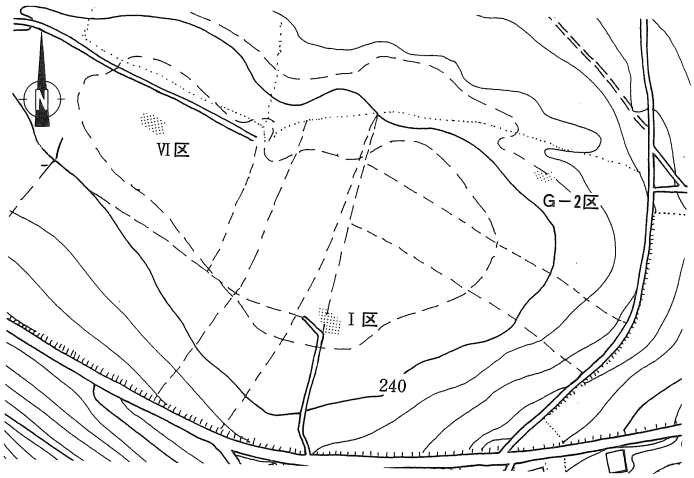
第45図　駒方C遺跡 出 土 石 器 実 測 図 (5)

(3) ま　と　め

駒方C遺跡の縄文時代の遺物は、当時東九州において空白期であった縄文後期後葉を埋める良好な資料であった。しかも、東九州の縄文時代後期は前半と後半で遺跡の立地や遺物の内容など様相を異にする。つまり、大分県における縄文後期前半の特徴は、海岸部では貝塚が形成され、遺跡の立地も、海岸部、内陸部と偏在することなくある。これに対して後期後半は、遺跡が大野川中流域などの火山性台地に集中し、遺物も土偶・注口土器・扁平打製石斧・十字形石器など新たな遺物が出現する。こうした、遺跡の転換期の中で、駒方C遺跡の存在は、火山性の台地に出現する初期の時期であり、しかも遺物の内容をみても、扁平打製石斧・十字形石器・注口土器・土偶など、新しい時代の様相をそなえ、出現期のこれらの遺物をみるうえで重要である。そこで、各遺物や遺物の出土状況などを検討し、まとめとしたい。

出土した土器の時期は後期後葉であるが、熊本県で細分化の研究がされている三万田式土器とは様相を異にする東九州の三万田土器として捉えられる。すなわち、熊本県では三万田式土器を基本的には西平式土器直系の磨消縄文系三万田式土器と羽状文系三万田式土器に分けて考えられている[註1]。そして、最近では、この両者に太郎迫遺跡のE・F地点出土の様相の異なる土器群を分け後期後半の編年を西平式土器―太郎迫式土器（磨消縄文系）―三万田式土器（羽状文系）―鳥井原式土器―御領式土器と考えている[註2]。

そこで、駒方C遺跡出土の三万田式土器を検討すると、文様では磨消縄文が全くなく、羽状文がみられる点などは、太郎迫F地点出土の羽状文系三万田式土器に相当する。器形や口縁部の形態および土器組成からみると羽状文系三万田として図示されている土器とは様相が異なる。特に駒方C遺跡の深鉢Ⅱ類のような土器は出土しておらず、類似する土器は太郎迫遺跡E地点出土の太郎迫式土器の中にみられる。また、口縁部が内湾する形態の浅鉢形土器は三万田式土器の中にはみられず、類似する器形は、これも太郎迫式土器の中にある。さらに、大部分の深鉢形土器の口縁部内面に沈線がめぐることも、三万田式土器より太郎迫式土器に類似する。このように、文様の点では三万田式土器、器形の点では太郎迫式土器に近く、熊本県で編年されている両型式では、駒方C遺跡出土の三万田式土器を捉えることはできず、東九州型の三万田式土器と考えられる。この系統の三万田式土器は、大野町夏足原遺跡[註3]・三重町惣田遺跡[註4]・野津町内河野遺跡[註5]・生野遺跡[註6]・臼杵市東台



第46図　駒方C遺跡縄文後期遺物集中部

遺跡[註7]などで、まとまった資料が出土しており、熊本県側の縄文後期後半の編年に対応できる編年が組まれつつある。

また、石器の組成は、扁平打製石斧が全ての石器の中の約8割を占め、縄文後期前半とは異なる様相を呈する。この組成は、以後縄文晩期前半まで同様な傾向が続く。大野川流域における扁平打製石斧の存在は、賀川光夫の提唱する縄文後晩期農耕論と直接的にかかわる遺物として重要である[註8]。

この駒方C遺跡は臼杵市東台遺跡とともにその出現期の代表的な遺跡であり、扁平打製石斧の形態や規格など、他地域や、他時期のそれと比較研究するうえで良好な資料である。

次に、遺物の出土状況であるが、試掘調査や本調査を含め、150m×100mの台地の平坦気味の頂上部に、少なくとも、第Ⅰ区・G－2区・第Ⅵ区の3個所で遺物の集中個所が確認できた。特に第Ⅰ区の状況は、近接した2個所に分かれて、径4～5mの範囲で、遺物が集中することがわかった。おそらく、他の遺物集中部分についても同様なことが考えられる。

この遺物の集中状況は、調査時においては集落の周辺にある生活廃棄物の廃棄場所と考え、周防灘沿岸などにみられる集落と貝塚の関係と同様と推測した[註9]。ところが、昭和56年に調査した野津町生野遺跡や内河野遺跡の調査で、駒方C遺跡のような遺物出土状況が観察された。それによると、生野遺跡では1個所、内河野遺跡では3個所の遺物集中個所が確認され、それぞれ円形や方形の竪穴住居跡の中に流れ込み堆積したものであることが判明した[註10]。遺物の集中範囲の規模も、駒方C遺跡と同様であった。

そこで、駒方C遺跡の遺物集中部分を竪穴住居跡とみなすと、少なくとも4軒の存在が推測される。しかも、その展開は、台地中央部に試掘調査や、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ区を設定し、調査したにもかかわらず、遺物の顕著な集中部分が検出されず、G－2区・第Ⅰ区・第Ⅵ区の台地上での位置から推定すると、中央部の縁辺に展開する住居跡の可能性が強い。

このような展開をみせる集落は、大分県では、縄文時代後期前半の貝塚を伴う遺跡である立石貝塚で確認されている。この遺跡は、洪積世の扇状地上に展開された遺跡であるが、中央の無遺物地帯を囲んで5～6個所の貝塚を伴う遺物集中部分が確認されている。また、熊本県側の遺跡では、上南部遺跡が知られている[註11]。この遺跡は縄文後期末から晩期前半にかけての大規模な遺跡で調査により台地中央の遺物出土の少ない部分をとり囲むように、台地の縁辺に帯状に遺物集中部分が展開する出土状況が検出された。

この両遺跡と駒方C遺跡を比較すると、時間的にみても、地理的にみても中間位置にあたり、このような形態の集落も想定できる。しかし、台地の面積に比較して調査面積が狭く、しかも、検出された遺物集中部分は3～4個所であり、まだ推測の域を出るものではない。

第5節　小　　結

駒方C遺跡の調査は、約1ケ月間という短期間のものであり、しかも今日大野川流域で実施されている畑地帯総合土地改良事業に伴う発掘調査の端緒となるもので、調査の方法など十分といえるものでなかった。しかし、調査で得た先土器時代と縄文時代の資料については、それぞれの時代の空白または希薄な時期を埋める良好なものであった。

先土器時代については、第Ⅳ区でＡＴの下位、黒色帯の上部にかけて石器群をとらえることができた。これは、大分県でこれまで発掘された最も古い石器群のひとつである。出土した剝片は総数38点で、石器は二次加工品を含めて７点であった。しかし、出土層位が明瞭であり垂直分布の範囲も狭いため単純な一時期と考えられる。このため、層位による編年的位置づけが明確であった。また、少ない出土石器であったが、接合資料が多く、遺跡の性格が、石器の製作にかかわるものであることが判明した。と同時に、いくつかの接合資料を通じて、この時期の母岩の大きさ、及び石器製作に関する技術の一端が明らかにされた。

縄文時代については、縄文後期後半、東九州において、大野川流域の火山性台地に遺跡の立地が偏在化してゆく傾向の中で、その初期の遺跡としてとらえることができる。また遺物も扁平打製石斧・十字形石器・土偶・注口土器など、縄文後期中葉東日本の影響を受け九州に出現し、晩期前半期までに、九州の縄文遺跡にみられる一連の遺物がすでに駒方Ｃ遺跡では出揃っていることも判明した。これらの遺物を分折した結果、土器は無文研磨土器が主体を占め、その出土状況から東九州の三万田式土器の一型式として型式を設定しうるものであった。また土器の組成も、前型式の西平式土器にはほとんど見られない浅鉢形土器が約10％を占め、後期末の御領式土器の浅鉢が24.3％であるように[註12]、以後晩期前半までみられる、浅鉢形土器と深鉢形土器という土器組成の萠芽を表わしている。また、注口土器は、土器型式からみれば、現在まで大分県で知られている最古の時期のものと考えられる。

石器の組成も後期前半とは大きく異なり、石鏃やスクレーパーが極めて少なく、扁平打製石斧が圧倒的に多く、約８割を占めることが判った。この石器組成も一型式古い西平式土器の石器の内容が不明であるため現在大分県の大野川流域でさかのぼりえる最古のものである。このことは土偶についても言える。

さらに、このような遺物を出土する状況は４～５ｍの範囲に集中ものであった。しかも、この遺物集中部分が、台地中央部の遺物出土の希薄な部分を取り巻くように３～４個所で検出され大分県の縄文後期前半の遺跡である立石貝塚や、熊本県の縄文後期後半から晩期前半にかけての遺跡である上南部遺跡と類似する可能性もあることが判明した。

以上のように、駒方Ｃ遺跡の先土器時代と縄文時代の遺物は、それぞれ層位的にみても、遺物を型式的にみても短期間のものであることが判った。このため、編年的位置づけや他の遺跡の各時期の遺物との比較が容易であり、今後の研究にとって貴重な成果をあげることができた。

註 1. 富田紘一「三万田式土器の文様」（九州の原始文様） 佐賀県立博物館　昭和52年
2. 富田紘一「三万田土器」（縄文文化の研究　Ⅱ） 雄山閣　昭和56年
3. 清水宗昭ほか「大野原の遺跡」 大野町教育委員会　昭和55年
4. 玉永光洋編「惣田遺跡」 三重町教育委員会　昭和58年
5. 後藤一重・栗田勝弘「野津川流域の遺跡　Ⅲ」 野津町教育委員会　昭和57年
6. 註５に同じ
7. 清水宗昭ほか「東台遺跡」 臼杵市教育委員会　昭和49年
8. 賀川光夫「農耕の起源」 講談社　昭和47年
9. 小倉正五・栗田勝弘「宇佐地区圃場整備関係発掘調査概報」 宇佐市教育委員会　昭和54年
10. 註５に同じ
11. 富田紘一「上南部遺跡発掘調査報告書」 熊本市教育委員会　昭和56年
12. 坪井清足「御領貝塚の発掘調査」（城南町史） 城南町史編纂会　昭和40年

第3章　夏足原（なたせばる）遺跡の調査

第1節　遺跡の立地と環境

大野原の台地群の南端に位置する夏足原台地は南を大野川本流、東と北を支流の平井川に囲まれた独立性の火山灰台地である。台地の形状は、東西約1,600m、南北約800mを測り、東部は、八手状に延びる。標高は約220m、周囲を流れる河川との比高差は約100mで、台地の周囲はV字谷になる断崖である。このため、台地の南側を流れる大野川の本流には沈堕ダムがあり北側を流れる平井川にも現在、矢田ダムの計画があるほどである。台地上は全て畑作地として利用され、水田は、周囲を取り巻く河川の周辺にわずかにみられる。また、集落は台地の西端に形成されている。

遺物は、台地上のほぼ全面に散布し、いたる所で土器片が採集される。このため台地全体を遺跡として認知している。

第2節　調査経過と調査区の設定

1.　調査の経過と調査区の設定

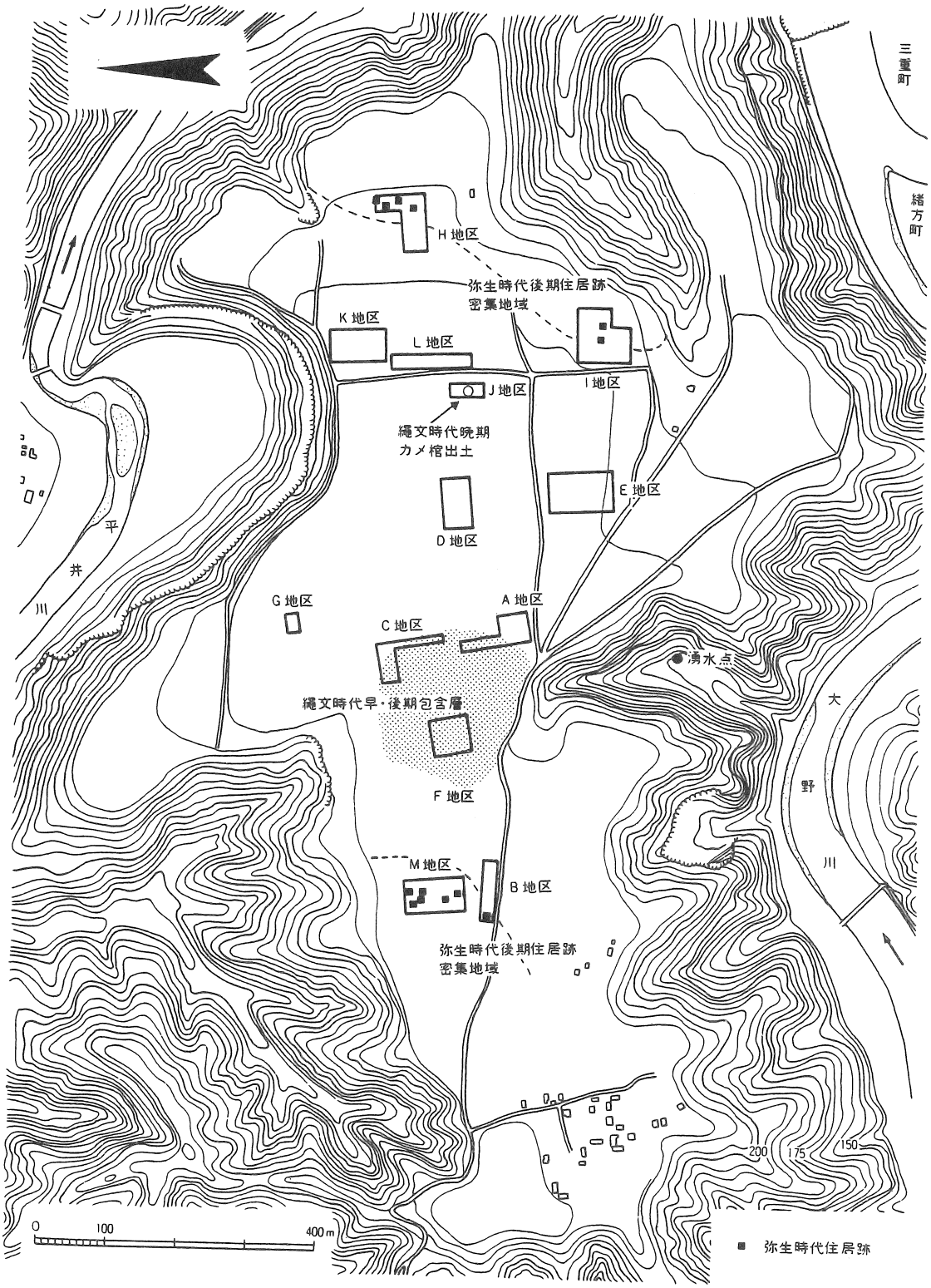
調査は畑地帯総合土地改良事業に伴うもので、大野町教育委員会が、国庫補助を受け実施したものである。しかし、調査の対象となる範囲が広く、工事に対応するには、遺構・遺物の集中個所を探す必要があった。このため、昭和50年から昭和53年までの4年間に、台地の作付の合い間をぬって試掘調査をした。

調査の方法は、空地となった畑に10m×10mを単位としたグリッドを取れるだけ設定しその一角の2m×2mを掘り下げ、遺物・遺構の状況を調査した。また、調査区の名称は調査順にアルファベッド名をつけ、最終的にはA地区からM地区までの13個所にわたり実施した。各年度の調査区は、昭和50年度がA・B・C地区の3個所、昭和51年度はD・E・F・G・H地区の5個所、昭和52年度はI・J・K・L地区の4個所、昭和53年度はM地区の1個所を調査した。

2.　調査団の構成

調査団の構成は以下のとおりである。

調査主体	大野町教育委員会	
調査指導員	賀川光夫	（大分県文化財保護審議会委員・別府大学文学部教授）
調査員	後藤宗俊	（大分県教育庁文化課）
	清水宗昭	（大分県教育庁文化課　昭和50～53年度担当）
	坂本嘉弘	（大分県教育庁文化課　昭和50・51年度担当）
	牧尾義則	（大分県教育庁文化課　昭和50・52・53年度担当）
	橋爪啓史	（元大分県教育庁文化課・現県立竹田高等学校　昭和50・51年度担当）
調査事務	名村博信	（大野町教育委員会）



第47図　夏足原遺跡地形図及び調査区位置図

第3節　各調査区の成果

昭和50年から昭和53年までの間の4年間に試掘調査をした結果、大まかであるが、台地上の遺構、遺物の包含範囲を想定することができた。それによると、縄文時代早期の包含層はA地区からF地区にかけて、後期の主要な包含層はF地区で確認された。また、弥生時代後期の集落は、台地東端のH・I地区、また、台地西部のB地区からM地区にかけての部分であった。

以下、各調査区の成果を表にまとめた。

第15表　夏足原遺跡各調査区の成果一覧表

調査地区名	調査年度	台地上の位置	主要遺構・遺物	備考
A地区	昭和50年度	台地南縁	縄文早期 押型文土器	一部弥生土器も出土した。
B地区	昭和50年度	台地西部中央	弥生後期 住居跡1軒	調査区の東部で三万田式土器の包含層を確認し、磨製石斧・石ノミなどが出土した。
C地区	昭和50年度	台地中央	縄文後期 御領式土器	出土量は少ない。台地中央が鞍部になっているため洪積層までが深い。
D地区	昭和51年度	台地中央		東西 100m南北50mの範囲内を25個所調査したが、縄文晩期の土器片がわずかに出土したのみである。
E地区	昭和51年度	台地中央南寄り		南に傾斜する緩斜面で、南北 100m東西50mの範囲を18個所調査したが有望な遺構・包含層はない。
F地区	昭和51年度	台地中央	縄文早後・ 晩期遺物	東西・南北50mの範囲を22個所調査し、その結果上部で縄文後・晩期、下部で縄文早期の有望な包含層を確認した。
G地区	昭和51年度	台地中央北寄り		東西南北30mの範囲を12個所調査したが西平式土器の破片が1点出土したのみである。
H地区	昭和51年度	台地東端	弥生後期 住居跡4軒	東西80m、南北70mの範囲を33個所調査した。弥生時代の住居跡の他、扁平打製石斧1点や縄文土器片も出土している。
I地区	昭和51年度	台地東部	弥生後期 住居跡2軒	南北80m、東西80mの範囲、34個所を調査した弥生時代の住居跡以外は注目される遺物はない。
J地区	昭和52年度	台地東部中央	縄文晩期末 深鉢形土器	埋葬棺状の深鉢が立石とともに出土している。
K地区	昭和52年度	台地東部北寄り		注目されるほどの遺物の出土はない。
L地区	昭和52年度	台地東部		遺物はほとんど出土しない。
M地区	昭和53年度	台地西部中央	弥生時代後期 住居跡6軒	弥生時代の住居跡のほかには、三万田式土器の浅鉢西平式土器の深鉢などが出土している。

第4節　夏足原遺跡F地区の調査

1. 調査区の設定

(1) 周辺の地形

夏足原遺跡は、大野原台地群の南端に位置する独立性の台地であることは、先に述べたが、その中でF地区は、台地のほぼ中央に位置する。地形はほぼ平坦であるが、南側から深い谷が切り込み、谷底近くには湧水があり、水田も経営されている。この谷は、F地区の南側を区切る台地上の鞍部に続いている。F地区で集中的に出土した縄文後期後半の地表面での遺物のひろがりは、F地区を中心に、B地区の東端からC地区までみられ、広範囲に広がる。

(2) 調査区の設定と経過

調査は、作物の作付に大きく左右されるため、思うにまかせないものがあった。F地区の調査も、たまたまこの部分が空地となったため、調査区を設定したものである。夏足原の台地は、試掘調査が昭和50年に開始される以前から、畑の畦畔や、空地に扁平打製石斧が山積みされていた等の情報があり、縄文後・晩期の有望な遺跡として知られていた。しかし、調査が開始されて、A地区からE地区を調査した限りでは、調査以前に耳にしていた情報ほど、後晩期の遺物の出土はなかった。こうした状況下で、F地区の調査は、開始された。

F地区では、夏足原台地の中央を東西に横断する高圧線の下、主軸を南北にとり、東西南北50mの調査区を設定し、2m×2mの試掘を22個所掘り下げた。その結果、各グリッドから、量の多少はあるものの、縄文後期前半から晩期にかけての遺物が出土した。特にA－3区では遺物が集中的に出土した。また、調査区の南端のE－1・E－2区を掘り下げたところ、有望な押型文土器の包含層も確認された。

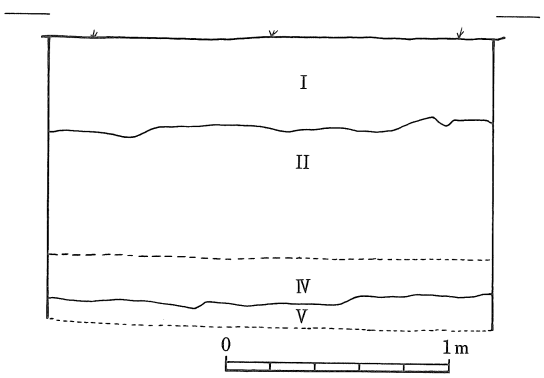
以上、夏足原遺跡F地区を調査した結果、以前から情報が寄せられていた、縄文後・晩期の有望な包含層のひとつを確認することができた、なお調査期間は、D・E・F・G・H地区を含めて、昭和51年11月8日から11月27日までであった。

2. 層位と遺物

夏足原遺跡F地区では、上層で縄文後期後半から晩期、下層で縄文早期の有望な包含層を確認した。第48図は、22個所の試掘のうち洪積層まで掘り下げたE－2区の土層断面図である。

Ⅰ層　表土層（灰黒色）

Ⅱ層　茶黒色土　この層の上部に後・晩期の遺物が多量に含まれる。



第48図　夏足原遺跡F地区土層図（E－2区）

Ⅳ層　茶黒色土　縄文早期の包含層である。この層の上部には、Ⅵ層の「アカホヤ」があるが、F地区では、肉眼では確認されなかった。土色は遺物を包含するためか、駒方C遺跡の黒色に比較すると茶色が強い。

Ⅴ層　黄褐色土　先土器時代の遺物包含層。F地区では遺物の出土はなかった。

第49図　夏足原遺跡F地区調査区配置図

3. 出 土 遺 物

(1) 土　　器

遺物は、A－3区を中心に各試掘グリッドから出土した。土器からみると時期も縄文早期、縄文後期中葉・後半、晩期前半と、各時期がある。そこで、以下これまでの研究に従い土器を分類し、その概要を紹介する。

（Ⅰ類）縄文早期の土器で無文土器も出土している。出土量は少なく32点である。

Ⅰa類　口縁部のあまり外反しない押型文土器で、外面には口縁部上位に空白部を残し横回転の小さな山形文が施文されている。内面には、原体刻文があり、その下にも横回転の山形文がある。

Ⅰb類　無文薄手土器である（7・8）。全て胴部の破片であり、器面は撫で仕上げである。

Ⅰc類　無文厚手土器である（9～11）。これもⅠb類同様、器面は撫で仕上げであるが器壁の厚さが圧倒的に異なり、約1㎝を測る。

以上、縄文早期の遺物であるが、端正な押型文、内側の短い原体刻文、直口気味の口縁形態、無文の薄手、厚手を伴うことなどは、縄文早期でも古式の遺跡である杵築市稲荷山遺跡、臼杵市東台遺跡などの様相と類似する。しかし、これらの遺跡出土の押型文土器には原体刻文がなく、押型文土器だけをみれば、夏足原遺跡F地区の押型文土器は早水台遺跡のそれに近い。今回の調査で得た資料が少ないため断定はできないが、縄文早期前半の遺物と理解しても間違いはあるまい。

（Ⅱ類）後期中葉の磨消縄文土器である。後半のそれに比較すると、縄文の粒が大きく沈線も太い。総出土点数は図示した8点で、15・16が浅鉢のほか全て深鉢と思われる。口縁部の形態には、波状になるもの（12）や、水平のもの（14～17・19）がある。15は北久根山式土器と思われ、口唇部に「W字状」の細い粘土紐を貼り付けた文様がある。また、17・19は西四国地方に多くみられる片粕式土器と思われる。その形態は屈曲し立ちあがる口縁部の外面に2～3条の沈線と縄文があり、頸部は無文帯である。また胴部の上位には、縄文施文後、粗い斜方向の沈線により文様が描かれている。同様な土器は大野町小牧遺跡からも出土している。

（Ⅲ類）屈曲または肥厚する口縁端部の外面、および、くびれた頸部から胴部の上位にかけて、磨消縄文や沈線文が施文されている。この文様施文部以外は丁寧な横方向の篦研磨で仕上げられる精製土器である。これまでの土器型式では、西平式土器あるいは、磨消縄文系三万田と考えられている。

Ⅲa類　口縁部が波状を成さない水平口縁である（20～37・65）。口縁部の形態には、端部に粘土紐をめぐらせ、屈曲立ち上り部を作る手法（20・21・36・27）と外面にめぐらせ、肥厚気味に仕上げる手法（24・25・28・30）がある。この部分には2本沈線のもの（20・26・31・34～36）と三本沈線のものがある。また31以外は、縄文施文後沈線をめぐらせている。

Ⅲb類　口縁部が波状になる深鉢形土器である（38～63）。口縁部の形成手法はⅢa類と同じであるが、波状の頂部に刻み目があり、54はその部分に2個所刺突文がある。また口縁部の文様もⅢa類と同じで、2～3本の沈線がめぐるが、波状頂部の文様施文部が幅広のため、他の部分が2本

沈線でも、この部分は3本のものが多い。

Ⅲc類　浅鉢と思われる破片で64の1点のみである。水平口縁で、口縁部に平行に縄文施文後数条の沈線がめぐる。

Ⅲ類の口縁部以外の破片は、頸部や胴部が多量に出土している。分類の基準を口縁部の形態におき、Ⅲa・Ⅲb類に小分類したが、これらの資料は、いずれに分類されるか不明である。ただ、口縁部と胴部が接合した63の資料によれば、Ⅲb類の口縁部と胴部の文様は、頸部のくびれ部に刻むような連点文が付き、以下胴部上位に、縄文と平行沈線がめぐっている。これ以外は接合資料がなく、口縁部形態や文様と、胴部の文様との関連性を追求することはできなかった。

頸部と胴部（66～118）の文様の共通性は、いずれも頸部のくびれ部に連点文または斜方向の短い連続短線文をめぐらせている。以下胴部上位にかけての文様はバラエティに富むが、基本的には横方向の沈線文と縄文で構成される。特異な文様としては、81の三角形を配したものや、沈線文の間に波状沈線を加えるもの（69・73・94・101・102）などがある。

以上が、Ⅲ類に分類される土器であるが文様を構成するのは縄文と沈線でⅡ類と同じである。しかし、Ⅱ類に比較すると沈線・縄文とも細かく、文様も繊細である。また器壁も薄い。これらの土器は、従来西平式土器あるいは磨消縄文系三万田と型式づけられ、口縁部の形態や文様で両者は区別されていた。しかし、夏足原遺跡F地区の資料でみる限りでは、33・37・54などが古い様相を示し、35・62・63は新しい傾向が認められるなど漠然とした区別はつくものの、両者を明瞭に区別することは現状ではできない。

（**Ⅳ類**）無文で口縁部内面に沈線がめぐる土器で駒方C遺跡では単純な状態で検出された三万田式土器である。

Ⅳa類　2点の浅鉢形土器で、口縁部が屈曲する。119は無文であるが120に沈線がめぐる。

Ⅳb類　口縁部の先端を肥厚させ、内側に沈線を一条めぐらす、水平口縁の深鉢形土器である。文様は一条の沈線のほかは無文で、横方向の篦みがきで仕上げられている。

Ⅳc類　Ⅳb類と、文様や器面調整の方法など同じであるが、口縁部が波状となる。

この他、Ⅳ類では深鉢の胴部の破片がある。これらは、文様が無いことからⅢ類では区別される。また器面の調整も横方向の篦みがきである。

Ⅳ類の土器は量的には多いものではない。しかし、系統的にみた場合、Ⅳb類はⅢa類から、Ⅳc類はⅢb類からの型式変化が考えられる。これらの資料は大野町駒方C遺跡・二本木遺跡・臼杵市東台遺跡などで、まとまった出土があり、熊本県で羽状文系三万田式土器と一部併行関係にあるが、土器組成の様相が異なり、東九州の三万田式土器として認識される。

（**Ⅴ類**）波状口縁が少なく、文様は口縁部外面を凹線文がめぐるのみである。確認された器種は深鉢形土器と浅鉢形土器・鉢形土器で、前者をⅤb類、後者をⅤa類とした。

Ⅴa類　浅鉢形土器が主体であるが鉢形土器も含まれる。しかし、両者の区別は口縁部のみでは困難である。器形は大きく2形態に分類される。まず137～153であるがこれは口縁端部が屈曲する

器形である。147～151は、外反気味に屈曲し、152・153は屈曲した口縁部が内傾して立つ。いずれも稜を生じて屈曲する口縁部外面に2条の凹線文がめぐり、147・150には屈曲部に凹点文が付く。次に154～158であるが、体部で屈曲し、稜を生じて張る胴部を形成する。さらに、口縁部でもう一度屈曲して立つ。器面の文様は、口縁部外面に1～2条の凹線がめぐり、稜を生じて張る胴部にも1条の凹線がめぐる。また、胴部と口縁部の屈曲部には、横に長い凹点文が施文されている。137～145は小破片で全体の器形を知ることはできないが、143・144・146は口縁部が緩い波状になる。器形は147～153と同じであろう。器面調整は、口縁部周上が横方向、底部に近くなるにつれ縦方向の篦みがきである。特に154・155・157は丁寧に研磨された精製土器である。

Ｖｂ類　水平口縁の深鉢形土器である。器形は胴部が緩い稜を持ち、扁球状になる。頸部は長く延び、口縁部は稜を生じて屈曲し、内傾気味に立つ。文様は、屈曲部の外面に2～3条の凹線文がめぐる。また、166にみられるように、肩部には小さな段が生じるが、全てではなく、167にはない。器面調整は口縁部から肩部にかけて横方向の篦研磨、以下底部まで縦方向の篦みがきである。167以外は全て丁寧に研磨された精製土器である。

以上がＶ類の土器であるが、口縁部の形態や器形など、縄文後期末に編年されている標式遺跡である熊本県御領貝塚出土土器に類似している。土器の組成は浅鉢形土器と深鉢形土器であるが、晩期にみられる浅鉢は精製土器、深鉢は粗製という製作上の区別はなく、両者にそれぞれ、精製・粗製の土器がみられる。なおＡ－３区で集中的に出土した遺物の大部分はこの時期の資料であり、夏足原遺跡Ｆ地区の主体を占めるものである。

（Ⅵ類）口縁部が外反する無文の深鉢形土器を主体とする土器で一部浅鉢（187）、あるいは鉢形土器（188）を含む。口縁部の形態は外反のみでなく、174・177・178・181～183など内湾気味のものもある。また器面調整は横方向の篦研磨が圧倒的に多いが、176のように横方向の条痕文もみられる。主体となる深鉢形土器の器形は198・200に代表されるように、口縁部が単純に外反し胴部の張りの小さいものであるが、大きさには口径17.5cmから33cmまで、さまざまである。なお187の浅鉢は、内外面丁寧に研磨された精製土器である。また188の鉢形土器は、器面を撫でによる粗い仕上げのあと、方向性のない粗い篦研磨で仕上げられている。

以上は、Ｖ類と同じく、熊本県御領貝塚出土土器の一部と類似する。大分県でもⅡ・Ⅲ・Ⅳ類土器出土の遺跡からは、Ⅵ類のような深鉢形土器が併出せず、また晩期の前葉期の遺跡からもほとんど出土しない。このことからも後期末の御領式土器に伴うものと理解できる。

（Ⅶ類）縄文晩期前半の土器を一括してⅦ類とした。器種は浅鉢と深鉢で形成され、前者が精製、後者が粗製と明瞭に区別される。

Ⅶａ類　浅鉢形土器で、全て横方向に丁寧に研磨されており、色も黒色化している。器形は、胴部で稜を生じて屈曲し、頸部は外反し、口縁部はさらに屈曲して立つ。この口縁部の屈曲部外面には1条の沈線がめぐり、Ｖａ類の2本の凹線文とは明らかに異なる。また、207・208・212・213は

第16表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(1)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
1	E－2	深鉢	Ⅰa	胴部	茶色	○	○				押型文をナデ消している
2	E－1	深鉢	Ⅰa	胴部	暗茶色	○					硬い焼成
3	E－2	深鉢	Ⅰa	胴部	暗茶色	○					
4	E－2	深鉢	Ⅰa	胴部	茶色	○	○				内面ナデ調整
5	E－1	深鉢	Ⅰa	口縁部	暗茶色	○	○				
6	E－1	深鉢	Ⅰa	口縁部	暗茶色	○	○				内面ナデ
7	E－2	深鉢	Ⅰb	胴部	茶色	○	○				無文薄手
8	E－2	深鉢	Ⅰb	胴部	茶色	○	○				無文薄手
9	E－2	深鉢	Ⅰc	胴部	茶色	○	○				無文厚手　砂粒が多い
10	E－2	深鉢	Ⅰc	胴部	茶色	○	○				無文厚手　外面は平滑な仕上げ
11	E－2	深鉢	Ⅰc	胴部	暗茶色	○	○				無文厚手　砂粒を多く含む
12	E－1	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○				タテ方向のヘラ研磨
13	C－3	深鉢	Ⅱ	頸部	茶色	○					
14	E－5	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○				口縁部は周辺ヨコ方向のヘラ研磨
15	B－3	浅鉢	Ⅱ	口縁部	暗茶色						ヨコ方向のナデ　大きい砂粒含む
16	C－5	浅鉢	Ⅱ	口縁部	淡黒色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨
17	C－2	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨　外面にスス付着
18	D－5	深鉢	Ⅱ	胴部	茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
19	E－5	深鉢	Ⅱ	口縁部	茶色						外面にスス付着
20	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
21		深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
22	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	茶色	○					
23	D－3	深鉢	Ⅲa	口縁部	淡茶色	○					縄文あり　ヨコ方向のヘラ研磨
24	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
25	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	赤茶色	○	○				器面　磨滅している
26		深鉢	Ⅲa	口縁部	茶褐色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
27	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	明茶色	○	○				縄文あり
28	D－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	茶色	○					縄文あり　内外面　入念なヨコ方向のヘラ研磨
29	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	黒色	○	○				砂粒多く含む　ヨコ方向のヘラ研磨
30	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○		○		縄文あり
31	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	茶色	○	○				縄文なし　厚手のつくり
32	C－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	淡黒色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
33	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	茶色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨
34	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	赤茶色	○	○				粗いヨコ方向のヘラ研磨
35	B－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○				内面は淡茶色　ヨコ方向のヘラ研磨

第17表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(2)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
36	D－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	茶色	○					大粒の砂粒を多く含む
37	C－2	深鉢	Ⅲa	口縁部	赤茶色	○		○			ヨコ方向のヘラ研磨
38	A－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○					縄文あり
39	E－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	淡茶色						砂粒少ない　縄文あり
40	D－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				内外面入念なヨコ方向のヘラ研磨
41	D－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	赤茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
42		深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○					縄文あり
43	A－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○					縄文あり
44	E－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
45		深鉢	Ⅲb	口縁部	明茶色	○	○		○		
46	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	淡茶色	○	○				縄文あり
47	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				内面黒色　縄文あり
48	A－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				縄文あり
49		深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○	○				外面スス付着
50	E－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
51	D－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				内面黒色　内外面入念なヘラ研磨
52	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	明茶色	○					
53	E－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				縄文あり
54		深鉢	Ⅲb	口縁部	灰茶色	○	○				ヨコ方向の入念なヘラ研磨
55	E－1	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○	○				縄文なし
56	D－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				内面ヘラ研磨
57		深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
58	B－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	黒色	○	○				外面にスス付着 内外面ヨコ方向ヘラ研鉢
59	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	明茶色	○					中央の沈線は押引き
60	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	茶色	○	○				縄文あり　内外面入念なヘラ研磨
61	B－2	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色		○				縄文あり　内外面入念なヘラ研磨
62	B－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	黒褐色	○	○				内外面入念なヘラ研磨
63	A－3	深鉢	Ⅲb	口縁部	暗茶色	○	○				ヘラ研磨
64	C－5	浅鉢	Ⅲc	口縁部	淡茶色	○					内面ヨコ方向のヘラ研磨
65	E－1	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○				
66	E－1	深鉢	Ⅲ	頸部	明茶色	○	○				
67		深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				
68	C－2	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○				
69	E－1	深鉢	Ⅲ	頸部	赤茶色	○	○				
70	C－3	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○					

第18表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(3)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
71	C—1	深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				縄文あり
72		深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				
73	B—2	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨　縄文あり
74	C—2	深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				縄文なし
75		深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○					
76	A—3	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨　縄文なし
77	A—3	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○	○				縄文あり
78		深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				
79	A—1	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○					
80		深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○				厚手の仕上げ
81	C—3	深鉢	Ⅲ	頸部	明茶色	○		○			内面に炭化物付着
82	C—2	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○				外面ヘラ研磨
83		深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○		○		外面にスス付着
84	D—2	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○		○			砂粒含む　縄文あり
85		深鉢	Ⅲ	頸部	黒色	○					内面は淡茶色　ヨコ方向のヘラ研磨
86	D—2	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○					
87	A—3	深鉢	Ⅲ	頸部	黒色	○	○				縄文あり　ヨコ方向のヘラ研磨
88	E—1	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色						縄文なし　ヨコ方向のヘラ研磨
89	E—1	深鉢	Ⅲ	頸部	黒色	○	○				内面茶色　縄文あり
90	B—3	深鉢	Ⅲ	頸部	黒色	○	○				内外面　ヨコ方向のヘラ研磨
91	E—1	深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				縄文なし　ヨコ方向のヘラ研磨　粗雑な仕上げ
92	C—1	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○	○				内面ヘラ研磨
93		深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○					入念なヘラ研磨
94		深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○				入念なヨコ方向のヘラ研磨
95		深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				
96		深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○					
97	C—2	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色			○			
98	C—2	深鉢	Ⅲ	頸部	茶色	○	○				ヘラ研磨　調整であるが　比較的雑な仕上げ
99	E—4	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○					
100	E—1 A—3	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
101	A—3	深鉢	Ⅲ	頸部	暗茶色	○					内面ヘラ研磨
102	A—1	深鉢	Ⅲ	頸部	淡茶色	○	○				内外面　ヘラ研磨、縄文あり
103		深鉢	Ⅲ	胴部	淡茶色	○					縄文あり
104		深鉢	Ⅲ	胴部	茶色						
105	B—3	深鉢	Ⅲ	胴部	茶色	○	○				入念なヨコ方向のヘラ研磨

第19表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(4)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
106	D—2	深鉢	Ⅲ	胴部	茶色	○					内面平滑ナデ仕上げ
107	E—1	深鉢	Ⅲ	胴部	暗茶色	○	○				
108	A—2	深鉢	Ⅲ	胴部	淡茶色	○	○				
109	B—2	深鉢	Ⅲ	胴部	明茶色	○	○				縄文なし　内面ヘラ研磨
110		深鉢	Ⅲ	胴部	茶色	○					
111	A—5	深鉢	Ⅲ	胴部	明茶色	○					内面平滑ナデ仕上げ
112		深鉢	Ⅲ	胴部	黒色	○	○				
113		深鉢	Ⅲ	胴部	淡黒色	○	○				
114		深鉢	Ⅲ	胴部	淡茶色	○					
115		深鉢	Ⅲ	胴部	茶色		○				ヨコ方向のヘラ研磨
116	E—1	深鉢	Ⅲ	胴部	黒色	○	○				
117		深鉢	Ⅲ	胴部	暗茶色	○	○				
118	E—1	深鉢	Ⅲ	胴部	暗茶色	○	○				外面ヨコ方向のヘラ研磨
119	A—5	浅鉢	Ⅵa	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラナデ状の調整
120		浅鉢	Ⅵa	口縁部	暗茶色	○	○				細い沈線がめぐる　外面にスス付着
121	C—2	深鉢	Ⅵb	口縁部	灰茶色	○	○				
122	D—1	深鉢	Ⅵb	口縁部	茶色	○	○				
123	E—1	深鉢	Ⅵb	口縁部	茶色	○	○				内側に沈線がない
124	A—3	深鉢	Ⅵb	口縁部	明茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
125	E—1	深鉢	Ⅳb	口縁部	明茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨　外面スス付着
126	C—2	深鉢	Ⅲa	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着　粗製
127	D—2	深鉢	Ⅵb	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
128	C—2	深鉢	Ⅵb	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨であるが粗製土器
129	C—2	深鉢	Ⅵc	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着
130	D—2	深鉢	Ⅵc	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
131		深鉢	Ⅵc	口縁部	暗茶色	○					内外面入念なヘラ研磨
132	C—1	深鉢	Ⅵ	頸部	暗茶色	○					外面にスス付着
133	D—1	深鉢	Ⅵ	頸部	茶褐色	○	○				外面にスス付着
134	C—3	深鉢	Ⅵ	頸部	暗茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
135	C—3	深鉢	Ⅵ	頸部	茶褐色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
136	D—3	深鉢	Ⅵ	頸部	暗茶色	○	○				外面にスス付着
137		浅鉢	Ⅴa	口縁部	黒褐色		○				
138		浅鉢	Ⅴa	口縁部	淡茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
139		浅鉢	Ⅴa	口縁部	明茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ
140		浅鉢	Ⅴa	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ

第20表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(5)

番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
141		浅鉢	Va	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ
142		浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ
143		浅鉢	Va	口縁部	淡黒色	○	○		○		ヨコ方向のヘラ研磨
144	A－3	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				
145	A－3	浅鉢	Va	胴　部	淡茶色	○	○				内外面に黒色斑がある　ヨコ方向のヘラ研磨
146	C－2	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				入念なヨコ方向のヘラ研磨
147	C－2	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				凹線文がめぐる
148	A－3	浅鉢	Va	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向の粗いヘラ研磨
149	A－3	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○		○		粗いヨコ方向のヘラ研磨　粗い凹線がめぐる
150	A－3	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○					内面は入念なヘラ研磨
151	A－2	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				ヨコ方向のナデ
152	A－3	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				粗いヘラ研磨
153	A－3	浅鉢	Va	口縁部	暗茶色	○	○				矢印方向の入念なヘラ研磨
154	A－3	浅鉢	Va	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向の入念なヘラ研磨
155	A－3	浅鉢	Va	口縁部	暗茶色	○	○				口縁部は浅い凹線
156		浅鉢	Va	胴　部	淡茶色	○	○				ヨコ方向の入念なヘラ研磨
157	A－3	浅鉢	Va	口縁部	茶　色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨　沈線化している
158	A－3	浅鉢	Va	口縁部	黒　色	○	○		○		ヨコ方向の入念なヘラ研磨
159		深鉢	Vb	口縁部	明茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
160	A－3	深鉢	Vb	口縁部	明茶色	○	○				ヨコ方向のナデ
161	A－3	深鉢	Vb	口縁部	淡茶色	○	○				精製土器
162		深鉢	Vb	口縁部	黒　色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
163		深鉢	Vb	頸　部	茶　色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
164	C－2	深鉢	Vb	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
165	A－3	深鉢	Vb	口縁部	茶　色	○	○				外面にスス付着
166	A－3	深鉢	Vb	口縁部	暗茶色	○	○				肩部に浅い凹線がめぐる
167	A－3	深鉢	Vb	口縁部	茶　色	○	○				口縁部はヨコ方向のナデ　大粒の砂粒含む
168		深鉢	VI	口縁部	淡茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
169		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○					内面ヨコ方向のヘラ研磨　外面はヨコ方向のナデ
170	C－2	深鉢	VI	口縁部	黒　色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨　外面スス付着
171	A－3	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
172		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○					内面ヨコ方向のヘラ研磨　外面はヨコナデ
173		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
174		深鉢	VI	口縁部	黒　色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
175		深鉢	VI	口縁部	茶　色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨

第21表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(6)

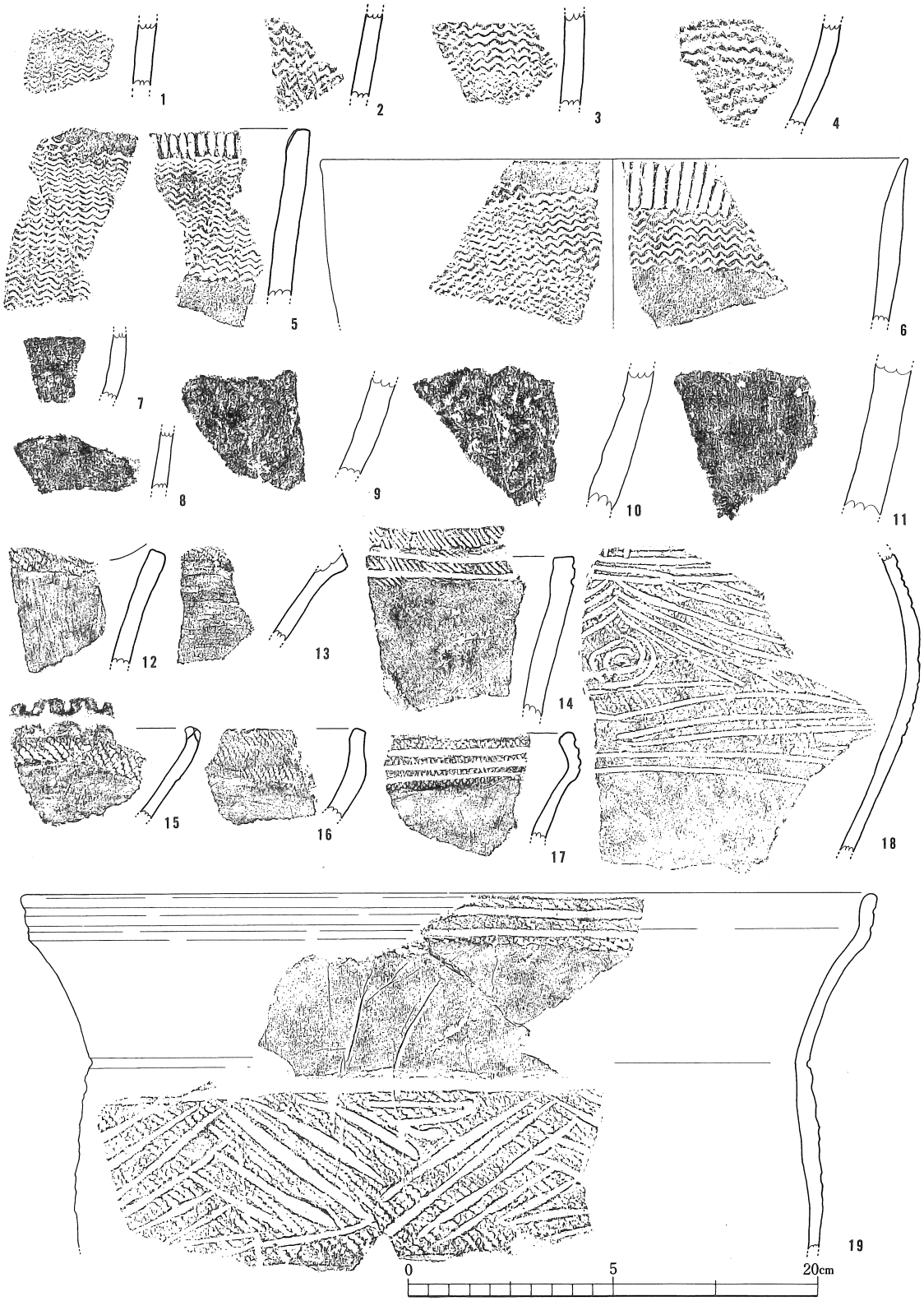
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
176		深鉢	VI	口縁部	淡黒色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨　外面はヨコ方向の条痕
177	A－3	深鉢	VI	口縁部	黒　色	○	○				内外面ヘラ研磨　外面にスス付着
178		浅鉢	VI	口縁部	黒　色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨であるが粗雑な仕上げ
179	B－5	深鉢	VI	口縁部	淡茶色	○					内面は磨滅　ヨコ方向のナデ
180	C－1	深鉢	VI	口縁部	明　茶	○					内外面ヨコ方向のナデ
181	A－3	浅鉢	VI	口縁部	色茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
182		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				内面はヨコ方向のヘラ研磨　外面は粗い仕上げ
183	C－2	深鉢？	VI	口縁部	暗茶色	○	○				
184	C－2	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○					
185	A－3	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				
186		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				
187	C－2	浅鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				
188		鉢	VI	口縁部	暗茶色	○					内面には炭化物　外面にはスス付着
189	C－2	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				
190	A－3	深鉢	VI	口縁部	淡茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨　精製土器
191	B－2	深鉢	VI	口縁部	明茶色	○					
192		深鉢	VI	口縁部	茶　色	○	○				内外面ヘラ研磨
193		深鉢	VI	口縁部	赤茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
194		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヘラ研磨
195		深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
196	C－2	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				内面はヨコ方向のヘラ研磨　外面は粗い仕上げ
197	A－3	深鉢	VI	口縁部	明茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ　外面にスス付着
198	A－3	深鉢	VI	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着
199	A－3	深鉢	VI	口縁部	黒　色	○	○				内面茶色　外面にスス付着
200	A－3	深鉢	VI	口縁部	茶　色	○	○				よく研磨された精製土器
201	A－2	浅鉢	VIIa	口縁部	赤茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
202	B－2	浅鉢	VIIa	口縁部	明茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
203	D－1	浅鉢	VIIa	口縁部	淡黒色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
204	C－1	浅鉢	VIIa	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
205		浅鉢	VIIa	口縁部	明茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
206	A－3	浅鉢	VIIa	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
207	A－3	浅鉢	VIIa	口縁部	黒　色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
208	B－1	浅鉢	VIIa	口縁部	明茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
209	B－2	浅鉢	VIIa	口縁部	茶　色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
210		浅鉢	VIIa	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨

第22表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(7)

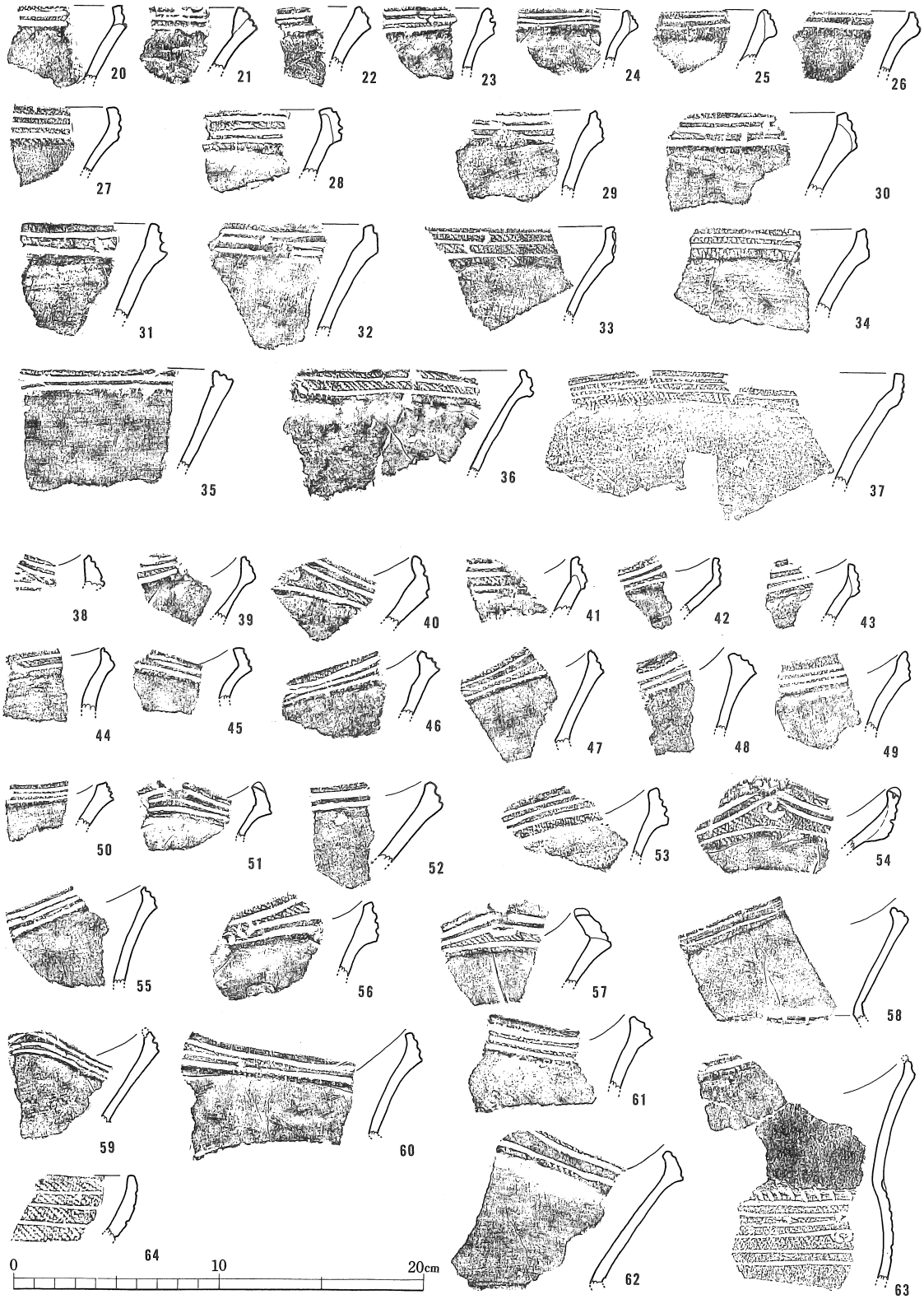
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
211	B－1	浅鉢	VIIa	口縁部	淡茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
212	A－3	浅鉢	VIIa	口縁部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
213	C－1	浅鉢	VIIa	口縁部	茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
214		浅鉢	V	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨　2条の凹線がめぐる
215		浅鉢	VIIa	肩部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
216		浅鉢	VIIa	肩部	茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
217	B－5	浅鉢	VIIa	口縁部	暗茶色	○	○				外面にスス付着　他に比較すると粗製
218		浅鉢	VIIa	肩部	黒色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
219	D－4	浅鉢	VIIa	口縁部	淡黒色	○	○				精製土器
220	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	赤茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ仕上げ
221	B－1	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				内面ヨコ方向のヘラ研磨
222	C－3	深鉢	VIIb	口縁部	茶褐色	○					内外面ヨコ方向のヘラナデ
223	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ仕上げ
224	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				内外面粗いヘラナデ
225		深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				内外面ヨコ方向の粗いヘラナデ
226	A－5	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のナデ　内面に小さな段が生じている
227		深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				外面にスス付着
228	C－1	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○		○		内外面ヨコ方向のナデ仕上げ
229	C－2	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のナデ
230	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のナデ　粘土の接合面から剝れている
231	D－2	深鉢	VIIb	口縁部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ
232	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラナデ
233	C－1	深鉢	VIIb	口縁部	明茶色	○	○		○		内外面ヨコ方向のヘラナデ
234	A－1	深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラナデ
235	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ
236	B－2	深鉢	VIIb	口縁部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ、外面にスス付着
237		深鉢	VIIb	口縁部	淡黒色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨　精製
238	C－2	深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○					内外面ヨコ方向のナデ
239	C－2	深鉢	VIIb	口縁部	茶色	○	○				ヨコ方向のナデ
240	C－2	深鉢	VIIb	口縁部	黒色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ仕上げ
241		深鉢		口縁部	茶色	○					内外面ヨコ方向のナデ
242		深鉢？	VIIa	肩部	薄茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
243		深鉢	VIIa	肩部	灰褐色	○	○				外面ヨコ方向のヘラ研磨　内面ヨコ方向の条痕
244	A－5	深鉢	VIIa	肩部	茶色	○	○				外面ヘラ研磨　内面炭化物付着
245	A－3	深鉢	VIIa	肩部	暗茶色	○	○				内外面ヨコ方向の粗いヘラナデ　外面に炭化物付着

第23表　　夏足原遺跡F地区出土土器観察表(8)

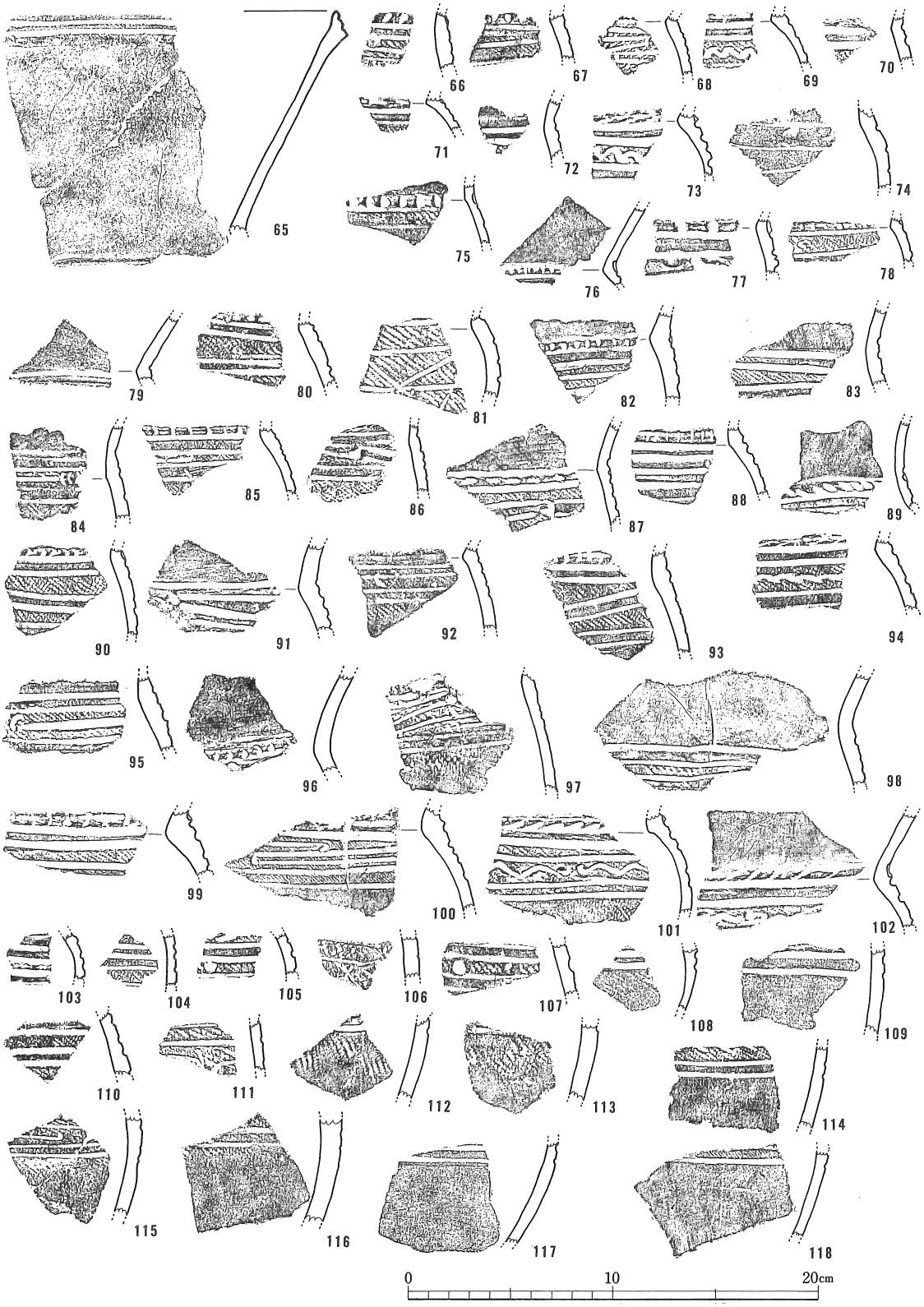
番号	出土地区	器種	分類	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
246		深鉢	Ⅷa	肩部	茶色	○					内外面ヨコ方向のヘラ研磨
247		深鉢	Ⅷ	肩部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のナデ仕上げ
248	C－1	深鉢	Ⅷa	肩部	暗茶色	○	○				内面に炭化物付着
249	A－3	深鉢	Ⅷa	肩部	色色	○					内外面ヨコ方向のナデ　外面にスス付着
250		深鉢	Ⅷa	肩部	茶色	○	○				内外面粗いヘラ研磨　外面にスス付着
251	C－2	深鉢	Ⅷa	肩部	暗茶色	○	○				外面にスス付着　内外面粗いヘラ研磨
252	C－2	深鉢	Ⅷa	肩部	暗茶色	○	○				
253	A－3	深鉢	Ⅷa	肩部	茶色	○	○				胴部にスス付着
254		深鉢	Ⅷa	肩部	暗茶色	○	○				
255		深鉢	Ⅷa	肩部	黒色	○	○				砂粒を多く含む　外面にススわずかに付着
256	A－3	深鉢	Ⅷa	肩部	淡茶色	○	○				
257		深鉢	Ⅷb	肩部	暗茶色	○	○				外面にスス付着
258		深鉢	Ⅷb	肩部	茶色	○	○				外面にスス付着　内面には炭化物付着
259		深鉢	Ⅷb	肩部	淡茶色	○	○				外面にスス付着
260		深鉢	Ⅷb	肩部	暗茶色	○	○				外面にスス付着　内面は明茶色
261	C－2	深鉢	Ⅷb	肩部	茶色	○	○				粗いヘラ研磨
262	A－3	深鉢	Ⅷh	肩部	淡茶色	○	○				内外面ヨコ方向のヘラ研磨
263		深鉢	Ⅷc	肩部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のナデ
264		深鉢	Ⅷb	肩部	暗茶色	○	○				ヨコ方向のナデ　粗いヘラ研磨
265	A－3	深鉢	Ⅷb	肩部	淡茶色	○	○				入念なヘラ研磨　精製土器
266		深鉢	Ⅷb	肩部	茶色	○	○				粗いヘラ研磨　内面はナデ仕上げ
267		深鉢	Ⅷb	肩部	暗茶色	○	○				内面は雑な仕上げ　大粒の砂粒含む
268	A－3 ⑭ C－1 ③			底部	明茶色茶色が主体を占める	全ての土器片に角閃石と長石が含まれており大型のものは砂粒が多い					小型の底部周辺まで入念なヘラ研磨をしているものが多い。大型のものは粗い仕上げが多い 内面は黒色に変化した土器が目立ち、中には炭化物が付着したのもある。 ○印内の数字は出土点数
↓	C－2 ④ A－5 ③										
	E－1 ④ D－5 ①										
	C－3 ①										
	D－1 ①										
	A－1 ①										
	B－1 ①										
	B－2 ②										
321											
293	A－5	深鉢		底部	茶色	○	○				
310	A－3	浅鉢		底部	茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ
312	C－1	深鉢		底部	茶色	○	○				ヨコ方向のナデ仕上げ
316	表採	深鉢		底部	明茶色	○	○				ヘラみがき
319	表採	深鉢		底部	明茶色	○	○				



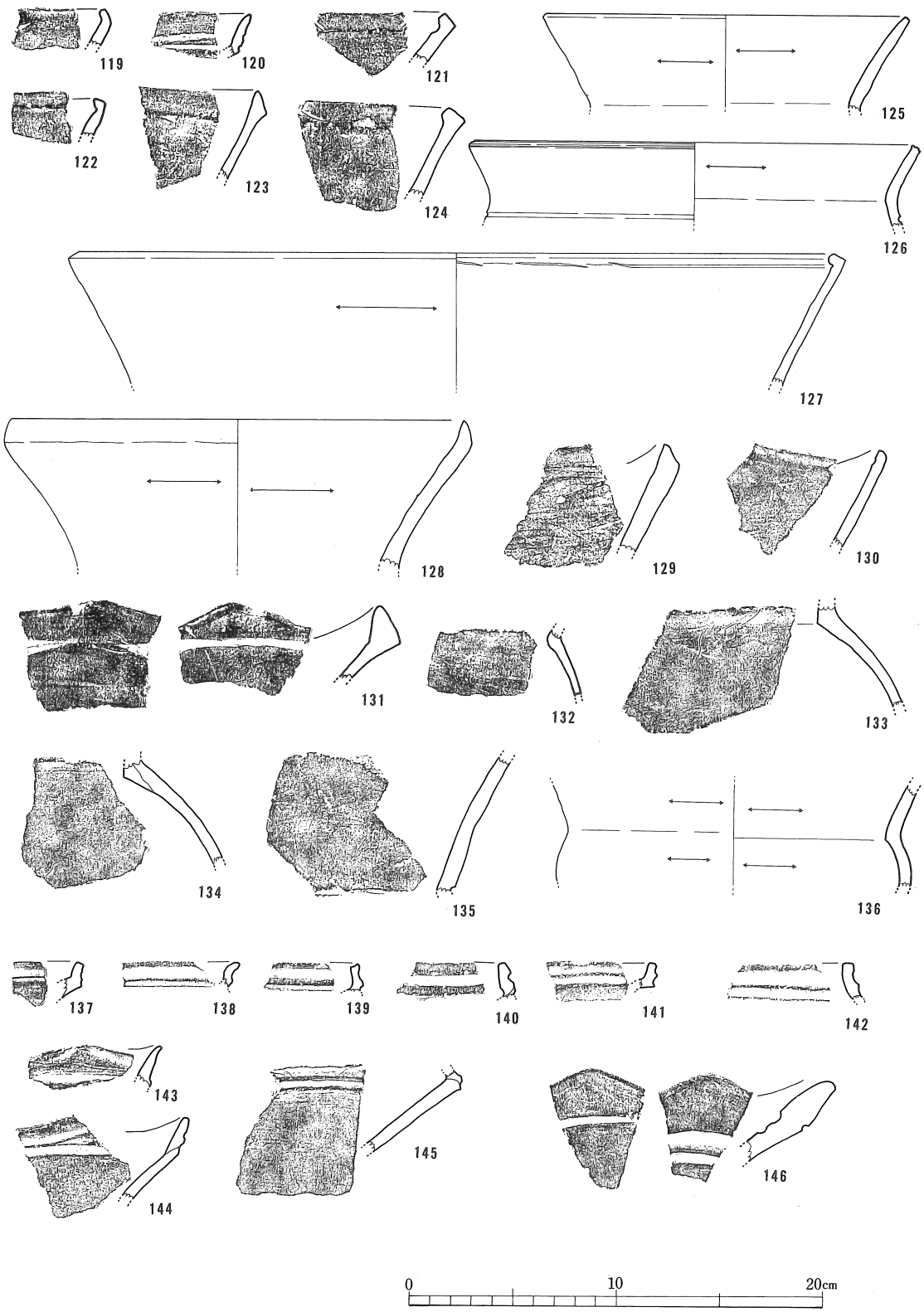
第50図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(1)



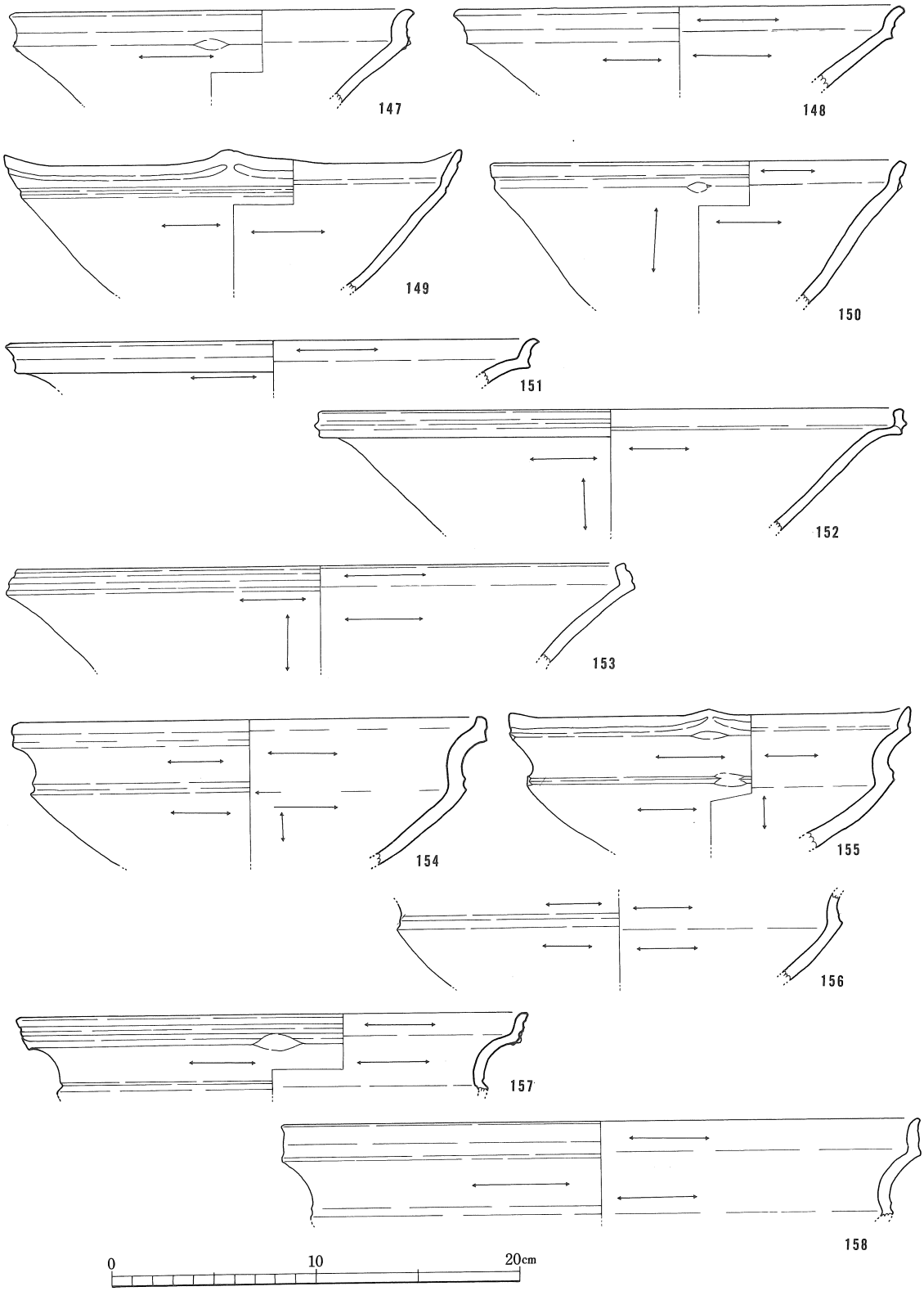
第51図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(2)



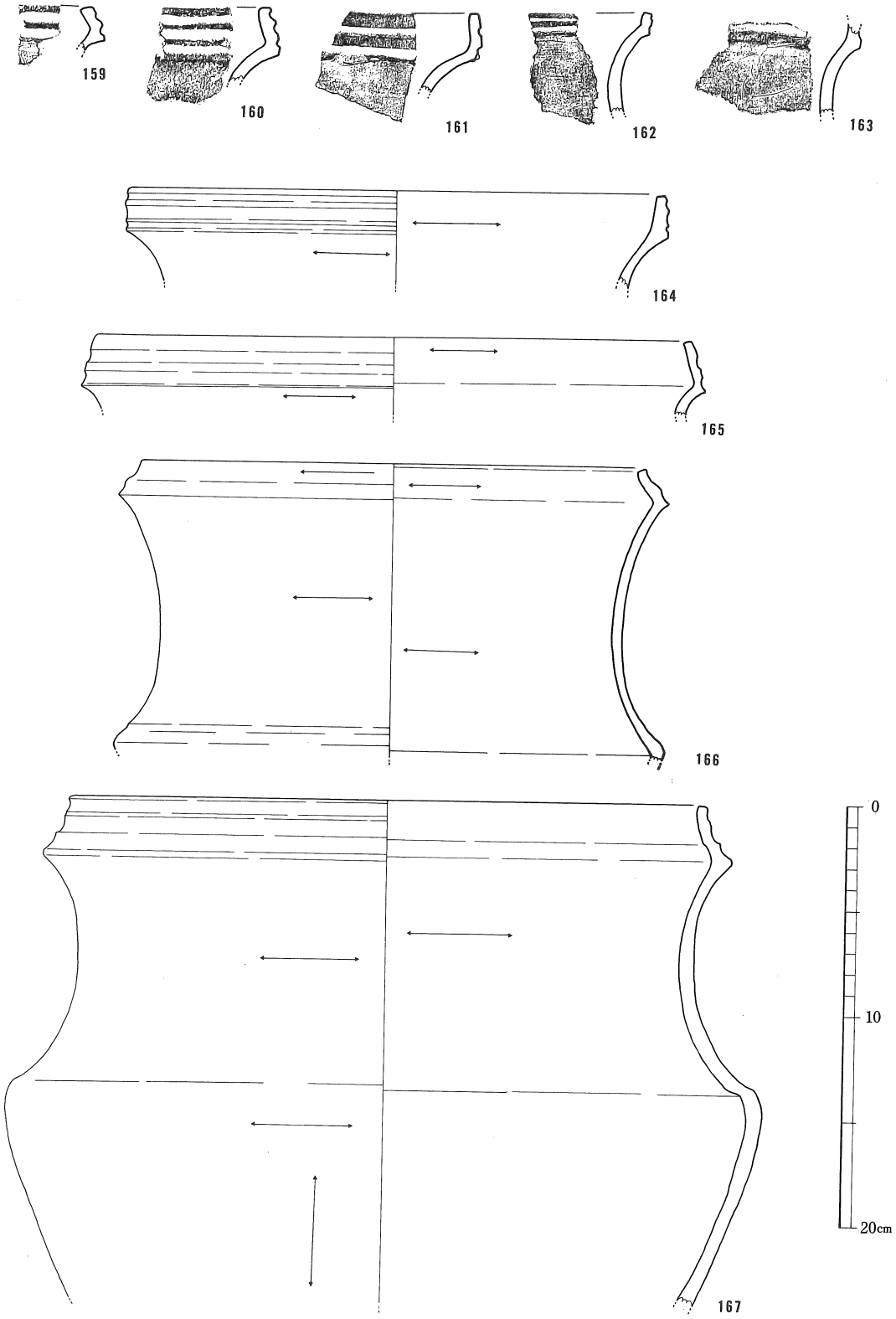
第52図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(3)



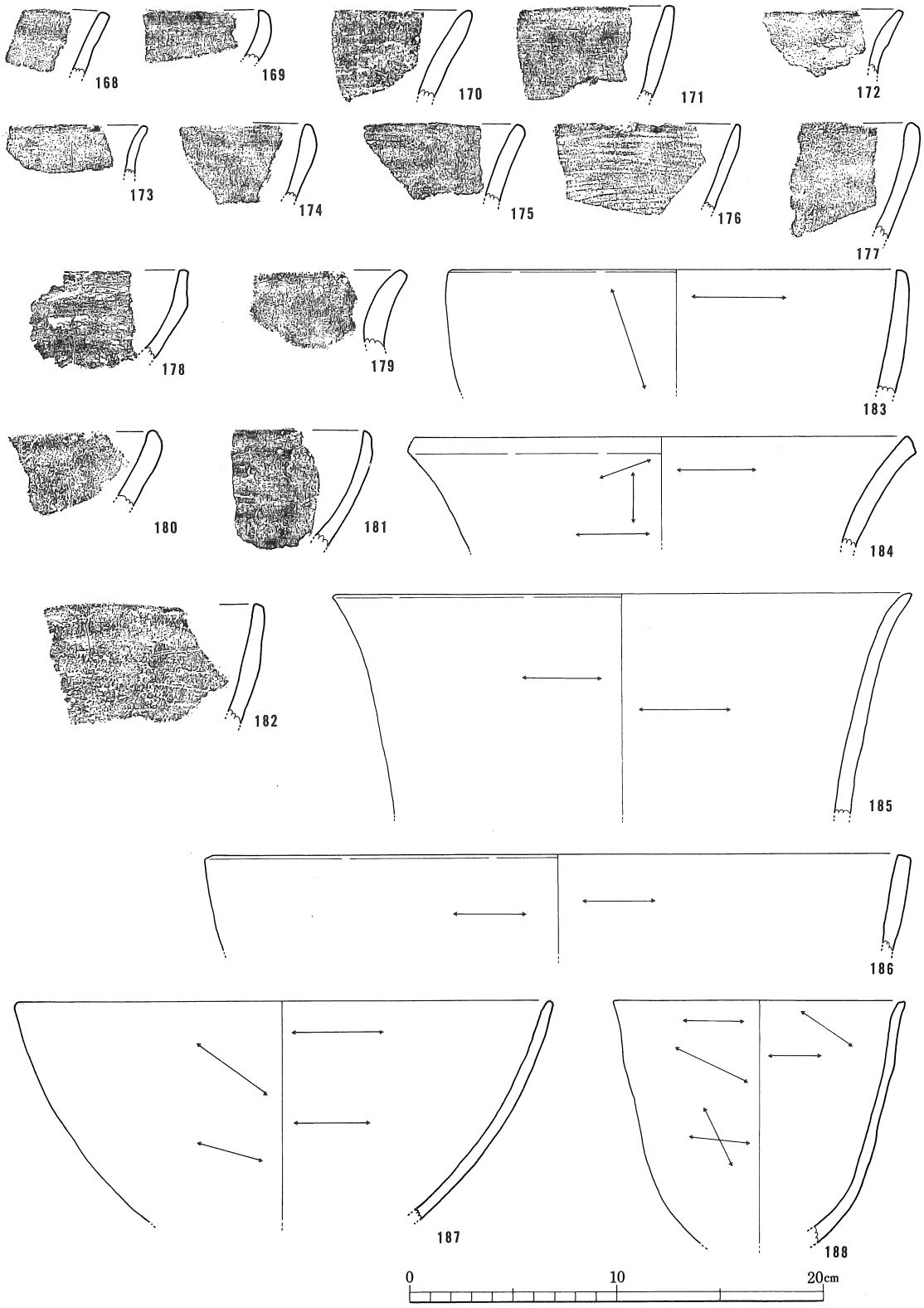
第53図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(4)



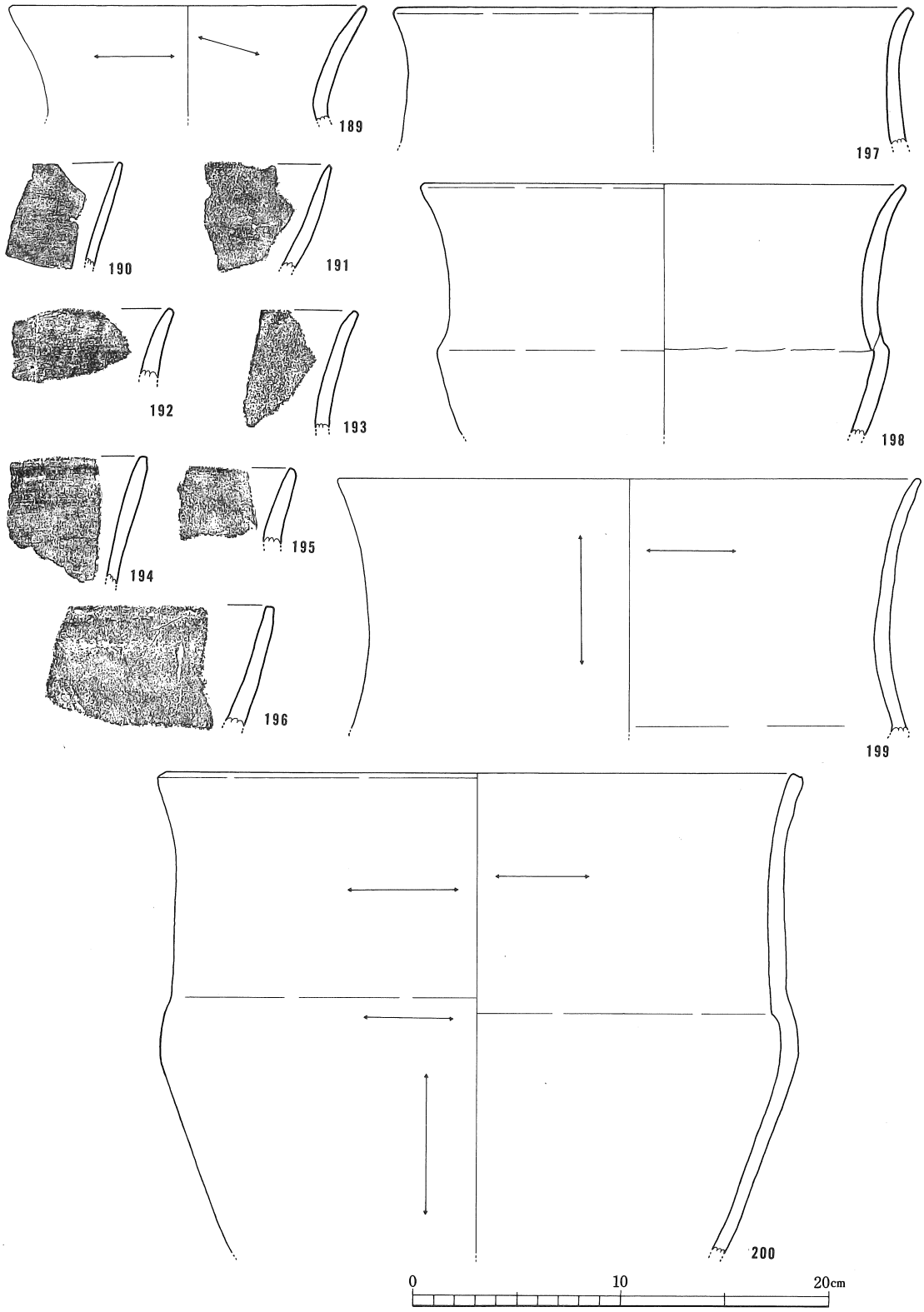
第54図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(5)



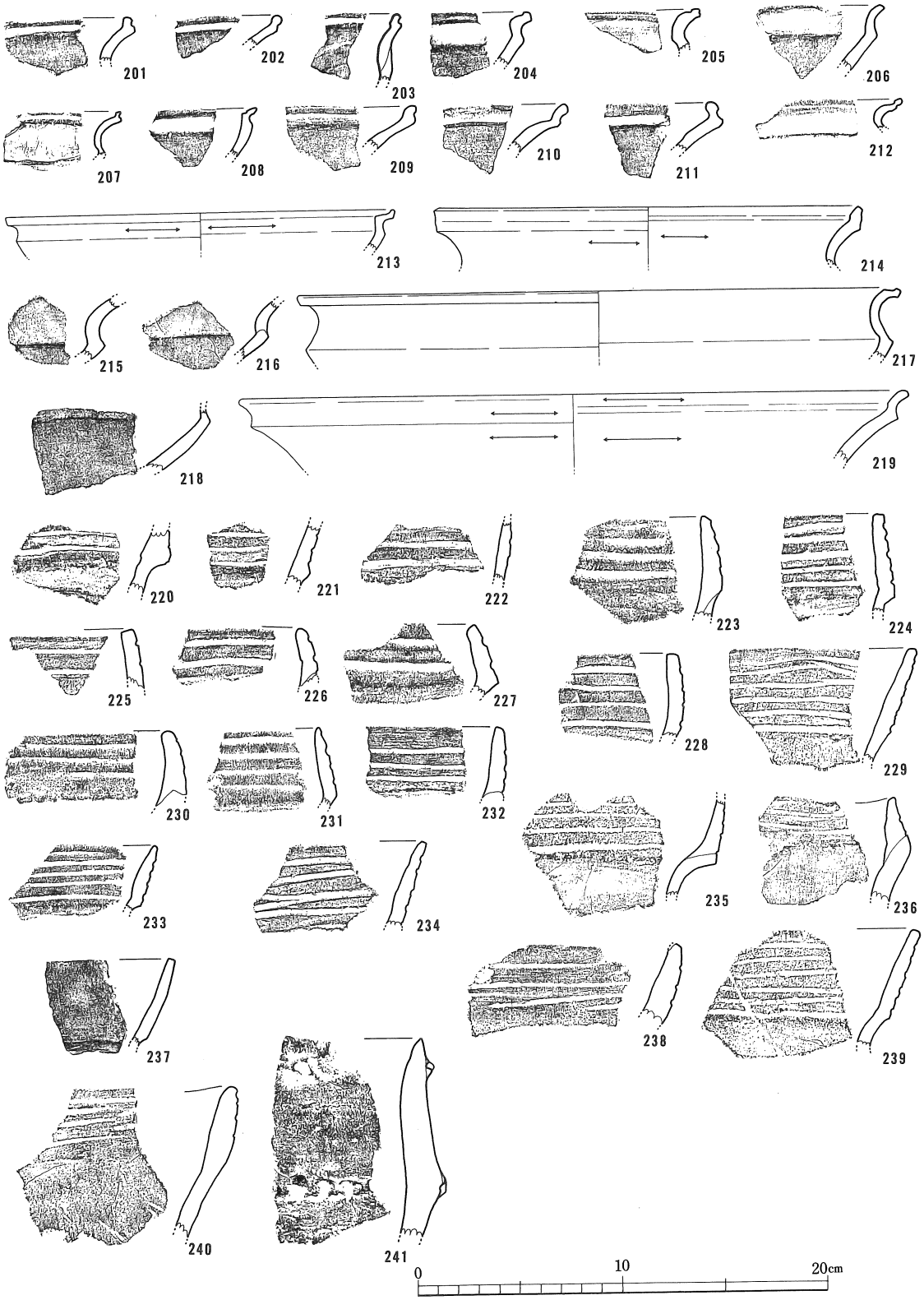
第55図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(6)



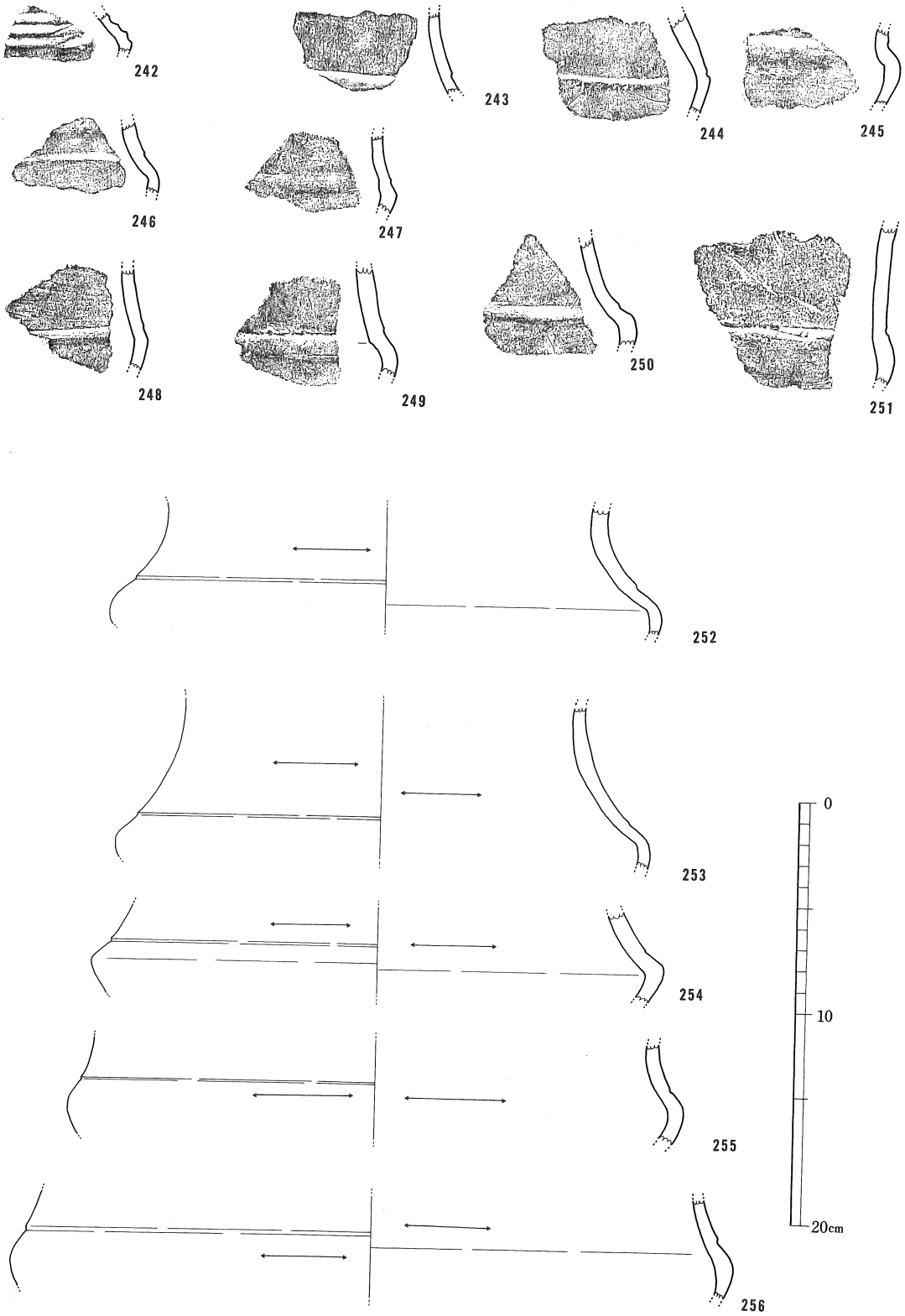
第56図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(7)



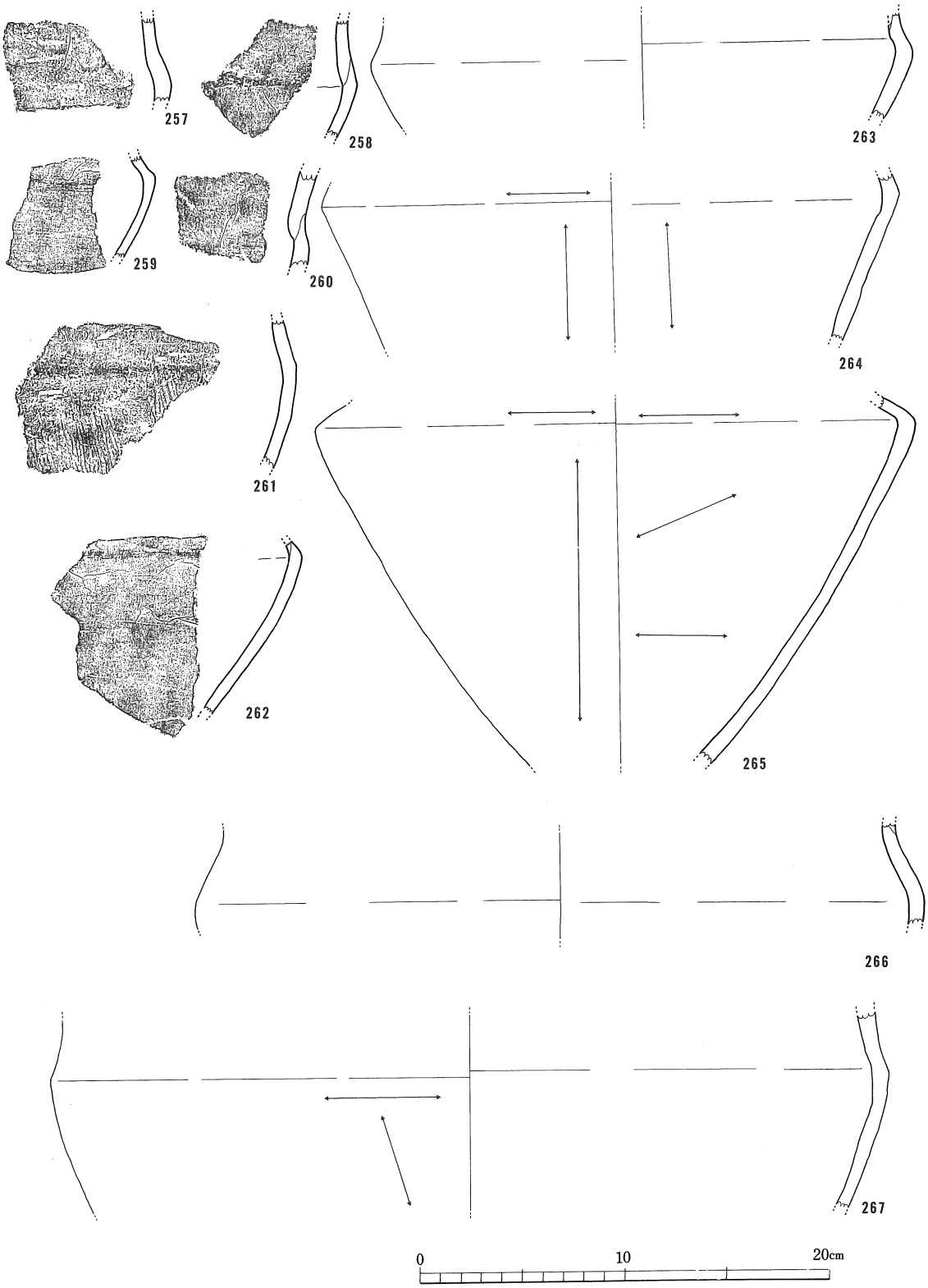
第57図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(8)



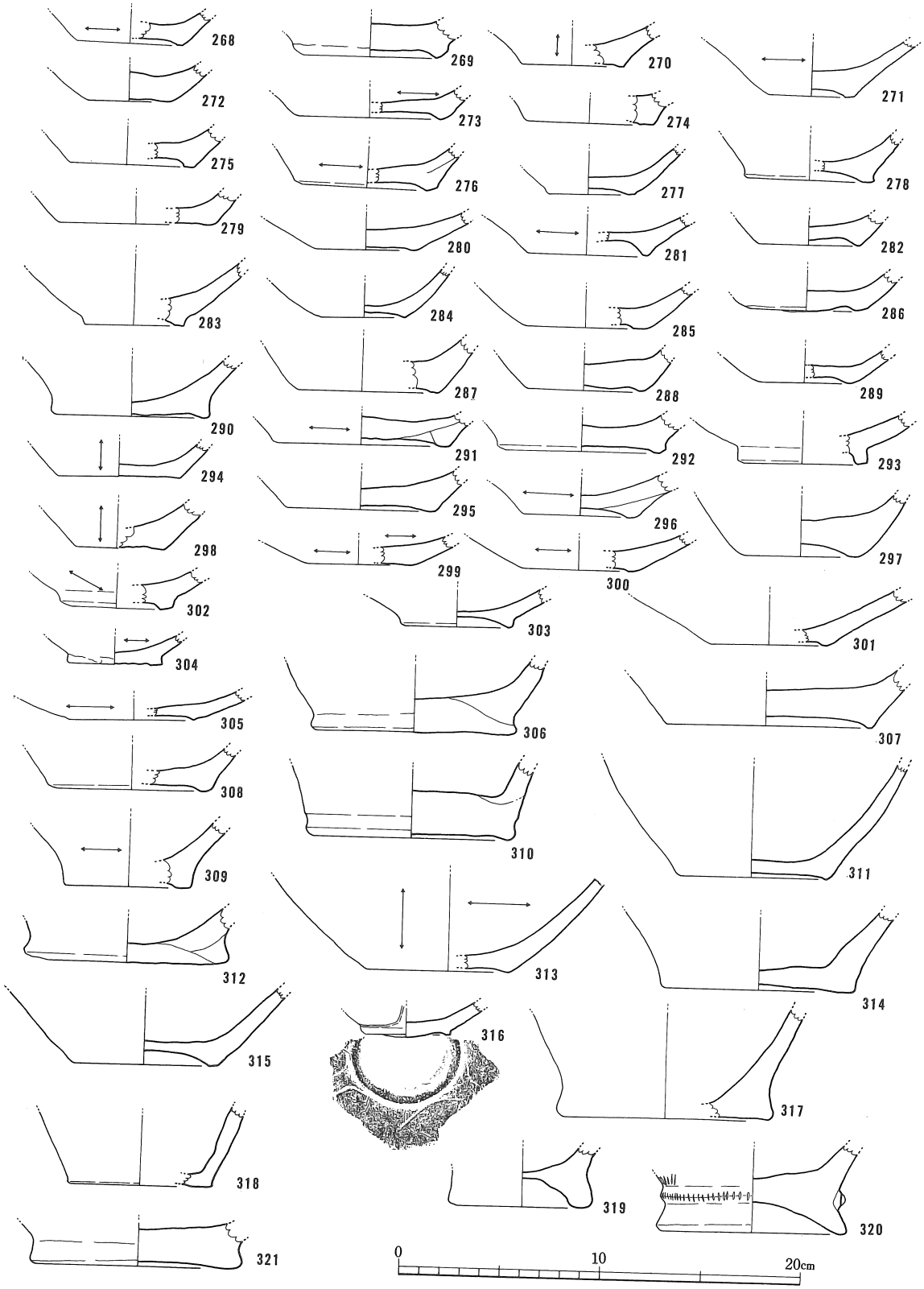
第58図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(9)



第59図　夏足原遺跡F地区　出土土器実測図(10)



第60図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(11)



第61図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土土器実測図(12)

口径が20cmに満たず、他の晩期の浅鉢形土器の口径が大きいのに対し特異である。

Ⅶb類　深鉢形土器の口縁部、あるいはその周辺の資料である。器面調整は横方向の篦撫で状で、色調は茶色を基調としたものが多い。器形は基本的にはⅤb類と同じで胴部が緩い稜を成して張り、外反する頸部の先端に屈曲して立つ口縁部がつく。しかし、Ⅴb類とは異なり、口縁部の屈曲部外面にめぐる沈線の数が増加し3本以上である。また、口縁部が229・233・234・235・238・239のように外反するものもある。

以上が、晩期の土器であるが、形態は後期末の影響が強い。口縁部の内傾する223・224・231などや、比較的新しい口縁部が外傾し幅の広い立ち上り部に6～7本の沈線がめぐるものまであり、量的には少ないが、晩期前半の資料が揃っている。なお大野原の晩期の遺跡では、北方約4kmの位置に宮地前遺跡がある。

Ⅷ類　頸部から胴部にかけての資料をⅧ類としたが、大部分がⅤb類・Ⅵ類・一部がⅦb類と考えられる。

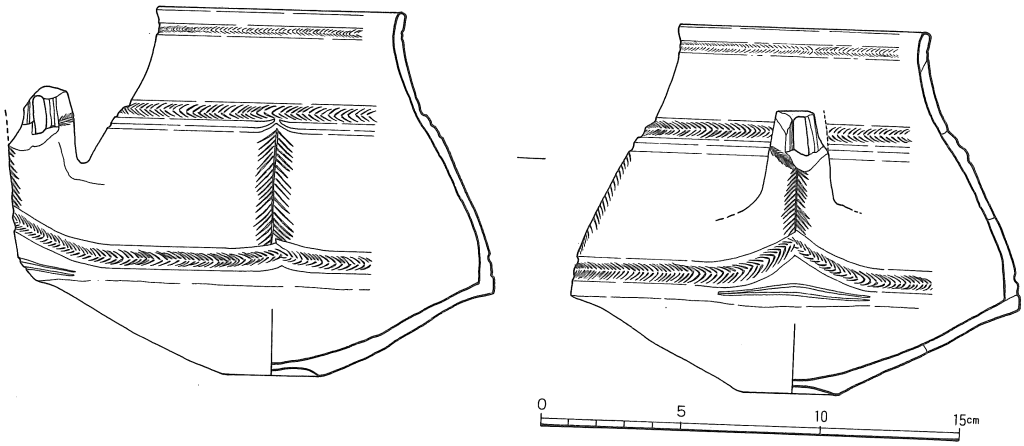
Ⅷa類　肩部に小さな段あるいは凹線を持つ深鉢形土器である。全てⅤb類の胴部である。251以外は器面を横方向に丁寧に篦研磨した精製土器である。

Ⅷb類　胴部が緩い稜を生じて屈曲する深鉢形土器の資料である。これも大部分は262・265などのように、よく研磨されており、Ⅴb類またはⅥ類の胴部と思われる。しかし粗い研磨のものはⅦb類である晩期の深鉢形土器と区別がつきにくい。

注口土器　A－3区の遺物集中部から他の土器に混って1点のみ注口土器が出土した。資料は貧弱ながら口縁部から底部まであり、一応全体の形状を知り得た。それによると、口縁部はやや外反し、胴部から底部にかけては鋭く屈曲する。底部は小さいが上げ底状となる。製作にあたっては幅2～3cmの粘土輪を積み、丁寧に光沢が出るほど器面を研磨し、薄く仕上げている。注口部は、個定するためか、2本の半截竹管状のものを軸としている痕跡がある。文様の羽状文は凹線の間に、先端の鋭い工具で、跳ねるように施文されている。色は茶褐色を呈する。

最後に、細かな時期区分は困難であったが、大量の底部が出土している。大部分が凹レンズ状の上げ底であり、縄文後期後半の西平式土器から晩期初頭までの特徴的な形態を呈している。しかし、この底部も他の土器片と同様、夏足原遺跡F地区で主体を占める後期末の御領式土器に含まれるのが大部分であろう。特に底部に凹線のめぐる310は、御領貝塚から同類のものが報告されている。また、316は、研磨された精製土器であるが、胴部から底部にかけて凹線による文様が施文されている。320は、底部に刻目突帯をめぐらせるものであり、縄文晩期末の土器と考えられる。

以上、夏足原遺跡F地区の調査では縄文後期末の御領式土器を中心に、その前後の土器が少量ながら加わることが判明した。



第62図　夏足原遺跡F地区出土注口土器実測図

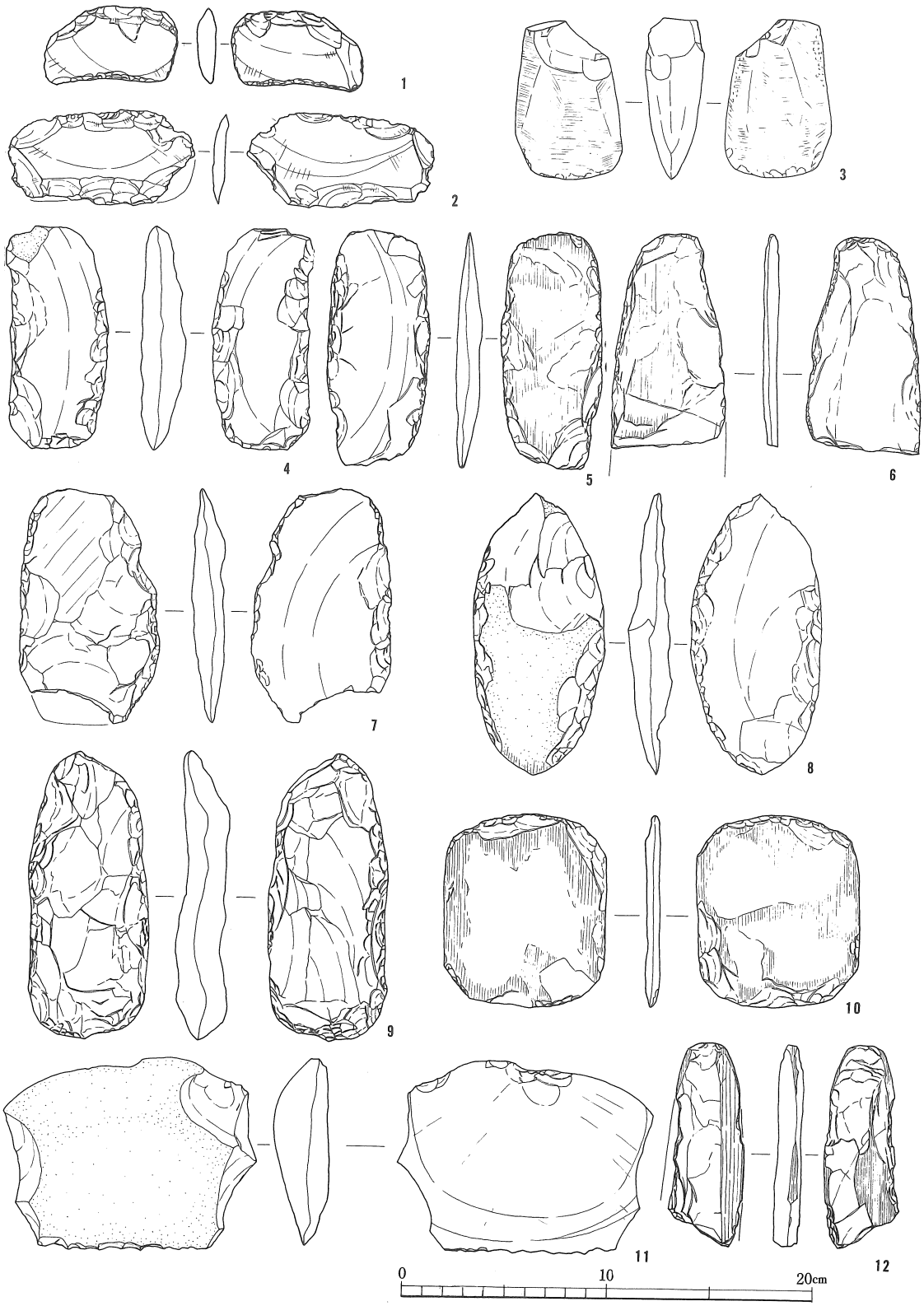
(2) 石　　器

夏足原遺跡F地区の調査で得た石器の資料は礫を除き約50点ある。このため、ここでは所属時期・表採地区の不明な資料は参考程度にとどめ、F地区の発掘資料である縄文後期後半から晩期前半に伴う石器について報告する。

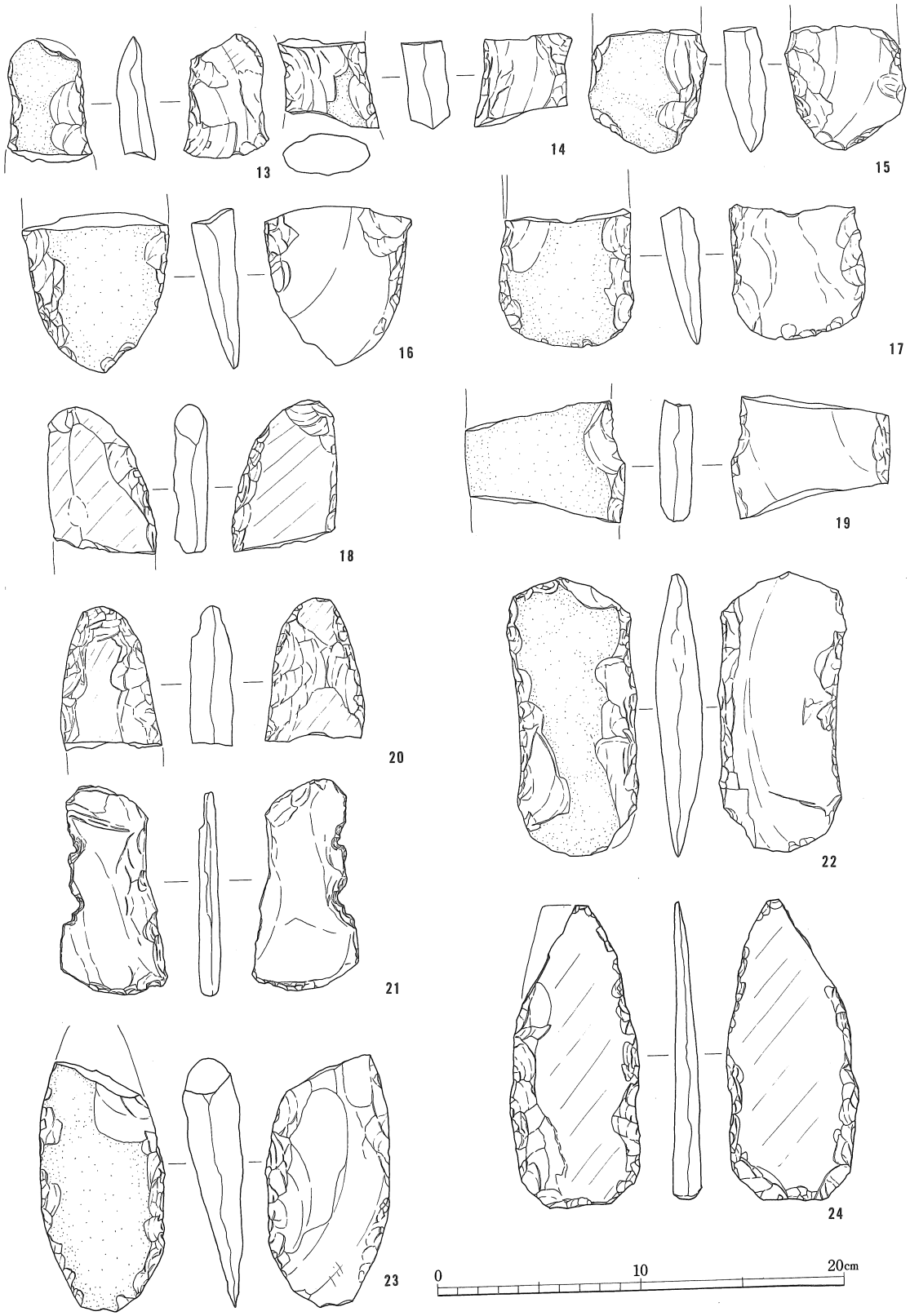
F地区出土の石器の内訳は横刃型のスクレーパーと思われるもの2点、磨製石斧2点、礫器1点で他の52点は扁平打製石斧である。全体の比率をみると、約91.3%が扁平打製石斧である。またこの扁平打製石斧を石材からみると、玢岩・安山岩・結晶片岩が使用されており、安山岩はさらに大野町片島や鎧ケ岳系などで産出する暗緑色をした安山岩（7・18・20・24）と、サヌカイト風の黒色をした安山岩などさまざまなものがみられる。しかし、最も多く使用されているのは玢岩と安山岩である。玢岩は、祖母山系を源流とする神原川、奥岳川の川原に転礫で産出される。このため、これらの河川から下流の大野川本流の川原にも転礫が観察される。色は白緑色をしており、他との区別は容易である。夏足原遺跡F地区出土の52点の扁平打製石斧のうち、36.5%にあたる19点が玢岩製である。これはF地区の南側に深く入り込んだ谷を下れば、大野川本流の川原に達するため、その入手が容易であったためであろう。また転礫を利用するため、玢岩製の全ての扁平打製石斧には磨滅による自然面が残されており、他の石材が節理による扁平な素材を利用しているのとは対象的である。また、暗緑色をした安山岩も同量の19点が出土しているが、これも鎧ケ岳山系や片島の代三五山系に産出するもので入手の方法としては、比較的容易であったためであろう。

第24表　　夏足原遺跡F地区出土石器観察表

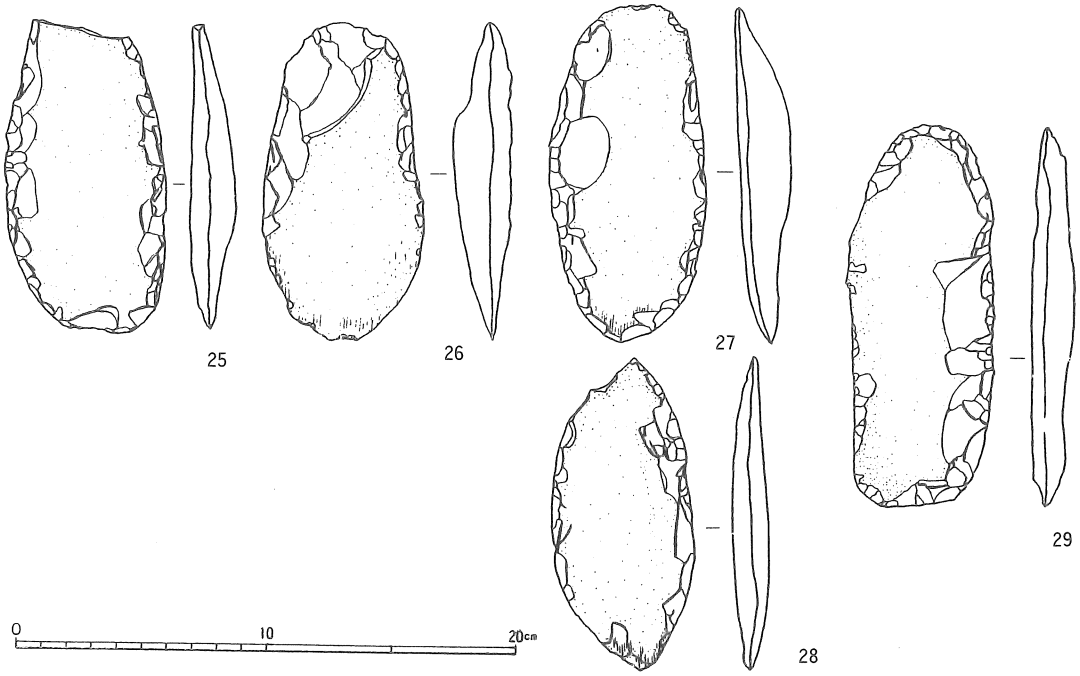
番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	石質	完形品	備考	出土地区
1	掻器	6.3	3.5	0.9	安山岩	○	黒色をしたサヌカイト製である	A－3
2	掻器？	9.0	4.5	0.5	安山岩	○	扁平打製石斧と同質の石材である	B－2
3	磨製石斧	7.7+α	5.1	2.8	安山岩		基部が欠損する。側線に敲打痕が残る。	D－5
4	扁平打製石斧	11.0	4.6	2.0	玢岩	○		A－5
5	扁平打製石斧	11.5	4.7	1.1	安山岩	○	黒色のサヌカイト質で、片面に従方向の擦痕がある	A－3
6	扁平打製石斧	10.4+α	5.5+α	0.8	結晶片岩		片面に縦方向の擦痕がある	A－3
7	扁平打製石斧	11.5	6.6	1.5	安山岩	○	刃部が欠損するが計測は可能である	F－3
8	扁平打製石斧	13.7	6.4	2.0	玢岩	○	刃部に使用痕が残る	C－2
9	扁平打製石斧	14.0	5.7	2.0		○	分厚い石斧で、刃部も純い	A－5
10	扁平打製石斧	9.2	7.8	0.7	緑色片岩	○	節理面による剥片の両面及び側縁がみがかれている	A－3
11	礫器	9.2	11.6	2.6	玢岩	○	刃部に使用痕と思われる。刃コボレがある。	D－2
12	磨製石斧	9.9+α	3.5+α	1.2+α	結晶片岩		一部に研磨部が残るが大部分が剥落している	A－5
13	扁平打製石斧	5.9+α	4.3+α	1.4	玢岩			B－5
14	扁平打製石斧	4.2+α	4.0+α	2.0+α	玢岩		分銅形か？	B－5
15	扁平打製石斧	6.0+α	5.6+α	2.	玢岩			B－5
16	扁平打製石斧	7.8+α	7.2+α	2.0	玢岩			C－5
17	扁平打製石斧	6.8+α	6.4－	1.8	花崗岩質			A－5
18	扁平打製石斧	7.0+α	5.0+α	1.6+α	安山岩			D－3
19	扁平打製石斧	5.8+α	7.8	1.6	砂岩？			B－5
20	扁平打製石斧	6.8+α	5.0	2.0	安山岩			B－1
21	扁平打製石斧	10.4	5.2	1.0	結晶片岩	○	刃部は鈍い	E－1
22	扁平打製石斧	13.5	5.7	2.2	玢岩	○	使用のためか自然面に光沢がある	A－5
23	扁平打製石斧	12.2+α	6.0	2.6	玢岩			B－2
24	扁平打製石斧	14.6	6.2	1.5	安山岩	○	基部が一部欠損するが計測可能である	A－1
25	扁平打製石斧	12.1+α	6.3	1.8	玢岩		基部が欠損する	E－2
26	扁平打製石斧	12.6	6.3	2.2	玢岩	○	刃部に使用痕がある	C－2
27	扁平打製石斧	13.2	6.0	2.0	玢岩	○	刃部に使用痕がある	C－2
28	扁平打製石斧	12.6	5.1	1.5	玢岩	○	刃部に使用痕がある	E－1
29	扁平打製石斧	15.0	5.8	1.6	玢岩	○		B－2



第63図　夏足原遺跡Ｆ地区　出土石器実測図(1)



第64図　夏足原遺跡F地区　出土石器実測図(2)



第65図　　夏足原遺跡F地区出土石器実測図(3)

第25表　夏足原遺跡F地区石器組成表

名　　称	スクレーパー	磨製石斧	礫　　器	扁平打製石斧
点　　数	2	2	1	52
百 分 率	3.5%	3.5%	1.7%	91.3%

第26表　夏足原遺跡F地区出土扁平打製石斧の石材表

石　　質	玢　　岩	安 山 岩	結晶片岩	そ の 他
点　　数	19	19	11	3
百 分 率	36.5%	36.5%	21.2%	5.8%

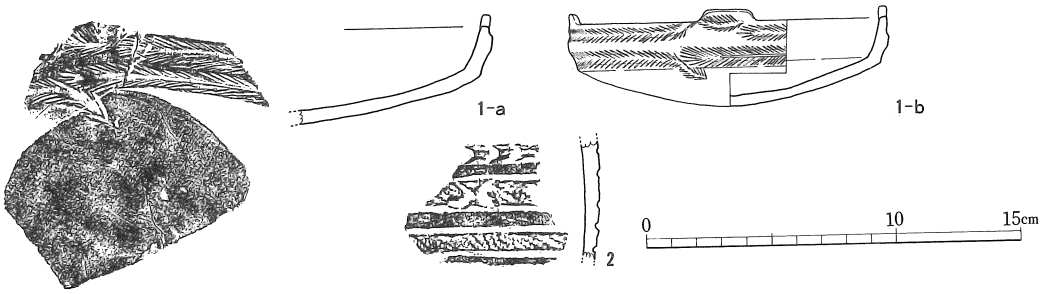
第５節　夏足原遺跡Ｍ地区出土の縄文土器

第66図の資料は昭和53年度のＭ地区の調査の際、弥生後期の住居跡を調査中に出土したものである。

１は、口縁部を凹線文と羽状文で飾る浅鉢形土器で、全面を横方向に入念に研磨して仕上げている。破片は、口径に比較して体部が大きく、口径どうりに復原すれば矛盾が生じる。それを調整しながら復原すると１－ｂのように丸底になる。

２は、西平式土器か磨消縄文系三万田式土器の深鉢の胴部の破片である。外面はＸ字状の文様がみられ、直線的な磨消縄文で飾られる。

この２点の資料は、Ｆ地区とほぼ同時期であり、特に１の浅鉢の羽状文はＦ地区出土の注口土器のそれに類似している。



第66図　　夏足原遺跡Ｍ地区出土縄文土器実測図及び復原想定図

第６節　小　　結

夏足原遺跡の調査は、４年間で台地の各所13地点を試掘した。その大半が２ｍ×２ｍの範囲の試掘調査であったが、台地上の遺構・遺物の遺存状況の一端を知ることができた。それによると、台地の東部・西部に弥生時代後期の集落、中央部に縄文早・後・晩期の包含層という状態であった。

＜土器について＞

特にＦ地区の調査では縄文後期末を中心に後期後半から晩期前半にかけての良好な包含層を発掘することができた。土器はこれまでの研究成果をもとに時期別または器形および部位別に分類し、説明したが、ここで再度、分類と時期及び土器形式名を照合すると以下のようになる。

Ⅰ類　縄文早期前半　早水台式土器

Ⅱ類　縄文後期中葉　北久根山式土器・片粕式土器

Ⅲ類　縄文後期後葉　西平式土器・磨消縄文系三万田式土器

Ⅳ類　縄文後期後葉　羽状文系三万田式土器

Ⅴ類　縄文後期末葉　御領式土器・鳥居原式土器

Ⅵ類　縄文後期後半　大部分が御領式土器に伴う深鉢形土器、一部Ⅱ類に伴う深鉢形土器か？

Ⅶ類　縄文晩期前半

Ⅷ類　縄文後期末から晩期前半　大部分が御領式土器の深鉢形土器の肩部。一部晩期の深鉢と思われる。

以上の土器のうち、各類別の出土数を口縁部でみると 以下のような表になる。なお、Ⅷ類の胴部、及び底部は、器種の基準を口縁部におくため省いた。またⅠ類の押型文については、縄文後期とは大きく時期が離れるため、ここでは扱わない。

第27表　　夏足原遺跡Ｆ地区出土分類別構成表

分類	Ⅱ		Ⅲ			Ⅳ			Ⅴ			Ⅵ			Ⅶ	
			a	b	c	a	b	c	a	b					a	b
器種	浅鉢	深鉢	水平口縁深鉢	波状口縁深鉢	浅鉢	浅鉢	水平口縁深鉢	波状口縁深鉢	浅鉢鉢	深鉢	不明	深鉢	鉢	浅鉢	浅鉢	深鉢
数量	2	3	29	28	2	2	8	4	19	9	5	55	1	2	23	25
計	5		59			14			33			58			48	
百分率	2.3%		27.2%			6.4%			15.2%			26.7%			22.2%	

以上のうち、同時期と思われる縄文後期末のⅤ・Ⅵ類で41.9%を占め、百分率からみても約半数を占める。次にこの主体を占める時期の土器組成である浅鉢・鉢、Ⅴ類の深鉢、Ⅵ類の深鉢の比率は以下のようになる。

第28表　　夏足原遺跡Ｆ地区出土縄文後期末土器組成表

分　類	Ⅴ			Ⅵ		
	a	b				
器　形	浅鉢および鉢	深　鉢	不　明	深　鉢	鉢	浅　鉢
数　量	19	9	5	55	1	2
百分率	20.97%	9.89%	5.49%	60.53%	1 %	2.12%

この比率を、鉢および浅鉢対深鉢でみると、前者19点、後者64点で、浅鉢および鉢形土器は約24%を占める。これは熊本県の縄文後期末の御領貝塚、滋賀県の晩期の遺跡である滋賀里遺跡などで

算出された浅鉢が約24.3%という結果とほぼ同じであり、深鉢も70.4%で、やはりほぼ同じ比率である。[註1] しかし、後期後葉の駒方C遺跡の浅鉢形土器の比率が約10%に比較すれば、かなりの増加であり、注目される。

<石器について>

石皿や磨石などに使われている安山岩や用途不明の小礫を除く、石器や剝片の出土量は 108点である。石材もチャート・黒曜石・玢岩・安山岩など多種である。下表はその一覧表である。

第29表　　夏足原遺跡F地区出土石器石材別一覧表

石材石	流紋岩	姫島産黒曜石	腰岳産黒曜石	安山岩サヌカイト質	チャート	玢岩	結晶片岩	安山岩	計
点数	3	4	6	8	4	29	22	32	108
百分率	2.8	3.7	5.5	7.4	3.7	26.8	20.4	29.6	100%

最も多く出土したのは、玢岩・結晶片岩・安山岩など、扁平打製石斧の材料となる石材で、土器も縄文後期後半が圧倒的に多いことからも肯定される。また、チャートはE－1区、E－2区の下部からの出土品が3点であり、おそらく縄文時代早期に属するものであろう。流紋岩は、大野川流域で先土器時代の石材として利用され、縄文時代にはほとんど使わない。F地区から出土した3点も、先土器時代のものと思われる。

さて、大量に出土した扁平打製石斧であるが、その9割を占める石材である玢岩・安山岩・結晶片岩をみるとそれぞれ製品及び製品の破片、製作時にできる小さな破片がある。下表はその分類表であるが、製品量に比較すると刃部調整などの際に生じる小さな破片が極めて少ない。おそらく、石材の産出地で製品化し、集落へ持ち帰ったものであろう。

第30表　　夏足原遺跡F地区出土扁平打製石斧石材別の組成表

名称	玢岩			結晶片岩			安山岩		
分類	製品又は製品の破片	不明	破片	製品又は製品の破片	不明	破片	製品又は製品の破片	不明	破片
点数	19	2	8	11	6	5	19	6	7
計	29			22			32		
百分率	34.9			26.5			38.6		

以上が、夏足原遺跡F地区の成果であるが試掘調査という性格上、広範囲にわたり、小面積というものであった。このため、遺物の取り上げについては十分といえるものではなかった。しかし、主体となった縄文後期末の遺物は、これまで東九州の縄文文化研究で資料の不十分な時期を埋める良好なものであった。

註1　坪井清足「御領貝塚の発掘調査」　城南町史　昭和40年　によれば、浅鉢23.4%で深鉢75.7%であった。また、夏足原遺跡Ⅵ類の深鉢が全体の60%を占め、御領貝塚でも同類の土器が全体の45%を占める。このことは比率の違いはあるが、両遺跡の深鉢形土器の主体をなすということで共通している。

第4章　大野原台地の先史遺跡

第1節　近中遺跡出土の先土器時代遺物

1. 遺跡の概況

遺跡は大野原台地の西端部の一角にあって、西は大野川の一支流酒井寺川、東は小鹿谷に挾まれる標高240ｍ前後の小台地に立地する。遺跡の北300ｍほどの台地上には、大野原台地最大の弥生時代後期～古墳時代前期の集落跡である二本木遺跡が位置しており、周辺には先土器時代から古墳時代前期にかけての遺跡が多い。

遺跡は昭和50年に畑地帯総合土地改良事業に先立つて試掘調査を行なったものである。試掘調査によって、遺跡の北側（Ａ地区）で縄文時代後期の包含層と弥生時代中期の竪穴式住居跡、南側（Ｂ地区）で先土器時代包含層を検出した。Ｂ地区は南西部に緩く傾斜しており、当初２ｍ×２ｍのグリットを設定した後、遺物を検出した部分を拡張してトレンチとした。

2. 出土層位

Ａ地区では表土（耕作土・Ⅰ層）の下部に一部弥生中期の包含層、やや広い範囲に縄文後期の包含層（Ⅱ層）があり、その下にローム層とつづく。しかしＢ地区ではⅡ層の包含層はなく、表土の下部は後期旧石器の包含層であるローム層（黄色火山灰土層）となっている。Ｂ地区での遺物出土レベルは、ほぼ同一面上であり、一括して同一文化層のものと考えられる。

3. 遺物

1）削器（第68図１）

幅広の剥片を利用した削器の一種である。加工は剥片の末端部に主要剥離面側から刺突部を作り出すようにノッチを二ケ所形成している。ノッチ部は Concave-scraper としての機能をもっているものと思われ、あわせて刺突具としても使用されたものであろう。

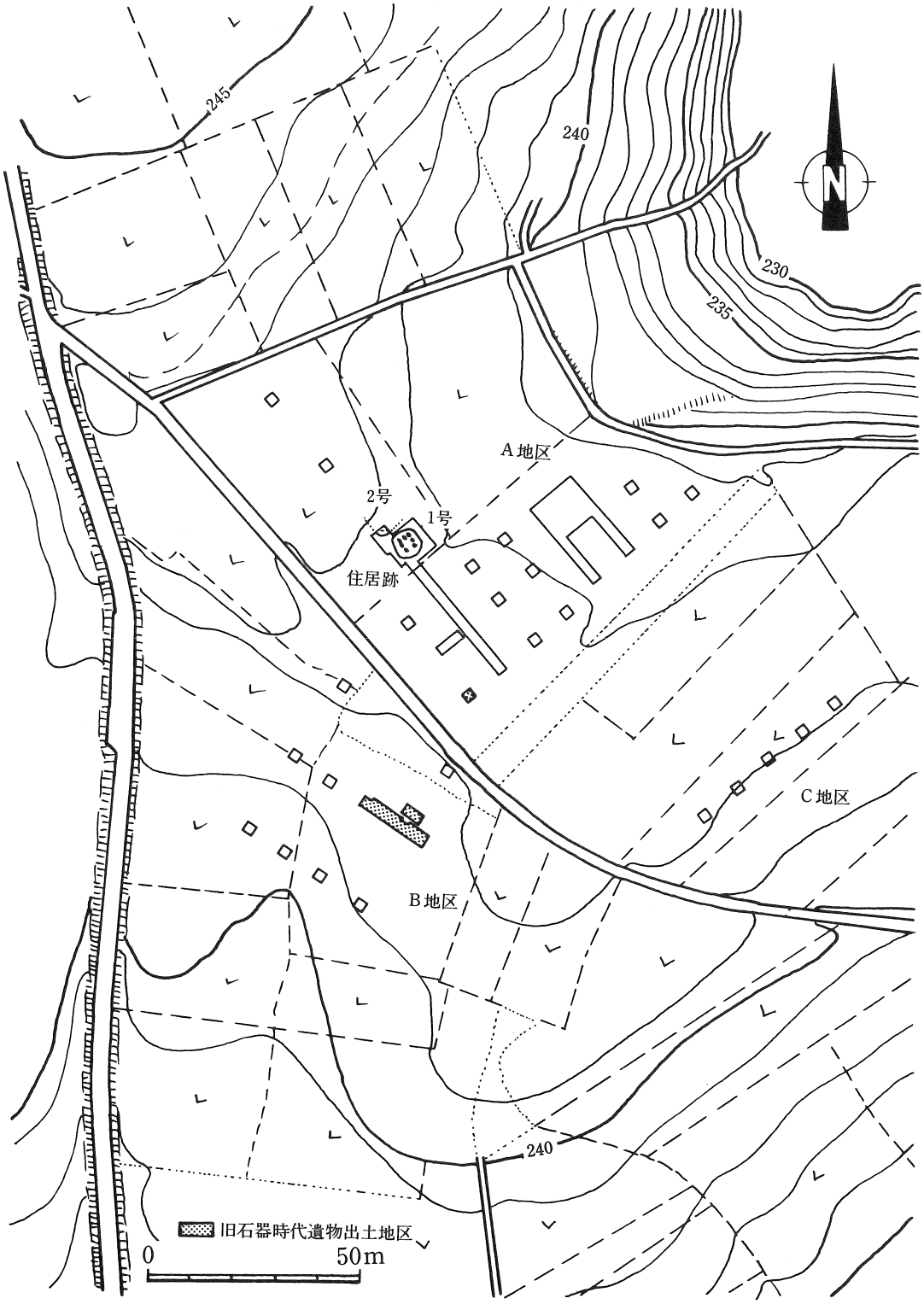
2）使用痕のある剥片（第68図２～５）

剥片の縁辺に利用痕とみられる微細な刃こぼれをもつ剥片類である。２は鋭い一側辺に背面側と主要剥離面側の両方から錯交状の微細な剥離面がみられる。３は突出部、４は直線状、５は凹湾部にそれぞれ使用痕とみられる細かい剥離が観察される。

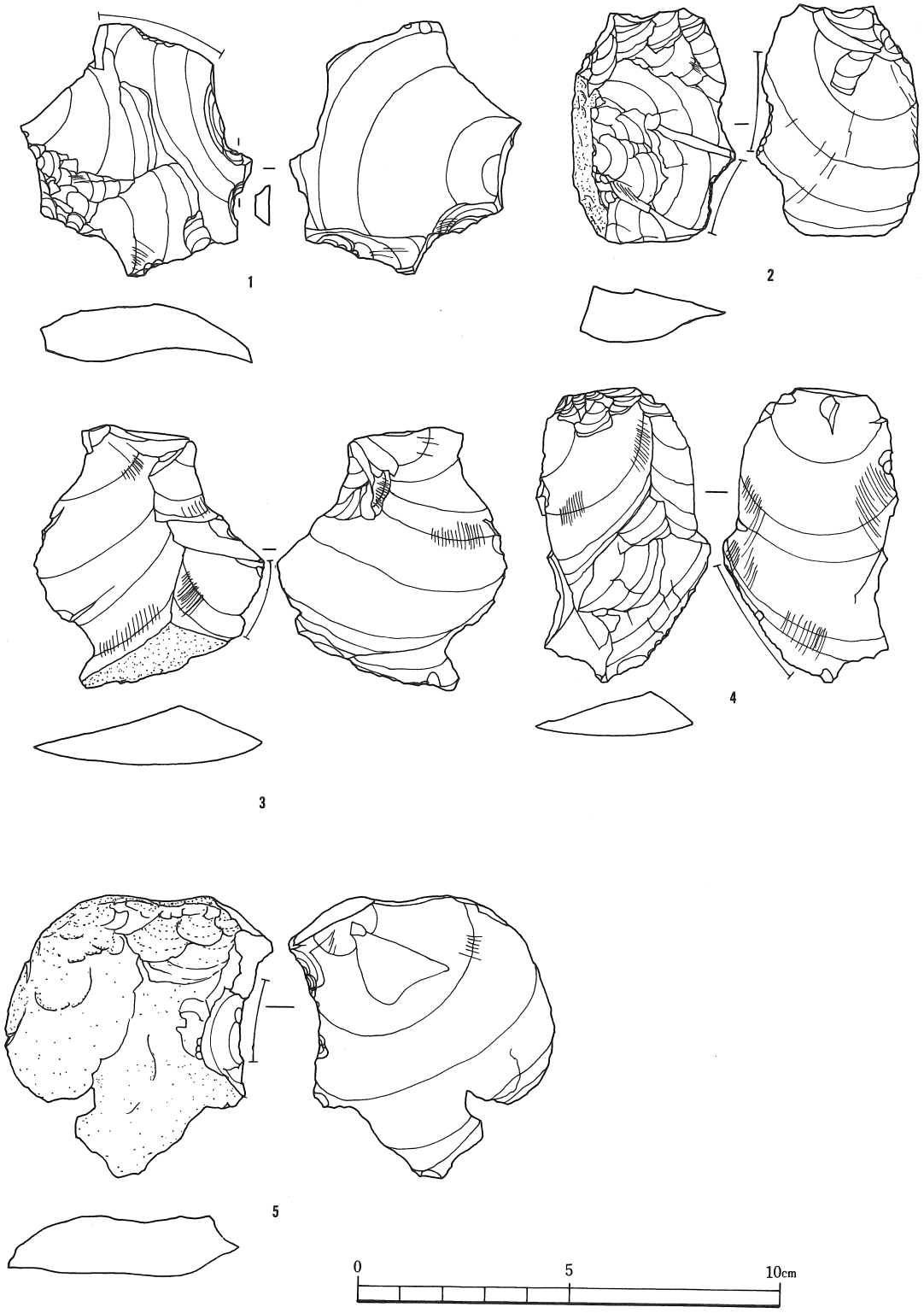
3）その他の剥片（第69図６～13）

１・２はやや縦長の剥片、３は打面を欠くが自然面をかなり残している。５～７は打面再生を目的とした剥片である。

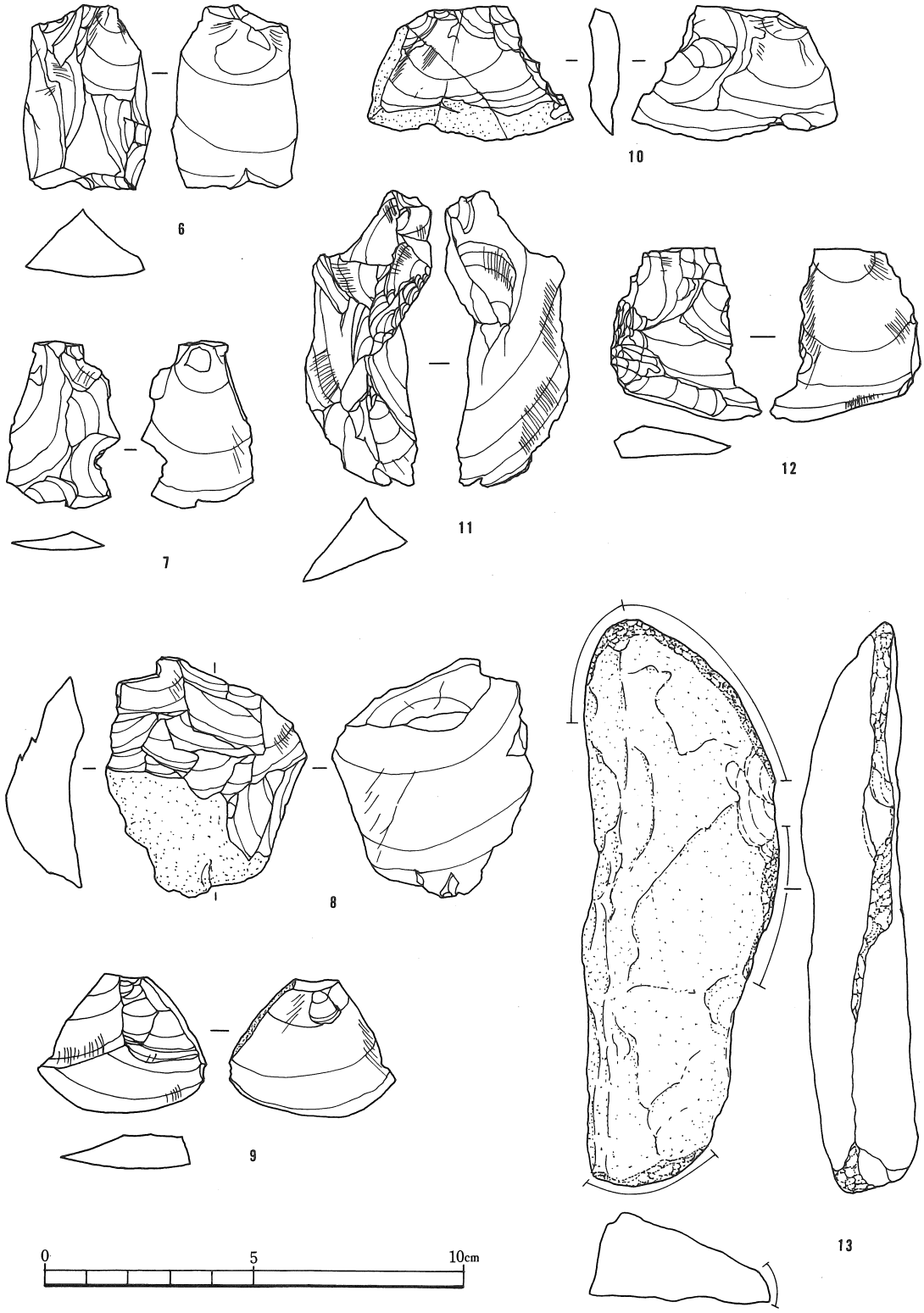
4）接合資料（第70図14～15）



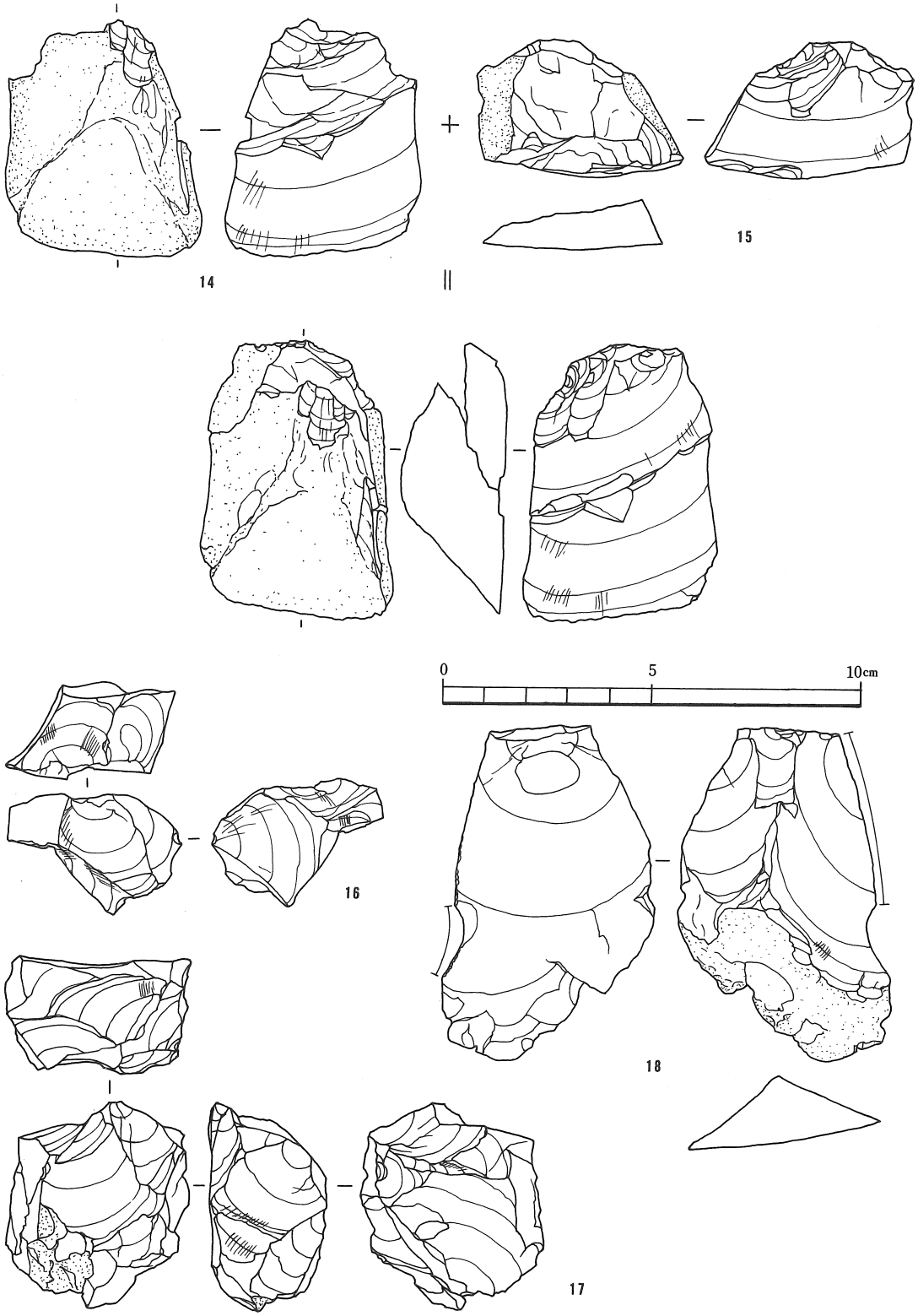
第67図　近中遺跡地形図及び調査区配置図



第68図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(1)



第69図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(2)



第70図　近中遺跡出土先土器時代遺物実測図(3)

一個の剝片が接合した例である。やや縦長の剝片が上下に分断されたものであるが、各々には分断後の加工は認められない。

5) ハンマーストーン（第69図8）

花崗岩質の細長い扁平な礫を利用した石器製作用とみられる敲石である。敲打痕は分厚い一端と薄い他の一端と縁辺部にのこされている。

第31表　　近中遺跡出土石器一覧表

No.	器種	出土地点	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	重量 (g)
1	削器	B	ホルンフェルス	5.9	5.2	44
2	使用痕のある剝片	〃	〃	5.5	3.9	30
3	〃	〃	〃	6.3	5.5	38
4	〃	〃	〃	6.9	4.2	32
5	〃	〃	〃	6.1	6.2	58
6	剝片	〃	〃	4.4	3.0	22
7	〃	〃	〃	4.0	2.6	5
8	〃	〃	〃	5.7	4.8	37
9	〃	〃	〃	3.3	3.8	9
10	石核再生剝片	〃	〃	3.2	4.8	12
11	〃	〃	〃	6.9	2.1	24
12	〃	〃	〃	4.2	3.8	10
13	ハンマーストーン	〃	花崗岩質岩	13.4	4.5	165
14	剝片	〃	〃	3.2	4.8	20
15	〃	〃	〃	5.8	4.6	56
16	石核	A	〃	4.6	2.8	21
17	〃	〃	硅化木（?）	4.3	4.5	78
18	使用痕のある剝片	〃	ホルンフェルス	7.9	4.8	54

6) A地区出土の石器類

北側のA地区で検出された先土器時代のものとみられる石器類である。

16、17は多面体の石核である。18は使用痕のあるやや縦長の剝片である。

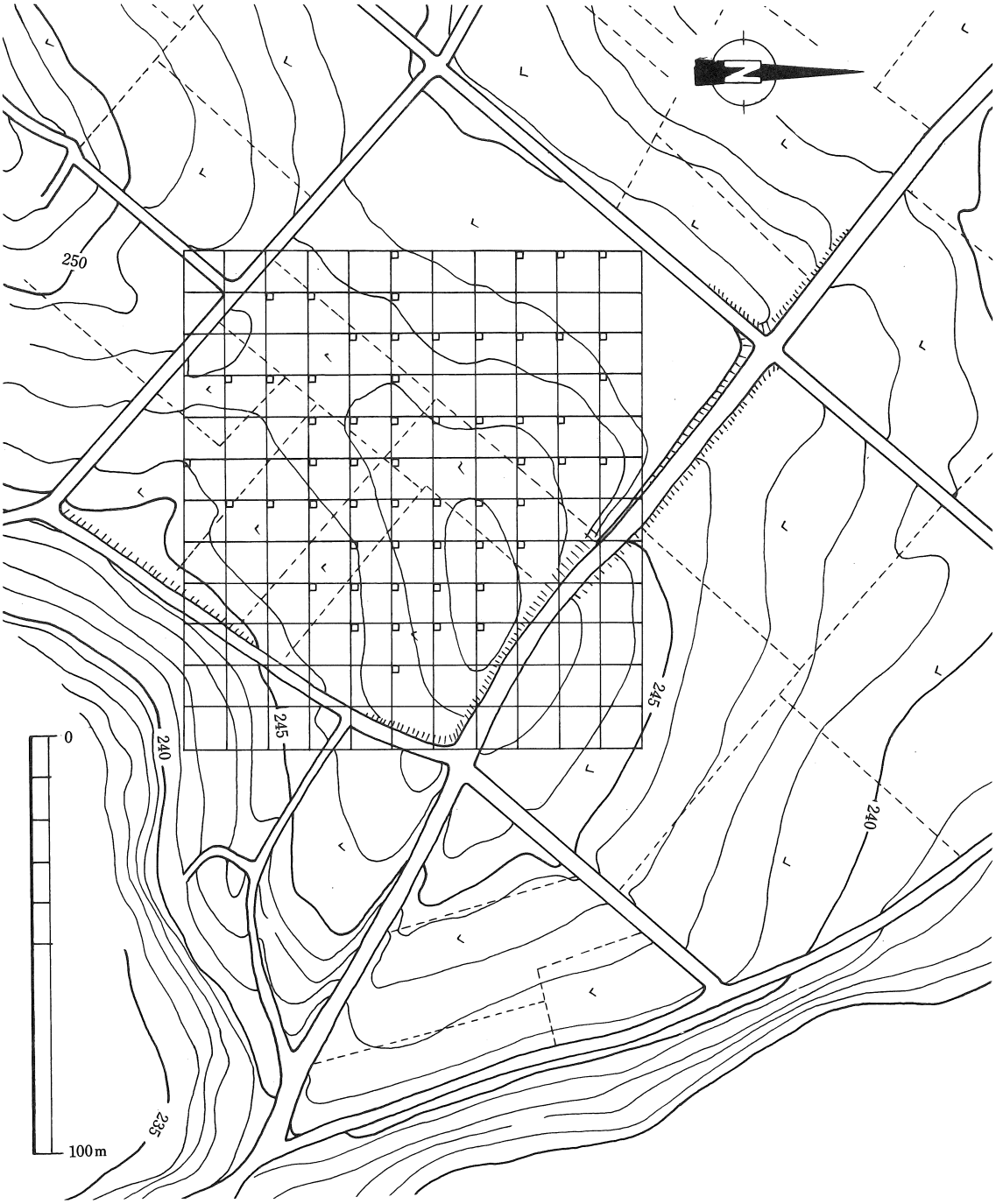
4. まとめ

以上の石器類の中にはナイフ形石器のように時期の推定に役立つ石器はみられないものの、ハンマーストーン、剝片・削器の存在からこの地点で石器の製作・使用がなされたことをうかがい知ることができる。剝片の剝離は大胆な技法によるものであり、その時期は細石核文化以前の段階に置くことが可能である。

いずれにせよ、調査地点はなおローム層中に残されている石器群の一部を検出したにすぎないものであり、その意味では有望な石器包含層遺跡として将来に託されるべきものが多い。

第2節　大　塚　遺　跡

昭和39年に鳥養孝好により調査されて以来、大分県ではナイフ形石器を出土する標式的な遺跡として知られている。遺跡は、大野原の東北部に広がる片島原の比較的平坦部の少ない丘陵上に立地



第71図　大塚遺跡地形図及び調査区配置図

する。地表面には、弥生土器・縄文早期・後期の土器片、チャートや流紋岩などの剥片が散乱している。

調査は、2m×2mの試掘区を、10m×10mの範囲の一角に設定し実施した。その結果、丘陵の大部分が、以前に実施された農業基盤整備事業により、削平を受けていることが判った。このため出土した石器は全て表土層中の一括資料である。定形石器はなく、使用痕のある剥片2点、剥片2点のみであり、石材は全て大野川流域で得られるホルンフェルスである。

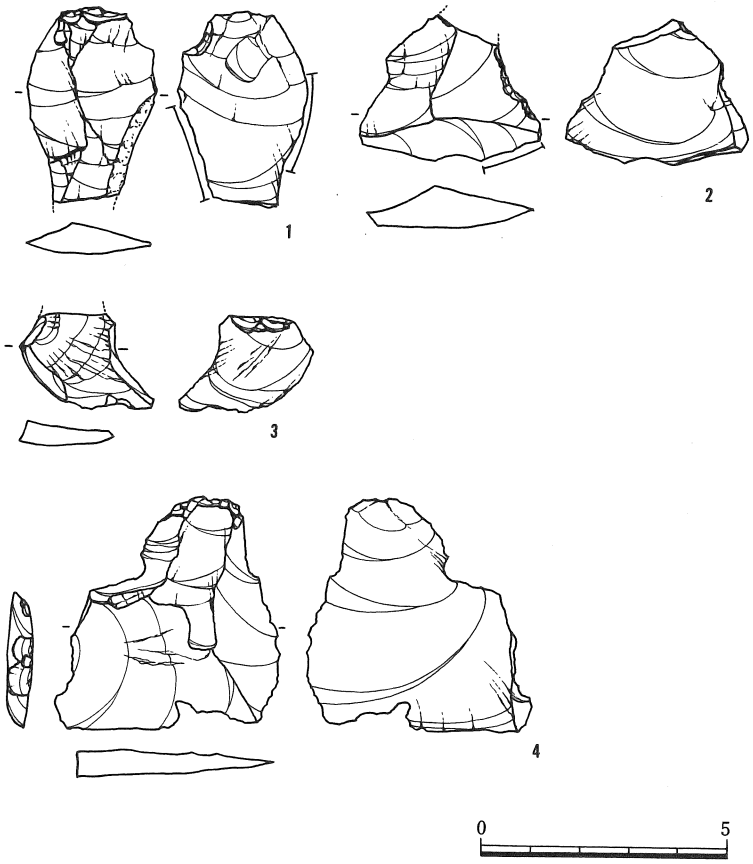
1は縦長剥片であるが、両側縁に歯こぼれが認められる。大剥離面には自然面を残し、剥片剥離作業は全て上面から行なわれている。主要剥離面には全く2次調整は認められず、打面付近にはバルブを大きく残す。下部欠損。

2は不定形剥片を素材とし、側縁と下端部に歯こぼれが認められる。大剥離面にみられる剥片剥離作業の加撃は多方向から行なわれており、多面体石核から得られたものであろう。打面は欠損している。

3は小形の剥片である。大剥離面の剥離は規則性がなく、主要剥離面には打面縁調整が認められるが打面は欠損している。

4はやや大形の剥片である。大剥離面には多方向からの加撃が認められ、側面には剥片の剥離作業以前に行なわれた石核の打面調整が認められる。

以上の資料の特徴として、剥片に認められる加撃方向は1を除き全て多方向である。このことは存在した剥片剥離技術が定形化されたものではなく、大野川流域で一般に認められる不定石核を基本としたものであったことを示している。また1の資料についても技術の定形化は積極的には認められず、他の資料と同様な技術の中でとらえるべきであろう。



第72図　大塚遺跡出土石器実測図

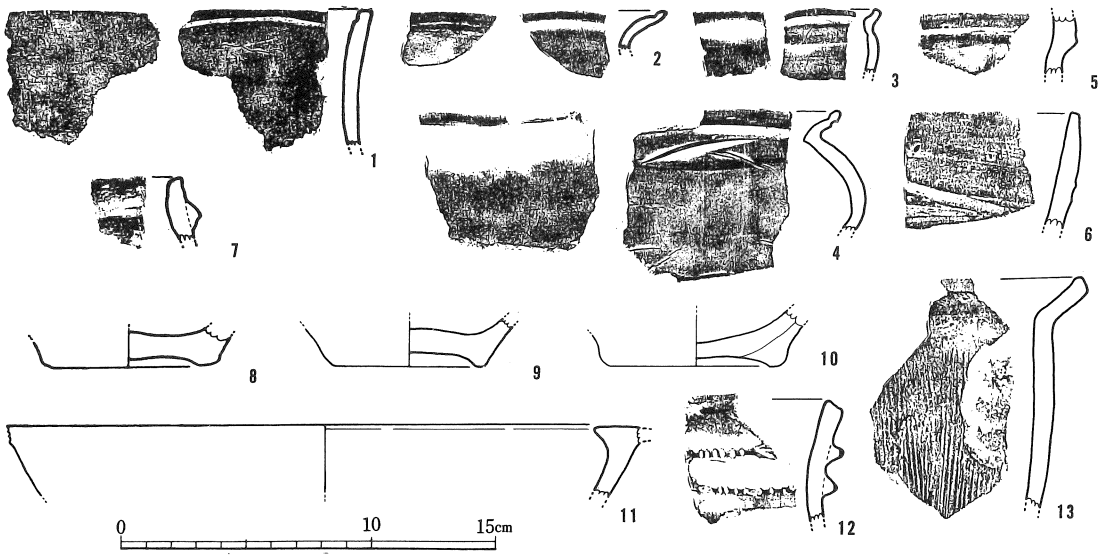
第3節　赤　鳥　居　遺　跡

大野町の中心街から東方 約700ｍに位置する。遺跡は、南西部を流れて田代川と北東部を流れる茜川に狭まれた尾根上の台地の平坦部に立地し、台地の東部と西部は地峡部となっている。調査は、台地の南部の12,000㎡について作付の関係で調査できない部分を除き実施した。その方法は、台地南部に10ｍ×10ｍのグリッドを組み、その一角の２ｍ×２ｍを32個所にわたり掘り下げた。その結果、大塚遺跡と同様、以前に農業基盤整備事業が行なわれているが弥生・縄文時代の包含層がわずかに残っている。特にＡ－５区・Ｆ－４区・Ｆ－５区では縄文時期の遺物を含む弥生時代の包含層が確認された。また、調査区南東部のＩ－11区・Ｉ－12区・Ｉ－13区では縄文晩期、弥生中期の土器・石器など比較的豊富な遺物の出土をみた。

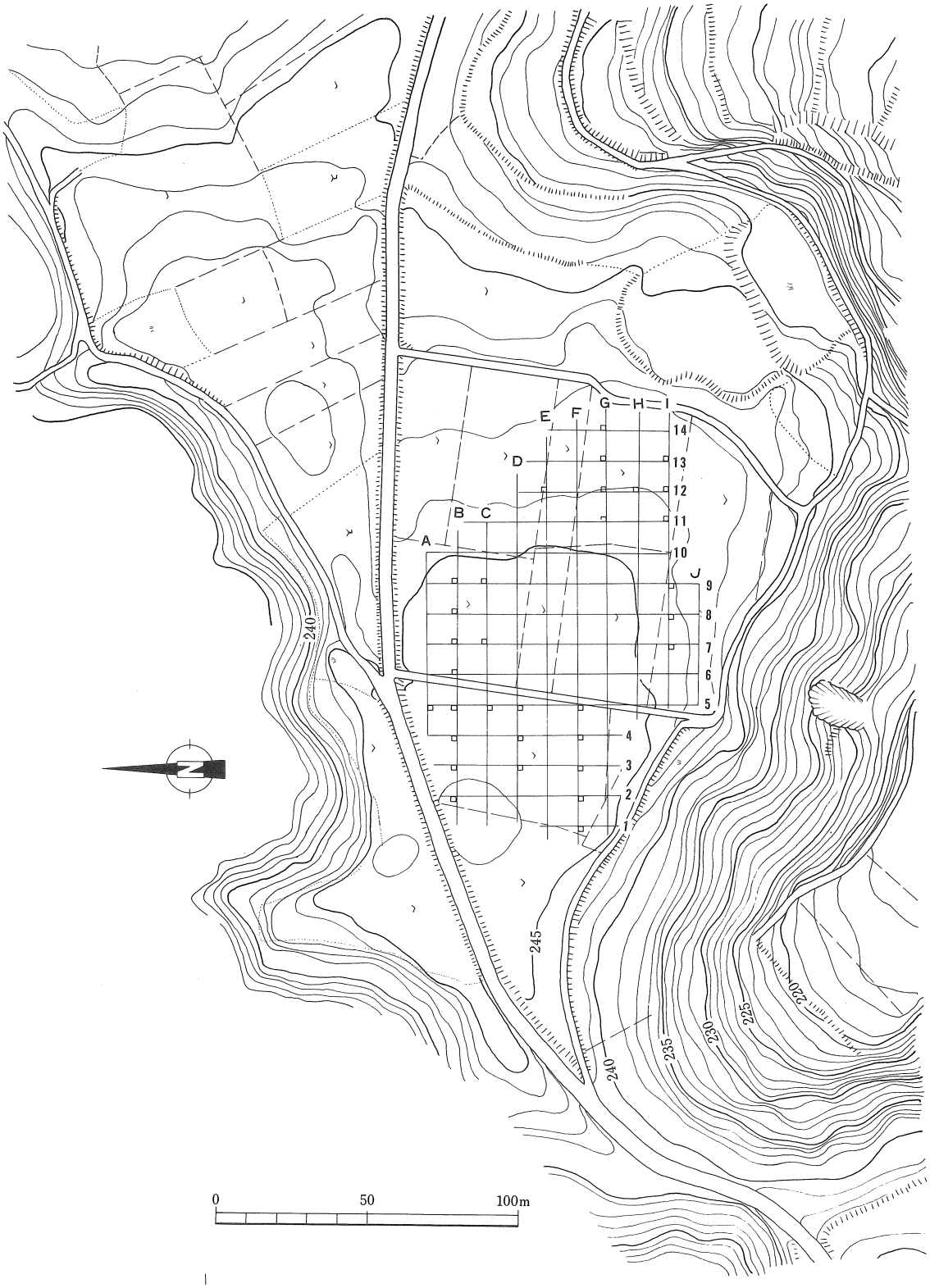
第32表　　赤鳥居遺跡出土土器観察表

番号	出土地区	器種	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
1		深鉢	口縁部	暗茶色	○					三万田式土器　横方向のヘラ研磨
2	Ｉ－13	浅鉢	口縁部	黒　色	○	○				ヨコ方向のヘラ研磨
3	Ｂ－９	浅鉢	口縁部	黒褐色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
4	Ｉ－13	浅鉢	口縁部	黒　色	○					ヨコ方向のヘラ研磨　晩期中葉
5	Ａ－５	深鉢	口縁部	茶褐色	○	○				ヨコナデ
6	Ｂ－９	深鉢	口縁部	茶褐色	○					ヨコ方向の条痕のあとヨコ方向のヘラ研磨
7		深鉢	口縁部	茶　色	○					
8	Ｉ－13	深鉢	底　部	暗茶色	○	○				
9	Ｉ－13	深鉢	底　部	暗茶色	○					接地部がすれている
10	Ｉ－13	深鉢	底　部	茶　色	○					接地部がすれている
11	Ｉ－12	高坏	口縁部		○					ヨコ方向のヘラ研磨
12	Ｇ－13	甕	口縁部		○		○			ヨコ方向のナデ
13	Ｉ－12	甕	口縁部		○					外面にススが付着　タテ方向の条痕

以上、赤鳥居遺跡では、縄文時代後期の三万田式土器、晩期中葉の精製の浅鉢と粗製の深鉢、晩期後半の突帯文土器が出土している。これらは、大野原で遺跡の数が増加する時期であり、その一連の遺跡であろう。また、弥生時代の遺物は、中期が主体であり、この時期は大野原台地で弥生後期爆発的に遺跡が出現する前段階である。同様な遺跡は、大野原台地の近中遺跡や、踊ケ迫遺跡など数ケ所がある。



第73図　　赤鳥居遺跡出土土器実測図



第74図　赤鳥居遺跡地形図及び調査区配置図

第4節　犬　山　遺　跡

赤鳥居遺跡から続く尾根上の平坦地で、さらに南東部の大塚遺跡へと続いている。地形は、赤鳥居遺跡が比較的平坦地であったのに対し、犬山遺跡は緩い斜面である。地表面には土器の小破片や、黒曜石片などが、東西200m、南北200mの範囲にわたり散布している。

調査は作付の関係上、全体にわたり調査区を設けることはできず、台地中央を通る県道田中一片島線の西側と東側を、それぞれA・B地区として調査区を設定した。

A地区は犬山神社の南側の斜面に設定した東西30m南北50mの調査区で、14個所を掘り下げた。その結果、斜面という地形的な問題のためか遺物はほとんど出土しなかった。しかし、今回は調査できなかったが神社の北側では、耕作の際多量の遺物が出土しており、この周辺は重要な地点である。

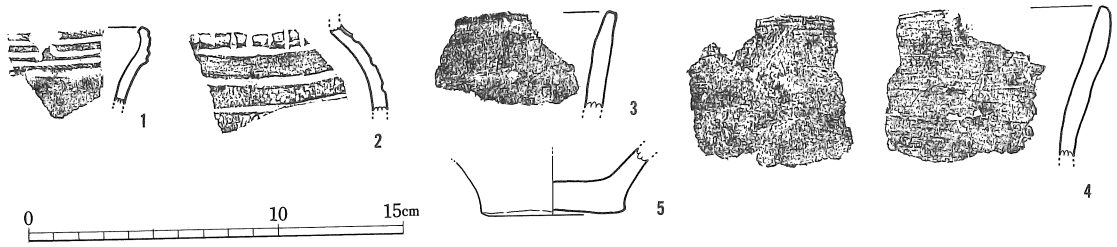
B地区は、県道に沿った比較的平坦部に東西20m、南北40mの調査区を設け、10個所を掘り下げた。その結果A－4区の表土層直下の黒褐色土から西平式土器と後期後半の無文の深鉢形土器の口縁部および底部が出土した。

このように犬山遺跡では、一部に良好な縄文後期の包含層を確認したが、やはり、大塚遺跡・赤鳥居遺跡、と同様、かって農業基盤整備事業を受けており、遺跡の遺存状況としては良いものではなかった。しかし、赤鳥居・犬山・大塚の各遺跡は大野原の尾根上の台地に縄文後期後半以降出現する一連の遺跡としてとらえられる。

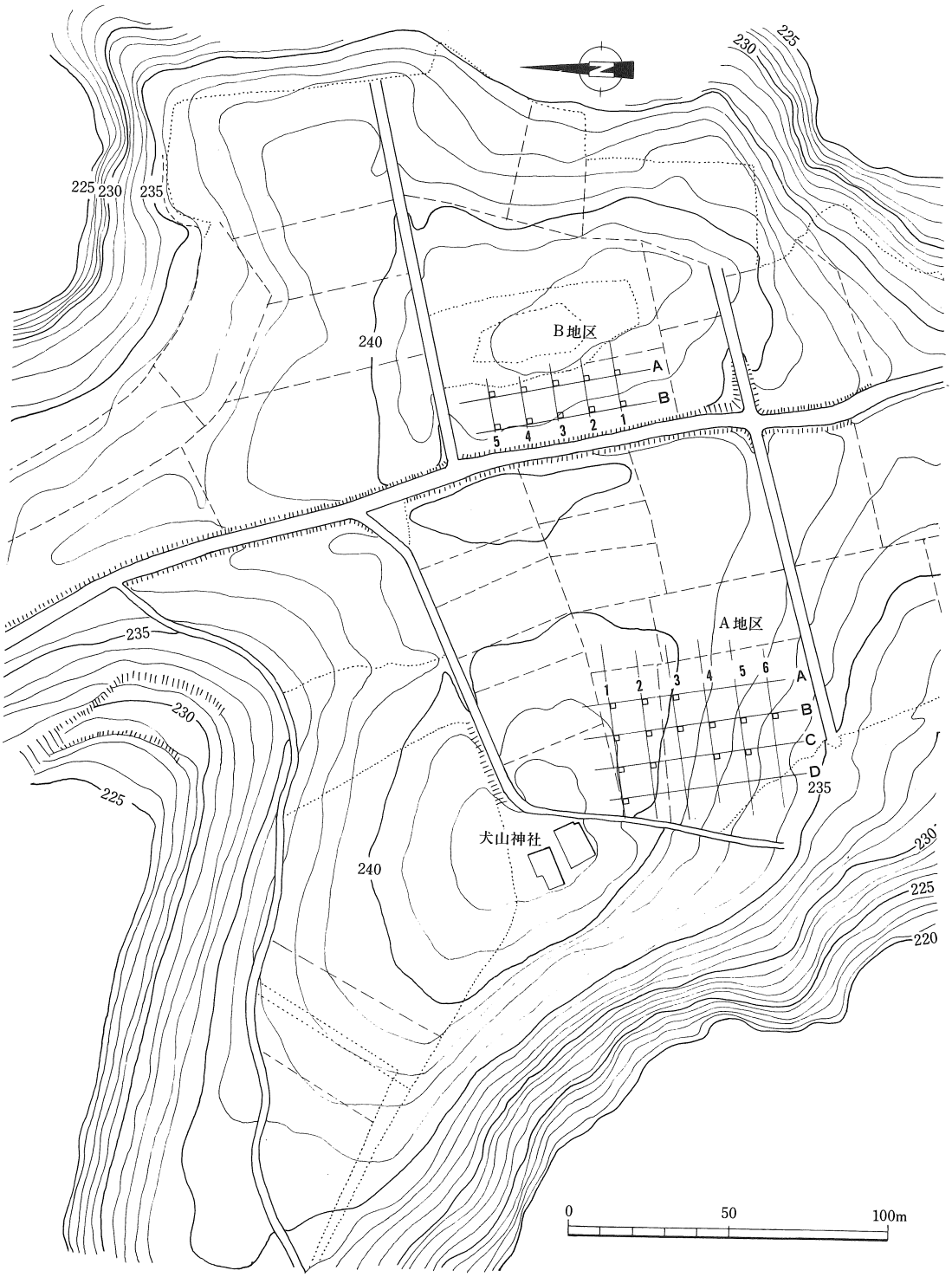
なお、今回は図示でもなかったが、遺跡の南側斜面下方にある牧場の柵杭を立てる際に、姫島産黒曜石の人頭大の石核が出土している。

第33表　犬山遺跡出土土器観察表

番号	出土地区	器種	部位	色調	胎土 角閃石	長石	石英	黒雲母	その他	備考
1	A－4	深鉢	口縁部	暗茶色	○					ヨコ方向のヘラ研磨
2	A－4	深鉢	胴部	暗茶褐色	○			○		ヨコ方向のヘラ研磨
3		深鉢	口縁部	茶褐色	○					ヨコ方向のナデ
4	A－4	深鉢	口縁部	暗茶色	○					ヨコ方向の荒いヘラ研磨
5	A－4	深鉢	底部	茶色	○					



第75図　犬山遺跡出土土器実測図



第76図　犬山遺跡地形及び調査区配置図

第5章　考　　察

第1節　縄文時代の大野原

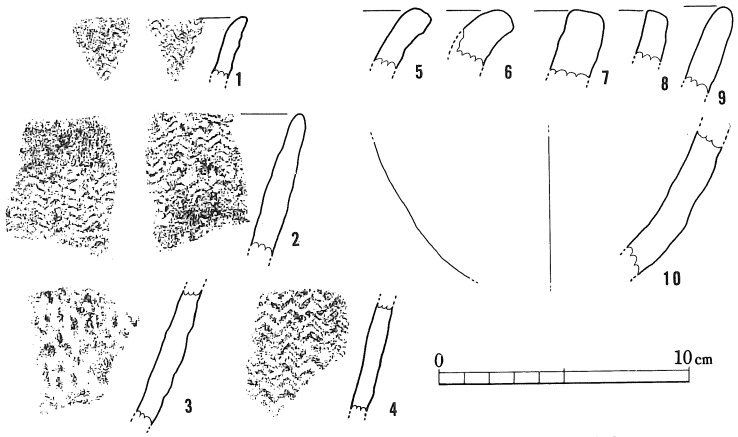
大野町は、町内の大部分を標高200～240mのなだらかな上面をもつ火山性の台地が占める。周辺の谷底平野との比較差も南部で大きく険しいものの、北部では小さく、傾斜も緩やかである。このような、優れた遺跡の立地条件をもつ大野原の台地では、先土器時代以来、数多くの人間の営みの痕跡が残されており、特に先土器・縄文時代の周知されている遺跡の数は大分県下でも目立つ地域のひとつである。

以下、縄文時代早期から晩期までの各期の大野原の様相を概観し問題点について考えてみたい。

早期　大野原台地で今日まで縄文早期の遺跡を調査したことは少なく、発掘資料は夏足原遺跡F地区の試掘調査で得たもののみで大部分は表面採集された資料ばかりである。しかし、各遺跡で採集された資料はそれぞれで様相が異なり、変遷を追うことができる。

最古の資料は第77図の寺遺跡出土の押型文土器である。採集された資料は少ないが押型文土器と無文土器で構成される[註1]。押型文土器は、口縁部が外反せず、整然とした横方向の押型文が施文されている。類例は杵築市稲荷山遺跡や[註2]宇佐市別府遺跡[註3]、臼杵市東台遺跡[註4]出土の資料に求められ、大分県の押型文土器出現期の時期に比定される。この出現期の押型文土器は、多量の無文土器と伴出する。押型文の中には、帯状に施文した例もみられ、長野県樋沢遺跡[註5]下層との類似が指適されている。

押型文出現以前の九州では、九重町二日市洞穴[註6]や大分市野田山遺跡[註7]のように条痕文土器や無文土器ばかりであり、九州で押型文土器が出現する要素はみられない。ところが、最近の近畿・中部地方を中心とした地域では爪形文から押形文への系譜がたどれるという。そうすれば、九州の押型文土器は、近畿・中部地方からの伝播を考えなければならないだろう。このため押型文出現期の遺跡が、多量の無文土器とわずかな押型文土器という様相を示すのは、押型文土器が客体としてあるためであろう。ところが押型文は以後、最後の土器型式と考えられている手向山式土器まで、九州の



第77図　寺遺跡出土土器実測図

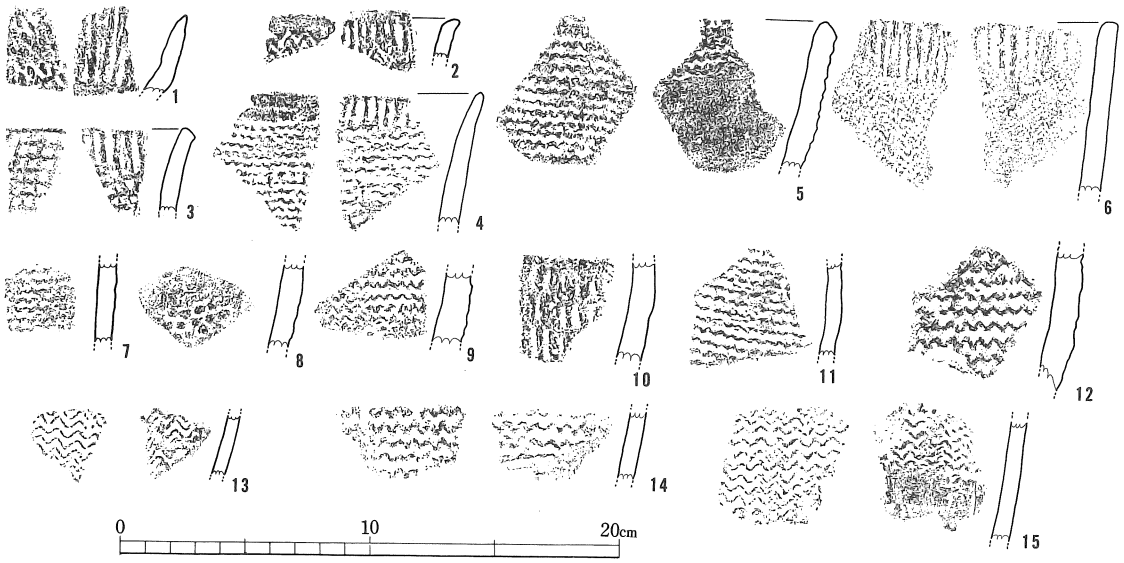
縄文早期の土器文様の主流となる。このため、押型文の九州出現は、早期とそれ以前を区切るひとつの時代の画期となりうる。そうすれば、大野町寺遺跡の時期は、縄文早期初頭と考えられる。

次の縄文早期の遺物は、第78図の宝福寺遺跡や第50図の夏足原遺跡F地区出土の土器が考えられる。これらの押型文土器の特徴は、あまり外反しない口縁部の内側に縦方向の原体刻文がめぐり、その下位に一列横方向の押型文がめぐる。また外面全面には横方向の整然とした押型文がめぐる。このような押型文は早水台式土器とされており、標式遺跡である日出町早水台遺跡[註8]をはじめ、県内各所で確認されている。また、押型文土器に伴う無文土器も、夏足原遺跡でみられるように無文の薄手、厚手の両者があり、前段階の杵築市稲荷山遺跡でみられた伝統が残されている。

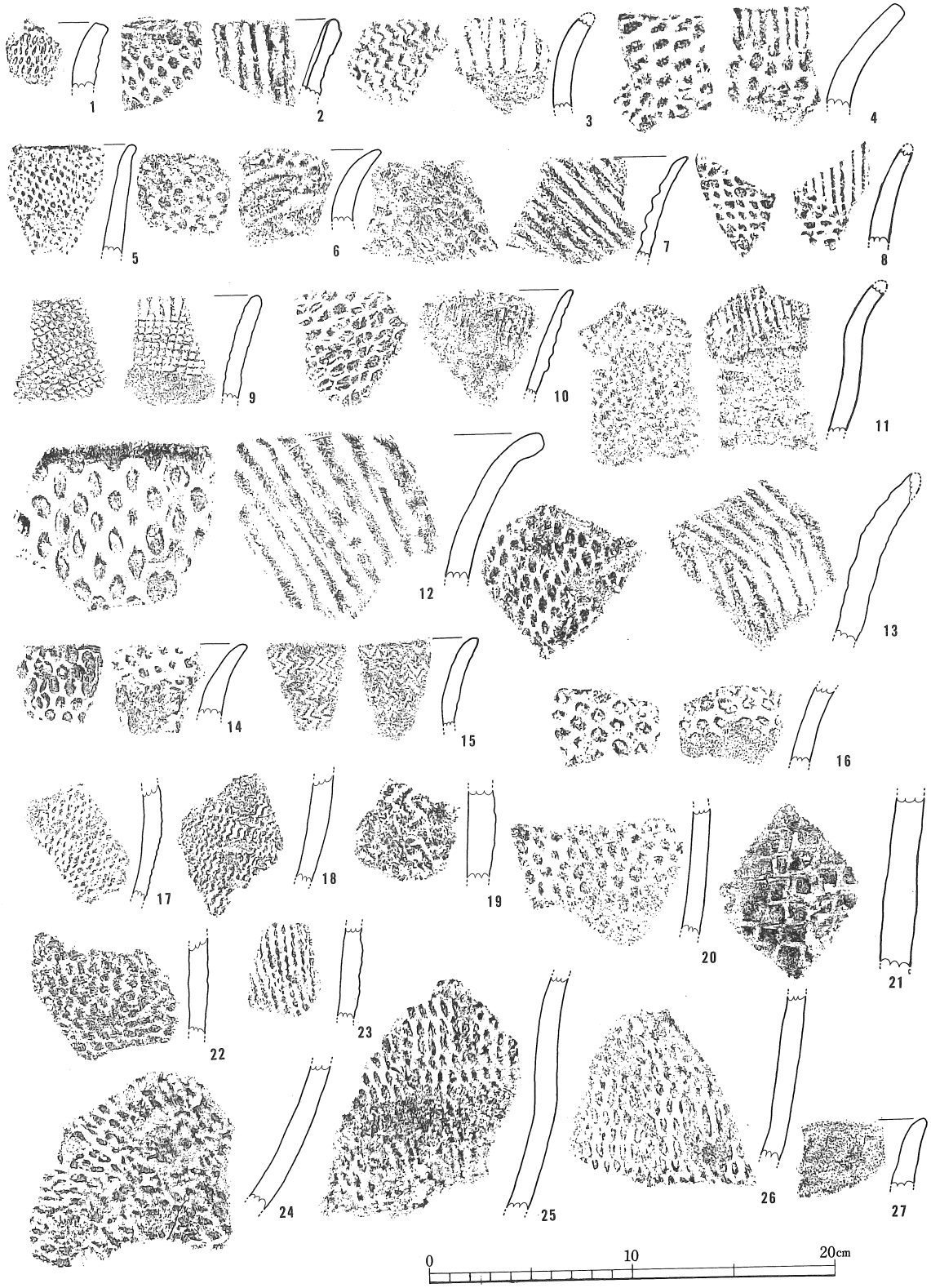
さらに新しく考えられるのが郡山遺跡の出土の資料である。口縁部が外反し、内側の原体刻文は太く長大化する。また外面の押形文は粗大になり縦方向の回転となる。この土器は従来田村式土器と考えられ、早期中葉に位置づけられている。しかし、最近の大野川流域では、荻町寺ノ前遺跡[註9]、竹田市下菅生B遺跡[註10]、西園南遺跡[註11]などで、この時期の調査が相次ぎ、細かな型式分類が検討されている。

それによると、縄文早期の押型文土器の型式変化は 器形では、(1) 口縁部の 直口から外反への 変化、(2)底部が尖底から丸底、平底へと変ることが認められ、文様では(3)口縁部内側の原体刻文の有無とその変化、(4)押型文の細かなものから粗大なもの、(5)施文方向の横回転から縦回転の変化が判明している。また、全体の土器の組成からみると、(6)無文土器の出土量の変化なども編年作業のうえで重要な鍵を握っている。以上の(1)から(6)の要素の結びつきにより、縄文早期の押型文土器の型式変化が、型式学上たどることができる。

たとえば、先に述べた最古の稲荷山式土器の、器形は口縁部が直口し尖底である。文様は原体刻文が無く、細かな押型文が横方向の回転で施文され、多量の無文土器が伴う。早水台式土器の器形



第78図　　宝福寺遺跡出土土器実測図



第79図　郡山遺跡出土土器実測図

は、稲荷山式土器と大差はないが、原体刻文が施文されるようになり、無文土器もみられる。

下菅生B式土器は、器形が尖底であるが、口縁部はやや外反する。外面の文様は早水台式土器とは異なり、縦方向の回転により細かな押型文が施文される。

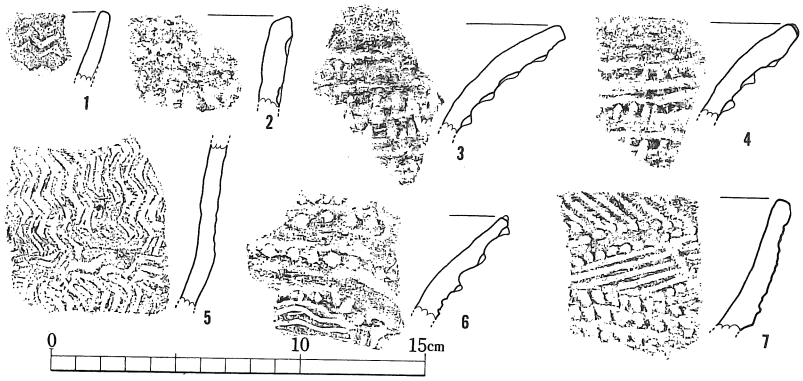
田村式土器は、口縁部は大きく外反し、底部は丸底気味になる。文様は原体刻文が太く長大化し、外面には粗雑な押型文が縦方向の回転により施文されている。さらに、この時期からは先に述べた(1)から(5)までの要素が複雑にからみ合い、田村式土器と同じ文様でありながら尖底を成すものや、同じ器形で原体刻文がなく、その部位に横回転の押型文がめぐるものなどがあり、底部も平底が現われる。第79図の郡山遺跡出土の資料は底部の出土はないがこの時期にあたる。

さらに新しい型式としては竹田市ヤトコロ遺跡出土の資料を標式とした、口縁部が外反し平底の押型文土器が考えられており[註12]、文様も、原体刻文がなく、その部位に押型文がめぐる。また胴部は、縦回転の押型文で飾られる。

この他、早期の土器として、押型文のある最終型式として手向山式土器や、南九州中心に分布する。平栫式土器や塞ノ神式土器などがある。大野原でも第80図3・4・6の手向山式土器、7の平栫式土器が出土している。

以上、縄文早期の大野原の変遷をたどれば寺遺跡―宝福寺遺跡―郡山遺跡―寺遺跡・井野遺跡の手向山式土器となる。

前期　遺跡数は早期の8個所に比較すると少なく5個所しか確認されておらず、しかも出土資料が少ない。第81図がその大部分の資料である。出土遺跡別にみれば、宮地前遺跡が4点で多いが、表採のため包含状況は不明である。また、井野・横井の両遺跡も1・2点の出土であり、その状況は不明である。これらの資料を型式学的にみれば、轟B式土器が多く、1・2・5・6はその代表的な例である。しかし、その特徴である隆起線文にはバラエティがあり、小さな時期差を示すものかも知れない。また、3・4の資料も轟式と思われるのが胴部の破片で、A・B式のいずれかは不明である。以上の轟B式土器は、縄文前期の九州を代表する土器で、大野川上流域ではアカホヤの上位から出土する。



第80図　大野原各遺跡出土縄文早期土器実測図
（小牧遺跡1　井野遺跡2・5・6　寺遺跡3・4　向原遺跡7）

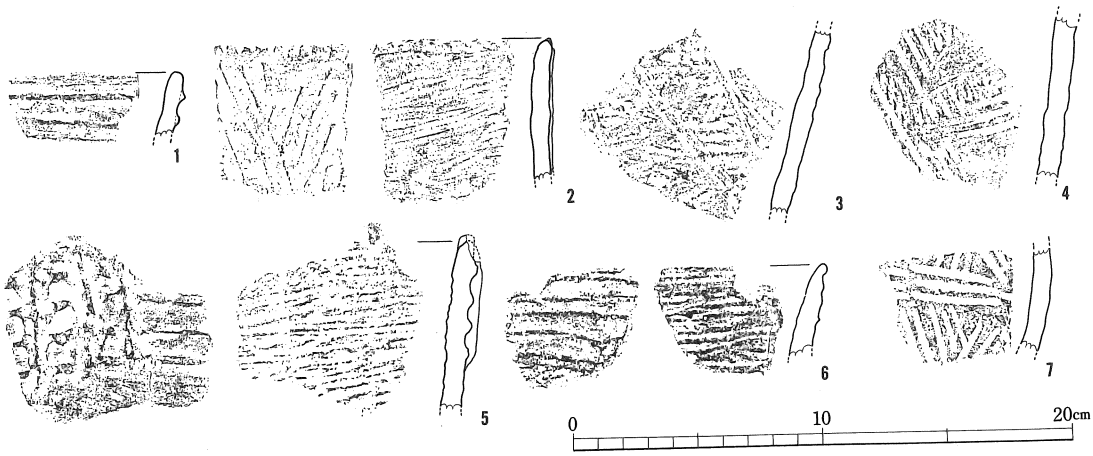
この他、7の短沈線文で飾られる土器は、曽畑式土器である。この土器は西九州から西南九州にかけで主体的に分布する。このため、大分では大野川上流域で比較的まとまって出土するが、東部にかけては数例しかない。しかも、西九州のそれが胎土に滑石を多量に含むのに対し、この地域では滑石はほとんど含まない。

以上の土器以外では、松木遺跡を調査中に横方向の条痕文を地文とし、口縁部に対し直角に押し引き文を施文する土器が出土している。押引文は瀬戸内地方を中心に分布する土器文様であり、大野川で通じたこの地域との関係も少なからずあったことも考えられる。

このように、縄文時代前期の大野原で検討できる資料は今日まだ少ないが、それでも、その一端を知ることができる。つまり、土器の様相が早期の押型文から一変し、条痕文土器が主体を示めるようになる。これに、西部九州と瀬戸内地方の土器や文様要素が客体として加わるようである。また早期に比較して遺跡や遺物が減少しているのは、前期初頭の「アカホヤ」降下の影響があったためと思われる。

中期　前期の遺跡数よりさらに中期の遺跡は少ない。現在確認されているのは、駒方C遺跡の並木式土器2点と松木遺跡と宮地前遺跡から船元式と思われる全縄文の土器片がそれぞれ1点出土しているのにとどまる。

この時期の東九州は、遺跡数の希薄な地帯として知られており、大分県全体でも20個所にみたない。しかも、まとまった出土状態を示すのは、大分市横尾貝塚[註13]・三重町惣田遺跡[註14]・天ケ瀬町平草遺跡[註15]などで、さらに少なくなる。そこで、大分県におけるこの時期の遺物の様相をみると、縄文早・前期にみられた。主体となる土器に容体として他地域の土器が加わるという状況は、みられない。つまり、縄文中期の九州と瀬戸内地方は、それぞれ、凹線文で飾る阿高式土器と縄文を地文とする船元式土器という小破片でも識別できる特徴的な土器で分布圏が別れる。そこで、東九州の縄文中



第81図　　大野原各遺跡出土縄文前期土器実測図
（宮地前遺跡1～3・7　井野遺跡4・6　横井遺跡5）

期の状況をみると前半は、船元式土器のみを出土し、九州在来の土器である阿高式土器とは共伴しない。このことは大野原に近い三重町惣田遺跡、あるいは天ケ瀬町平草遺跡・荻町古賀遺跡[註16]などの遺物の出土状況からも裏づけられる。また、阿高式土器を単純な状態で出土する遺跡もない。大分県で阿高系の土器を出土するのは宇佐市西和田貝塚[註17]や久住町コウゴ一松遺跡[註18]・野津町筒井遺跡[註19]などで、後期初頭の中津式土器を伴う。

以上のように、縄文時代中期の東九州は、少なくとも前半期は瀬戸内地方の影響下にあり、大野原もその例外ではなかったと思われる。

後期　東九州の縄文後期は、磨消縄文の出現に始まる。しかし中葉でこの技法も衰退し、後半は無文研磨土器が出現する。この土器製作法とかかわるように、遺跡のあり方も前半と後半では微妙な変化をみせる。

後期前半の大野原は、中期の状況より遺物、遺跡とも増加するものの、後半に比較すれば数が少ない。現在知られているのは、二本木遺跡[註20]・片島遺跡・夏足原遺跡・小牧遺跡[註21]などで出土した後期前半から中葉にかけての土器で、小池原上層式土器・北久根山式土器・片粕式土器である。しかし、量的には少なく全ての土器片で50点ほどである。

しかし、大野原台地以外の東九州の遺跡の状況は、宇佐平野の立石貝塚[註22]や植野貝塚[註23]、別府湾沿岸の小池原貝塚[註24]など、海岸部では貝塚形成活動が始まる。現在確認されている貝塚は、この時期のものが最も多く10ケ所を数える。これらの貝塚は瀬戸内海に面するため、立石貝塚ではアジ・イワシ・スズキ・クロダイ、小池原貝塚ではマダイ・クロダイ・マフグなど沿岸の浅海性の魚類や沖合回遊魚を対象とした漁労活動が行なわれている[註25]。

一方、内陸部でも、後期初頭に編年される中津式土器は各地で出土している。竹田市小園遺跡・内河野遺跡[註26]・荻町寺ノ前遺跡[註27]・久住町コウゴ一松遺跡[註28]などは、その好例で、九州山地の中央部に立地している。中でも昭和48年調査したコウゴ一松遺跡では、72点の石器のうち狩猟用具と思われる石鏃・石匙は少なく22点で、叩石・磨石・石皿が多く41点が出土している。これは、堅果類など植物食に対する依存度が大きかったことを暗示している。

このように、東九州の縄文後期前半は、海岸部・内陸部とも偏在することなく遺跡が残されている。大野原台地からわずかながら出土する遺物も、こうした一連の動きの中で残された遺跡と考えられる。

ところが、縄文後期中葉から後半にかけて東九州では、遺跡の立地に微妙な変化があらわれる。まず海岸部では、10数個所確認されていた貝塚が次々に姿を消す。宇佐市西和田貝塚・立石貝塚、中津市植野貝塚・入垣貝塚、豊後高田市森貝塚・来縄貝塚、大分市小池原貝塚などがその例で、これらの貝塚は、後期前半で貝塚形成活動を終了する。しかし、こうした中で宇佐市石原貝塚だけは、他の貝塚と異なる展開をみせる。つまり、石原貝塚[註29]はさらに貝採集活動が活発化し、今日県下最大の貝塚として知られている。貝層の状況は、純貝層が厚くみられて、中には土器・石器・魚骨などをほとんど含まず、貝種も90%以上ハマグリの単一種である。これは、後期前半の貝塚が、貝

層中に多量の土器・石器、獣魚骨などが貝層中に多量の土器・石器・獣魚骨などが混入しており、貝種も多種にわたるのと対象的である。

一方内陸部では、大野川中流域に遺跡の集中がみられるようになる。これ以前の内陸部の遺跡は、野津町川平遺跡[註30]、耶馬渓町ザットク遺跡[註31]のように谷底の小さな平坦地に立地するものや、日田市川下遺跡[註32]、朝地町田村東遺跡[註33]のように河岸段丘上に立地するものなどが見られる。ところが後期後半になると、大野原台地に代表されるような火山性台地の発達した地域に遺跡が集中し始める。この傾向は、大野原台地を中心に、三重町、野津町で顕著であり、今回報告した大野町駒方C遺跡、夏足原遺跡はその代表的な遺跡である。

この遺跡の立地の転換期ともいえる後期後半からは、九州に伝統の見い出し得ない、さまざまな遺物が出現する。土偶・各種の扁平打製石器・注口土器がその代表である。

九州の土偶は関東地方の山形土偶の影響を受け出現すると考えられている[註34]。このため、福岡県元松原遺跡[註35]出土の後期初頭の土偶は縄文がみられる。大分における土偶の出現はやや遅れ、後期前半期の宇佐市立石貝塚で土偶の脚部が出土しているとゆう。以下確実な時期のわかる例は本報告の三万田式期の駒方C遺跡、同時期と思われる大野町宮地前遺跡、後期後半期と考えられる宇佐市石原貝塚、後期末の中津市高畑遺跡、晩期前半の緒方町大石遺跡の例があげられる[註36]。

そこで、これらの土偶の時期的な変遷をたどると、出現期である大野原台地の宮地前・駒方C遺跡の土偶の頭部は半球形を呈し、扁平な顔面には宮地前遺跡の場合は羽状文、駒方C遺跡の場合は沈線で顔の表現が施されている。しかし、次の時期である石原貝塚の例では、頭部は扁平な円形状となり、顔面の表現はみられない。この傾向は縄文晩期前半の大石遺跡でもみられ、顔面の表現は同様に喪失している。しかし、いずれにしろ、東九州での土偶は熊本県を中心とする西九州に比較すると未発達で、その出土例も極めて少なく、九州の土偶主流地帯の周辺地域といえる。

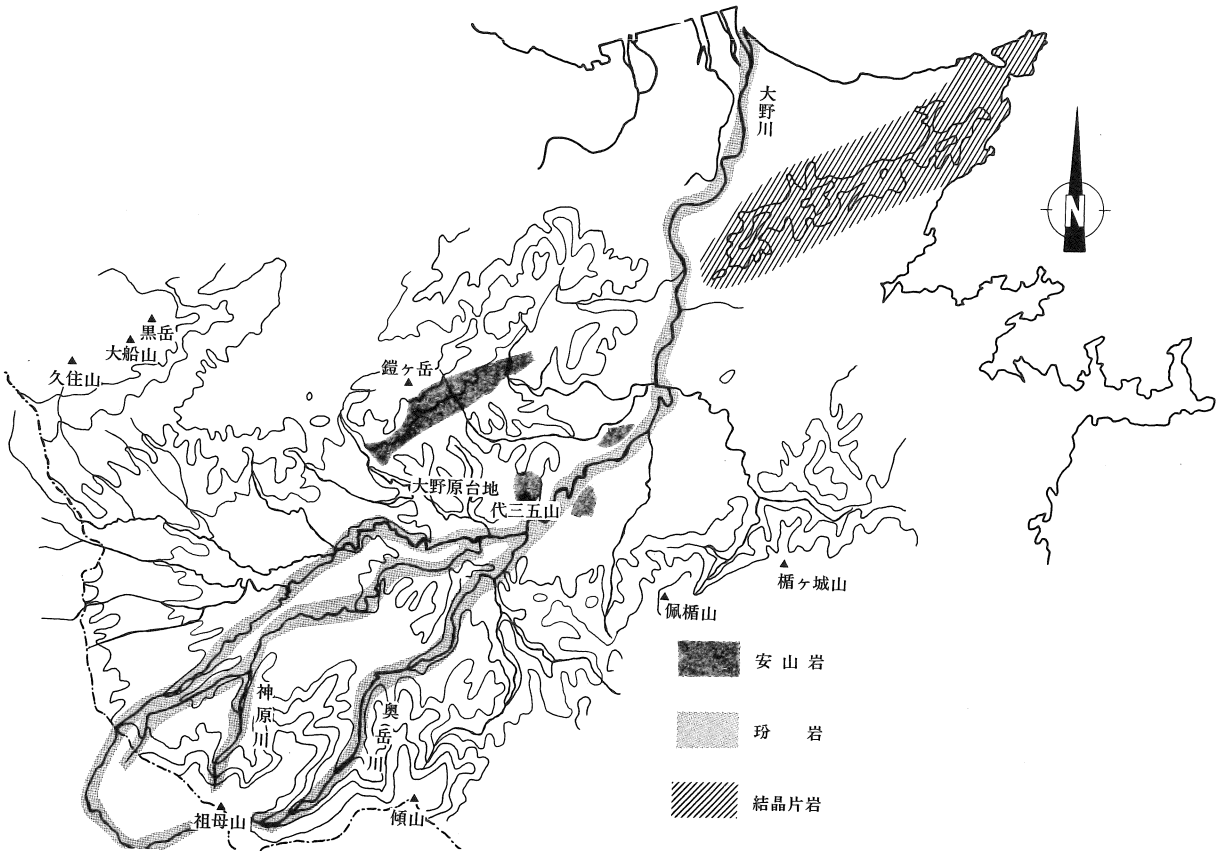
次に扁平打製石斧であるが、九州ではこの遺物に関して賀川光夫の縄文晩期農耕論とからめた中国大陸からの伝播[註37]と渡辺誠の東日本的文化複合体西漸論とからめた縄文中期の中部山岳地帯からの伝播[註38]の二つの考え方がある。そこで、扁平打製石斧出現期の九州の様相をみると、最初に登場するのは、福岡県柏田遺跡[註39]、北九州市下吉田遺跡[註40]あるいは、福岡県築上郡石町遺跡[註41]などで北部九州のようである。このうち報告書の刊行されている柏田遺跡の場合、後期中葉の北久根山式期に10数点の扁平打製石斧が出現している。また、石町遺跡からも同時期の土器に伴い10点の緑色片岩製の扁平打製石斧が採集されている。しかし、同時期の大分の遺跡である日田市川下遺跡・国東町ワラミノ遺跡[註42]・朝地町田村東遺跡では、扁平打製石斧はみられない。大分で現在最古のものは、三重町惣田遺跡の、西平式土器あるいは磨消縄文系三万田式土器に伴い出土した3点の扁平打製石斧である。

大分県の扁平打製石斧は後期後半の三万田式期である駒方C遺跡では確実に伴う。そしてこの時期には以後、晩期前半までみられる石器組成が完成している。

ところで、大野原の縄文後期後半の遺跡から出土する扁平打製石斧の石材であるが、玢岩・安山岩・結晶片岩の三者で主体を占める。玢岩は祖母山系を源流とする神原川、奥岳川の川原に転礫と

して多量に存在している。このためこれらの下流である。大野原台地の南端を流れる大野川本流、あるいはこの付近で合流する緒方川、奥岳川の川原にも玢岩が転礫として散布している。安山岩は大野原の東側に連なる代三五山に代表されるように、現在の大野原台地の基盤となる阿蘇溶結凝灰岩がこの地域を埋めた際でも、埋めきれなかった山々から産出されている。代三五山の他には三重町大辻山、大野町北側の鎧ケ岳・神角寺山系からも産出される。また結晶片岩はその大部分が緑色片岩であるが、この産出地は、大野原台地の北側に連らなる鎧ケ岳山系にもみられるが、大きな石材は佐賀関半島から産出される。

そこで、これらの石材から大野原台地の縄文後期後半の遺跡である駒方C遺跡、夏足原遺跡の扁平打製石斧をみると、駒方C遺跡では安山岩・結晶片岩がほぼ同量で全体の約80%を占め、玢岩は少なく約20%である。ことろが夏足原遺跡では、玢岩約35%、安山岩40%、結晶片岩約25%である。両遺跡の時期的な差は前者が三万田式期で後者が御領式期主体と時期差はある。そこで大野原台地での扁平打製石斧の石材の取捨選択をみると、一番遠隔地である結晶片岩が、駒方C遺跡では40%、夏足原遺跡でも25%の比率でみられる。次に玢岩であるが駒方C遺跡では20%と少ないものの、夏足原遺跡では約35%と多い。これは夏足原遺跡の時期的な差あるいは、散布地である大野川本流と遺跡のある台地が接するのがその要因と考えられる。そして安山岩は、両遺跡とも40%と安



第82図　大野川流域における扁平打製石斧の主要石材分布位置図

定した量がみられる。このことから、扁平打製石斧出現期である後期後半の大野原では、扁平な節理面をもち、加工の容易な結晶片岩が歓迎される。そして不足するものを、それぞれの集落に近い原石地から安山岩、あるいは玢岩を用い補ったと思われる。しかもその製作にあたっては、遺跡内から石核、剝片の出土量が少ないことから、産出地で加工し、ある程度製品化した後、集落に持ち込んだものと思われる。

以上のように、大野原台地では、縄文前・中・後期後半と、残された遺跡の数は少ない。しかし後期後半、扁平打製石斧の出現と同時に台地上で急激に遺跡が増加し始め、各台地のいたる所で遺物が採集されるという状況になる。

晩期　後期後半から大野川中流域を中心にみられる遺跡の集中は、晩期になると大野川上流域まで拡大し、阿蘇外輪山東麓の菅生台地や荻台地では50個所以上の遺跡が確認されている。一方、大野原台地では、後期後半に比較すると増加する傾向はみられないものの、ほぼ同数の遺跡が確認されている。その代表的な遺跡は宮地前遺跡である。この遺跡は昭和48年、平安博物館により調査されたものであるが、その際、約250点の扁平打製石斧が出土している。その後、遺跡は畑地帯総合土地改良事業により大打撃を受け、多く遺物が露出し周辺の方々により採集されている。それによると、土器は縄文晩期前半を主体としながら後期後半の三万田式土器、御領式土器も出土しており、遺跡としての成立期間の永さがうかがわれる。

大野原台地では、この他宮地前遺跡ほど大規模ではないが、赤鳥居遺跡・夏足原遺跡・松木遺遺跡などで、まとまった資料が出土しており、後期後半と類似した様相を呈する。

九州の縄文晩期は刻目突帯文の出現以前と以後で、前半と後半が区分されて考えている。大野原台地の晩期前半に関しては、前述したとおりであるが、後半になると再び微妙な変化をみせる。この変化は東九州共通の現象か不明であるが、遺跡の数が急に減少し、大分県でまとまった資料が出土しているのは挾間町下黒野遺跡のみである。

下黒野遺跡[註43]は福岡市板付遺跡[註44]、唐津市菜畑遺跡[註45]と同時期と考えられているが、立地条件は大分の縄文後期後半から晩期前半の遺跡と類似し、河岸段丘ではあるが表面を火山灰で覆われた台地上に立地している。しかし、遺物の内容は異なり、土器の組成の中に壺が加わり、土器の組成から打製石斧が欠けている。

この時期は北部九州に本格的な土木技術を伴う稲作が伝播する時期で、それとかかわるためか大野原台地に遺跡は極めて少ない。わずかに知られているのは、小牧遺跡から出土している2点の刻目突帯のある深鉢形土器の口縁部の破片である。これ以外の資料は確認されておらず、大野原台地の縄文晩期後半は不明な点が多い。しかも後続する弥生前期も、北九州系の土器がほとんどみられない。しかし中期には遺跡が増加し、弥生後期には縄文後期後半から晩期前半のように各台地に集落がみられるようになる。この地域における縄文時代から弥生時代への移行は、北部九州や海岸部のそれとは異なる様相がうかがわれる。

註　1．綿貫俊一「縄文式土器―大野町の資料―」大野高等学校社会部　昭和52年
2．橘昌信ほか「稲荷山遺跡緊急発掘調査」（大分県文化財調査報告　第20・21輯）大分県教育委員会　昭和45年
3．小倉正五・栗田勝弘「宇佐地区圃場整備関係発掘調査概報」宇佐市教育委員会　昭和54年
4．清水宗昭ほか「東台遺跡」臼杵市教育委員会　昭和49年
5．戸沢充則「樋沢押型文遺跡」（石器時代　第2号）石器時代研究会　昭和30年
6．橘　昌信「大分県二日市洞穴調査報告」別府大学付属博物館　昭和55年
7．讃岐和夫・牧尾義則「野田山遺跡」大分市教育委員会　昭和54年
8．八幡一郎・賀川光夫ほか「早水台」（大分県文化財調査報告書 第3輯）大分県教育委員会　昭和30年
9．高橋　徹ほか「荻台地の遺跡Ⅵ」荻町教育委員会　昭和56年
10．玉永光洋・後藤一重「菅生台地と周辺の遺跡Ⅵ」竹田市教育委員会　昭和56年
11．田代健二・小柳和宏「竹田地区遺跡群発掘調査概要」竹田市教育委員会　昭和58年
12．賀川光夫「押型文土器共伴資料」（九州考古学　2）九州考古学会　昭和32年
13．高橋信武ほか「横尾貝塚発掘調査概報」大分県教育委員会　昭和57年
14．玉永光洋ほか「惣田遺跡」三重町教育委員会　昭和58年
15．栗田勝弘「平草遺跡」天瀬町教育委員会　昭和57年
16．高橋　徹・高橋信武「荻台地の遺跡　Ⅳ」荻町教育委員会　昭和54年
17．坂本嘉弘ほか「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会　昭和54年
18．賀川光夫・橘　昌信「コウゴ一松遺跡調査報告」久住町教育委員会　昭和49年
19．栗田勝弘「野津川流域の遺跡　Ⅱ」野津町教育委員会　昭和56年
20．清水宗昭ほか「大野原の遺跡」大野町教育委員会　昭和55年
21．高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」（赤れんが　創刊号）赤れんが出版会　昭和56年
22．賀川光夫ほか「立石貝塚」（大分県文化財調査報告　第31輯）大分県教育委員会　昭和49年
23．賀川光夫「大分県中津市植野貝塚発掘調査報告」中津市教育委員会　昭和32年
24．賀川光夫ほか「野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査」（大分県文化財調査報告書第13輯）昭和42年
25．小池史哲「小池原貝塚・横尾貝塚出土の自然遺物」（考古学論叢　1）別府大学考古学研究会　昭和48年
26．牧尾義則ほか「菅生台地と周辺の遺跡　Ⅱ」竹田市教育委員会　昭和52年
27．（註9）に同じ
28．（註18）に同じ
29．（註17）に同じ
30．清水宗昭・牧尾義則「日当遺跡」（大分県文化財調査報告　第58輯）大分県教育委員会　昭和57年
この他、野津町筒井遺跡も同類の遺跡といえる。
31．「耶馬溪町史」耶馬溪町史刊行会　昭和51年
32．穴井通照「筑後川上流の縄文土器」（九州考古学　11・12）九州考古学会　昭和36年
33．昭和52年に朝地町教育委員会で調査、現在大分県教育委員会で整理中
34．宮内克己「九州縄文時代の土偶研究」（九州考古学　55）九州考古学会　昭和55年
35．木下修ほか「元松原遺跡」（岡垣町文化財調査報告書　第4集）岡垣町教育委員会　昭和56年
36．宮内克己「祭祀具・装身具」（大分県史　先史篇Ⅰ）大分県　昭和58年
37．賀川光夫「農耕の起源」講談社　昭和47年
38．渡辺　誠「桑飼下遺跡発掘調査報告書」平安博物館　昭和50年
39．橘　昌信・小池史哲「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第四集」福岡県教育委員会　昭和53年
40．「下吉田遺跡」昭和55年度九州史学研究会発表レジュメ　北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　昭和56年
41．（註17）に同じ
42．賀川光夫「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告書」（大分県文化財調査報告書　第6集）大分県教育委員会　昭和35年
43．清水宗昭・渋谷忠章「下黒野遺跡」大分県教育委員会　昭和49年
44．山崎純男ほか「板付遺跡調査概報」（福岡市文化財調査報告書　第49集）福岡教育委員会　昭和54年
45．中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」（歴史公論　通巻74号）　昭和57年

第2節　大野川中流域における縄文後・晩期土器の編年

（付図参照　番号は付図の土器番号）

大分県の縄文後晩期の土器編年は、これまで、賀川光夫[註1]を中心に、乙益重隆・前川威洋[註2]によりその研究がなされており、筆者も昭和54年に宇佐市の縄文貝塚の報告書をまとめる際縄文後期土器編年の一試案を提示したことがある[註3]。

以上の研究の中でも特に後期の編年は中津市植野貝塚をはじめとする周防灘沿岸や大分市小池原貝塚に代表される。別府湾沿岸の貝塚調査から研究を進めたものである。それらの貝塚は、前節でも述べたが、後期前半で大部分が貝塚形成活動を終了してしまう。このため、編年の資料も後期前半が充実しているのに対し、後期後半は希薄なものとなっている。

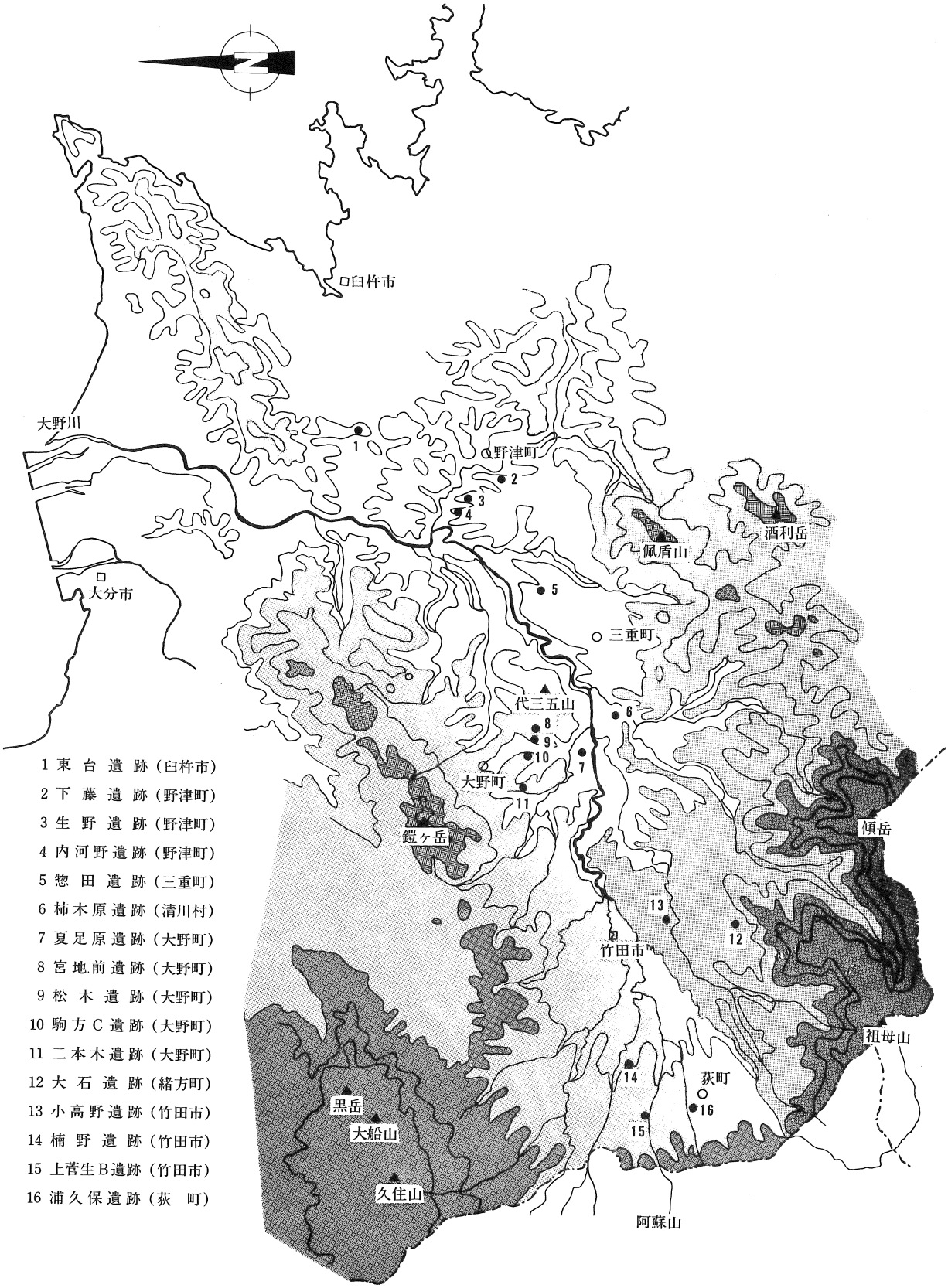
また縄文晩期の編年については、賀川光夫の提唱する大野川流域での縄文晩期農耕論の研究のため調査された遺跡の資料が基準となっている。このため緒方町大石遺跡や直入郡荻町を中心とする大野川上流域の遺跡から出土した資料から、その試論が提示されている[註4]。しかし、これらの編年で明らかにされた資料は、わずかであり、報告書も刊行されていない状態である。

このように、大分県の昭和40年代までの縄文後晩期の編年は、後期前半が充実しているものの後期後半から晩期にかけての西平式・三万田式・御領式などは、散発的な資料や未発表な資料しかなく不明な部分が多かった。ところが、大野川流域で畑地帯総合土地改良事業に伴う調査が開始されると、大野川中流域からは主として縄文後期後半の資料が、上流域から晩期前半の資料が出土し、これらの不明な時期が埋められつつある。

そこで、本稿では、大野川中流域に地域をしぼり、縄文後期後半から晩期前半までの編年を考えてみたい。取扱う主要な遺跡は大野町駒方C遺跡・松木遺跡・夏足原遺跡・宮地前遺跡・小牧遺跡・三重町惣田遺跡・野津町生野遺跡・内河野遺跡・下藤遺跡で半径10㎞の範囲におさまる。立地も阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする標高100～200ｍの火山性台地の上に展開するという共通性をもつ。

東九州の縄文後期前半の編年の概要は、後期初頭に瀬戸内地方から磨消縄文の施文技法のある中津式土器の伝播に始まり、小池原上層式土器に代表されるような九州独特の磨消縄文土器の出現、そして磨消縄文施文技法の簡略化、退行現象がおこり、後期後半には姿を消す。大野川中流域から出土する土器の多くは、この磨消縄文土器の衰退期である北久根山式土器・西平式土器以降のものである。

北久根山式土器は、現在、小池原上層式土器や鐘ケ崎式土器から変遷と瀬戸内地方に分布する津雲A式土器の影響から成立すると考えられている[註5]。一方、西四国に分布する北久根山式土器と同時期の片粕式土器も、平城式土器からの変遷がたどれる。第84図はその模式図であるが、このことについて木村剛朗もすでにふれている。1は典型的な平城式・小池原上層式の胴部文様で、渦巻のの周囲を半月形の磨消縄文帯がめぐる。2は平城貝塚の資料である。類例は少ないが、片粕式土器との間を繋ぐ好資料である。すなわち、胴部の渦巻文が簡略化頸部にみられる入組文は消える。また胴部の渦巻文の周囲をめぐる磨消縄文帯にはさらに1本沈線が加わり、縄文も胴部上位全面に施



第83図　大野川流域の主要遺跡位置図

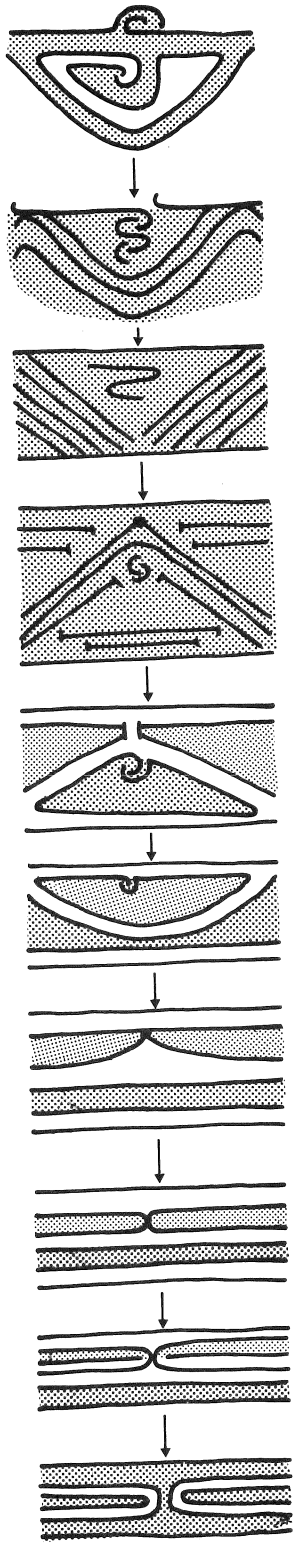
文され、縄文施文帯の上に沈線で文様を描くようになる。そして3になると2よりさらに、簡略化した文様になる。すなわち、胴部上位の縄文帯の上に渦巻文を簡略化した蛇行文とそれを中心に斜行沈線で囲む文様が描れている。この時期を片粕式土器と呼んでおり、高知県片粕遺跡出土の土器[註6]を標式としている。大分県でも大野町夏足原遺跡[註7](1)、小牧遺跡[註8]でもみられ、豊後水道両岸地域に分布する。

次に編年されるのは大野町松木遺跡の資料である。これは高橋信武により仮称された松木式土器(2)にあたる[註9]。この土器は、縄文地文の上に沈線による文様施文など片粕式土器からの伝統を受け継ぐものの、胴部に円形の連続刺突文や、沈線の端を刺突で強調するなど新しい文様要素が加わる。類例は松木遺跡のほか、日田市川下遺跡(3)からも出土しており[註10]、それによると口縁部の形態は波状になるものと水平の2種類が認められる。

この松木遺跡出土の土器は類例が極めて少なく、資料も少量であるため、土器の組成など実体が不明である。このため型式として成立させるにはさらに資料の集積を待たなければならないが、口縁部などの文様は、先行型式の北久根山式とも、後続する西平式土器とも異なり、型式学的にみても一土器型式として成立する可能性が強い。

次に西平式土器であるが、この型式から古式の三万田式土器にかけての文様変遷に関しては高橋信武の分析がある[註11]。それによると、胴部の文様は、第84図の後半のように変遷するという。氏はこの変遷をもとに西平式土器とそれに直続する磨消縄文系三万田式土器をそれぞれ三期に型式分類し編年している。つまり、西平Ⅰ式土器は片粕式土器や松木遺跡の土器にみられた縄文地文上に描かれた蛇行文やC字形の組合せ文を囲む斜行沈線文で構成された三角形状をした文様単位が整い、交互に三角形状と逆三角形状の文様単位が組み合う。そして、一部には、この文様単位の間の縄文を磨消し、磨消縄文土器になっている。西平Ⅱ式は、Ⅰ式に比較すると文様帯が狭くなると同時に、逆三角形状の文様帯も細長くなり、曲線化し長い弧状になる。磨消縄文は明瞭化してゆく。西平Ⅲ式になると、さらにこの傾向は強まり文様帯は頸部周辺に集約化する。また三角形状の文様単位もさらに細長くなり、平行沈線化する。一方逆三角形文は、わずかに名残りを留め、曲線化して残り西平Ⅰ・Ⅱ式にみられた入組文は向い合うC字文として、これと組み合い文様を構成している。

以上が高橋の分析による西平式土器の細分案であるが、先行する松



第84図　縄文後期中葉磨消縄文変遷概念図

木式土器と同様、今日まで各型式で単純な出土資料はなく、土器の組成など不明な点が多い。

しかし、文様変遷からみれば、資料が整えば将来型式として成立する可能性もある。ここでは、片粕式土器・北久根山式土器からの文様変遷のメカニズムとしてとらえ、従来からの型式である西平式土器として捉える。

西平式土器は大野川中流域では、清川村柿木原遺跡[註12]、大野町夏足原遺跡[註13]で出土しているが、単純遺跡はなく、後続する磨消縄文系三万田式土器と複合する場合が多い。

高橋信武の磨消縄文系三万田式土器のⅢ期区分もⅠ式は「西平式の基本型をよく踏襲している。X字文の両側が逆三角形文に、その下の二本直線が本来の三角文に相当する。下部の一本直線も同様である」と考えられている。以下Ⅱ・Ⅲ式とも、この文様の変形と考えられ、背合せになるC字文が離れ、直線文で繋ぐ文様となる。このため土器片をみた場合、磨消縄文系三万田式土器は平行沈線であるが、西平式土器の場合は斜行沈線や曲線文が加わり、判別は容易である。また、口縁部の文様も、二本沈線で囲まれた部分を磨消線文としたものが多く西平式土器の口縁部文様が三本沈線により構成されるのと比較すると簡略化している。さらに新しい文様要素として一部の土器の胴部に横方向の波状沈線文がみられる。これは、東九州に特徴的にみられる土器で、近畿地方からの影響が考えられている[註14]。

この時期の大野川中流域での資料はこの2・3年で増加している。野津町下藤遺跡[註15]・大野町夏足原遺跡[註16]・三重町惣田遺跡[註17]がそれであるが、惣田遺跡と下藤遺跡では、ほぼ単純な状態で出土している。それによると、器種は圧倒的に深鉢形土器が多く浅鉢形土器は極めて少ない。また深鉢形土器は、磨消縄文で飾られるものと無文研磨の2種類がある。両者とも口縁部形態が波状を成すものと、水平のものがある。有文の深鉢形土器は前述したように、平行沈線による磨消縄文である。また無文土器には、口縁端部の内側に一条の沈線文がめぐるものが目立つ。

東九州では、この時期を過ぎると磨消縄文は急速に姿を消す。そして新しい文様要素である羽状文が出現する。代表的な遺跡は、大野町駒方C遺跡である。中でも中心資料となる第Ⅰ区の器種は浅鉢・深鉢・注口土器で構成される。浅鉢はさらに4類に分類されるⅠ類は、口縁部が屈曲して内湾あるいは直口し、その外面に平行沈線や羽状文が施文されている（24・27）。また一部には口縁部に粘土溜を付けるものもある。Ⅱ類はⅠ類から文様を省いたものである（26・30）。Ⅲ類(25)は底部から口縁部へと直線的に延びる器形である。文様は無い。Ⅳ類(29)は胴部で稜を生じて屈曲する浅鉢で、屈曲部と頸部にかけて沈線文と羽状文による文様帯がある。

深鉢は口縁部の形態と文様により4類に分類されるが、大部分は次に述べるⅠ類とⅡ類で占められる。Ⅰ類(31・32)は水平口線の深鉢である。大きさは口径が約30cmのものから、50cmを超えるものまで大きさにバラエティがあるものの形態は同じである。文様は外面には全くなく、口縁部の内面に一条の沈線がめぐる。Ⅱ類(28)は口縁部が3～4の波状を成す形態の深鉢形土器である。これも大きさにバラエティがあるものの形態に類似し、文様も同様である。Ⅲ・Ⅳ類は、この遺跡では特殊な土器としてとらえられる。Ⅲ類(33)は、口縁部が屈曲して立ち、その外面には磨消縄文系三万田式土

器の文様と同じ文様が施文されているが、縄文はみられない。Ⅳ類(34)はⅢ類から文様が消えたものであるが、屈曲した口縁部は激しく内湾している。なお深鉢形土器の底部は全て上げ底状を成す。

注口土器は、第Ⅰ区から2点、G—2区から1点出土している。前者は口縁部と注口部であるが、文様は浅い沈線文で描かれ、その構成は、前段階の磨消縄文系三万田式土器と類似する。後者は研磨された太い沈線と刷毛目状の羽状文、小さな巻貝による押圧文で構成される。両者は全面入念にヘラ研磨されている。

以上、駒方C遺跡出土の土器は、下藤遺跡・惣田遺跡と土器組成や文様の上で大きく異なる。その第1は、全体の一割を占める浅鉢形土器の出現である。浅鉢形土器は、北部九州の福岡県四箇遺跡[註18]や、西北九州の深掘遺跡[註19]、西九州の三万田東原遺跡[註20]などで、磨消縄文系三万田の時期に存在するものの、東九州ではこの時期にならなければみられず、出現期に時間差が認められる。第2に3：1の割合でみられるⅠ・Ⅱ類の深鉢形土器である。前段階の深鉢形土器の比率は、今日資料不足で十分理解できないが、典型的な西平式土器の口縁部が波状であるのに対しては、この時期のその形態の口縁部は少なく減少傾向にあるといえる。第3に数は少ないが注口土器の出現である。注口土器は、東九州では類例が少ないが、この時期以後、晩期初頭までみられる。最後に文様であるが、前段階の三重町惣田遺跡、野津町下藤遺跡で認められた磨消縄文が完全に消滅する。このことは、駒方C遺跡のみでなく、同時期である同町の二本木遺跡[註21]、臼杵市東台遺跡[註22]も同様で、さらに次の時期と考えられる野津町内河野遺跡も含めて証明される。そしてこれに置換されるようにして新しく出現するのが羽状文である。しかし、この時期の羽状文は浅鉢Ⅰ類や注口土器に施文される例が圧倒的で、他の器種にはあまりみられず、特に、深鉢には皆無である。文様施方法として、磨消縄文ほど普通化はみられない。

羽状文のみられる土器群で、駒方C遺跡より新しい傾向を示すのが、野津町内河野遺跡出土の土器群である[註23]。この遺跡は報告によると、住居跡と思われる3個所の遺構に遺物が流れ込むように堆積して出土したという。現在整理中で図示された資料は少ないが、駒方C遺跡と土器の組成や組様など異なる点が認められる。

浅鉢は、駒方C遺跡の組成とほぼ同様であるが、Ⅳ類とした胴部で稜を生じて屈曲するタイプの浅鉢の増加が感じられる(36)。また文様も平口沈線文や羽状文で飾られるものが多い。

一方深鉢は、駒方C遺跡でⅠ類とした水平口線のものはみられるが(41)、Ⅱ類とした波状口縁深鉢形土器は極めて少なくなる。これに変り、目立つのが、Ⅲ類・Ⅳ類とした口縁部が屈曲し内湾するものが多くなるようである(40)。これは屈曲部外面に3本の平行沈線文がめぐり、以後、御領式土器をへて、晩期前半まで、深鉢形土器の主体となる形態の祖形ともいえる。また、これ以外の深鉢として、駒方C遺跡で深鉢Ⅰ類とした土器の胴部上位に平行沈線がめぐるものがあるが、これは西平式土器以来の伝統的な文様の名残りと理解される。

文様は、羽状文と沈線文で構成されるものが多いが、一部に次の御領式土器の凹点文の祖形と思われる。円形の刺突文がみられる。また、深鉢形土器Ⅰ類とした土器の口縁部内面にめぐる一条の沈

線と口縁端部の間に羽状文が施文されているものが認められる(38)。この文様は、広島県馬取貝塚[註24]や岡山県広江・浜遺跡[註25]、奈良県宮滝遺跡[註26]などでもみられ、羽状文の伝播経路を知るうえで重要である。

以上が、内河野遺跡出土の土器の一端であるが、現在整理中で、その内容は不明な部分が多い。本報告での詳細な検討が待たれる。

次に新しく考えられ、後期末に位置づけられる資料は大野町夏足原遺跡F地区から出土している。器種は浅鉢・深鉢・注口土器で構成される。

浅鉢形土器の形態は大きく分けて、口縁部先端で屈曲し、その屈曲部外面に凹線2条をめぐらせるものと(A類　42～45)胴部で一度屈曲し、さらに口縁部で屈曲し、その外面に2条の凹線や、屈曲部に凹点を施文する(B類　46)、2種類が認められる。これらは、駒方C遺跡以来の浅鉢形土器の伝統を引くもので、A類は、駒方C遺跡でⅠ・Ⅱ類とした口縁端部が内湾気味に屈曲するものが、内河野遺跡の時期を経て、この形態になったものと思われる。また、B類は駒方C遺跡でⅣ類とし、内河野遺跡でまとまった量が認められた胴部の屈曲する浅鉢の系統を引くものと考えられる。

次に深鉢形土器であるが、これも大きく分けて、胴部が緩く張り、口縁部が外反する(A類　48)と胴部が屈曲気味に張り、外反する頸部と屈曲して立つ口縁部をもつ(B類　47)の2種類がある。これも先行する内河野遺跡の中にその祖形を求めることができる。A類は、駒方C遺跡で深鉢Ⅰ類としたもので、口縁部内側に沈線が一条めぐるものである。しかし、この夏足原遺跡F地区の資料には、この文様は認められない。またB類は、駒方C遺跡で深鉢形土器Ⅲ・Ⅳ類としたもので、内河野遺跡の時期にその類例を増加させたものである。

次に注口土器であるが、駒方C遺跡のそれに比較すれば、薄く精緻に仕上げられている。また注口土器のみみられる羽状文も、駒方C遺跡の場合、刷毛目状に細かく施されているのに対し、夏足原遺跡F地区のそれは、粗く跳ねるように施文している。

以上が夏足原遺跡F地区出土の土器であるが、土器の組成上、浅鉢形土器が増加し、鉢形土器を加えれば25%になる。また深鉢はA類60%、B類約10%である。文様は、内河野遺跡まで主体的にみられた羽状文が姿を消し、注口土器のみに施文されている。この他、器面は細い沈線文や円形刺突文から研き入れた凹線文や凹点文で飾られている。駒方C遺跡・内河野遺跡に比較すると文様性にとぼしい。また器形の上でも変化が大きく、あるいは内河野―夏足原の間に一時期あるかも知れないし、この間の社会変化の激しさを示すものかも知れない。

さらに、夏足原遺跡F地区の出土の資料の中には、現在態本県で編年されている後期末の鳥井原式土器[註27]―御領式土器[註28]の両者が認められる。しかし、東九州側での遺物の出土状況をみた場合、現状では分離不能であり、将来への問題として残しておきたい。

このように、縄文後期の東九州での文様の変遷は、磨消縄文から沈線文＋羽状文そして凹線文＋凹点文と変化するが、これは近畿地方での元住吉山Ⅰ式から元住吉山Ⅱ式、宮滝式への変化と符合しており、従来から考えられているように、これからの文様要素の伝播により九州の土器文様も変化したと考える。しかし、中間の瀬戸内地方の実態が、今だ不明であり、その組成から併行関係は、

今後の問題として考えてゆきたい。

次に縄文晩期であるが、大野川中流域の調査例としては、平安博物館が昭和48年に調査した大野町宮地前遺跡[註29]がある。この資料は現在、平安博物館で整理中で、内容は明らかでない。しかし、昭和50年、この遺跡が畑地帯総合土地改良事業にかかった際、多量の遺物が出土している。この資料については安藤栄治・高橋信武により報告がなされている[註30]。ここでは、この資料に基づき、編年を試みたい。

現在、東九州での縄文晩期の刻目突帯文出現期までの編年は、3期[註31]あるいは4期[註32]で考えられている。以下、その成果に従い、宮地前遺跡の資料を検討してみたい。

Ⅰ期は、従来大石式土器あるいは晩期Ⅰa式とされていたものである。

深鉢は、縄文後期末の御領式土器の伝統を受け、口縁部が屈曲して直口、あるいは内傾気味に立ち、その外面には3～4条の沈線がめぐる。また、胴部にも御領式土器の深鉢にみられる小さな段の名残りである沈線が一条めぐるものもある。一方、口縁部が単純に外反する深鉢は数が減少するようで、あまりみられない。

浅鉢も、御領式土器の直接的な影響を受けたものと思われ、胴部で屈曲し外反する口縁部の先端が小さく立つ形態のものと、口縁部が小さく「く」の字状に屈曲する2種類がある。これは、先に夏足遺跡F地区の資料で述べた浅鉢A類とB類の変化したものと理解できる。さらに口縁部の文様は二本の凹線文から一本の沈線文に変化している。

このようにⅠ期は、御領式土器の伝統下に成立した土器とも言えるが、新たに沈線文で文様を施した滋賀里Ⅰ式土器が伴う。それゆえに、縄文後期と区別されるわけである。また、御領式土器の文様が磨き込まれた沈線文を文様の基調とするのに対し、この時期の文様は沈線文が主体である。

Ⅱ期は、大石式土器・晩期Ⅰb式・浦久保式土器と呼ばれる土器である。

深鉢は、Ⅰ期に比較し、屈曲して立つ口縁部が外傾し、立ち上り部分の幅も拡大する。と同時に外面をめぐる沈線も数を増し、4本以上となる。また、胴部の張りは鈍い稜を生じる。底部は上げ底が少なくなる。

浅鉢は、Ⅱ期と大きな変化は認められない。しかし、胴部で屈曲し、外反する口縁部の先端が小さく立つ形態のものは、さらに大きく外反部が延びる。この小さな立ち上り部の外面をめぐる沈線は一条でⅠ期と変化はない。

Ⅱ期はⅠ期に比較すると、さらに浅鉢＝精製、深鉢＝粗製という製作上の区分が明確化する。また、大野川上流域の直入郡荻町浦久保遺跡[註33]は、Ⅱ期の単純遺跡であるが、ここでは、滋賀里Ⅱ式土器を伴い出土している。

Ⅲ期は、黒川式土器・晩期Ⅱ式土器の一部と同類の土器で、大野川上流域の竹田市菅生石井入口遺跡[註34]で検出された縄文晩期の住居跡は、この時期の単純時期であろう。

深鉢はⅡ期に比較すると、さらにその特徴を顕著にし、頸部から直線的に、あるいは小さな段を生じて外傾し、その外面には粗い沈線がめぐる。また、一部の深鉢の頸部には粘土粒による蝶ネク

タイ状の飾装が付くものも認められる。底部には円盤貼り付け状のものもみられる。

浅鉢は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とも、深鉢ほど形態上に大きな変化は見い出せない。しかし、Ⅱ期にみられた、外反部が延びる特徴が、この時期にも同様にみられ、口縁部の小さな立ち上がり部はⅠ・Ⅱ期に比較すると、鈍くなり丸味をおびている。竹田市楠野遺跡では、この時期の深鉢と一緒に、近畿地方でみられる彫刻的な三角形の刳込みのある橿原式土器が出土している。[註35]

Ⅳ期はこれまで晩期Ⅱ式・黒川式土器・上菅生B式土器とされたものの一部を示す。

深鉢は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とは様相を異にし、口縁部の形態は内傾、あるいは外反するが、両者とも口縁部外面に一条の突帯がめぐる。Ⅲ期からの系統をたどれば、外反するものは、Ⅲ期の深鉢が形態変化したものに突帯をめぐらせたものと考えられ、また内傾したものは、Ⅲ期の深鉢の外反する口縁部の頸部の屈曲部より上位を欠いだものに突帯をめぐらせたものと理解できる。

浅鉢は、Ⅱ・Ⅲ期以来の伝統的なものに加えこの時期の特徴的なものとして、胴部が扁球状に大きく張り、口縁部が短かく立つものがみられる。また口縁部にはリボン状の突起が付く。

なお最近この時期の資料は増加しつつあるが、遺跡として単純なものは知られていない。あるいは、Ⅲ期または次に編年されている刻目突帯文のに含まれるものかも知れない。時期区分として独立させるのはなお今後の検討を要する。

以上が大野川中流域に多くみられる縄文後期中葉から晩期前半までの土器の編年であるが、これ以降、弥生時代前期にかけて資料は少なく今後の問題として残される。

註
1．賀川光夫「縄文文化の発展と地域性―九州東南部」（日本の考古学　Ⅱ）河出書房新社　昭和40年
2．乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化―九州」（新版考古学講座3　先史文化）雄山閣　昭和44年
3．坂本嘉弘ほか「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会　昭和54年
4．賀川光夫「縄文晩期文化―九州」（新版考古学講座3　先史文化）雄山閣　昭和44年
5．（註2）に同じ
6．岡本健児ほか「高知県片粕遺跡」（高知県文化財調査報告書　第19集）高知県教育委員会　昭和50年
7．坂本嘉弘「大野原の遺跡　Ⅱ」大野町教育委員会　昭和52年
8．高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」（赤れんが　創刊号）赤れんが出版会　昭和56年
9．（註8）に同じ
10．栗田勝弘「大分県の縄文時代遺跡―筑後川流域」（大分県史　先史篇Ⅰ）　昭和58年
11．（註8）に同じ
12．渋谷忠章編「大分県内遺跡詳細分布調査概報　2」大分県教育委員会　昭和58年
13．（註7）に同じ
14．近畿地方の元住吉山Ⅰ式土器にみられる連弧文が変化・退化した文様と考えられる。
15．高橋信武「野津川流域　Ⅳ」野津町教育委員会　昭和58年
16．（註7）に同じ
17．玉永光洋ほか「惣田遺跡」三重町教育委員会　昭和58年
18．柳田純孝「四箇周辺遺跡調査報告書　(2)」（福岡市埋蔵文化財調査報告書　第47集）福岡市教育委員会　昭和53年

19．内藤芳篤編「深掘遺跡」（人類学考古学研究報告　第１号）長崎大学医学部解剖学第二教室 昭和42年
20．坂本経堯他「三万田東原調査概報」泗水町教育委員会　昭和47年
21．清水宗昭ほか「大野原の遺跡」大野町教育委員会　昭和55年
22．賀川光夫・清水宗昭ほか「東台遺跡」臼杵市教育委員会　昭和49年
23．栗田勝弘・後藤一重「野津川流域の遺跡　Ⅲ」野津町教育委員会　昭和57年
24．松崎寿和ほか「松永市馬取遺跡調査報告」（広島県文化財調査報告　第４集）広島県教育委員会　昭和38年
25．間壁忠彦・間壁葭子「広江・浜遺跡」（倉敷考古館研究集報第14号）倉敷考古館　昭和54年
26．末永雅雄「宮滝の遺跡」（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第15集）　昭和19年
27．富田紘一「鳥井原遺跡調査報告書」熊本県教育委員会　昭和52年
28．坪井清足「御領貝塚の発掘調査」（城南町史）城南町史刊行会　昭和40年
29．渡辺　誠「大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報」平安博物館　昭和48年
30．安藤栄治・高橋信武「大分県宮地前遺跡の採集資料―大分の晩期前半を中心とした土器編年」（赤れんが　第２号）赤れんが出版会　昭和57年
31．高橋　徹「大分県考古学の諸問題（Ⅰ）―刻目突帯文土器の出現とその展開について」（大分県地方史　第98号）大分県地方史研究会　昭和55年
32．玉永光洋・後藤一重ほか「楠野遺跡」（大分県文化財調査報告書　第63輯）大分県教育委員会　昭和58年
33．高橋　徹ほか「荻台地の遺跡　Ⅳ」荻町教育委員会　昭和54年
34．玉永光洋・後藤一重「菅生台地と周辺の遺跡　Ⅳ」竹田市教育委員会　昭和56年
35．（註32）に同じ

第3節　扁平打製石斧について

駒方C遺跡から出土した扁平打製石器類は扁平打製石斧・横刃形石器・十字形石器・円盤状石器の4器種54点が出土した。中でも扁平打製石斧が圧倒的に多く、全体の80%以上を占める。

以下、扁平打製石斧について若干の考察を加える。

1. 石　材

当遺跡出土の扁平打製石斧に利用される石材は大きく3種類に限定できる。

1）は大野川流域で採取される、傾山系で産出する石英玢岩で、この石材利用の石斧は、一般的に片面に自然面を残し、刃部は円礫剥離の剝片の尖部をそのまま利用するといった量産目的の荒い加工の物が多く、このタイプの石斧には大型製品が多い。形態的には基部と刃部幅の較差の大きい「撥形」を呈する。全体の20%の使用量である。

2）は遺跡とは非常に近距離にある同町片島で産出する通称「片島石」あるいは「鉄平石」と呼ばれる輝石安山岩で、同石材は節理面から扁平に剝離し、比較的堅固な性質をもつ。剝離当初から角礫棒状の様相を呈しており、この結果、この石材利用の石斧は基部と刃部幅の較差の少ない長方形状を呈する。産出地及び加工の容易さから、この石材利用石斧は全体の40%を占める。しかし、使用頻度の高い石材のためか、石斧の欠損品の半数以上も当石材が占める。

3）は朝地変成岩中に含まれる緑色片岩で、これも同北町で産出される。板状に剝離し、粘質力は強いが強打には弱い性質をもち、従って当石材利用石斧には欠損品が多い。原石産出地が近距離である事、加工が容易である事等から2同様40%の利用率である。

横刃形石器とした器種も前2石材が主体となる。

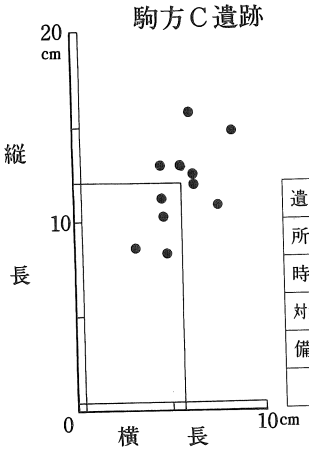
2. 形　態

県下で縄文時代後期から晩期初頭にかけて多量に出土する扁平打製石斧はその形態から「撥形」、「短冊形」、「分銅形」に3分類されることが多い。この中で「分銅形」は県下ではその出土量は少量で、しかも晩期に集中する傾向があり、従って県内縄文時代後期遺跡である野津町内河野遺跡[註1]、大野町夏足原遺跡[註2]、竹田市楠野遺跡[註3]等では「撥形」と「短冊形」に限定される。この形態は地域あるいは石材に関係なく普遍的なものと言える。しかしながら「撥形」と「短冊形」石斧の2者の利用頻度には各地域でその較差を見出すことが可能である。これは前述した素材となる石材剝離の結果生じる剝片の形態がそのまま石斧の形体に反映されるといった消極的な結果によるものと思われる。つまり遺跡周辺で豊富に産出される石材の利用頻度が当然高くなり、これがそのまま較差として現われる。

このことから推察すると扁平打製石斧の形態変化は利用目的に応じた結果によるものとは考えに

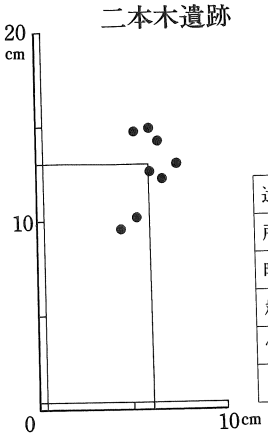
第34表　　大野川流域各遺跡出土扁平打製石斧縦長・横長対比表

駒方C遺跡



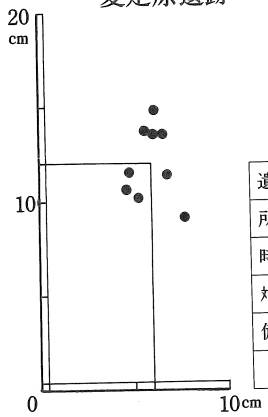
遺跡名	駒方C遺跡
所在地	大野郡大野町
時　期	後期後半(三万田)
対象点数	11　点
備　考	大野川中流域

二本木遺跡



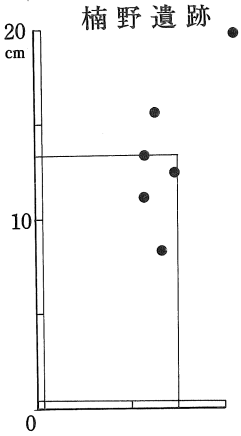
遺跡名	二本木遺跡
所在地	大野郡大野町
時　期	後期後半
対象点数	8　点
備　考	大野川中流域

夏足原遺跡



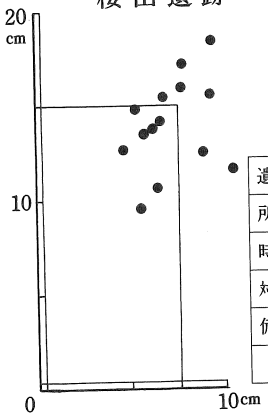
遺跡名	夏足原遺跡
所在地	大野郡大野町
時　期	後期後半～晩期初
対象点数	9　点
備　考	大野川中流域

楠野遺跡



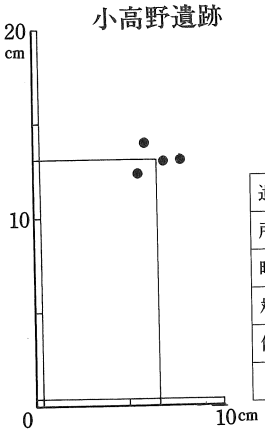
遺跡名	楠野遺跡
所在地	竹田市
時　期	後期後半～晩期初
対象点数	6　点
備　考	大野川上流域

桜山遺跡



遺跡名	桜山遺跡
所在地	直入郡荻町
時　期	晩期初頭(1式)
対象点数	15　点
備　考	大野川上流域

小高野遺跡



遺跡名	小高野遺跡
所在地	竹田市
時　期	晩期初頭(1式)
対象点数	4　点
備　考	大野川上流域

くい。

3. 重　量

完形品のみを対象とした重量は34ｇから344ｇと幅があり、平均約150ｇである。しかし重量比定については、サイズ、石質等でその差異が大きくなるため、ほとんど意味がない。

ただ同遺跡における玢岩を素材とする石斧は、その剝片剝離の性格上、他２石材利用石斧の断面厚平均が1.4cmに対し、1.9cmと圧倒的に厚く、従って重量も重いものが多い。

4. 大きさ

扁平打製石斧の形態差が利用石材差によるものと前述したが、ここでは地域、時期面から、石斧の大きさに差異があるか否かについて検討するために、大野川中・上流域所在の縄文時代後・晩期遺跡を選出して比較の対象資料とした。

対象とした遺跡は、大野川中流域では、後期後半期の大野町所在二本木遺跡[註4]、やや新しく位置づけられる同町夏足原遺跡、上流域では竹田市楠野遺跡と縄文時代晩期初頭に入り竹田市小高野遺跡[註5]荻町桜山遺跡[註6]でこれらの遺跡から出土の完形扁平打製石斧の縦長、横長比により大きさを比較してみた。ただし、比較資料が各遺跡とも少量であり厳密なデーターとは言えず、平均値による考察を行った。

この結果、時期的にも地域的にも明確な変化が認められた。具体的には、時期面から見ると、後期後半の石斧より晩期初頭期に出土する石斧の大きさが明らかに拡大していることで、このことは形態的には「短冊形」とした細身の長二等辺三角形状から、刃部幅の広い「撥形」への変化であり、駒方Ｃ遺跡の平均値と比較すると、縦長で３cm、横長で２cmもの差が生じてくる。

また、地域的に見ても中流域より上流域出土石斧はやはり拡大化する傾向がうかがえる。

上記の結果だけ見ると、石斧の拡大化の原因が筆者の言う素材差と吉留秀敏[註7]の指摘する時代差のいずれの可能性も示唆するようであるが、比較対象とした資料が非常に偏在的[註8]であり、いずれかの限定にはさらに資料の増化を期待したい。

註

1. 後藤一重・栗田勝弘「野津川流域の遺跡　Ⅲ」　野津町教育委員会　昭和57年
2. 牧尾義則・玉永光洋「大野原台地の遺跡　Ⅲ」　大野町教育委員会　昭和53年
3. 玉永光洋編「楠　　野」（大分県文化財調査報告　第63輯）　大分県教育委員会　昭和58年
4. 二本木遺跡出土の扁平打製石斧の時期決定は研究者により差があり断定はできないが、ここでは吉留秀敏「先土器時代・縄文時代の石器」（「楠野」大分県文化財調査報告　第63輯）の時期設定を採用した。
5. 賀川光夫編「小高野遺跡調査報告」（別府大学考古学研究報告　４）別府大学　昭和49年
6. 賀川光夫編「大分県荻町桜山遺跡―縄文晩期農耕の起源に関する研究」　（別府大学考古学研究報告　４）　昭和46年
7. 注３と同じ
8. 県内の縄文時代後期遺跡は大野川中流域までに集中しており、上流域になると、その数は減少する。ところが晩期に入ると全く逆の傾向を呈するようになり、互いに比較資料の偏在性が強く、現状の資料では非常に対比困難。

第4節　縄文晩期刻目突帯文土器系の甕（深鉢）形土器について

今回の大野原台地の先史時代の遺物で注目されるのは、駒方B遺跡出土の埋葬に使用されたと思われる土器がある。器種は全て甕(深鉢)形土器で、浅鉢形土器あるいは壺形土器は出土してない。このため時期を決定するためには、他の地域の類似資料との対比を行なう必要がある。

まず、駒方B遺跡出土の資料の器形の共通点であるが、いずれも胴部で屈曲し、口縁部は内傾あるいは直口気味に立つ。さらに、胴部の屈曲部外面に1条、口縁部外面にも1～2条の刻目突帯文がめぐる。器面の調整は撫で仕上げと思われ、特別な器具による調整痕はみられない。このような器形、文様を持つ土器としては縄文時代最終末期の夜臼式土器がある。そこで、大分県の夜臼式土器の単純遺跡である挾間町下黒野遺跡出土の甕形土器と比較する[註1]。下黒野遺跡の甕形土器は、胴部の屈曲部が駒方B遺跡のそれよりも上位にある。また器面には横方向の貝殻条痕文がみられる。このように夜臼式土器と比較した場合、駒方B遺跡の甕形土器は様子が異なり、ただちに同時期というわけにはいかない。

そこで、大野川流域の同様な墓地遺跡である竹田市小高野遺跡の土器と比較する[註2]。小高野遺跡の甕形土器は、駒方B遺跡出土のそれと器形や胎土は極めてよく似ている。ただ異なるのは、口縁部と胴部をめぐる突帯文を斜格子状や鋸歯状に突帯で繋ぐ文様が目立つことである。また、この遺跡からは、大野川中・上流域では珍しい壺形土器が出土している。これは口縁部が肥厚し、頸部と胴部の境界に浅い沈線もみられる。また胎土も甕形土器が暗茶色を呈するのに対し黄茶色である。この土器を北部九州の壺形土器と比較すれば、口縁部の特徴などから弥生前期後半に編年されている板付Ⅱ式土器に比定できる。出土状況も埋葬遺跡という性格のためか、甕形土器に大きな時期差は認められず、しかも小高野遺跡の出土遺物の中には、縄文晩期前半の遺物があるものの弥生前期のまとまった資料はなく、この壺形土器は駒方B遺跡出土の土器と類似する甕形土器と同時期と考えられる。

さらに、追加資料として久住町内畑遺跡の資料がある[註3]。この遺跡は水系的には大分川流域になるが、大野川水系と近接し、しかも地形的に類似しているため、同一地域として把握することができる。出土土器は少ないが生活遺跡のためかバラエティは富む。大小の壺形土器、北部九州系の胴部に縦方向の刷毛目のある甕形土器、それに、駒方B遺跡・小高野遺跡で埋葬用の土器として出土した、調整痕のない、厚手で胴部の屈曲部に刻目のある暗茶色をした甕形土器の破片がみられる。

これらの土器を検討してみると、壺形土器は口縁部の単純な外反胴部と頸部の境に明瞭に沈線や小さな段がみられるなど、小高野遺跡の壺形土器より若干古式の様相をもつ。しかし北部九州系の甕形土器をみると、如意状口縁のそれは、口縁部下端に刻目があり、いわゆる板付Ⅱ式土器として認知されうるものである。内畑遺跡の資料は、県立三重農業高校久住分校の牛舎建設の際出土したものであるが、弥生時代前期の直前あるいは直後の遺物は出土しておらず、小高野遺跡とほぼ同時期である弥生前期後半と考えてもさしつかえないものと思われる。

こうしてみると、駒方B遺跡出土の甕（深鉢）形土器は、弥生時代前期後半として理解して間違

いないものであろう。

駒方B遺跡の甕（深鉢）形土器が弥生前期後半とした場合、次に問題になるのは、大野川上・中流域での縄文時代から弥生時代への移行の問題である。大野川上・中流域を中心とする地域の縄文時代から弥生時代にかけてこれまで理解されていた様相は縄文晩期前半に多くの遺跡が認められるものの、晩期後半にはその数も減少し、弥生時代前期の遺跡は皆無という状況であった。そして中期に再び遺跡が目立ちはじめ、後期中葉から後半にかけて爆発的に増加し、再び縄文晩期前半のような状況になる。駒方B遺跡・小高野遺跡・内畑遺跡出土の資料は、こうした空白の時期を埋める良好な資料である。

この時期の出来事として重要なことは北部九州への稲作の伝播である。縄文晩期の突帯文土器の時期にはすでに北部九州に本格的土木技術や大陸系磨製石器を伴う稲作が伝播していることは佐賀県唐津市菜畑遺跡[註4]や、福岡市板付遺跡[註5]の水田跡の調査で明らかになっている。この稲作の大分県への伝播状況をみると、弥生時代前期後半には伝播しているようである。たとえば宇佐平野の宇佐市台ノ原遺跡[註6]、日田盆地の日田市吹上遺跡[註7]、安心院盆地の宇佐郡安心院町宮ノ原遺跡[註8]。大分平野では大分市雄城台遺跡[註9]がその代表的遺跡で稲作と直接関係する大陸系磨製石器である石庖丁や扁平片刃石斧が板付Ⅱ式土器に伴い出土している。

大野川中・上流域における縄文時代晩期から、弥生時代前期にかけての遺跡の増減は、この出来事に呼応するように変化している。しかも、先にあげた板付Ⅱ式土器と石庖丁を出土する宇佐平野や内陸盆地、大分平野などの沖積平野の発達した地域には、縄文晩期の遺跡が大野川流域に比較すると極めて少ない地域であり、稲作の伝播とともに遺跡の出現する地域とも言える。

そこで、大野川上・中流域での縄文時代末期から弥生時代前期の空白な時期は、大野川流域から沖積平野へと、直接的あるいは関接的な人間の移動があったことも十分考えられる。そして、弥生時代中期から再び遺跡が目立ちはじめ、後期に爆発的に増加するのは、この新しい栽培技術や植物によるためと考えられる。

しかし、一方で駒方B遺跡や小高野遺跡などのように縄文時代の刻目突帯文土器の伝続を強く残す土器もある。この地域は、縄文後半から晩期前半にかけて、九州でも熊本県の菊池台地、長崎県島原半島と並んで遺跡の急激な増加がある。しかも、出土する石器は扁平打製石斧や石皿などで、極めて植物食依存度の強い様相を示している。賀川光夫が原始的な焼畑農耕の存在を問うている地域でもある。駒方B遺跡や小高野遺跡の甕形土器の存在は、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての急激な社会変化があってもなお、この地域にとどまった人々の残したものと理解され、空白と考えられた時期でも無住の地ではなかったことを示している。なお、駒方B遺跡や小高野遺跡でみられた。甕形土器による覆甕棺方法の墓制は、北部九州で弥生前期後半からみられる甕棺葬とは甕の大きさや埋置方法を異にする。その伝統は縄文時代に求めなければならないがこの地域の縄文時代のそれは、竹田市ネギノ遺跡[註10]、朝地町田村遺跡[註11]でみられるように合せ口もある。また単棺による甕棺も長崎県山ノ寺梶木遺跡[註12]、熊本県城・下原遺跡などで確認されており、島原半島から菊池台地、大

野川中・上流域とかつて縄文晩期遺跡の多かった中部九州に多くみられる[註13]。しかし、まだ覆甕単棺の例は少なく、この方法による葬制は、この地域のこの時期だけの特殊なものか否かは、今後の検討が心要であろう。

ところで、縄文晩期の刻目突帯文土器のその後の展開であるが、今日までにその系統は弥生土器の甕形土器の中にみられる。西北九州を中心に分布する亀ノ甲式土器、東九州を中心に分布する下城式土器がそれである[註14]。ところが駒方B遺跡などで出土した甕形土器の器形は胴部が屈曲し、器面調整に刷毛目を使用しないなどの点からみれば、亀ノ甲式や下城式土器より、さらに、刻目突帯文の特徴を強く残すものである。しかも、これら3タイプの甕形土器は、弥生時代前期後半から中期初頭にかけてほぼ同時に存在するものである。そこで九州の中部以北では、従来考えられていた、亀ノ甲式土器、下城式土器の分布圏に狭まれるように、阿蘇・久住連山を中心とした内陸部により刻目突帯文土器の伝統を強く残す甕形土器を用いる地域があったことが想定される。

次に、亀ノ甲式土器、下城式土器、および駒方B遺跡などで出土した刻目突帯文土器の展開を考えてみる。

亀ノ甲式土器は、弥生時代前期末から中期初頭に福岡県八女地方から北部九州にかけてみられる土器で、板付Ⅱ式土器などの如意状口縁の甕形土器と一諸に出土する。そして、それ以降になると、みられなくなる。刻目突帯文の土器の伝統を引くものの、弥生中期初頭で姿を消す土器である。

下城式土器の最古式の土器は大分県でも海岸部や県北部に多くみられる。宇佐平野の台ノ原遺跡、安心院盆地の宮ノ原遺跡、大分平野の雄城台遺跡がその代表的な遺跡で板付Ⅱ式土器を伴い出土する。これらの遺跡で出土する下城式土器はいずれも亀ノ甲式土器と同じ弥生前期末である。しかし、下城式土器はその後、さらに形態変化をしながら中期まで残り、分布範囲も大野川の中流域まで広がる。一部では後期初頭まで、その存在の可能性が考えられる。

次に最も刻目突帯文土器の伝統を残す一群の甕形土器であるが、その分布の中心と思われる大野川上流域では、弥生後期後半に頸部から胴部にかけて工字状の突帯がめぐる甕形土器がある。この土器は九州の他の地域ではみられず、この地域だけの特殊な土器と言える。その祖形となるものは、下城式土器が考えられているが[註15]、器面調整に刷毛目が見られず、器壁も厚い。弥生中期にこの地域にみられる下城式土器との器形や器面調整上の格差には大きいものがある。一方、駒方B遺跡や小高野遺跡出土の甕形土器と比較すれば、器形は大きく異なるが土器の胎土や器壁の厚さ、器面調整に刷毛目を残さない点など、類似点も多い。この土器が弥生中期から後期にかけて、他地方の影響や植物処理の変化などで形態変化し、弥生後期後半の工字状突帯文の甕形土器に続く可能性は十分考えられる。そうすれば、刻目突帯文土器の伝統は、弥生後期後半まで残ることになる。

以上のように、3地域に分布する刻目突帯文土器の展開をみれば、亀ノ甲式土器は弥生中期初頭、下城式土器は中期末、大野川中・上流域の甕形土器は後期後半で姿を消してしまうと言える。この刻目突帯文系土器消滅の時期差は、あたかも北部九州に最初に伝播する“弥生文化”とそれまで存

在した“縄文文化”との関係を象徴するように思われる。つまり、縄文時代末期に北部九州に伝播する水稲栽培を生産基盤とする新しい文化である“弥生文化”は、最初西北九州に広がり、次に東九州、そして最後には大野川上・中流域のような九州内陸部と広がる。それに従い亀ノ甲式土器・下城式土器・大野川上流域にみられる工字状突帯の甕形土器は、この“弥生文化”の浸透により消え去って行く“縄文文化”の名残りのひとつとも考えられないだろうか。

以上、大野川中・上流域の縄文時代晩期後半から弥生時代にかけて考えたわけである。現在駒方B遺跡・小高野遺跡・内畑遺跡など資料が増加しているが、まだ完全に埋めきれるものでない。この地域の縄文時代から弥生時代にかけての移行期の遺跡の調査が待たれる。

註1. 清水宗昭・渋谷忠章「下黒野遺跡」大分県教育委員会　昭和49年

2. 昭和47年別府大学により調査され、現在整理中であるが、一部牧尾義則「大分県の縄文時代遺跡—大野川流域—」（大分県史　先史篇Ⅰ）昭和58年に紹介されている。

3. 渋谷忠章・坂本嘉弘「久住町内畑遺跡出土の土器—弥生前期の豊後内陸部の様相—」（大分県地方史　第110号）大分県地方史研究会　昭和58年

4. 中島直幸「唐津市菜畑遺跡の水田跡・農工具」（歴史公論　通巻74号）　昭和57年

5. 山崎純男ほか「板付遺跡調査概報」（福岡市埋蔵文化財調査報告書　第49集）福岡市教育委員会　昭和54年

6. 後藤宗俊ほか「台ノ原遺跡」（大分県文化財調査報告　第33輯）大分県教育委員会　昭和50年

7. 村上久和「吹上遺跡　Ⅰ・Ⅱ」日田市教育委員会　昭和55・56年

8. 坂本嘉弘「宮ノ原遺跡　1・2」安心院町教育委員会　昭和57・58年

9. 昭和46年以来7次にわたり大分県教育委員会により調査され、弥生前期の貯蔵穴をはじめ、多くの資料が出土している。現在、整理中である。

10. 賀川光夫「縄文時代のカメ棺」（考古学ジャーナル　34・35・37）ニューサイエンス社　昭和43年

11. 古田正隆「山の寺梶木遺跡」（百人委員会埋蔵文化財報告　第1集）百人委員会刊　昭和48年

12. 倉原謙治ほか「城・下原遺跡」山鹿市教育委員会　昭和55年

13. 賀川光夫「西日本のカメ棺一覧」（考古学論叢　2）別府大学考古学研究会　昭和49年

14. 小田富士雄「入門講座　弥生土器—九州2—」（考古学ジャーナル　77）ニューサイエンス社　昭和48年

15. 牧尾義則「菅生台地と周辺の遺跡　Ⅱ」竹田市教育委員会　昭和52年の中の結語で鳥養孝好が述べており、高橋徹・高橋信武「荻台地の遺跡　Ⅳ」荻町教育委員会　昭和54年の中で、高橋徹がさらに具体的に論じている。

大野原の台地群
（神角寺より遠望）

大野原台地の土層
駒方遺跡

大野原の台地群遠望と土層

写真図版2

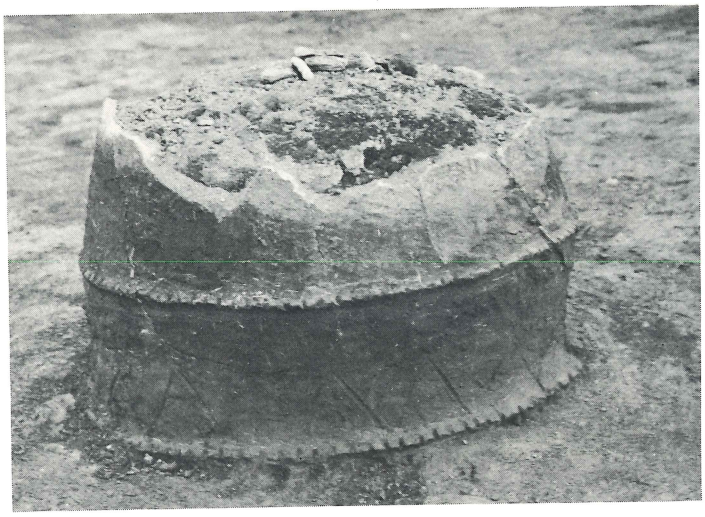
3 号甕棺

2 号甕棺

4 号甕棺

駒方B遺跡甕棺出土状況(1)

6 号甕棺



7 号甕棺

5 号甕棺

駒方B遺跡甕棺出土状況(2)

1号甕棺

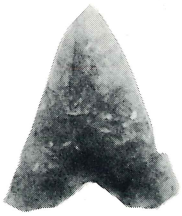
5号甕棺

駒方B遺跡出土土器(1)　　縮尺1/3

3 号甕棺

7 号甕棺

8 号甕棺



1/1

駒方B遺跡出土土器及び石鏃　　土器縮尺1/3

駒方C遺跡試掘調査の状況

3

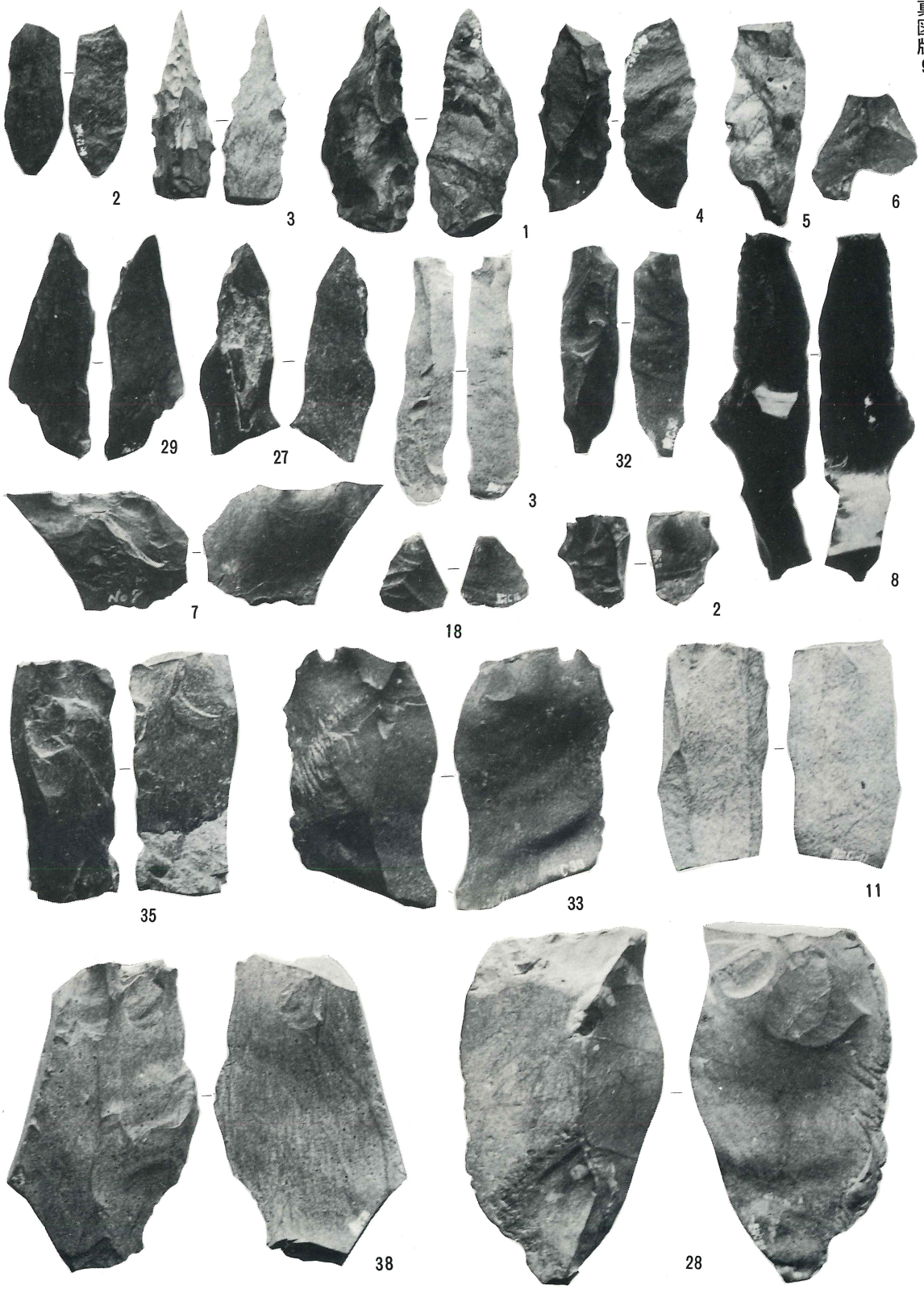
29

左から
4・3・2

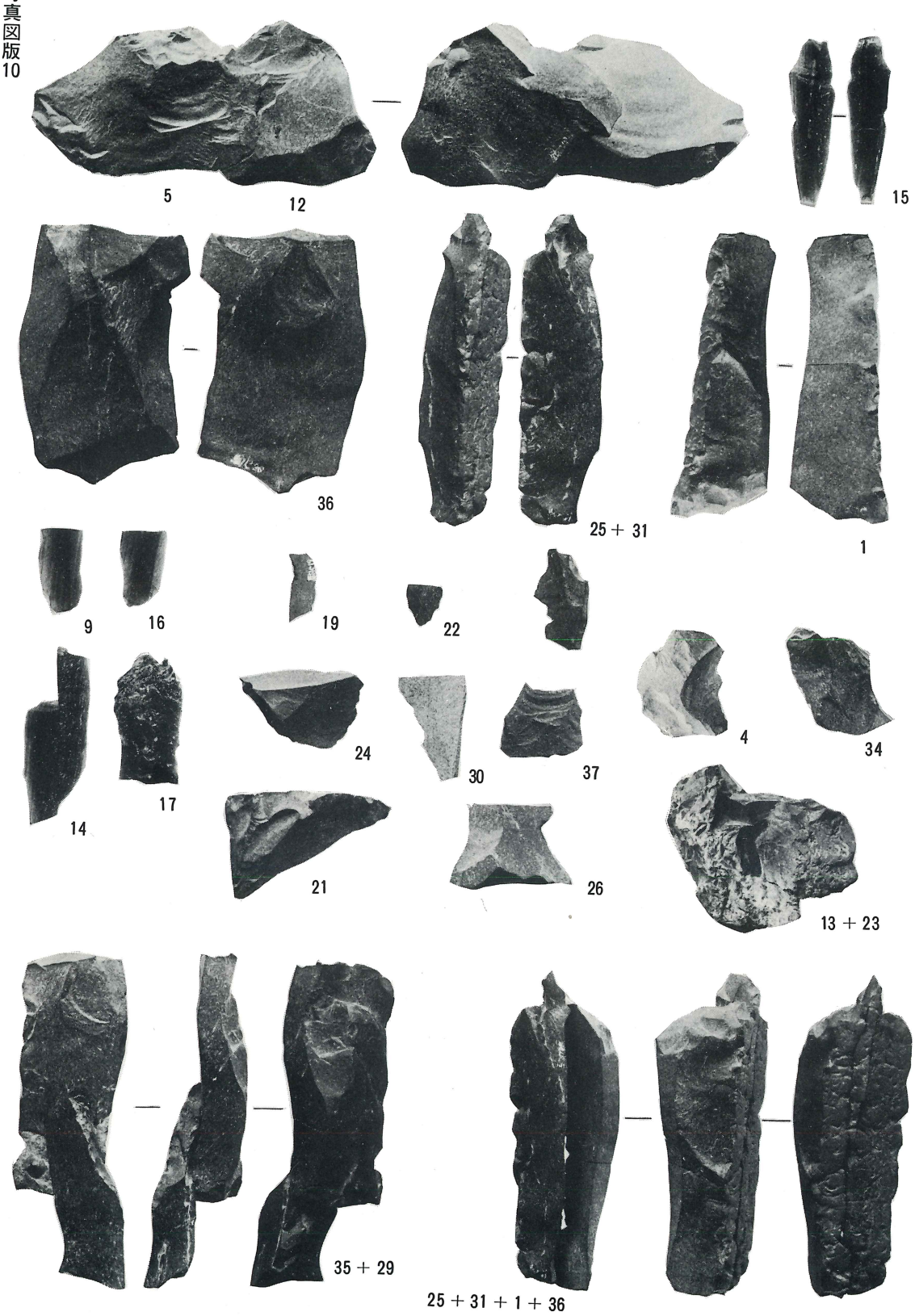
左から
32・33・34

駒方C遺跡第Ⅳ区　遺物出土状況

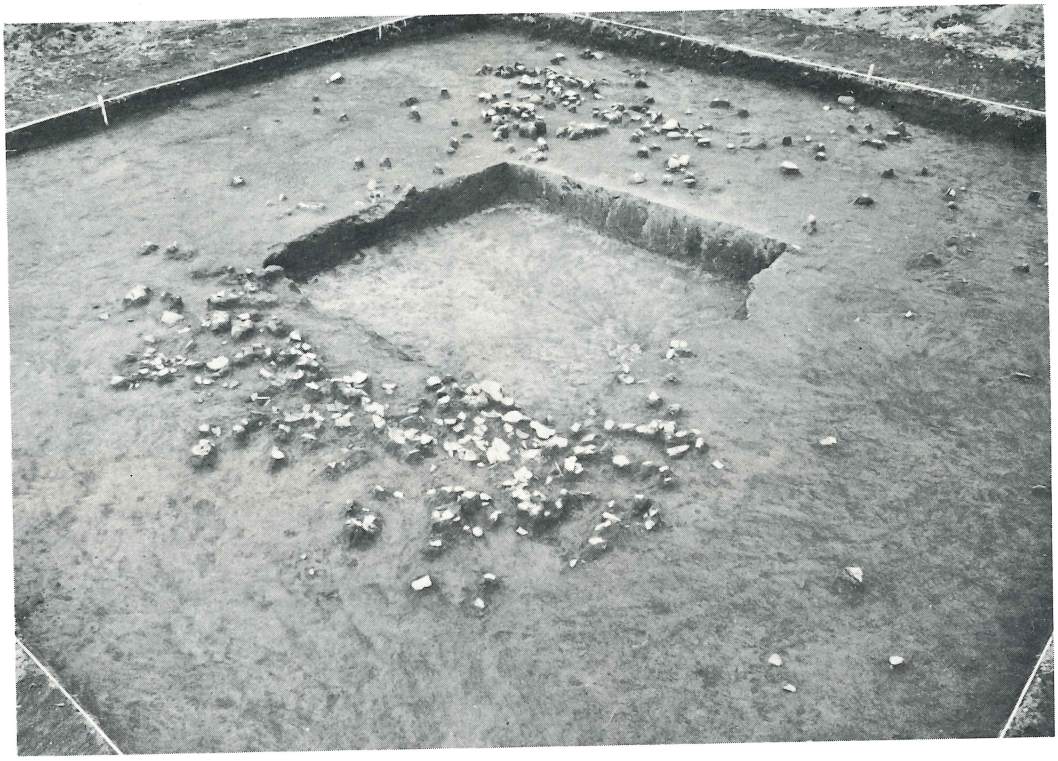
駒方C遺跡第Ⅳ区検出先土器時代遺構

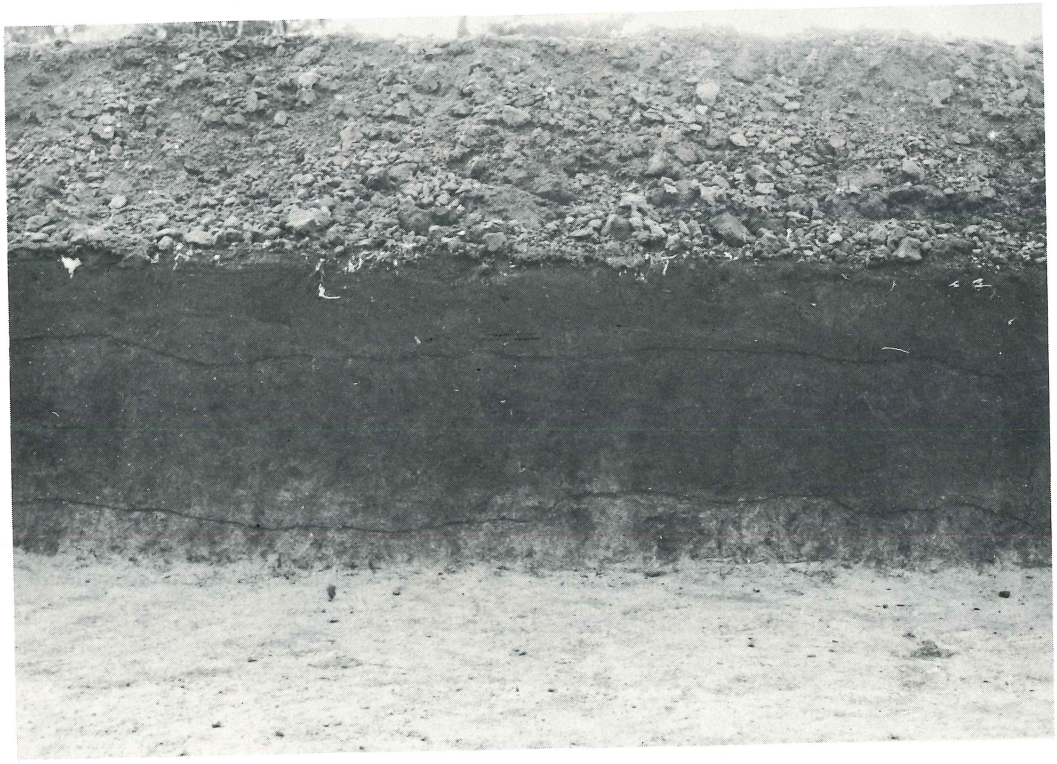


駒方C遺跡上部及び下部（第Ⅳ区）出土の先土器時代遺物　縮尺2/3

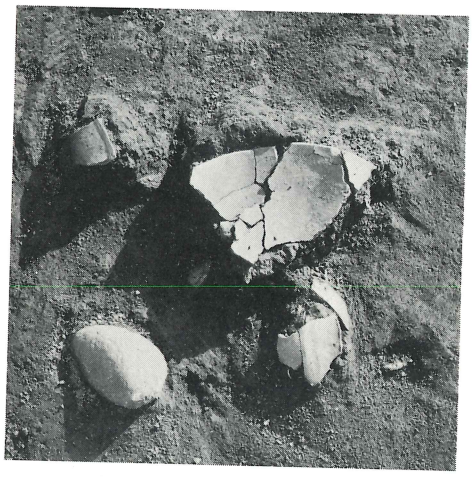


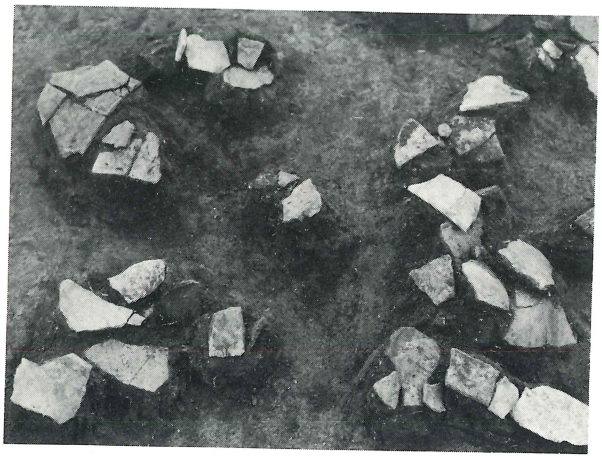
駒方C遺跡下部（第Ⅳ区）出土の先土器時代遺物及び接合状況　縮尺2/3

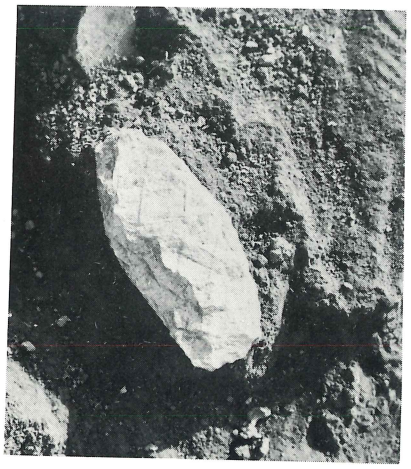




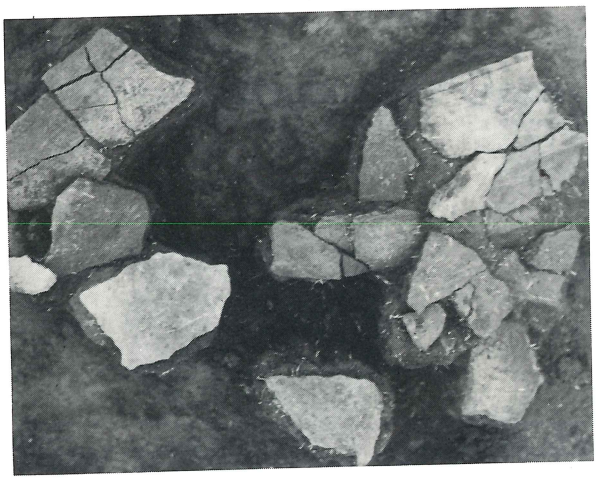
駒方C遺跡第Ⅰ区遺物出土状況及び土層



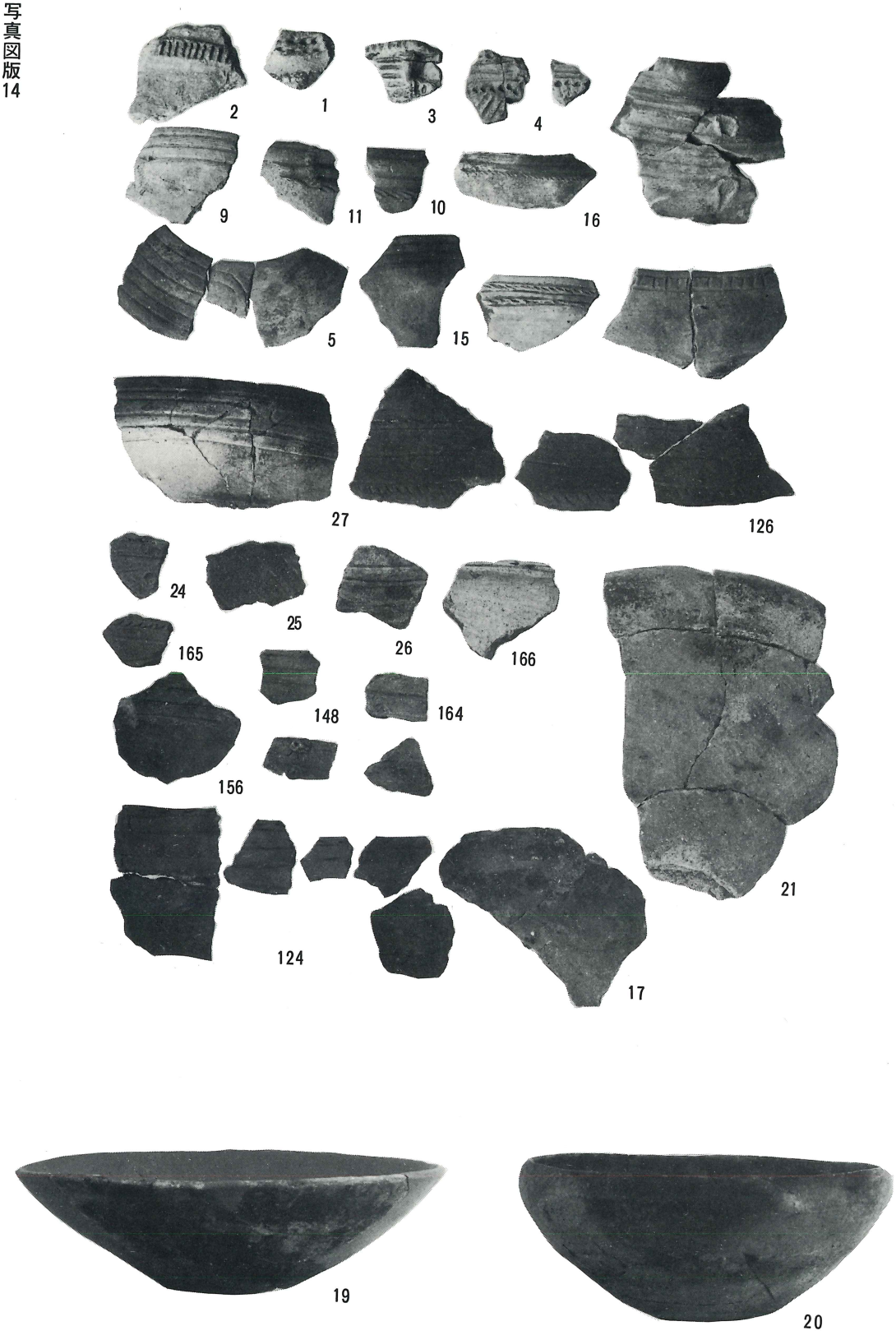




駒方C遺跡第Ⅰ区遺物出土状況(1)

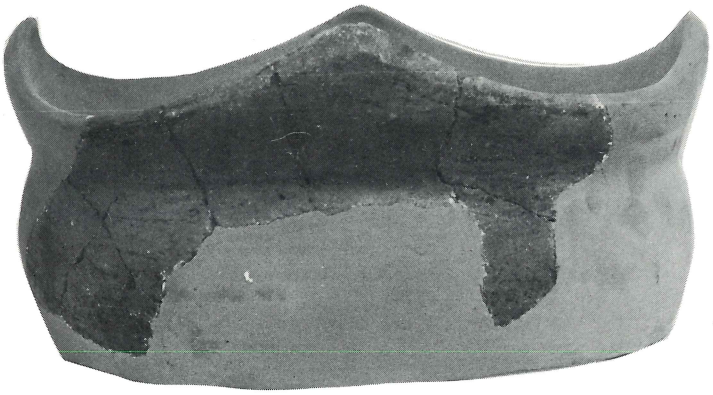


駒方C遺跡第Ⅰ区遺物出土状況(2)

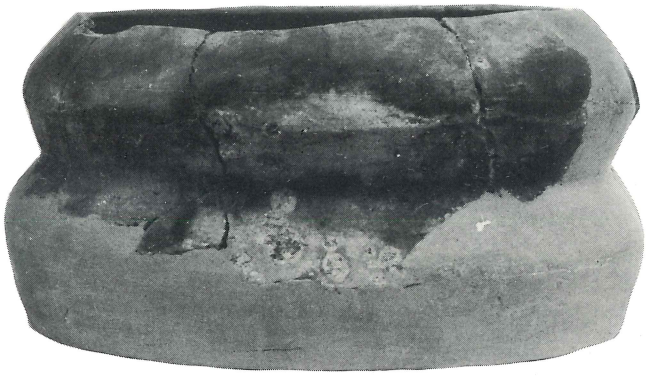


駒方C遺跡出土土器　　縮尺1/3

74

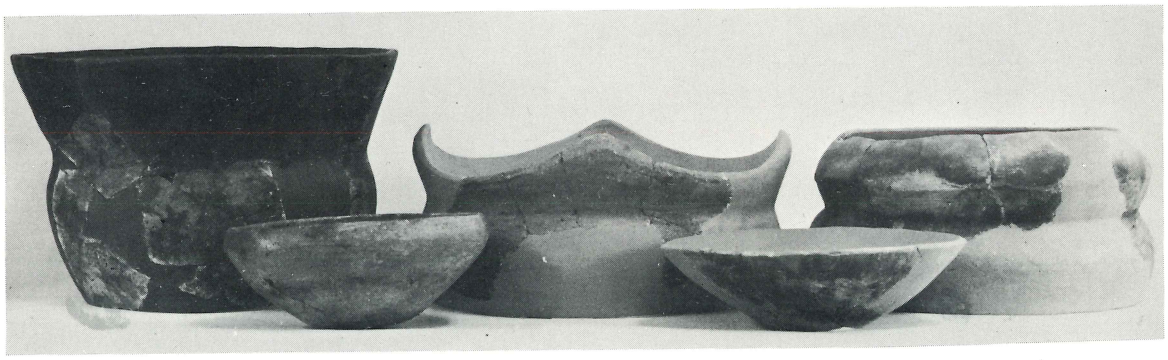


76

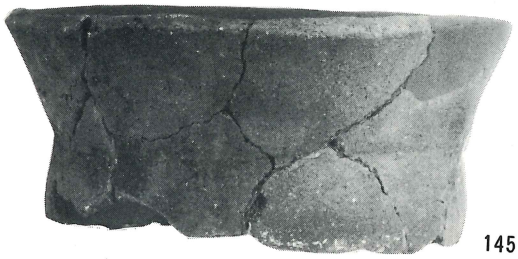


28

1/3



駒方C遺跡出土土器及び組成



145

38

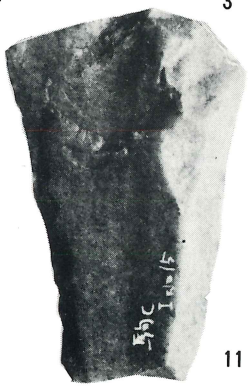
40

1

3

2

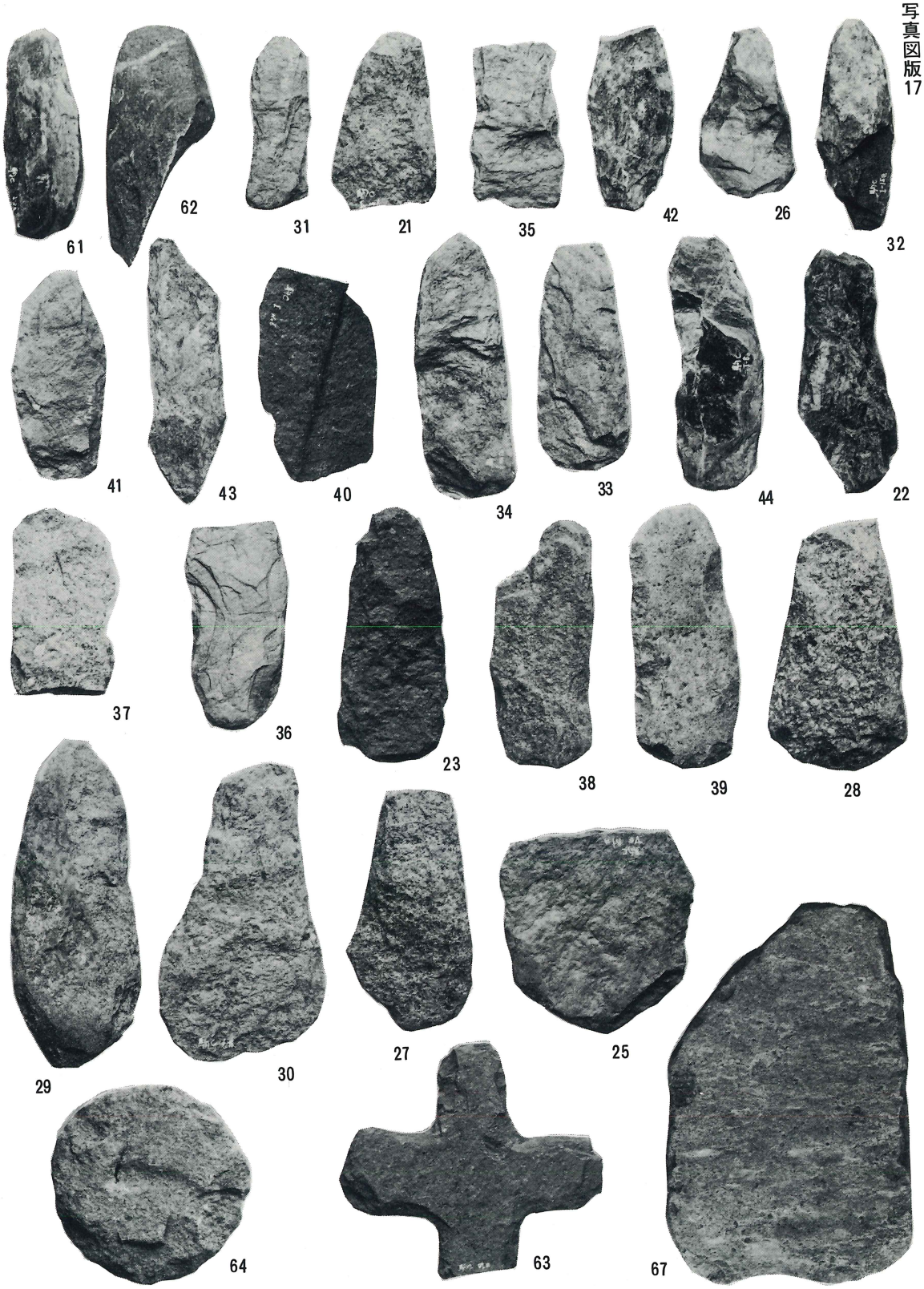
6



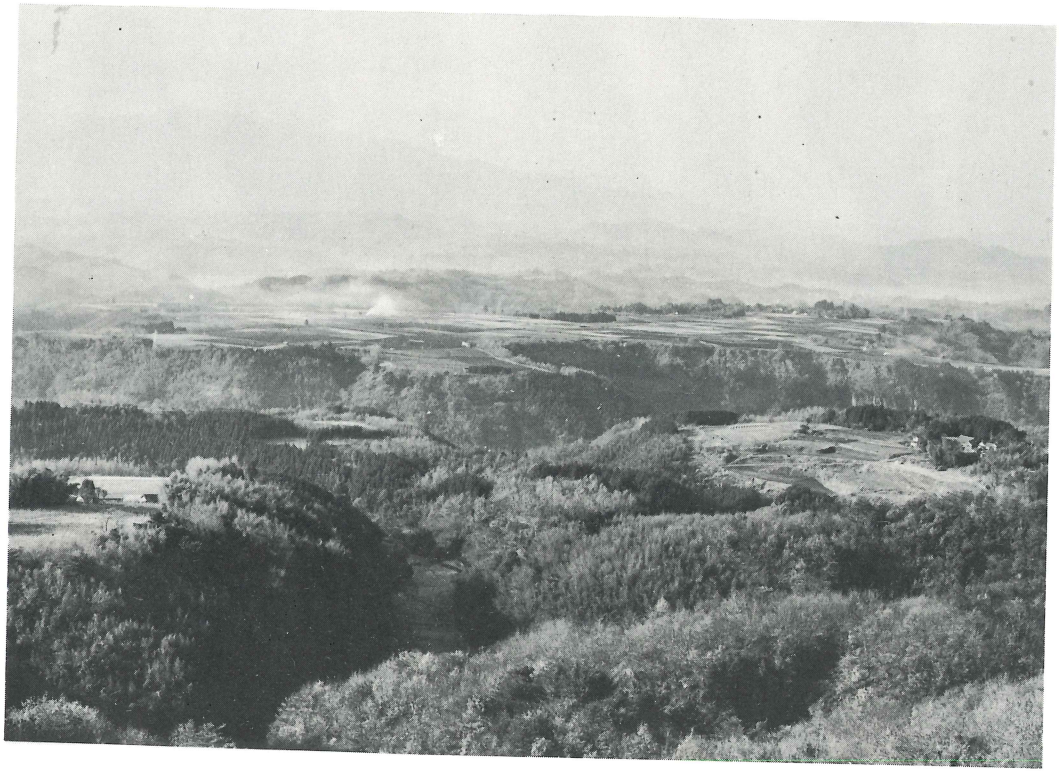
11

15

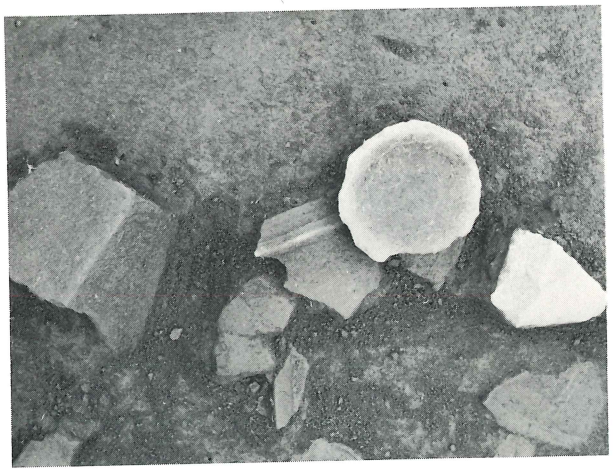
駒方C遺跡出土土器及び石器　土器縮尺1/3・石器縮尺1/1



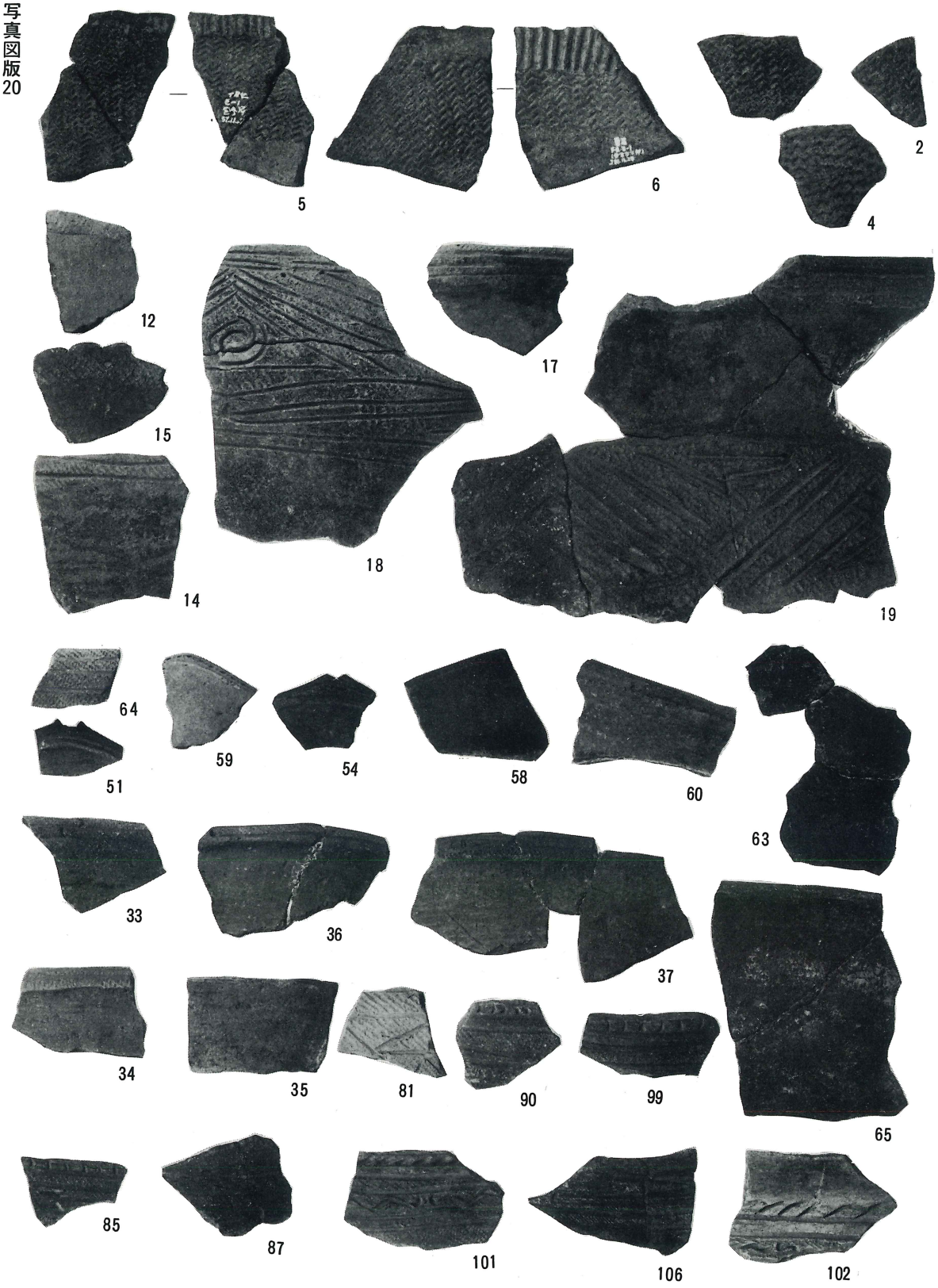
駒方C遺跡出土石器　縮尺1/3



夏足原遺跡全景及びＡ－３区遺物出土状況

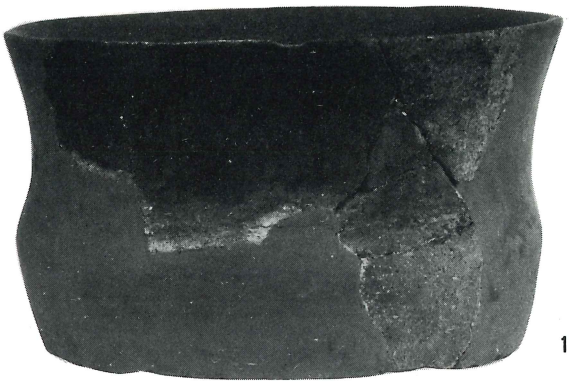


夏足原遺跡A－3区遺物出土状況



夏足原遺跡F地区出土土器　　縮尺1/3

夏足原遺跡F地区出土土器　　縮尺1/3

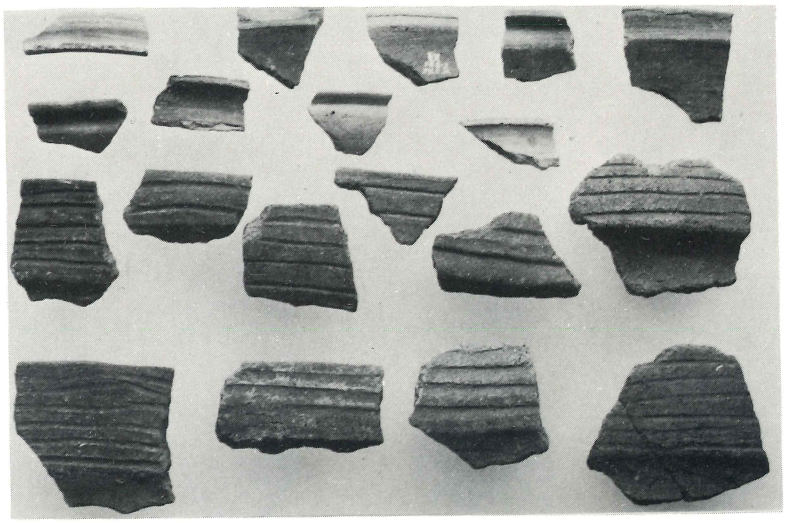


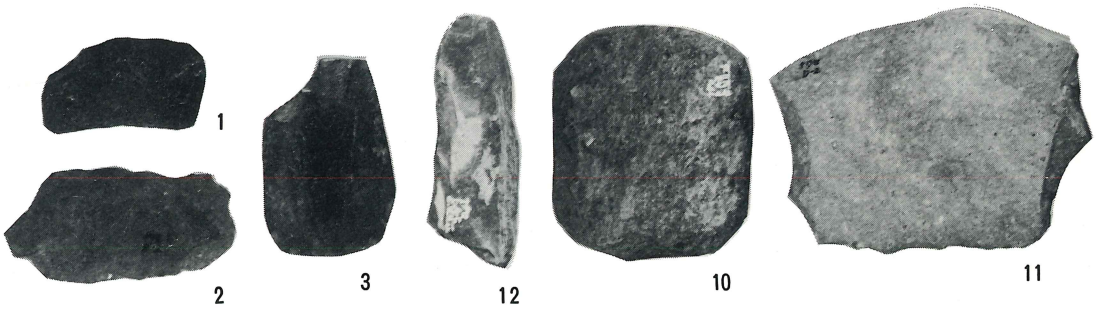
198

200

1/3

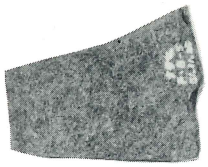
夏足原遺跡F地区出土土器



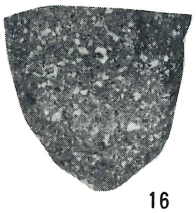


夏足原遺跡F地区出土土器及び石器　縮尺1/3

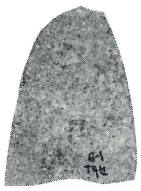
14

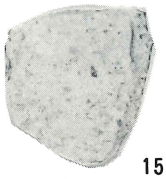

19

18


16

13


20


15

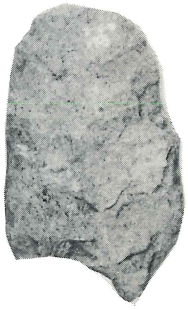
17

4

21

6

5


7

8

9

22

23

24

夏足原遺跡Ｆ地区出土扁平打製石斧　　縮尺1/3

大野原の先史遺跡

大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書

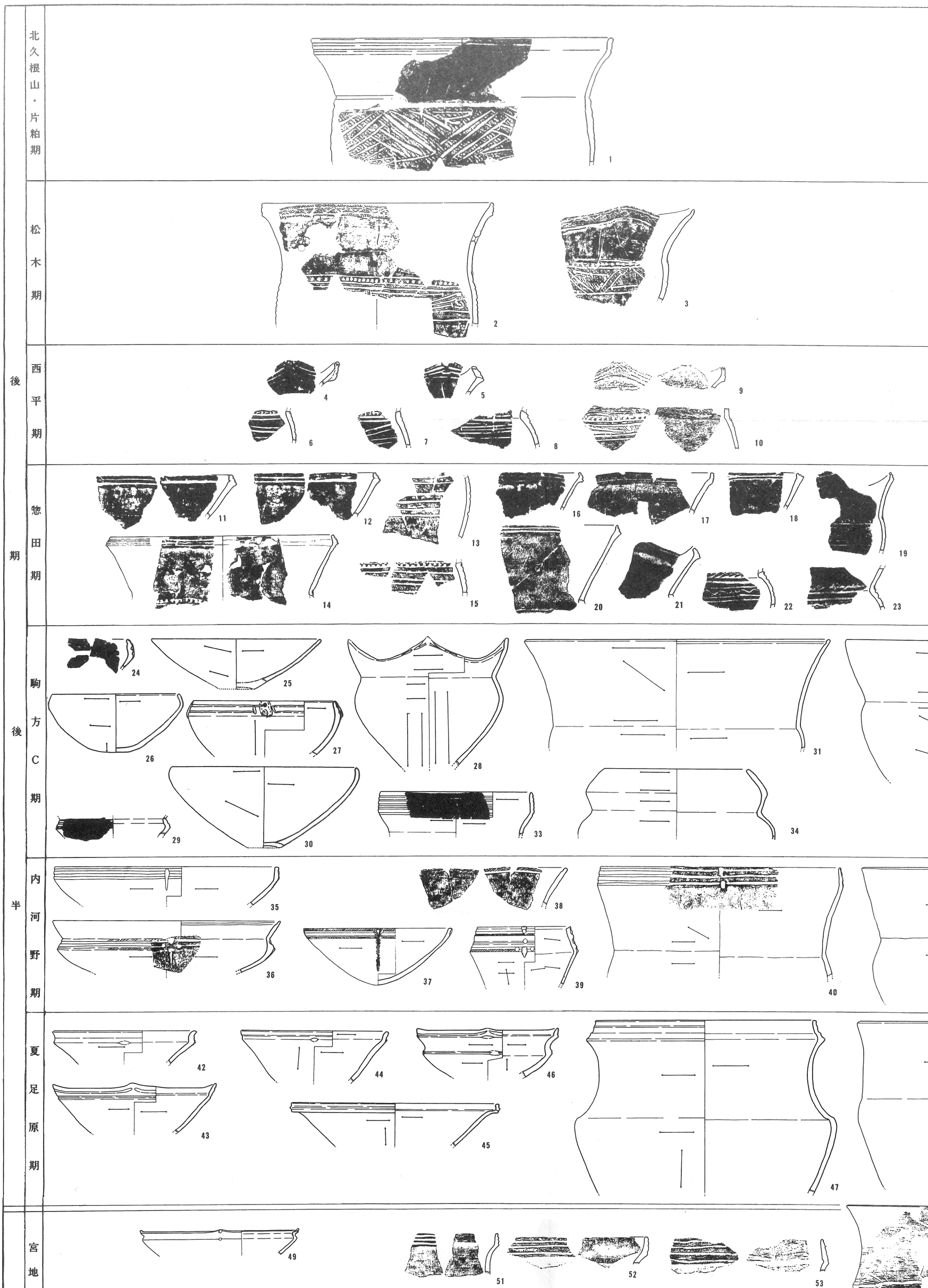
大分県文化財調査報告

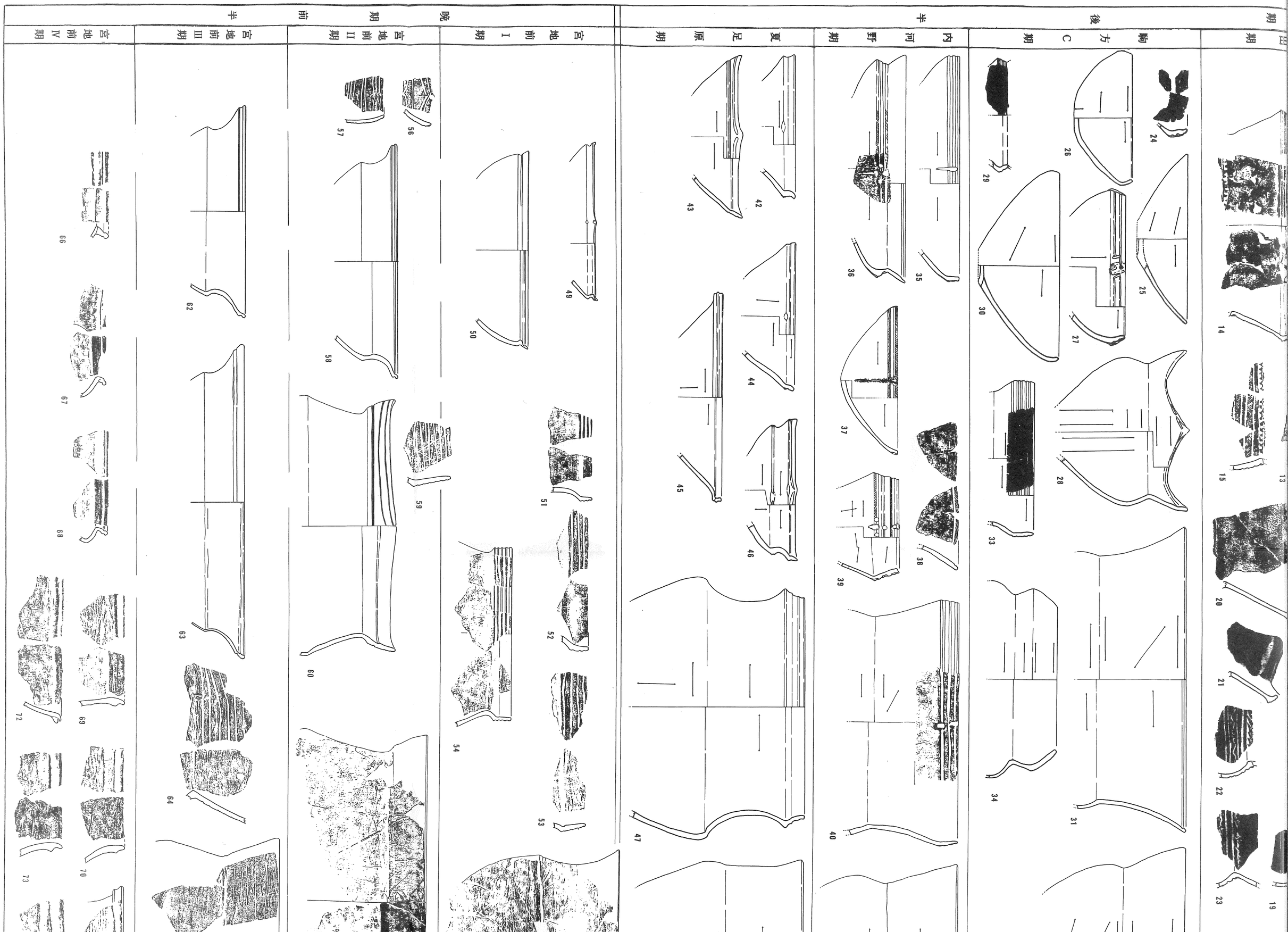
第65輯

1984年1月

発行　大分県教育委員会

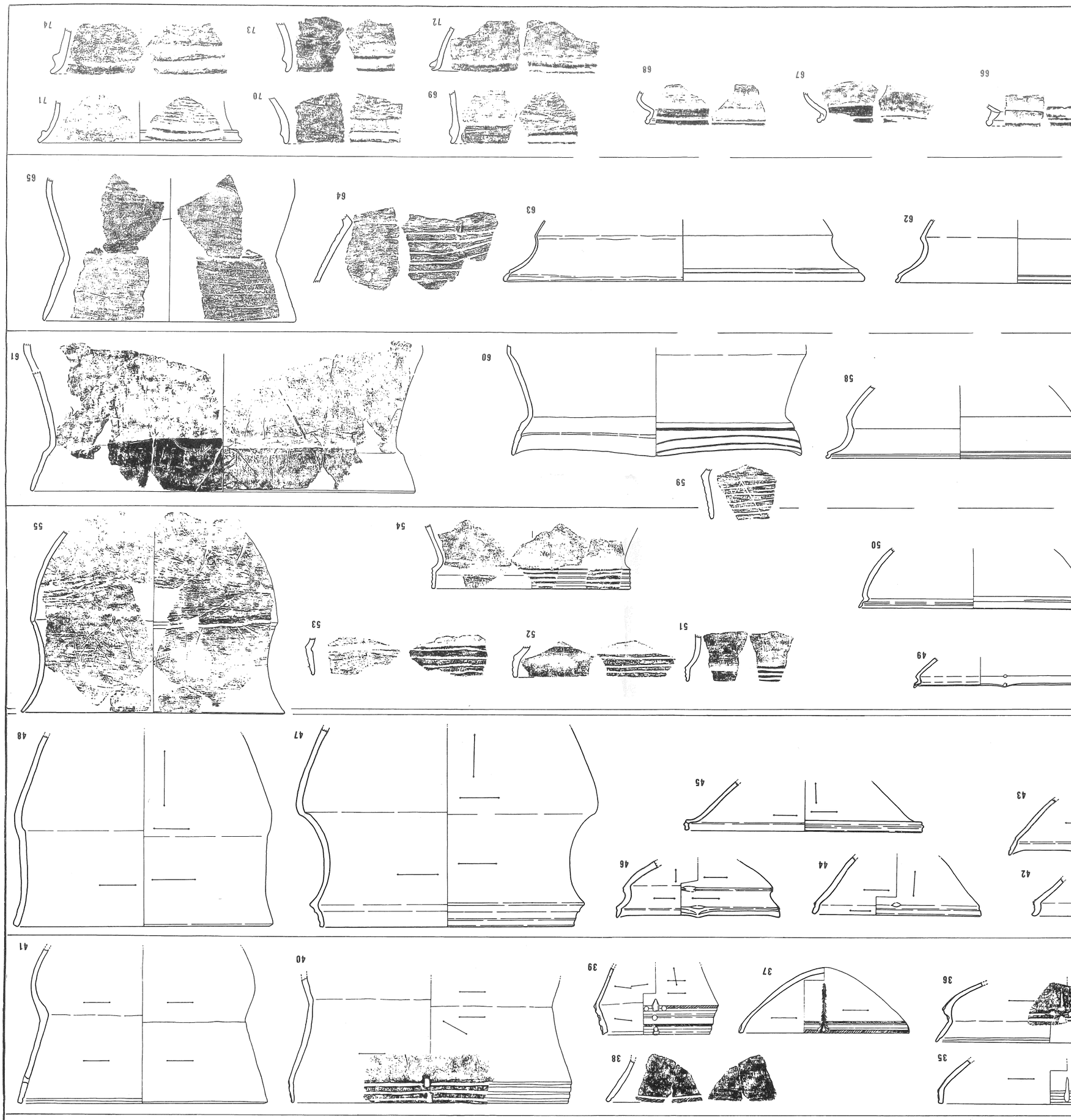
印刷　明治印刷株式会社

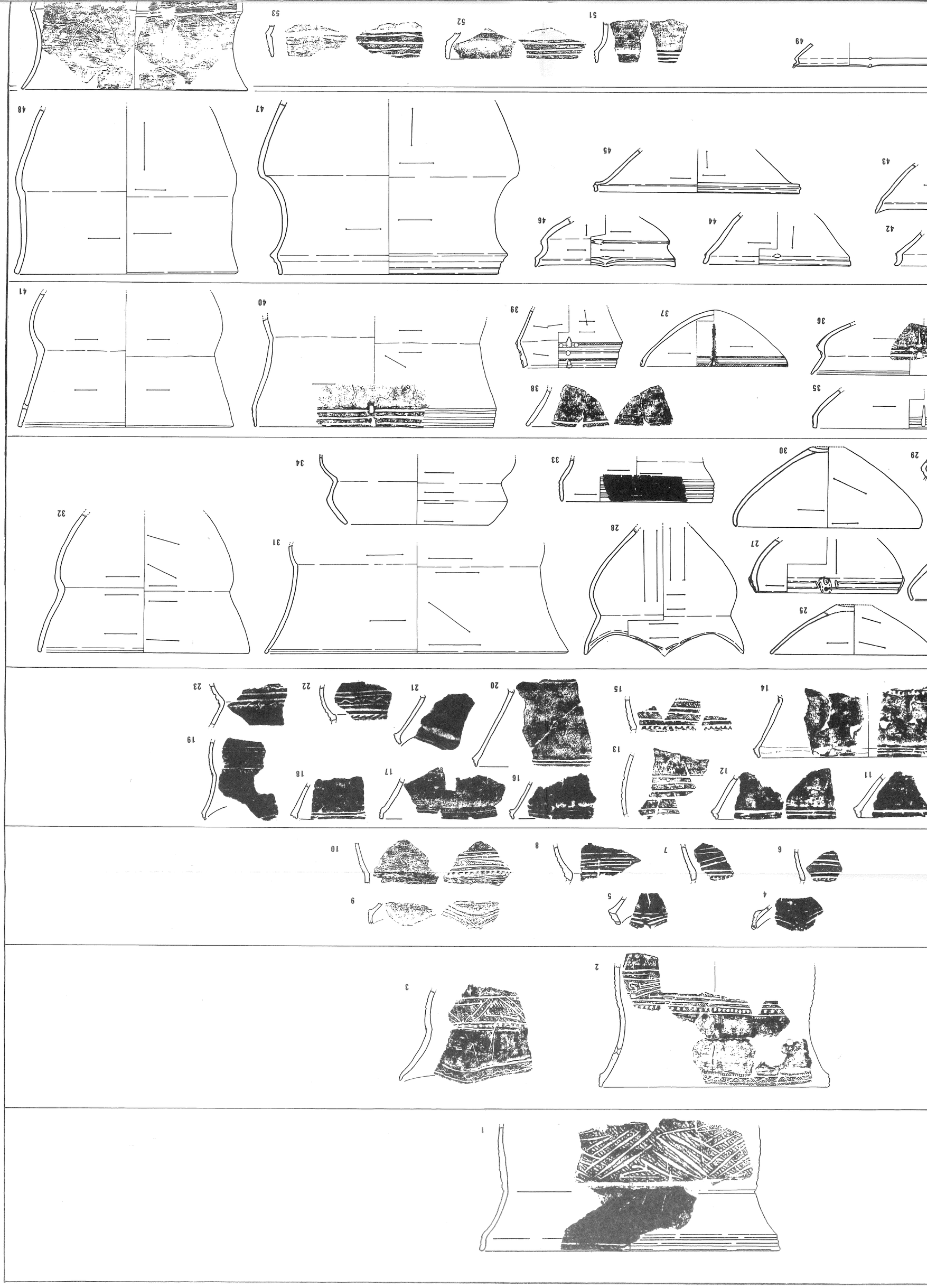

後期
後半
北久根山・片粕期
松木期
西平期
惣田期
駒方C期
内河野期
夏足原期
宮地



付図1　大野川中流域縄文後・晩期土器編年図

夏足原遺跡（1･4～8･16～23･42～48）　松ノ木遺跡（2）　柿木原遺跡（9･10）　惣田遺跡（11～15）
駒方C遺跡（24～34）　内河野遺跡（35～41）　宮地前遺跡（49～74）　日田市川下遺跡（3）



第1図　大野川中流域縄文後・晩期土器編年図

夏足原遺跡（1・4～8・16～23・42～48）　松ノ木遺跡（2）　柿木原遺跡（9・10）　窓田遺跡（11～15）
駒方C遺跡（24～34）　内河野遺跡（35～41）　宮地前遺跡（49～74）　日田市川下遺跡（3）